

部活動に燃えた青春

草創期から盛んであつた部活動。

撃剣部、武芸部とは何か？

戦前の約五十年間にわたる本校部活動の歩みをつづる「旧制時代の部活動」。

文化部、運動部の華々しい活動の跡をたどる「それぞれの黄金時代」。

現在あるすべての部の最近二十年間の活躍を記す「最近の部活動」。

各部の歴史の栄枯盛衰が一目でわかる消長表。

旧制中学時代の部活動

本校における部活動は、開校間もない一九〇一（明治三四）年に、学友会活動の一つとして会則に規定され、正式に発足したようである。従って、部活動もほぼ百年の歴史があるといえるであろう。ここでは、その旧制中学時代の約半世紀にわたる部活動について、三期に分けて概説する。

第一期はまさに部活動草創期である明治から大正年間前半まで、第二期は活動が本格化していった大正後半から昭和初期まで、第三期は全国的な活躍も多く記録されている昭和の初めから終戦直後までとする。

第一期（草創期）

創立間もない一九〇〇（明治三三）年に本校学友会が発足するが、部活動はその中の一活動として始まったものである。「学友会報」第一号（明治三四年発行）に掲載されている学友会会則には見られないものの、第二号（明治三六年一月発行）掲載の会則には、第三章風紀部、第四章学芸部、第五章運動部、第六章会計部が規定されている。

この中で、いわゆる部活動といえるものは、第五章の運動部である。その第三〇条に、撃剣部、柔道部、

野球部、庭球部、フットボール部の名があげられている（明治三九年発行の「学友会報」第六号掲載の会則では、武芸部の撃剣科と柔道科、運動部の野球科、庭球科、フットボール科に整理された）。特に運動部が早期から設立されていることには時代背景的要因があるようである。「学友会報」第三号には「体育は国家の最大急務たり」という賛助員三田定吉氏の小論が掲載されているが、この中で三田氏は「日清両帝国の間に戦端を開きし以来引き続いて東洋の天地は世界列強の注視するところとなりしが（中略）抑も今日に於ける我が国民の身体の矮小貧弱なることは既に自覚せる所なり。かかる国民をもつて強壯偉大な白哲人種と馳逐せんとするは実に至難の事たり。苟も今日を以て未来を察する者豈に悚然として恐れざる可けんや。恐れを止むべきか。否々吾人は実大声疾呼して体育の急務を善く天下に訴へんと欲するなり（後略）」と述べている。

当時の部活動は、現在のものとはかなり様子が異なり、全校的なものであった。生徒と教職員が一緒になって競技を楽しんだり、技術の向上に努めたり、といった趣が強かったようである。「学友会報」に部活動



教員のテニス（1902年）

に関する記事がはつきり出るようになるのは第六号（明治三十九年発行）からである。「過去一年間に於ける本会の状況」という記事の中に、文芸部、武芸部、運動部の活動状況が書かれている。ここにその一部を引用する。

「武芸部 本部は前原会長赴任以来頗る改良の実挙り、著しき進歩を見るに至れり、彼の助教制の設定あり、教授法の改良ありて、新進の指導に力を用ひ、道場設備を拡張完成せしかば、技大に進み、人益多きを加ふ。（中略）柔道にありては未だ他と比較の機を得ざれども、撃剣にありては、昨年十月修学旅行の途次、鎌倉に泊し雨天の徒然に師範学校に赴き、数番の仕合に徴するも、頗る其精を証すること得たり。（中略）」

運動部 戶外遊戯中にありて、最精なるは庭球なり、庭球はしばしば浦和の師範学校と往復して、其技を闘はし、長を取り短を捨て、進歩頗るみるべきものあり。然れども野球に至りては大に振はず、僅に見るべき寄宿生対通学生の競技一回ありしのみ（後略）」

この文章からは、施設が不十分な中、練習方法なども試行錯誤で活動が行われていた様子がうかがわれる。大正のはじめ頃までは対外試合をすることは少なかつたようである。活躍の主な機会は毎年春、秋と行われていた運動会や武術大会であった。

また、一九〇八（明治四一）年より「水泳教授」が行われていたが、一九一三（大正二年）よりこれを「水泳部」と呼ぶようになった。六月中旬に水泳部員を募集

し、七月末から八月はじめ頃の日程で千葉県北條町（現館山市）に宿泊し、北條海岸などで水泳教授を行っていた。期間中には階級別に試験が行われた。

第二期（発展期）

大正の後半になると、各部とも活動が本格化していった。それまでの活動は校内試合などが中心だったが、対外試合にも多く出場するようになっていった。剣道部、柔道部とも大正の終わり頃には、一年を通じてたいへん活発な活動が行われていた。「学友会報二十五周年記念号」（大正十四年十二月発行）よりその活動の記録を拾ってみる。

一九二四（大正一三年）五月十八日 第二回誘掖会主催県下中等学校剣道大会出場（浦和、粕壁、熊谷、不動岡中学参加）。剣道部は昨年に続き優勝カップを持ち帰る。

六月七、八日 本校武道大会（外来者もあり）。

七月二十日 大宮町蓮見順道館柔道大会出場。

七月二十一日～三十一日 柔道部夏期練習。

八月八日 東京高等師範学校主催全国中等学校柔道優勝試合出場。

優勝試合出場。

八月二十～三十日 剣道部土用稽古。応募者五〇名うち六名は寄宿舎を借りて合宿。

九月二十三日 早稲田大学主催全国中等学校剣道優勝試合出場。三回戦にて青森師範に惜敗。

九月二十八日 高等師範学校主催全国中等学校剣道



1928年、登山部。槍ヶ岳山頂にて



水泳教授。房州北條町北條海岸にて

優勝試合出場。準決勝にて北海中学に2対6で敗れる。

同日 浦和高等学校主催関東柔道大会出場。参加一七校。

十月五日 桐生高等工業学校主催第三回関東地方中等学校剣道優勝旗争奪戦出場。参加二四校。優勝。

十月十二日 浦和高等学校主催関東剣道大会出場。準決勝にて敗退。

十一月二十四日 鯨井先生主催県下昇段昇級試合。本校より柔道部員一〇名参加。

十二月三日 講道館入門。五年生五名、四年生三名が許可された。

大正十四年一月二十五日 本校にて、豊島師範、早稲田実業合同剣道対抗試合。

野球部では、部の創設は大正八年であり、それ以前は同好会的存在ととらえている。「学友会報」で野球部の活動についての記載が始まるのは、第二三号（大正五年）からである。この記事では、四月二十八日の校内練習試合が五回戦で行われ、0対6で伊藤軍勝利と記されている。一九一六（大正五）年十一月三日、立太子の礼を祝って大会を催したが、北尋常小学校（現川越小学校）の生徒が教師に引率されて試合を観戦、応援したとの記載もあり、娯楽的要素が見える。

一九二〇年には初めて対外試合の記載があり（学友会報一七号）、対飯能実業団との試合で16対14にて本校軍勝ちと記されている。

この年の四月二十九日に本年度のメンバーが発表さ

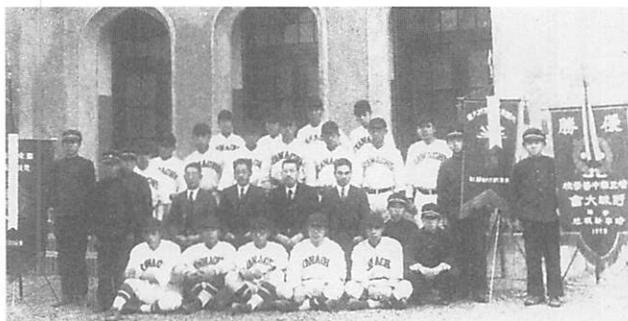
れ、「猛練習開始」の五文字を掲げて練習に努めたとあり、活動の本格化がうかがわれる。

庭球部も発足当初とは異なり多くの対外試合を行うようになった。一九二四年の記録によれば、校内対抗試合以外に県立川越工業学校、不動岡中、埼玉師範学校、熊谷中、松山中などと試合を行っている。公式戦としては、日本軟式庭球協会主催全国中等学校庭球大会（四回戦進出）、浦高主催関東中等学校庭球大会（四回戦進出）などで活躍した。また、他校の庭球大会にもよく招待されていた。

一九一七（大正六）年より埼玉県中等学校総合体育会が毎年開催されるようになった。剣道部、柔道部ともに第一回（一九一七年）、第二回（一九一八年）に総合優勝している。第二回よりその年に創立された徒歩部（現在の陸上競技部）も出場するようになった。参加競技は、二〇〇名、四〇〇名、一〇〇〇名リレー、長距離であった。徒歩部は一九二五年より競技部という名称になり、前述の部と同様活動はたいへん活発であった。

一九一九（大正八）年には登山部（後の山岳部）の創設があった。同年七月二十三日より富士山への第一回登山が行われた。このとき、校長ほか五名の教師引率のもと生徒二五名は制服制帽を着用して登山に臨んだとのことである。

一九二四（大正一三）年には弁論部が文芸部（旧学芸部）より独立し、文化部として本格的な活動を開始し



1931年、埼玉県予選会で優勝した野球部。5年生卒業記念スナップ

ている。

第三期(充実期)

中学時代の終盤を飾る活躍の代表は、野球部と陸上競技部である。野球部は、昭和初期には県内の各中学校と競い合い力をつけていた。県内にとどまらず多くの県外の学校との対抗試合も一年を通じて行われていた。朝日新聞社主催全国中等学校野球大会北関東予選大会には、一九二二(大正一一)年に初出場。一九二七(昭和二)年からは毎年のように出場し、強豪として活躍した。一九三二(昭和六)年には、大阪毎日新聞社主催の全国中等学校選抜野球大会(春の甲子園大会)に関東代表として出場した(320頁参照)。陸上競技では、鈴木木間多選手(中29)の活躍が有名である(498頁参照)。運動部関係では、前述の部に限らずどの部も活発な活動をしていた。ここにその様子を簡単に記す。

柔道部、剣道部とも発足以来強豪として県大会、関東大会で上位入賞の常連校であった。庭球部も強豪ベアを毎年輩出している。栗原英夫・加藤清(中39)組は一九三八(昭和一三)年の県下庭球大会に優勝し、関東大会に駒を進めた。

蹴球部は一九二七(昭和二)年に創設された。遠征試合はしばしば松山中と行っていた。公式戦では、県南の学校が常に難敵であった。

籠球部の創設は一九二九(昭和四)年。夏合宿等の練習の成果もあり、一九三九年、一九四〇年には県下中

等学校籠球選手権大会において準決勝へ進出している。

相撲部の存在も見逃せない。同部は、一九二七(大正六)年に「角力部」の名称で発足した(「学友会報」一五号)。以後、しばらく記録に見られないが、一九四〇(昭和一五)年全国日本中等学校明治神宮相撲大会埼玉県予選において優勝し、全国大会に出場した。

夏季の水泳教授(その当時の水泳部)も毎年行われていた(一九四〇年まで記録あり)。山岳部も毎年の夏山登山記録が残っている。一九四〇年の槍穂高縦走をはじめとして、どれも立派な記録ばかりである。

弁論部は、各校との交流大会や弁士派遣を盛んに行っており、その活動は隆盛を極めていた。一九三四(昭和九)年より本校主催全関東雄弁大会を行っていたことからそれは十分うかがわれる。

一九四〇(昭和一五)年には弓道部と郷土部の創設があった。しかし、その後戦時色が強まる中、従来の部活動は、その活動自体が難しくなっていたものと思われる。残念ながら一九四二年以降の記録は乏しく、その活動をたどることはきわめて難しい。

終戦直後の混乱期にも、庭球、野球、蹴球、籠球、陸上競技部等の復活、排球部、卓球部の新設などがあり、その後の新制高等学校の部活動へとつながっていく。武道関係部活動の復活は、GHQの政策もあり、柔道部が一九五一(昭和二六)年、剣道部が一九五二年まで待たなければならなかった。



1940年、県大会で優勝した相撲部員たち



寒稽古にはげむ柔道部員(1936年、雨天体操場)

それぞれの黄金時代

裸足でボールを追い、勝ち取った全国制覇

庭球部

庭球部(現軟式庭球部)の歴史は古く、学友会発足当時からその存在が記され、まさに本校創立ともにあるといっても過言ではない。

ただ創立当時は現在のクラブとは形態が違って、全校的なものであり、職員生徒一体となってテニス大会を開催したり、放課後楽しんだりする、体力の向上と親睦を図ることを目的としたものであった。

本格的クラブ組織が作られていったのは、大正年間に入り、各旧制高校主催の関東中等学校選手権大会等が開催されるようになってからである。

戦前に輩出した名選手は数多く、後に三菱商事の社長・会長を歴任する藤野忠次郎(中17)もその一人

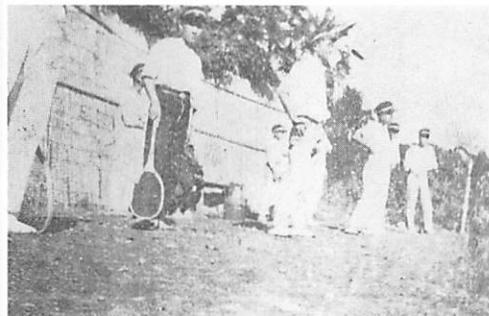
であるが、戦後も活躍し埼玉のテニスの発展に貢献した笹田泰治・山本道隆(中21)組は忘れがたい存在である。

戦時中は芋畑に変わっていたコートが、終戦とともに卒業生、部員の努力で復旧、整備され、厳しい練習が再開された。しかし当初は雨が降るたびに畑の畝のでこぼこが現れて、そのつどコート整備に時間をかけることの繰り返しであった。また用具の入手も困難で、パンクしたボールは修理して前衛練習に使い、テニスシューズは試合の時だけ履き練習時には裸足でボールを追いかけた。

このような練習を続けるうち、一九四七(昭和二二)年、戦後第一回の学校対抗戦に見事優勝し、

華々しく幕開けを飾った。当時の感動の様子は、松田蘭風先生が作詞された川中庭球優勝応援歌によく表れている。これ以後、川越高校庭球部は県下で常に上位を保つようになり、一九四九年には芹沢良三(高2)・岡田立彦(高3)組が

ついに全国優勝という偉業を成し遂げたのである。この年、柿田・加藤組、一色・津坂組を加えた川高チームは県内すべての大会を制覇し、国体代表も独占する素晴らしい勢いを示し、新設された東京後樂園テニスコートにおける全日本大会にも三チームが出場した。全国の精鋭一八四組が集まったこの大会で、特に芹沢・岡田組は順調に勝ち進み、薄暮の頃ついに兵庫県神戸高校の中塩・吉森組との



庭球部練習風景(1925年)

決勝戦に臨んだのである。つめか
けた多数の先輩や部員、県連幹部
はもとより、大会関係者までもが
「優勝杯が、初めて箱根の山を東
に越えるか」という期待をかけ、
大声援が送られる中で激しい戦い
が繰り広げられ、日没寸前、つい
に4-2で勝利を得たのである。

その後も川高の黄金時代は当分
続くことになる。一九五〇(昭和
二五)年には津坂・岡田組、一九
五一年には三村・阿部組が続き、
この年は団体・個人戦とも県内の
大会を全制覇するとともに関東大
会でも三位に入賞、さらに第一回
の全国高校総体団体戦の部に出場
権を得ている。一九五二年からは
新制中学出身者の時代となり、一
九五三年には伊藤・小久江組が関
東大会三位、全日本大会四位入賞
の好成績をおさめた。翌五四年も
杉本・山崎組が関東大会三位、団
体戦では関東大会準優勝と続き、
一九五五(昭和三〇)年の平田・森
田組、五六年の三村・森田組、五
七年の金尾兄・吉田組の時代まで

団体戦、個人戦ともほとんど負け
知らずであった。特に金尾兄・吉
田組は甲府市での関東大会に見事
優勝し、北関東大会では島村・金
尾弟組、海野・戸口組、松本・笹
森組を加えての本校四チームが準
決勝で争うという、県外大会では
珍しい記録を作るなどした。一九
五八年も島村・金尾弟組、金尾兄
・笹森組が全国大会とともにベス
ト16に入るなどの成績をあげ、特
に双子の金尾兄弟の活躍が話題を
呼んだ。

この後も、庭球部の活躍は絶え
ることなく続き現在に至っており、
県外大会への出場、活躍について
は枚挙にいとまがない。しかしこ
こに記した一九四九(昭和二四)年
から一九五八年までの十年間は、
県北大大会七回のうち三回、関東大
会予選一〇回のうち六回、全国大
会予選七回のうち二回、同じく団
体戦は八回のうち二回(出場は三
回)それぞれ優勝しており、さら
に県外大会の活躍ぶりを見てもま
さしく黄金時代の名にふさわしい

十年間といえよう。

当時の庭球部の雰囲気伝える
エピソードが寄せられているので
紹介してみたい。

主将、国体選手として活躍した
加藤昌孝(高2)は、「ラケット、
ボール、ガット、靴、すべてが入
手困難な時代で、コッペパンをか
じりながら空腹をまぎらせて、皆
猛練習をした。また多数の先輩や、
近藤、島田両先生の物心両面にわ
たる支援も私たちを支えてくれ
た。また、後に十四年間にわた
り本校庭球部の顧問を務める田中
啓彦(高4)は、「合宿というと、
住職でもあった近藤鉄城先生のお
寺に泊まり、自炊をしながら猛練
習に励んだ。慈愛に満ちたお人柄
で、いつも優しく生徒を見守って
いてくれた」と語る。さらに、団
体・個人で伊勢のインターハイに
参加した山根政男(高6)は、「個
人戦で伊藤・小久江組が全国第四
位に入賞した夜のこと、近藤先生
が夕食を食べに入った食堂で、大
会が終わりご苦労さまと、三年生



芹沢・岡田組 全国優勝の賞状(1949年)

川中庭球優勝應援歌

本校教官 松田蘭風作
昭和二十一年秋、終戦後初の縣下中等学校庭球大会
に於いて優勝し、これは同夜感激の餘り作詞せしむ、そ
の要領を在校生徒に傳報報告の同伴せし發せしもの

(一) 秋空高き初雁の

古城も揺らく熱球に
勝利をめざす若人の
見よその力の決意

(二) 秩父嶺染むる夕焼けに

光る白線、唸る球は
練りしサーに傳統の
示せその技術の結り

(三) 入間の川の瀬と湧き

若き血潮にわが腕に
ひそむ涙も先輩の
知れその情けの誠

(四) あ、熱球の飛ぶところ

満場グットの聲を吞む
攻防兼ねた前後衛
出せその威力この機会

(五) 苦闘を語るラケットに

唸もうるむこの響れ
輝く銀杯仰ぎ、
聞けこの感激の優勝歌

六名にビールを注文してください
ました。初めて味わうビールの味、
そのなんともいえない苦い味。これ
からの人生の味を密かに教えてく
れたものと、非常に懐かしい思い
出となっております」と、おおよ
かな時代の先生と生徒の心の交流
が偲ばれるエピソードを伝えてく

れている。

川越高校庭球部の伝統は、この
ように顧問、OB、部員の親密な
人間関係の中から生まれてきたも
ので、この伝統は連綿と受け継が
れ現在に至っているのである。

最後に、この庭球部の輝かしい
伝統を支えてくださった、岡田萬

甲子園への夢を突らせた青春と「場」の力

野球部

川越高校野球部——人が何らか

の意欲、目的を抱き、それを達成
しようとして集う「場」としての
始まりは、記録によると一九一六
(大正五年)、校内野球の練習試合
であった。「敵を知るにはまず己
から」であったのか、一九二〇年
まで、校内生徒の観戦をともなっ
た活動は続き、初の対外試合を16
対14と僅差の勝利を飾った。以来、
対外試合で勝利、敗北を重ねなが
ら、一九二二年に正式な関東大会
に参加することになった。当時の
部長である飯田亮先生はとても喜
ばれて、一同を集めて宣告し、一

同は小躍りして喜んだ。しかし、

二回戦で太田原中学に10対0と完
敗。翌年には熊谷中より小林氏が
コーチとして招かれ、まず参加す
るということ、やるからには勝つ
ということ、代表として全国大会
に出場するということを説かれた。
この時期川高野球部に、冒頭にの
べた「場」となる礎いしづえが出来てい
った。そして一九三二(昭和七年)
念願の地域代表として全国大会に
出場することになる。
「二月一四日……快報東日(現毎
日新聞)より来る。大阪甲子園で
花々しく開会される……全国選抜

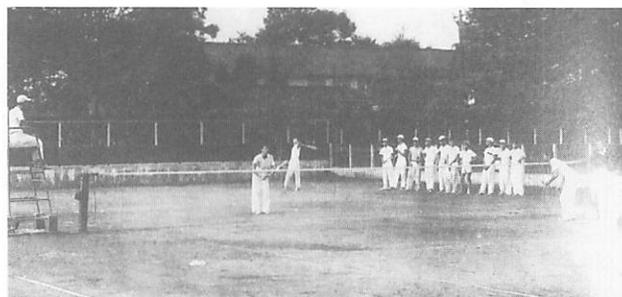
雄、長谷川貞平、松田蘭風、近藤
鉄城、平正夫、影山増夫、田中啓
彦、石井正雄、深澤一博の各先生
の親身の御指導に対し、あらため
て深甚なる敬意を表する次第であ
る。(顧問 五十公野順一・高27)

野球大会に見事関東の雄と折紙を
つけられ推薦の榮譽を勝ち得た」
(『八十周年記念誌』より)。この

前年四月、飯田部長、山本主将以
下部員一〇名からスタートした川
中野球部は、川中OB立教大の岸
田勝太郎(中25)をコーチに迎え、
北関東大会では準決勝で敗れるも、
42勝5敗1分という好成績でシー
ズンを終えた。「大会の彗星」と
称されたこのチームを母体に、新
たに早大主将森、多勢投手、プロ
野球大毎の林、三氏のコーチを受
けながら、一路春の甲子園に向か
い、野本主将の選手宣誓の下、幕



再度甲子園へ(1959年)



庭球部練習風景(1964年)

を開けた甲子園大会で、初の「場」の代表として中京商業と対戦した。結果は0対10、完敗であった。当時の野球事情である西高低が如実に表われた結果となった。夏の大会に再度の出場をかけた北関東予選では準決勝で僅差にて敗れたが、その後の県大会で優勝を飾り、地域の勇者ぶりをアピール、川中野球部はこの大会で四連覇をなしとげ、第一期の黄金時代をつくることになった。

再度の栄光は一九五九(昭和三四)年まで待つことになる。「有名な実力高との練習試合では、……王選手中心の早実、大羽投手率いる日大一高等にも打ち勝つ好成績を収め、夏の大会に突入したわけです」(『野球部七十周年誌』より)。一九五八年のチームは、三割を越す強打線を中心に、関東強豪校と

の練習試合で鍛えられながら、夏の予選にのぞんだ。結果は決勝で0対6と大宮高校投手の好投に完封負けを喫した。

翌一九五九年のチームの教訓は、「ミスをせず僅差で勝つ」であった。家村相太郎(中34)監督は当初から打倒大宮高校を念頭におき、前年のメンバーだった横田主将、吉田投手を中心に、「守って勝つ」「一点差でも勝ちを掴み、春の大会で野球スタイルを貫き、春の大会で大宮高校を撃破。自信をつけたチームは本番の夏の大会予選決勝戦となる西関東大会で、2対1と逆転勝ちし、前年の先輩の恩に報いた。と同時に、主催者の推薦で初の甲子園出場を果たしながら、

「夏は自らの力で甲子園へ」の夢を途中で破られた二十八年前の先輩達の無念を見事に晴らしたのである。二回目の「場」の代表としての全国大会出場。鎮西高との初戦を3対1と快勝。二回戦は対高知商戦、それは完全な投手戦だった。六回七回とランナーを出した川高は得点出来ず、九回裏高知商に一死二塁のランナーを二ゴロで帰され、サヨナラ負けを喫した。それでも強豪相手に互角の試合をしたことに、大きな拍手がわいた。メンバーは次のとおり。

- ④ ⑥ ⑧ ⑤ ① ③ ⑨ ② ⑦
- 沼藤 田田 田島 本野 根
- 内近 杉横 吉飯 島高 宮
- 1 2 3 4 5 6 7 8 9

第二期の黄金時代はこのように成立していった。

現在でも諸先輩の築いた伝統を引き継ぎ、三度目の甲子園を目指し、部員一同日々努力を続けている。(顧問 横田雅之・高32)

川中から川高へ、かくかく赫々と連なる戦績の誇り—— 剣道部

① 川中の黄金時代

剣道部は、一九〇一(明治三四)

年に「撃剣部」、一九〇七(明治四〇)年に「川越中学剣道部」とし

て活動が始った。『教育剣道を培った人々』(いなほ



甲子園球場前にて(1959年)



全国選抜中等学校野球大会出場(1931年)

書房、全国茗友会編)によると、一九一九(大正八)年十月十九日に始まった東京高等師範学校主催の全国中学校剣道大会に、川越中学剣道部の記録をみる事ができる。

第一回大会(一九一九年、参加校二四校)では一回戦に横浜二中に勝ち、二回戦で横浜一中に敗退している。

団体戦成績	県大会記録			県外大会記録
	全国大会予選	関東大会予選	新人戦	関東大会
優勝	昭和43、45、58	昭和39、40、44	昭和55	
2位	昭和41、53、56	昭和41、53、56	昭和38、46、50、52、54、57	昭和47
3位	昭和29、37、39、40、42、48、49、55、60、平成9	昭和37、47、49、50、51、52	昭和40、41、平成7	昭和40、50
入賞		昭和44、58、59、平成7		

事二位に入賞している。二回戦より出場した本校は、熊谷中、浦和中(二回戦)、早稲田実業(四回戦)、東京高師付属中(準決勝)を連破し、決勝戦で秋田師範と対戦した。以下、決勝戦の記録である。(このときの試合は四人戦の対勝負であった)。

秋田師範7——3川越中

常喜○○○ 大川原

田代○○○ 浅野

根本○○○ ○北村

志賀○○○ ○○平川

第五回大会(一九二四年九月二十八日、六〇校参加)では、川越中は四回戦で茨城師範を七対五で下し準決勝に進出したが、北海中に二対六で敗れ、三位となった。以下その記録である

北海中6——2川越中

木村○○○ 山口

伊藤○○○ 山崎

傳法 ○○北村

松田○○○ 大塚

第九回大会では、個人表彰として、川越中、高橋の名が出ている。

なおこの大会は二一回(一九四〇年八月五日)まで続いた。「少年剣士にとってこの大会が權威ある憧れの大会」(前出書)であり、当時の剣道の社会的位置付けに影響を与えた大会で上位入賞を果たしたこの時期は、第一期黄金時代といえるであろう。

② 撓しな競けい技

戦後、剣道はGHQの下禁止されてきた。剣道にかわる「撓しな競けい技」としての記録が本校「生徒会報」(第五号、一九五三年)にある。

一九五三(昭和二八)年三月二十八日に第一回県下高等学校の撓しな競けい技が行われた。本校より、長谷川稔、発智祐次郎、水野仁(共に高6)の三名が出場し、第二位となっている。五月の県民体育大会では、現OB会長の水野仁が十八人抜きぬきの快挙をなすとげ、個人優勝に輝いている。

③ 川高の黄金時代

川越高校が県内初征覇を成し遂げたのは、一九六四(昭和二九)年第二回の関東予選のことである。



関東高等学校剣道大会出場(1975年)



1935年卒業アルバムより

この年全国大会個人予選で松本幹司(高17)が優勝し、本戦に進んでいる。翌一九六五年第二回の予選も連続優勝を果たし、関東大会でも三位に入賞している。

一九六八年には、関東予選、全国予選連破を達成しており、この年初の全国大会出場となった。

一九七〇(昭和四五)年第一七回大会において二回目の全国大会県予選優勝を成し遂げている。この

一九四六(昭和二二)年四月、松本利雄先生の着任。戦後の精神的にも荒廃し、物質的にも不十分な時代を背景に高校四回生は松本先生と陸上競技に出会い、旧制中学から新制高校への変換期の六年間に受けた教育は川越高校陸上部の黎明期であったといえる。

一九四九年、松本先生の着任から三年目に埼玉県下で武村好惟(高2)が、一〇〇秒で十一秒四、高校ランク一位の記録を出し、広

後、県内制覇は一九七〇年第二七回大会の新人戦まで待つことになり、関東大会でみてみると、一九七二年の本大会二位、一九七四年〜七八年までの五年連続出場(特に七五年は本大会三位)がある。

全国予選の団体では一九八三年度の県内制覇(三回目)まで待つものの、一九七二(昭和四七)年〜七五年までの小高守(高26)、羽田聡

沢謙一(高2)が四〇〇秒で五十五秒四の二位、紫藤研一(高4)が四〇〇秒で五十五秒六の三位の好記録を生むことができた。

一九五〇年四月、新制中学校卒の第五回生が入学、四回生は六年目にして初めて下級生を迎え、戦後教育の申し子達に先生達も面喰らった様子。生活の規範を失った生徒達に小泉信三の『自由と規律』を読むことが勧められ、また、ある先生は句誌への投稿を勧めら

(高27)、指田雅美(高28)の三年連続本大会個人出場、一九七八(昭和五三)年の新聡一郎(高31)、八一年度の土屋晴紀(高34)(松本幹司以来の県内全国個人予選優勝)の本大会出場の記録がある。

表は、一九五四(昭和二九)年からの高等学校体育連盟主催の県内入賞の記録である。

(顧問 森田智裕・高34)

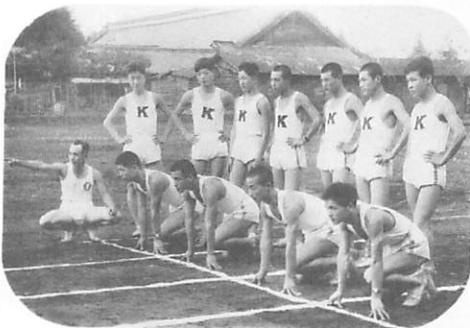
陸上競技部

自分と闘った時代、それが黄金時代

れ、精神的な教育が進められた。

松本先生の薫陶よろしきを得た四回生は新中卒の後輩達を十分にしごきあげたのだ。ボストンマラソンで田中茂樹が優勝して以来、

松本先生は長距離はスピードの時代になるということで、スピード中心のピッチ走法の練習が強化され、インターバルグッシュが組み入れられ、それは猛烈な練習が行われた。このあたりが長距離を含めて、フィールドもトラックも意



松平先生の指導の下、猛練習は続く

識的に練習の質の大きな変換点であったと推量する。

一九五一(昭和二六)年五月、春の学徒総合体育大会での最終レースの八〇〇メートルは薄暮の中、浦和高校との伯仲した闘いでアンカー紫藤研一(高4)がゴール手前、胸一つで追い込み、一分三十六秒九で優勝した。それは同時に、これから数年間の黄金時代と言われる時期の幕開けの一瞬であったのかも知れない。夕暮れの大宮競技場のフィールドに大きな円陣をつくり校歌を歌った感動は今でも鮮烈に思い出すことができる。

当時の川高の校庭は南北に長くトラックを取り、そこに野球部、蹴球部、陸上競技部がそれぞれの部分を使い分け、野球部の恩師飯田先生顕彰碑の脇に並ぶ榎の木は夏の日陰をつくりだしていた。また、この数年間、週五日制の授業で土曜日は試合が無ければ休みだった。

一九五一年十二月、全国高校駅伝への初出場。大阪毎日マラソン

コースでの六位入賞。そして、四回生は翌年三月に学窓を去っていた。一九五二年十二月、一区一万メートルを木村昭夫(高6)はアクシデントにあいながらも力走し、その後継に一年生メンバーを含めて、三位に入賞することができた。

一九五三年八月、インターハイは横浜三沢競技場で、曇天の中、木村昭夫は五千メートルの優勝を果すことができた。

こうして、一九五〇年から五五年頃は、陸上競技部にとっては、あらゆる試合に一生懸命に闘った時代だった。遠くは八幡平を行く十和田湖駅伝から、関東駅伝、埼玉駅伝と。一九五一年から五五年、国体、全国高校駅伝等々、この間、奥武蔵駅伝、奥多摩駅伝、東京青森駅伝への参加等、関東大会から全国大会へと参加できたことは確かに選手の層が厚くなってきたことも考えられるが、まさにコッペパンをかじりながら、戦後のハングリーの時代をいかに生きるかを真っ正面から突き進んだことの一

面の成果であったと考える。

陸上競技は選手にとっては全く孤独なものだ。しかし、この孤独感に打ち克つことが必要なのだ。それぞれの選手の努力と結果(成績)が触発しあい、チーム全体の士気を高揚させることができる。

つまり、陸上競技部のチームワークとは、直接的な連携動作は少ない、精神力の結合だといえる。お互いに見えないセンスが張り巡らされている、その連帯感の中で自分に克ち、個々の競技に勝つことでチーム全体に好結果をもたらすことができるのだ。陸上競技部という集団生活の中で自分の位置を確認し、その役割を十分に果たすことが大切なことだった。これらのことは、三年間の陸上競技部の生活で得た感想であり、充実した時間であったといえる。

振り返ってみれば、確かに試合ごとに好成績で終わっていた。しかし、松本先生は一度たりともなっことししたことは無かった。「試合に勝つより自分の記録に克



高校駅伝県大会優勝メンバー(1952年)

て」「試合に敗れて泣くより練習の辛さに泣け」と。

(大河原光行・高6)

春高バレー 忘れられない監督の「ありがとう」—— 排球部

バレー部の創設は、終戦直後の一九四五(昭和二〇)年のことである。用具、施設とも十分にそろわない時代であったが、すでに昭和二十年代後半には県の上位校として活躍するようになった。

から六人制への転換で苦勞があったが、一九六三年には、この年赴任された小原先生のもと実力をつけ、一九六五年、関東大会(大宮市)に出場した。

一九六六年に小原先生の下でコーチをされていた萩原先生が新たに監督となった。先生は、精神力、体力、競技の調和に基づいた指導を實踐された。一九六九年、学徒総合体育大会県予選にて優勝、関東大会出場。以後、萩原先生指導のもと県大会優勝、準優勝あるいは上位入賞を続け、関東大会への出場も数多く果たした。

大会出場権を得た。全国選抜優勝大会(春高バレー)でもベスト16という優秀な成績を残した。さらに八月の国体予選にも優勝し、第三一回国民体育大会(佐賀県鳥栖市)に出場した。

*

さて、話は一九七六年度のこと。

『八十周年記念誌』などに詳しいが、簡単に紹介させていただく。一九五二(昭和二七)年、春季県大会に初優勝。関東大会(四街道市)ならびに全日本大会(藤沢市)に出場。秋季大会でも強豪春日部高校を一回戦で破り、優勝を勝ちとる。第七回国民体育大会出場。

なかでも特筆すべきは、一九七六(昭和五二)年の活躍である。新人戦県大会で優勝し、全国選抜大会の出場権をかけた西関東大会(甲府市)に出場した。この大会の決勝戦で地元韮崎工業高校との激戦を勝ち取り、十数年ぶりの全国

この年のライバル校は、県内では熊谷高校、深谷商業高校、所沢高校、深谷高校であったと思う。新人戦をひかえ練習は続いたが、その中心は練習試合であった。一日に二〇セットを超えるときもあり、辛さも勝てない悔しさもあった。早稲田実業高、足利工大付属高、法政二高などとも数多く練習試合をした。

一九五三年、全日本県予選優勝。関東大会(水戸市)、全日本大会(郡山市)に出場。

練習試合での萩原監督を思い出すと、「試合で学べ」という姿勢が一貫していた。「負けてもよしだが、なぜ勝てないのか。どうし

一九五五年、関東大会(東京)出場。その後も県大会上位入賞を続けた。

一九六二(昭和三七)年は九人制



川高春高バレー初出場を報ずる新聞



1976年度のチームと萩原監督(右端)

たらしいのか」を作戦タイムのた
びに考えさせられた。普段の練習
が楽だったなどというつもりはな
い。しかし、自分でなんとかしな
くてはいけない場面(試合)にあっ
ては、私たち選手に「考え直す場
」を与え続けてくれた。

新チーム誕生前後の頃であるが、
私は萩原監督によれば、ある部屋
に赴いた。あまり褒められた部員
とはいえなかっただけに、緊張し
ながら部屋に入った。かしこまる
私に監督は、バレーボールの話で
はなく学業の話が始めたのである。
私は学業でも風采のあがらぬ方
であったのでびくびくしていた。し
かし、試験でわずかながら伸びた
成績を我がことのように笑顔いっ

ぱいに喜び、私を称賛してくれた。
「文武両道の文と武、どちらが先
と言うことはない。両道は両立で、
双方がかみ合ってこそ成長といえ
る」という話をしてくださった。
その監督の姿勢をいまだに忘れる
ことはない。

考えてみれば、監督は当時のレ
ギュラーのほとんどを体育の授業
で受け持たれてはいなかった。し
かし、監督はわれわれのことを実
によく把握されていたと思う。そ
れは学業に関するにとどまら
ず、生活環境や健康状態について
もきめ細かいものであった。

*
萩原監督は決勝戦のあと、当時
主将であった私にこう言われた。

「よかったな。ありがとう。」

そして、手を出された。戦った
部員に「ありがとう」である。監
督は部員にとって父親以上の存在
であった。その監督が、私たちに
むかって「ありがとう」なのだ。

私は返す言葉もなかった。つい
さっきまで、叱咤激励していた監
督の手が、今は祝福を与える手に
変わっていた。私は感激で目の前
が真っ白になった。

一九七六(昭和五一)年度の戦績
は、萩原監督をはじめとし、多く
の先輩方のご指導に支えられては
じめて可能となったものであり、
また、川高バレー部の伝統に育て
られた歴史の一ページともいえる。

(西 敬・高29)

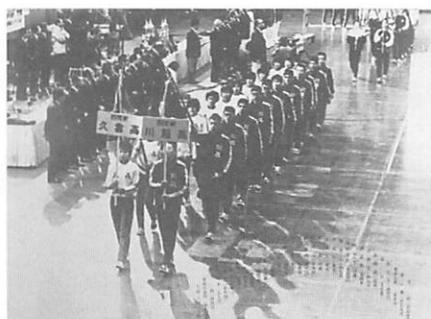
千の和音が響く、三十有余年の「人の和」

吹奏楽部

川高吹奏楽部に青春を賭けた者
達は、現在まで千人を超える。吹
奏楽部の三十年余の歴史の一部を
取り出して記すことは、幾多の青
春達にとっても失礼な思いがする。

しかし、百周年にあたり、吹奏楽
部が対外的に名を残した時代の紹
介は、区切りに際して必要なこと
と考え、失礼を承知でここに記す
こととする。

吹奏楽部はコンクール関東大会
に九回の出場をしている。特に、
一九七一(昭和四六)年から一九七
七(昭和五二)年まで、連続七回の
出場を果たした時代について、



1977年3月、春高バレー出場!

『吹奏楽部三十周年記念誌』に寄せられた玉稿により紹介したい。

なお、文中の各期は吹奏楽部における呼び方である。

金井茂(高24)は初出場の頃をこう語る。

「……八期の年には今年こそその概があふれ意欲満々でした。松本成二先生も絶対の自信をもって臨まれたように思います。残念ながらこの年は代表の座を逸し私たちが九期まで待たねばならなかった訳ですが、その時の悲憤慷慨ぶりは鮮明に記憶に残っています。実は当時松本流コンクール必勝法がありました。自由曲は初演に近い現代曲を使う方法です。聞いている人は一生懸命に聞いていないとよくわからなく、演奏する方は自信を持って演奏して終わると『どうだ』というような顔をする。今思うと非常に卓抜な戦略でした。」

小暮和弘(高27)は黄金期について。

「……こんな言葉がありました。

『一年殿様、二年侍、三年足軽』

苦しいこと、辛いことは上級生がやれということですよ。例えば、練習場や楽器の後片付けはもっぱら三年生の仕事。『人と人との和を大切に、音楽はそのための手段にすぎない』。松本先生が最も強調されていたことでもありました。

あれだけ多くの部員が集まり、大半が初心者ながら充実した活動が行えたのも、そうした運営方針があったからこそだと思います。それは高校生活三年間で終わったことではありません。入れ代わり立ち代わり現れるOBたちが文字通り東奔西走してくれました。夏の都市対抗野球応援の収入での部費援助もそうです。『現役時代はOBの世話になればいい。自分がOBになったら次に後輩のために何かしてやる。それが恩返しだ』。松本先生から、繰り返し繰り返し教えられたことです。松本先生はもとより、現役時代には雲の上の存在だった大先輩達、卒業後に入部してきた後輩達。いつの間にか私のまわりには何世代にもわたる

大きな人の和ができあがっていて、それは今でも続いています。」

沖本浩之(高29)は花の一四期を。「……私たち一四期は、部員数一六〇名という大所帯の時代であり、生徒ホールの完成など環境的にも非常に恵まれた時期にあり、定期演奏会は、クラブ創設以来初めて三日間演奏会を開催し、全てが超満員、コンクールでは関東大会に出場することができ金賞受賞。三年生十二月のチャリティー演奏会にも全員出席するなど、演奏面でも貴重な経験をさせてもらった学年です。しかし、吹奏楽部では楽器を演奏する事だけではなく、人の和(チームワーク)も学びました。音楽はあくまでも手段であり、同じ目標に向かい協力していく事が重要であると身をもって体験させてくれたのが川越高校吹奏楽部なのです。現役時代、OBのお世話になりよく言われた事は、『感謝する気持ちは次の現役達に返してやりなさい』でした。このような気持ちで自然に生まれ、受け継が



吹奏楽コンクール(関東大会)出場(1981年)



松本成二先生の指揮による定期演奏会

れていく事こそが伝統となつていくのだと信じています。」

西川潤(高31)は活動を通して培った私たちの絆と題して。

「……振り返ってみますと、あの『量』の強みは、今となつては『人』の強みであつたことを感じ

今も響き続ける黄金のハーモニー

音楽部

させます。一学級の人員をはるかに超えるほどの大所帯であつた同期生(卒業時で五四名)が、一日のうちのかなりの時間をあの生徒ホールで費やし、三年間という時間の中で数多くのイベントを重ねる中で培われた連帯感、卒業後

にも形を変えて確実に存在しているからです。」

まとめにあたり、改めて松本先生の指導力に敬服するとともに、川高吹奏楽部の更なる発展を期待したい。

(前顧問 吉敷 茂・高21)

音楽部が創設されたのは一九四九(昭和二四)年である。一九五一年に牧野統先生が着任され、男声合唱が中心の活動となつたが名称はそのまま音楽部を使用(定期演奏会はこの年を第一回とした)。

二年から長瀬青年の家で合宿(五日間)を行う。

「去年は去年、今年は今」という気持ちで望んだ一九六五年のNHK合唱コンクールは全国二位、朝日コンクールは埼玉県代表となる。その後NHK合唱コンクールは一九六六年から三年連続で全国大会に出場。特に県の代表は、六

一九五三(昭和二八)年NHK合唱コンクールで県大会初優勝。

一九六四年、部員九〇余名。NHK合唱コンクールで全国大会にまで進み一位を獲得し、第一回目の黄金時代を迎える。この時期は各部員の歌唱力の高さとチームワークの良さ、そして年齢的にも精神的にも充実した牧野先生の指導の素晴らしさがうまく重なり合っていたのではないかと感じている。

九年まで続いた。練習も(通称)朝練、昼練、午後練と長い間の伝統が引き継がれ、特に楠の下へ足踏み式オルガンを出してのパート練習は川越高校の風景の一つとなり、懐かしく、心温かく思い出される。その後牧野先生は体調をくずされ、それとともに部員も減り、成績もあまり振るわなくなってきた。そ

一九五五年NHK合唱コンクール関東大会で二位となる。この頃より朝日コンクールでも関東大会に進むようになり、部活動も充実してきた様子がかがえる。一九六一(昭和三六)年には部員約七〇名にまで増え、NHK、朝日コンクールともに県代表になる。翌六

市市民会館落成記念演奏、青少年音楽祭参加、一九六七(昭和四二)年には埼玉国体の合唱に参加等定期演奏会を含め大きな事業が続いた。



NHK 全国学校音楽コンクール第1位(1964年)

して、一九七二(昭和四七)年三月二十八日、余りにも早い牧野統先生の死去を迎えることになる。

一九七三年、秋月直喬先生を顧問に迎え、川越女子高校音楽部と合同定期演奏会の第一回を実施。

この合同定期演奏会は第八回まで続く。部員減による苦肉の策だったようである。川越女子高校音楽部に感謝申し上げる。

一九七六(昭和五二)年、小高秀一(高1)が着任。この年、部員三〇名、しかし皆練習熱心で翌年には久しぶりに朝日コンクールで関東大会に出場する。一九七八年、新しい音楽室が五階に完成し移動引越しが大変であった。新しい音楽室は嬉しかったが中央付近に柱が二本あり、音も響きすぎでハーモニイ等、聞くことが出来ず練習に苦勞した。校長にお願いして絨毯と壁紙を張ってもらい、音楽室を横に使うことにより全てを解決した。

その後、顧問としての私は部員を増やすことと全日本合唱コンク

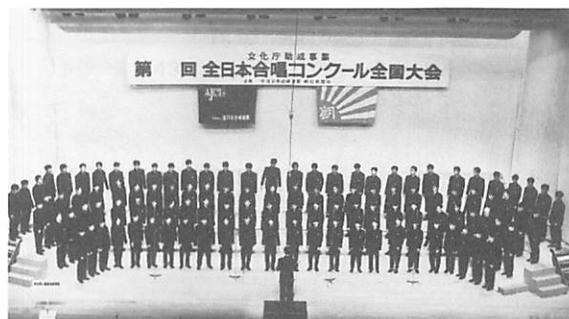
ール(朝日コンクール)の全国大会出場を目的とした。そのため、せっかく行っていた川越女子高校音楽部との合同定期演奏会をやめ、男声合唱のみとし、大学のグリークラブで歌われる合唱曲や発声を生徒とともに学んだ。幸いなことに卒業生の多くが大学のグリークラブに入り、中心となって活躍していたので情報は手に入れやすかった。一九八五(昭和六〇)年に部員約一一〇名となり、全日本合唱コンクール全国大会初出場を果たす。翌八六年には全国大会高校の部で銀賞受賞。翌年、NHK合唱コンクール全国大会で銀賞に入賞した。この時も一九六四年と同様に部員も顧問も充実した時を迎えていたように思える。牧野先生もそうであるが、ピークに持っているのに約十年かかることが良くわかる。部員数一〇〇名以上という時代が一九九三(平成五)年まで続いたことに驚いている。

一九八八(昭和六三)年、浅井一郎(高30)が着任。本校音楽部OB

の浅井が着任出来たことは音楽部にとって大きな喜びと安堵があった。浅井は今年(一九九八年)で着任十一年目を迎えたが、期待どおりの活躍をしてくれた。

この十年間で全日本合唱コンクール全国大会高校の部で金賞受賞一回、銀賞受賞四回、優良賞受賞一回を果たしている。川越高校音楽部の男声合唱は全国的に有名になり、押しも押されもしない高校合唱界のエリート校になった。第二期黄金時代が十年以上続いていることになる。これも努力に努力を重ねた部員諸君と浅井教諭のご苦勞の賜である。

川越高校は伝統的に音楽系クラブ員の数が多い。芸術科目音楽選択者も全校の半数以上という、男子高校では珍しい学校である。運動ばかりでなく文化面でのレベルも高く、特に音楽においてのセンスが良い。このような広い土台に支えられた音楽部がいつまでも続くことを祈念するとともに二〇〇〇(平成一二)年に開催される第五



全日本合唱コンクール全国大会金賞(1990年)

○回定期演奏会の成功を心より期

待し、まとめとしたい。

(前顧問 小高秀一・高川)

明日に向かって発言し続けた青春群像

弁論部

言論の冬が去り、我が川越高校弁論部も一九四七(昭和二二)年に復活をみる。しかし、全関東雄弁大会を盛大に主催し「川中辯論部」の名を全国に響かせた昔日の姿を取り戻すには、その後二十年近くの歳月を要するのである。

一九四九(昭和二四)年七月に川越市高校雄弁連盟が発足、八月には埼玉県高校雄弁連盟が発足と、着実にその歩を進め始めた。一九五二年には、市連盟主催による第一回関東地区高校雄弁大会を川越女子高で開催するとともに、本校弁論部主催、朝日新聞社後援による初の県下高校弁論大会を開く(校舎改築のため、川越農業高校を借りての開催)までになったものの、翌年の開催はならず、慢性的な部員不足の中で細々とその活動を続けていくのである。

一九五七年、第一回全埼玉高校

弁論大会を本校講堂において開催する。後に全国大会へと発展する大会が産声をあげたことになる。黄金期への前兆と言えよう。校外における弁論大会への出場もこのころから盛んになる。

一九六〇(昭和三五)年には、放課後の練習に加え、昼休みの発声練習が始まった。近隣の住民にとっては、昼の憩いを破る罵声でしかなかったかもしれない。入部間もない一年生は一度は必ず喉をつぶしたものである。弁論部員の特権は、英語の教師が「君は弁論部か、読まんでよい」と、声の出ない部員にリーダーの朗読を免除してくれることであつた。

一九六一年には、夏休みの合宿練習が始まった。炎天下での午前午後の発声練習、テーマを決めての討論、座禅、さらには一日三食の自炊と、心身ともに鍛えられ、

秋からの弁論シーズンには、その成果が実を結ぶこととなる。

一九六二年一月七日、この日は川高弁論部にとって記念すべき日となつた。二年生の山川一陽(高15)がNHK青年の主張全国コンクールにおいて、見事、全国優勝を成し遂げたのである。出場者が学生に限られず、年齢も二五歳までと幅広いこの大会において、普通高校の生徒が、その論旨だけで渡り合い全国優勝を遂げたことは特筆すべきことであつた。その後、後輩たちによつて校外弁論大会での優勝、全国大会への出場などは数多く記録されるが、これを超えるものは残念ながら出ることはなかつた。

一九六三(昭和三八)年には、本校弁論部主催の全埼玉高校弁論大会が発展解消し、第一回初雁杯争奪全関東高等学校弁論大会が開催



第5回初雁杯争奪大会を終えて



黄色地に黒の腕章

される。部員も四〇名近い大所帯となっていた。翌六四年の、第二回大会は新築なった川越市民会館へと会場を移しての華々しい開催となった。部員数も五〇名を超え、腕に輝く黄色地に黒の「川高弁論部」の腕章が黄金期を象徴するかのようであった。各地で開かれる弁論大会での優勝は枚挙に暇がなかった。

弁論部の活動にあつて、弁論大会の開催は、その準備に要する時間、エネルギーとも、計りしれないものがあつた。新学期早々、各地の高校への大会要領および募集要項の発送から仕事はスタート。集まった原稿を審査し、出場校の決定と通知。それと並行して、各種団体への後援依頼、市長はじめ来賓への祝辞の依頼、審査員の依

頼、旅館の手配、広告取りとプログラム作成等々、仕事は山積していた。しかし、黒の詰襟学生服に川高弁論部の腕章を付ければ、どこへ行くにも臆することはない。当時、高校文化部の活動としては卓抜したものであり、この大会は、高校弁論部が主催する大会としては、全国有数のものであつた。

一九六五(昭和四〇)年の第三回大会は、全関東の名を冠してはいらぬものの、出場弁士は、遠くは兵庫、岐阜にも及び、早くも全国大会の様相を呈していた。市役所前の松村旅館を借りての前夜祭は、各弁士の郷土自慢や本校弁論部員の歌や踊りで盛大なものとなった。

一九六八年第五回大会(六七年はテーマ大会『明日への発言』のため大会回数には加えず)より、名称を初雁杯争奪全国高等学校弁論大会と改め、名実ともに全国大会となったのである。出場校は、北は山形、新潟から南は静岡、愛知、岐阜、京都、兵庫にまで及ん

だ。まさに我が世の春を謳歌するが如き弁論部であった。二年後の一九七〇年、第七回大会を以て、その火が消えようとは、だれに予測できたであろうか。学園紛争の終焉とともに到来する、「シラケの時代」には、弁論も抗する術がなかったのである。

思えば、弁論部ほど時の趨勢に影響を受けた部は他に例を見ないであろう。その後、衰退した弁論部は、一九七四(昭和四九)年の生徒会報からは、ついにその名も消え、再び会報にその名を現すのは一九九三(平成五)年を待たねばならなかった。

一九六五(昭和四〇)年をはさむ約十年間は、弁論部がさんざんとその輝きを放った、まさに黄金時代であったのである。

(近藤伸一・高20)



夏合宿の発声練習



堂々の全国優勝(NHK青年の主張全国コンクール)

最近の部活動

新聞部

怠慢部から全国コンクール入賞へ

私が顧問を引き受けた十二年前（一九八七年）、新聞部は「怠慢部」と呼称されていた。記事は取材活動がほとんどなしの机上原稿の寄せ集めだった。しかし目をみはるような素晴らしい伝統をもっていた。自分たちで企画し、編集し、校正をし、発行予定日を守ること。だれの指導も援助もなしに行われていた。一年生は広告とり市内をあるき、二年生が編集実務を担当する。残念だったのは、二年生が秋季号の発行後引退してしまうことだった。

私の方も新聞部を指導するのは、



1996年度大東文化大学長賞(最優秀賞)受賞

初めてのことだった。引き受けて一年間、自学自習を続け、次の年より夏季合宿を開始した。この年の一年が三年に進級した一九九〇（平成二年）、全国高校新聞コンクールで朝日新聞社賞を受賞した。

これより十年間に六回の入賞をはたすこととなった。いつの間にか怠慢部の呼称は聞かなくなっていた。

並行して、全国高校新聞コンテストでも技術賞をはじめいくつもの入賞もはたした。

夏合宿には引退した三年生も参加し、身につけた専門的技量、技術の引き継ぎを行ってきた。一年はここで、広告とりではない編集の実務を学びはじめることとなる。ときには、卒業生も参加し、また大学卒業後、新聞記者になった先輩からの批評や苦情文に接して、新聞づくりへの、なにかの財産を手に入れていく。こうした相互の交流を通して、教師による指導以外からも多大の教訓を身につけ、全国的レベルの紙面をつくりあげることができるようになった。

新聞づくりの基本原則をふみはずさず、先輩たちのつくりあげた自主自立の伝統に立てば必ずや素晴らしい編集成果をあげるにちがいないと確信する。

（前顧問 吉田尚司）

応援部

応援部は、応援部、吹奏楽部、及び本校生徒で構成する応援団の指揮にあたり、愛校心の涵養、教育活動の活性化等、本校のさらなる発展を目標とし、活動を行っている。

部員は一九九八年十二月現在、三年三人、二年一人、一年七人であるが、古き良き伝統を守りつつ、従来の応援部の活動を見直し、新

しい応援部作りを行っている。

以下、現在の応援部の主な活動を紹介します。

◎対面式(四月初)

上級生と初めて対面した新入生に第一応援歌とエールを送り、高生活の出発を祝う。

◎新入生、校歌及び応援歌指導(四月初)

新入生に向けて校歌、応援歌を指導する。新入生は本校の歌を覚え川高生になったことを実感する。

◎新入生歓迎会(四月)

新入生に応援団の大団旗や、主な演技を披露する。

◎球技大会(六月)

開会式には第一応援歌を、閉会式には校歌を斉唱する。

◎始業式、終業式(各学期)

式の終わりに校歌を斉唱する。学期の始まりと終わりに、川高生としての自覚を促す。

◎野球応援(四月、七月、九月)

野球部の春季大会(県大会以上)、秋季大会(県大会以上)、夏季大会(第一回戦より)に応援団を結成

し応援活動を行う。

◎壮行会

壮行会は部活動が関東大会以上の大会に出場する場合に開かれる。出場する部活動に全校生徒で第一応援歌とエールを送る。

◎陸上競技大会(十月)

開会式には第一応援歌を、閉会式には校歌を斉唱する。競技大会の最後には文系軍と理系軍に分かれて騎馬戦が行われ、その際、応援部幹部が両軍の大將になり指揮をとる。

◎夏合宿(八月)

くすのき祭での演技発表会に向けて、合宿は八月の最終土、日を含み、通常三泊四日で行われる。練習には、それぞれの演技を受け継いだOBを招き、演技を完成させ、演技が正確に受け継がれるように指導を受ける。三日目の夜、現幹部は新幹部を決定し、発表する。下級生は幹部を目ざし、合宿を頑張る。

〔練習内容〕

午前 腕立て伏せ等の筋力トレー

ニング、拍手、腕振り等の基礎練習

午後 演技練習

夜 体育館にて通しリハーサル

◎くすのき祭(九月)

開祭式には第一応援歌を、閉祭式には校歌を斉唱する。閉祭式時に応援団幹部の引退式が行われる。引退式は『学生注目』で始まり、校歌斉唱を行い、幹部胴上げで幕を閉じる。

◎くすのき祭での演技発表会(九月)

幹部は夏の合宿を経て、この演技発表会で大団円を迎える。この日までに幹部は演技を完成させ、二年生部員は幹部から部経営を学び、一年生部員は、応援部の精神を学ぶ。

◎埼玉県六校応援団連盟主催演技発表会「日輪の下に」(二月)

川越、浦和、熊谷、不動岡、松山、春日部の六校応援団連盟が主催する演技発表会。会場は各校が順番で毎年持ち回っている。新幹部になって初めての演技発表会で



第38代応援部(1998年)

あり、他校と幹部の演技の完成度や下級生の元気の高さを競い合う。

◎予餞会(三月)

卒業生に向けて全校生徒の前で演技を披露する。卒業生の新たな出発の成功を祈念して応援歌やエールを送る。

◎卒業式(三月)

三年生旧幹部が各クラスの代表に名乗りでて卒業証書授与時に、『学生注目』を行い、エールを切る。卒業する旧団長は羽織袴をまとして舞台へと上がるのが応援部

の慣例となっている。

本校の百周年記念誌に現在の応援部の活動記録をのこせることを大変光栄に思う。今後ともこの応援部が存続し、本校の教育目標である『自主自立の精神』の涵養の一助となることを願っている。

(顧問 杉崎一彦、福島佳克)

放送部

放送部の活動は、校内放送をすること、校内の諸行事の手伝いがその中心である。

まず朝登校すると、放送室で待機し放送の依頼を待つ。シヨート・ホームルームの時間になると教室に行き、休み時間になるとまた放送室に直行する。放課になるまでこれを繰り返すわけである。放課後は放課後で放送依頼が多いため放送室で待機する。職員室からも放送は出来るわけだが、放送部に依頼する職員も多く、なかなかた

いへんである。

次は校内行事の放送の準備、運営の仕事であるが、一年を通して見るとかなりあり、主な行事だけでも次のようになる。

まず一学期だが、始業式、入学式で始まり次の行事の手伝いをす

る。
対面式、離任式、生徒総会、避難訓練、PT会後援会総会、一年交通講話、立会演説会、球技大会、終業式

二学期は始業式で始まり次のような行事がある。

くすのき祭、陸上競技大会、強歩大会前日の集会、防災訓練、終業式

三学期は次の行事の手伝いである。

予餞会、卒業式、入学許可候補者説明会、終業式

活動の内容が基本的に裏方の仕事であり、また放送機器が老朽化しており、同じ手順で準備してもうまく音が出なかつたりと、いろいろと苦労はあるが、よく活動

している。

数年前全部員数が六名になってしまい、まさに存亡の危機にさらされたことがあったが、現在(一九九八年)は八名と少しずつふえている。

他校の放送部では、コンクール等に出場することが多いと思うが、本校の放送部の場合、残念ながら最近までそうした活動はできていなかった。ただ十年前ごろは出場していたらしく、次の様な賞を受賞したことが記録されている。

◎一九八七(昭和六二年)
NHK放送コンテスト県大会、ラジオ自由番組県大会 優良賞、全国大会出場

◎一九八八(昭和六三年)
第七回埼玉県高校放送コンクールラジオ部門 優秀賞 優良賞

今後の活動であるが、幸いなことに平成十年度より主顧問が高等学校文化連盟放送専門部責任者である佐賀先生にかわった。先生は放送についてはすべてを熟知しており、またコンクール等について

も意欲的であり、現にここ二二年間で次のような成果をあげている。

◎一九九七(平成九年)
第一四回埼玉県高等学校総合文化祭高校放送コンクール オーディオピクチャー部門 入選

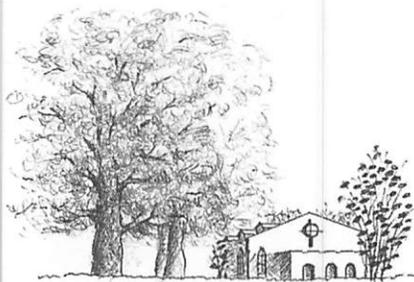
◎一九九八(平成十年)

第四五回NHK杯全国高校放送コンテスト テレビ制作第一部門 埼玉大会 最優秀 全国大会出場 全国大会 準決勝進出 入選

第一五回埼玉県高等学校総合文化祭高校放送コンクール

ビデオメッセージ部門 優良賞
ビデオコミュニティ部門 優良賞

(顧問 根岸 登・高18)



カット・藤野達也(中43)

吹奏楽部

一九六二(昭和三七)年十月、校内放送の呼びかけによって吹奏楽部は発足した。これは、その三年前に野球部が甲子園出場を果たしたとき、応援に吹奏楽がなかったのが本校を含めわずか二校だけだったということに端を発しているという。創設の労を担った松本成二先生の尽力で、その後めざましい発展を遂げることになる。

吹奏楽部は一九九一(平成三)年度に創部三十周年を迎えた。当時のOB会運営委員長小高洋一(高40)、部長青木豪俊、磯崎政徳、顧問栗原進(高10)、清水徳雄(高19)、根岸登(高18)を中心に、現役、OB相互協力のもと、さまざまな行事が組まれた。その一つ、『三十周年記念誌』の編集は吉田裕揮(高45)を委員長にして進められ、「吹奏楽部のこうした記念誌作り

も珍しい」と埼玉新聞で紹介され、「転居のOBぜひ連絡を」と朝日新聞で呼びかけ、「スタッフ一同二学期をそっくり注ぎ込んでしまった」と吉田が編集後記で語った記念誌および名簿が完成した。

一九九二(平成四)年一月五日には、三十周年記念演奏会(第二一回チャリティー・コンサート)が川越市民会館で、記念パーティーが川越プリンスホテルで行われた。記念演奏会には高二六回卒業のピアニスト椎野伸一が「ラブソティ・イン・ブルー」で花を添え、記念パーティーには創設者の松本先生をはじめ、歴代の指導者、卒業生が一同に会し、盛会であった。現在の活動は、定期演奏会(六月)、チャリティー・コンサート(OB会と共催、一月)の二つの演奏会を軸に、コンクール(八月)、アンサンブルコンテスト(十一月)、高等学校音楽祭(十一月)等校外行事への参加、野球応援、応援団演技発表会「日輪の下に」など他部との共同行事、その他学校行事

での演奏にと多岐にわたっている。したがって、皆様の目に触れる機会も多いと思われる。その折には、応援していただければ幸いである。なお、ここ数年の話題となった吹奏楽部卒業生一人を紹介しておきたい。

まず高二六回卒業の奥泉光(本名・康弘)である。一九九二(平成五)年十二月号「文学界」掲載の「石の来歴」で第一〇回芥川賞を受賞。在学中はフルートを奏し、現在は同期の仲間とジャズバンドを編成しているという。本校卒業生で芥川賞の受賞は奥泉以前には聞かない。

もう一人は高二九回卒の田村文生。東京芸術大学大学院在学中の一九九三(平成五)年、吹奏楽コンクール課題曲公募「第四回朝日作曲賞」に「饗応夫人・太宰治作「饗応夫人」のための音楽」で入選。一九九四(平成六)年度の課題曲として多くの学校に演奏された。在学中はホルンを奏し、芸大進学後、三年間指揮者として、部を指

導していただいた。一九九四年度のコンクールは、卒業生の課題曲でもあり、作曲者直々の指導もいいただき、県選考会優秀賞というよい結果であった。

(前顧問 吉敷 茂・高21)

英語部

八十周年記念誌によると、本校英語部は戦後の一九四八(昭和二三)年四月、新制高校の発足とともに正式の部としてスタートしている。一九四九年に創刊された生徒会報第一号によると、当時の活動内容は、①英会話、英語発音練習②英書輪読会③英語発表会(朗読、スピーチ等)④英文学講演会⑤市内高校英語弁論大会などに取り組んでいたようである。戦争をはさみながらの本校の英語教育は立派な先生の指導のもとで生徒の英語学習意欲が高揚し、船戸英夫(中46)立教大学教授、武藤脩二

(高6)中央大学教授、増田秀男(高6)明治大学教授等の英文学者を輩出している、とある。

その後の生徒会報の英語部の自己紹介欄を何年分かのぞいてみた。

○一九八〇(昭和五五)年 英会話班(ICE)のテープ利用等)／翻訳班(モーム、ラッセル等)／英検班(英検一級合格目標)／タイプライター班

○一九八三(昭和五八)年 実用英語班／翻訳班／英検班／タイプ班／単語班

○一九九四(平成六)年 英字新聞を読みまくる／Z会の問題(特に和文英訳)／英検一級の過去問を解く／単語テスト／長文和訳問題を解く／ヒアリング(ラジオ講座を解く)／大学の過去問)／AET(後のALT)のケイトさんとの英会話／大学の過去問(筆記)／英語教材(主に物語)

次に最近(一九九七、一九九八年度)の英語部の活動を紹介する。
(一)ALTとの会話(一九九七年度一学期までオーストラリア出身の

パトリシアさん、二学期以降イギリス出身マーチンさん、一九九八年度二学期以降、アメリカ出身のカペナさん)

特に三年生は熱心で、単なる会話だけではなく、ノートにエッセイを書いてきて毎週添削してもらった活動など。

(二)電子メールを海外に送る取り組み(定時制の商業科目で使うコンピュータ室をお借りして)

顧問が入手したインターネットでのペンパル希望者一覧から好きな相手を選び、顧問の家から電子メールを送った。ブラジル等から三通ほど返事が来たがあまり文通の必然性がなく継続できていない。

(三)英作文コンテストへの参加

高等学校英語研究会主催の全県英作文コンテストに参加。参加したことには意義があった。

(四)輪読会

現在はこれを中心に活動をすすめている。一学期はゴールズワージーの“The Apple Tree”(美誠社)。百頁近いものだが美しい話

なので楽しく読んだ。顧問のほか家庭科の先生にも参加していた。だき中味がふくらんだ。二学期途中から生徒の希望する副読本に移り、“Martin Luther King Jr.”(桐原書店)や、“Episode on FAMOUS PEOPLE”(北星堂)を読了。現在は、ALTのカペナさんとともに、原文ではないがシエイクスピアの『ハムレット』や『マクベス』を読んでいる。

(五)ビデオによる英語の発声訓練

キング牧師についてのアメリカのビデオ資料、ALTのマーチンさんが持参したイギリスについてのビデオ資料を、聴く力の向上を意識しながら鑑賞した。

*

今英語部員が一人オーストラリアのメルボルンに留学している。

読む、書く、話す、聞く、のオールラウンドな英語力を高めながら将来世界に発信できる国際人の基礎づくりに励みたい。

(顧問 柳沢民雄)

映画視聴覚 研究部

(一)映画鑑賞と批評を中心として

最近のビデオ機器の著しい普及により、名作映画を映画館へ行かなくとも、容易に家庭、学校で鑑賞できるようになり、映画が好きで好きでたまらないという部員たちによって、視聴覚室や部室等で活動が行われている。川高伝統の「よい映画を鑑賞し、悪い映画を排斥する」との趣旨のもと、映画鑑賞や批評を行い、背景にある社会全体の問題についても、深い議論がなされている。また最近の日本映画の海外映画祭での多くの受賞をふまえて、海外と日本での映画作品のとらえ方の違いなどにも目を向けている。

(二)ビデオ制作をめざして

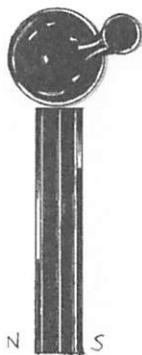
映画鑑賞にとどまらず、部員自らがビデオ制作に取り組もうとしている。まずその第一歩として

「川高の現在を記録する」という目的から文化祭、体育祭等の学校行事や体育館改築工事などを記録に収めようと、いくつかの班を作り、ビデオ撮影を始める計画もある。また、個人的に文化祭の展示や水泳部の発表(シンクロ)などをビデオで撮影している部員もいる。

(三)文化祭・映画会を通して
文化祭や定期的な映画会を通して、よりよい映画を鑑賞し、その批評を持ちより活発に議論し、今後の部の活動に役立てている。またこれからの展望としてビデオ制作に必要な機器をそろえ、より高く、より深い作品を作るべく活動を続けようとしている。

一九九八(平成一〇)年現在、部員数七〇名である。

(顧問 石塚稔成)



カット・関根伸夫(高13)

写真部

一、現在の状況

現在の活動は、毎週金曜日の必修クラブの時間を中心に行っているが、写真展前後は休日も登校し、撮影や現像作業に明け暮れることが多い。年に三回実施される写真展は、最終日に表彰式とともに合評会が行われ、審査員から作品に関する批評をいただき、これが次の作品づくりへの有益な助言となっている。

一九九七(平成九)年の第一六回埼玉県高等学校写真連盟写真展に出品した三年生、白石拓也(高50)の作品「休み時間」は、優秀な成績をおさめ、翌一九九八年二月に東京で開催された関東地区の各都県高等学校文化連盟写真部合同写真展(関東大会)に、候補作品として推薦されることになった。今後も部員の減少に悩まされる

こととは思うが、少数精鋭で地道な活動を続けていきたいと考えている。

二、年間活動計画

四月―新入生歓迎撮影会

現像等技術指導講習会

五月―埼玉県高等学校写真連盟

写真展出品準備

六月―同写真展

七・八月―くすのき祭準備

九月―くすのき祭

九・十月―高等学校総合文化祭

高校写真展出品準備

十一月―同写真展

十二月―一月―西部地区写真展出品準備

品準備

二月―同写真展

(顧問 中里秀子)

感想

初めて作品を出品したときのことは、今でもよく覚えている。入部したばかりで、何をどうすればいいのかまったくわからなかった。作品の内容よりも、とりあえず期限内までに作品を仕上げることに精

一杯だった。

出品の回数を重ねることに、みんなそれぞれ自分なりの表現をするようになり、白石君のように県大会で優秀賞を受賞するほどに腕を上げた人もいた。

今後の後輩たちの活躍に期待したい。

(新井真一・高47)

物理部

現在の活動のルーツは今から十年ほど昔のこと、牧野剛太郎(高41)ら、数名のヲタクたちにある。それ以前は、帰宅部化していた時期が長かったため、多少の研究資料以外は残念ながら記録されていない。彼らは、「Rを中心とした部活作り」と「学会への復讐」という周囲からは全く理解されない理念のもと、物理部を復興し、「静電気研究」「レーザーアート」の研究を開始したのであった。

静電気研究はUFOの飛行原理

として紹介されていた技術(現在は人工衛星の姿勢制御に実用化されている)の真贋を確かめるといふ目的で開始された。これが科学的動機によるものであったかどうかは定かではないが、この研究は純粋に物理学上の議論を提供し、さまざまな研究を生んできた。研究においては、理論追及のみならず実証も行ったが、高電圧を用いる実験であるため絶えず感電し、苦勞した。また、レーザーアースは、レーザー光を制御してアニメーションを描こうというものであった。これは、部員のアニメ嗜好にあったものの、技術的には非常に高度で、取り組む部員は徹夜を重ねてくすのき祭に臨むことになった。

この物理部の黎明期を「大御所時代」とわれわれは呼んでいる。これは引退した部長が三年になっても大御所として実権を握り、院政をしいて後輩の指導(?)にあたったことを言う。このため、物理

部は縦のつながりの大変強い部活となった。これが、技術の伝達と自由な議論の伝統を生み、後の多彩な研究を支える布石となったのである。

一方で、当初のメンバーは非常に型破りであったため、周囲を混乱させることもしばしばあったようである。

それには、ニトログリセリンを作ったとか、放射線源をどこからか入手してきたとかいう危険なものから、少女漫画を部内に流行させるといったことまであったようだ。とにかく普通でないことを実践してきたのである。

時は流れ、両研究とも充実してきた時期にリアモーターの研究を開始するが、実動部員が二〜三名という「帰宅部」化の危機に陥る。しかし、同時期に松山高校物理部から「ロボット対決」を持ちかけられ、絶対不利な状況の中で勝利する。

これを契機に翌年は多くの新入部員があり、新入部員らでロボッ

ト研究を開始、ハンド型、多彩な

移動型、はてはUFOキャッチャー(人形を取るゲーム機)まで製作した。これは、一九九三(平成五)年にNHKがくすのき祭を紹介した際に取材された。リアモ

ーター研究はエレクトロニクス工作コンテストの優秀賞に入賞したほか、さまざまな方式を製作した。

また、レーザー班員がスーパーコンピュータのプログラムコンテストに参加し特別賞を受賞するなど、対外的にも成果をあげた。その後、ソフトウェアの研究が進み、レーザーアースの技術力を一気に高めることになる。

近年の異色の研究としては、テレミンという古典電子器の製作研究がある。

卒業生の多くは理工系学部に進学し、物理部時代と同じような分野を専攻している。

(小池剛史・高46)

化学部

化学部では一年生が入部すると、三年生によって、参考書を使って化学の基礎をみっちりたたき込まれる。その後、自分のやりたいテーマを見つけ、班別に分かれて研究を始めるといような活動を行ってきた。そのため、同じ生徒が活躍している間は、しつかりできるが継続性に乏しいという傾向が強い。

そんな中で、毎年継続的に行っているのが新河岸川の水質調査である。市内三か所(高沢橋、田谷橋、氷川橋)について毎年一回、塩化物イオン、COD(化学的酸素消費量)、DO(溶存酸素ガス)、PH(水素イオン濃度)、アンモニア窒素を測定している。また、長期休業中の三月、七月、八月、十二月には、氷川橋のみだが、二十四時間水質測定というのも行っ

ている。これは、一時間ごとに水を取ってきて、先の五項目について測定をするというものである。

これらの内容については「くすのき祭発表資料」などにゆずるが、十年以上続いている非常に誇れる研究であると思う。

そのほかの実験では、電池、ナイロン、高分子、スライムの製造合金の製造など、市販の高校生用の化学実験書や雑誌などから採ってきたものや、新聞紙から紙を再生する、廃油からセッケンをつくるなど、最近の時代を反映しているようなテーマのものが多くある。

ちよつと変わったものとしては、バイオテクノロジの研究がある。ランの種子の無菌発芽に成功したのである。生徒からバイオテクノロジをやってみたいと言われたとき、これは化学部ですることなのかちよつと疑問に思ったが、何でもできるのが我が部の取り柄、とにかくやってみることにした。たまたま、扱いやすいといわれるシランの種子があったのでそれを

使つて無事発芽成長させることができたのである。その後、後輩たちがニンジンの組織培養に挑戦したがあまりうまくいかなかった。

また、マイスナー効果による超伝導の確認に挑戦というのも、ユニークなものである。簡単にいうと、永久磁石の上に冷やした超伝導物質を置くと反磁性現象によつて浮かぶというもので内容を知らないとそのすばらしさはなかなかわからないものである。実際にはこの冷やした超伝導物質をつくるのに挑戦したのだが、八五〇度に加熱したり、高圧プレスしたり、液体窒素で冷やしたりといろいろやつたがなかなかうまくいかなかった。

このように生徒がやりたいと思うことがやれるのも化学部の特徴でもあろう。これからも自分たちでやりたいことを見つけ、可能性にどんどん挑戦していつてもらいたい。

(前顧問 田端昭彦・高24)

生物部

本校の生物研究室に残る生物部に関する最も古い資料は、「川越高等学校生物部編集生物部研究1(二九四九)」という小冊子である。

この飾り気のない冊子を読むと、当時からさまざまなテーマについて熱心な研究が行われていたことが伝わってくる。小川瑞穂(高2)による発刊の辞には、自然科学の研究に対する熱意が強く語られている。生物部の誕生は、この部報に一九四六(昭和二一)年と明記されている。

部の活動は創設当時から活発で、木村冉、横田稻吉両顧問の指導の下、秩父、伊豆大島、尾瀬等々精力的に遠征し、採集活動などを行っていた。また、県内での蝶採集活動や個人研究も多く行われていた。

部員の研究は、毎年発行された

部報にまとめられていたが、一九六〇(昭和三五)年よりその名称を校歌にちなんで「むらさき」とし、部の伝統となった。本校同様に活発な活動をしていた浦和高校、浦和第一女子高校、大宮高校などとは部報の交換などの交流をしていた。

昭和三十年代は、横田、岡田幹雄両顧問の下、蝶、野鳥、シダの研究、そして夏の採集旅行も毎年行われていた。四十年代は、富樫裕顧問の下、植物ホルモン、植物組織、菌類等々について実験室での研究が盛んであった。生態研究も相変わらず熱心に行われ、特に蝶の分布調査、赤城山周辺のヤドリギの研究は高い評価を得ている。昭和四十年代後半から五十年代は、愛川敬武、紺野雄三、牧野彰吾の各顧問の下、継続的生態研究に加え、プランクトン、熱帯魚飼育等の新分野の研究が行われた。また、本校近くの「伊佐沼生物環境調査」では多くの成果があり、なかでも池田靖(高29)による「ウルナ

テラ」発見は、特筆に値する。これは、元東北大学教授鳥海衷博士に同定して頂き、日本での初の発見であることがわかった(この件は、一九七七年四月の日本動物学会発表にまで至った)。

各研究の詳しい報告は、部報「むらさき」に、昭和五十年代までの部の様子については『八十周年記念誌』に詳しい記述がある。

昭和六十年代は、高橋守(高20)顧問の下、サホテンやタテツガムシの生態研究等々があり、県科学展や発表会へ参加している。その後、部員数人の状態が続き今日に至っている。一九九七(平成九)年からは、「伊佐沼生態調査」が再開され、水質の化学的調査および



1965年2月発行の部報第5号

植物・フランクトン調査を中心に研究が進んでいる。

一九九八年には、その研究成果を科学教育振興展覧会(西部地区)で発表し、優良賞を獲得した。

(顧問 中村 潔・高32)

地学部

現在、探検隊と天文班が活動し成果をあげている。

最初に探検隊について述べる。

一九八八(昭和六三)年夏、富士山の北西に広がる青木ヶ原樹海の溶岩地帯に新風穴を発見し、「神座川越風穴」と日本火山洞窟協会が命名した。NHK甲府放送局は終始密着取材し全国ネットで放映した。第一発見者の貴家雄一(高43)等がその後六回調査測量し、総延長は二三〇m、流動部に溶岩柱と溶岩球があることがわかった。一九九〇(平成二)年に日本火山洞窟学協会会長の小川孝徳先生が来

校し、講義をしていただく。

一九九一(平成三)年夏、「西湖第八風穴」を発見する。調査の結果、三層の構造で最深奥部に巨大な溶岩球を擁することがわかった。測量が一部未完成なので早急に対応したい。付近での自殺死体の発見は今も脳裏に残る。

一九九四(平成六年)夏、西湖遊歩道直下に発見した「西湖第一風穴」は溶岩棚の発達が著しい洞窟であった。

一九九八(平成一〇)年夏、富士山麓青木ヶ原樹海に「西湖第一風穴」を隊員の柏木雅生(当時二年生)が発見し、測量団とともに正式登録した。

奥多摩を中心とした石灰岩地帯に発達する鍾乳洞は月例活動に利用している。特に奥多摩最大級の規模を持つ「倉沢鍾乳洞」では入洞初体験の洗礼を受け、正に身も心も探検隊員になる。奥秩父大滝村に発見された「瀧谷洞」を求めて豆焼沢を遡上したこともあった。これらの活動は「くすのき祭」



神座川越風穴の調査(1988年)

や理科研究発表会、部誌としてまとめ発表している。一九九六年の県理科教育発表会で佐藤友彦(高49)が「青木ヶ原樹海における新溶岩洞窟の発見」を発表し優秀賞を受賞する。探検隊の部誌には酒本幹夫(高44)編集による「富嶽」二五五頁の巨編があり詳しい。次に天文班の活動について述べる。

一九六六(昭和四一)年、地学部部報「あめつち」が創刊。地質・天文・気象各班の研究活動が掲載されている。

ここから分離独立して一九六七（昭和四二）年には班報「ヴィーナス」を創刊。同六号からは名称を「VENUS」に改め、一九九八（平成一〇）年の三二号まで連綿と発行している。

「VENUS」一三号のまえがきでは北原栄一（高42）がサンシャインプラネタリウムの写真展で入選したことが紹介されている。一九七七年、「月刊天文ガイド」三月号フォトコンテストで、楠本圭（高51）の「オリオン座景勝地」が一席に選ばれている。

一九九二（平成四）年度県理科教育研究発表会で、森村将之（高46）が「十二月二十四日の部分日食の観測」を、一九九六年度は楠本、矢島知泰（高51）が「光害の影響から見た天体観測地の考察」を発表し、それぞれ優秀賞を得ている。

一九八九（平成元）年発行の部誌「VENUS」一三二号は二〇〇頁の大作である。そこから主な活動を拾ってみると、太陽黒点、直達日射量、流星群、流星塵の観測の

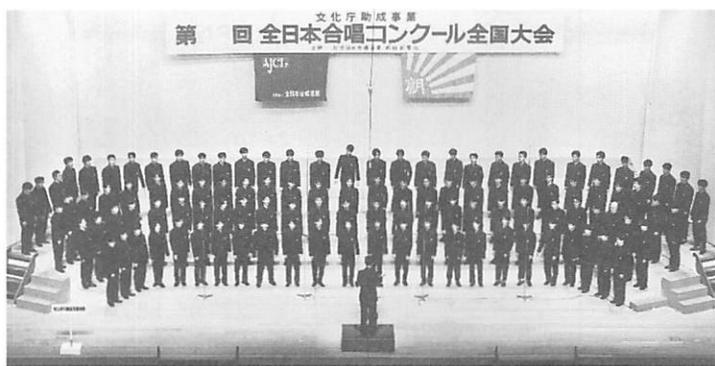
ほか、五月は流星群観測を兼ねた新入生歓迎会、月例観測で木の子茶屋、八月は三日目にやっとはれてすごい流星の入笠山夏合宿、九月は大成功のくすのき祭、十月は金星食観測、野辺山へ冬合宿下見、十一月はすばらしい星空の三峰山、一月は零下二三度を記録した野辺山の冬合宿、二月はビデオ撮影に成功した皆既月食の観測、三月は高峰高原で春合宿との記録がある。続く二三号は二三五頁と過去最高の超大作で、荻野正宏（高44）が川越北東部の田圃地帯でのカノープス観測の成功を書いている。

（顧問 西川正己・高21）

音楽部

音楽部の名称で活動を開始したのは一九四九（昭和二四）年度からのものであるが、現在も年一回行われている定期演奏会の第一回は、一九五一年（牧野統先生が顧問に

なられた年）であった。音楽部のOB会はこの年を第一回としている。卒業生数を見ると、一〜一〇回八六名、一一〜二〇回二〇五名、二一〜三〇回一一八名、三一〜四〇回二九〇名、四一〜四八回一九八八年二四四名と合計九四三名になる。活動については一九九八年度以降主なものについて触れてい



全日本合唱コンクール全国大会 金賞（1990年）

く。一九八〇（昭和五五）年。川越高校第三〇回定期演奏会は川越女子高校との合同演奏会としては最後となった（秋月直胤先生が顧問になられた一九七三年より八年間行われた）。朝日コンクールでは三年ぶりの関東大会進出を果たし、銀賞。以降同コンクールでは一九八二年を除いて毎年関東大会に進出している。

一九八四（昭和五九）年。全国高等学校総合文化祭（山口県）に埼玉県代表として出場する。また、埼玉県男声合唱四校合同演奏会の第一回を埼玉会館で行う（浦和・熊谷・松山高校と。平成九年、第一四回より春日部高校を加えて五校合同となる）。NHKコンクールでは十五年ぶりの関東・甲信越大会へ進出し、優良賞。この年度第一回送別演奏会を行う。

一九八五年。部員数が一〇〇名を超え、朝日コンクールで音楽部史上初の全国大会（長野県）進出を果たし、優良賞。

一九八六年。朝日コンクール二年連続全国大会（愛媛県）進出。銀賞（四位）。

一九八七年。NHKコンクール十七年ぶりの全国大会進出。銀賞（二位）。

一九八八年。一九七六年より顧問となり、熱心に指導にあたった小高秀一（高11）から浅井一郎（高30）顧問にかわった。顧問交代に危機感を持った二、三年生の熱心な勧誘により、六五名の新入生を迎え、部員数がピーク時には音楽部史上最多の二二八名となった。NHKコンクール関東・甲信越大会進出、銀賞（二位）。

一九八九（平成元）年。朝日コンクール三年ぶり全国大会（福岡県）進出。銀賞（八位）。この年度から送別演奏会（第二回）が毎年行われるようになる。

一九九〇年。定期演奏会第三ステージ（ポピュラーステージ）で、それまでの簡単な振り付けから自作劇を始める。三年生の部員が五三名と音楽部史上最多の人数を誇

り、さまざまなアイデアを生み出した。朝日コンクール全国大会（北海道）進出。初の金賞（四位）。

一九九一年。前年の全国大会金賞により定期演奏会は用意したプログラムが足りなくなる。超満員のお客様を迎えた。朝日コンクール全国大会（岡山県）にシードされ、優良賞。

一九九三年。朝日コンクール全国大会（大阪府）進出。銀賞（一四位）。

一九九六年。朝日コンクール三年ぶりの全国大会（京都府）進出。銀賞（一〇位）。

一九九七年。朝日コンクール全国大会（東京都）。銀賞（八位）。

一九九八年。朝日コンクール全国大会（静岡県）で八年ぶりの金賞（五位）。

このほかに、入学式での校歌紹介、市、県合唱祭、西部地区高校音楽祭、春、夏合宿、小、中学校等の招待演奏、講習会への参加等を行っている。また、東京学芸大学教授の佐藤幹一先生をはじめ、

多くの外部講師をお招きし、指導の充実を図っている。一九九八年現在部員約九〇名。

紙面の都合でコンクール関係の記載が多くなってしまったが、九〇〇余名の卒業生それぞれが深く音楽部に関わっていたことを忘れることはできない。音楽部は二〇〇〇年に五十周年を迎えるが、その際に記念誌を発行する予定である。詳しくは是非そちらを御覧いただきたい。

（前顧問 浅井一郎・高30）

郷土部

郷土部のここ二十年の状況を簡単にのべれば、積極的な活動が次第に少なくなってきたこと、とまとめることができよう。そして、それと相まって、部員数の減少があげられる。例えば、一九八八（昭和六三）年度の学校要覧の郷土クラブ員は、三年生のみ四名で

ある。私が顧問についたのは、その翌年の一九八九（平成元）年なので、ここに記すのは、以後一九九八年までの十年間に限らせていただく。

さて、顧問になった一九八九年は、最初から郷土部だった生徒は皆無だったが、部員数三四名、特に二年生は二五名もいた。しかし、部として何をしてよいのかわからない。とりあえず、くすのき祭では、「川越の舟運等」の展示をして、一年生に、翌年は何をするか考えるようにと話をした。二月になって、発掘することに決まり、元顧問の小泉功先生にお願いして、川越市の場の発掘に四名が参加した。翌一九九〇年に、新たに野口孝（高25）が顧問に加わった。そして、くすのき祭の展示を「縄文時代の再現」とし、竪穴式住居、土器、石器、まいぎりを製作することとした。

川越市立博物館で概括的な話をうかがい、各作業に取りかかった。例えば、竪穴式住居については、

まず武蔵野郷土館を見学し、設計図をかいた。屋根には、部員の家の畑の小麦のわらを使うこととし、くすのき祭まで部室棟に並べておいた。そして、くすのき祭の前日一日で、教室内に作り上げた。また、土器については、先輩たちの記録が部報「初雁」にあり、非常に参考になった。嵐山や高坂で採集した粘土を使い、焼成実験も含めて計三日、焼却炉のわきに穴を掘り、縄文式(?)土器を焼いた。石器については、部活旅行をおこない、長野県の和田峠で黒曜石を採取した。くすのき祭後は、自由



竪穴式住居の展示前で（1990年のくすのき祭）

研究とし、三月に部報「初雁」第一四号を発行した。「初雁」は現在、二〇号まで発行されている。これ以後、くすのき祭の展示発表、部報の発行を柱として毎年活動している。しかし、一九九二年以降は、部員数がついに一桁になり、細々と活動をつづけている状態である。

（前顧問 三浦良朗）

美術部

私は現在、現代美術の作家として活動している。現代美術という言葉を目にして、多くの方は「難解」と感じるのではないだろうか。現代美術は非常に多様かつ混沌した様相を呈しており、絵画や彫刻といった旧来の枠組みから逸脱する表現が散見される。そうしたことから、現代美術は大変「難解」な印象を与えるが、その根底には表現の自由、創造の喜びが確固と

して存在している。

「何をどのように表現してもよい。絶対的な価値基準は存在しない」

現代美術の原理はかくも単純なものであるが、どこか川越高校の「自主性に重きを置き、各々の学生に自由という責任を負わせる」という校風と重なって見える。私が現代美術の世界に足を踏み入れることになったのは、美術大学で教育を受けたためであるが、高校時代の美術部での活動もまた、大きな役割を果たしたように思われる。

川越高校美術部は、旧制中学校時代から設けられ、現在の新制高等学校制度発足と同時に引き継がれ、現在に至るまで精力的な活動を続けている。美術部の主な活動は、各部員の自由研究（油絵制作を中心に、粘土を素材とした立体作品、さまざまな素材を自由に使った抽象作品、クロッキーやデッサンの研究等）、くすのき祭での美術部展示会、埼玉県高校美術展参加（例年八点を出品）、夏期合

宿（主に伊豆、房総半島への写生旅行）、川越女子高等学校の紫苑

祭への賛助出品などがあげられる。とくに、例年のくすのき祭での

展示会は年間活動の大きな節目であり、部員（例年二〇名ほど）は直前には夕方遅くまで美術室で絵筆を走らせ、各自四〜六点（小品、大きな作品、デッサン、クロッキーなど）を出品し、毎年充実した展示を行っている。

川越高校美術部の特色として、画風が多彩であり、活動が多岐にわたっていることがあげられる。

歴代の顧問の先生方も、美術作家として活躍されている方が多く、絵画技術の指導だけでなく、美術の在り方や美術論を指導していたり、だくこともあった。その結果、私是一九八八（昭和六三年）の第二二回全国高等学校総合文化祭熊本大会の絵画部門の県代表として参加する貴重な機会を得ることができ、高校時代の良き思い出となった。以降も、一九九一（平成三年）の第一五回香川大会へ井上健太郎（高

44)がデザイン部門の県代表として、また一九九四(平成六)年の第一八回愛媛大会には山口聡一郎(高47)が絵画部門の県代表として全国高等学校総合文化祭に出品する成果をあげている。

歴代の部員は、卒業後各方面で活躍することはもとより、美術界で活動する者も数多く、川越高校美術部は、美術界への橋渡しとしても大きな貢献をしてきた。『八十周年記念誌』によれば実に多数の美術作家が美術部から輩出されており、その活動は絵画、版画、建築など多岐にわたり、国内のみならず広く海外にもおよんでいる。

書道部

(眞島竜男・高41)

書道部は一九五〇(昭和二五)年に書道専任教員として赴任された大沢龍男(史峰)先生により創立され、翌一九五一年に小名木康佑(東郎)先生が赴任され十七年間、一九六七年から牛窪勲(梧十・高16)が十四年間、吉澤義和(翠亭・高8)が十年、現在は遠藤一郎(心齋)が七年と、いずれも書道科担当教諭が主顧問となつて活動している。

日々の古典への取り組み、月間競書誌への出品、県内、市内高校書道展への出品、書初め展覧会、硬筆展覧会への出品、くすのき祭参加、学校行事への協力、夏季合宿などがあげられる。

弘
昭和五十六年〜平成二年
顧問 吉澤義和(五十六・五十七年) 作山好邦(五十八年) 山本喜美子(五十九年) 平成二年/下村延代
平成三年〜平成九年
顧問 遠藤一郎(三年) 下村延代(四年) 六年/大館義広(七年) 九年/渋谷忠司
各年度ごとの部長、展覧会受賞者

記録をひもといてみると、合宿が開始されたのは一九五五(昭和三〇)年に三峰の大陽寺で初めて実施。当時としては画期的であつたと思われる。また、一九七五(昭和五〇)年に飯能、高山不動での合宿が記録され、その後、一九八〇年に飯能、竹寺での合宿の記録が見える。最近では群馬の湯檜曾で合宿を実施している。

また、毎年開催されている県書初め展では全出品者の一割に与えられる推薦賞を多くの生徒が受賞し、記録としても残されている。

以下、各年度ごとに顧問名、部長名とともに紹介する。()内は副顧問である。
昭和四十八年〜五十五年
顧問 牛窪勲(五十二・五十三年) 作山好邦(五十五年) 関口



カット・岸田拓郎(美術部)

本稿執筆にあたり、広報「かわたか」を創刊号より、「生徒会誌」、「同窓会報」を昭和四十二年から、また、学校要覧を約二十年前の八十周年あたりから調べてみた。できるだけ記録として正確なものをごとにとどめておくことにする。

書道部のおもな活動としては

昭和四十八年〜五十五年
顧問 牛窪勲(五十二・五十三年) 作山好邦(五十五年) 関口

部長 冬木晃 (特記事項) 大黒健志 作品を中国山西省太原市に寄贈 昭和六十年 / 部長 丹羽誠一、推薦賞 吉澤正宏、加藤誠一、丹羽誠一、藤木昭弘 昭和六十一年 / 部長 吉澤正宏、推薦賞 堀部信和、吉澤正宏 昭和六十二年 / 部長 堀部信和 昭和六十三年 / 部長 菊池達士、推薦賞 富重敦雄 平成元年 / 部長 五津昌利 平成二年 / 部長 田口拓、推薦賞 石川剛・富重敦雄、平成三年 / 部長 田口拓、平成四年 / 部長 田口拓、推薦賞 西村拓也、田口拓、平成五年 / 部長 関口裕也 (特記事項) 全国高等学校総合文化祭に関口裕也作品出品 平成六年 / 部長 渡辺雅雄、推薦賞 黒田悟史 平成七年 / 部長 佐野貴之、硬筆展推薦賞 黒田悟史、佐久間大輔、推薦賞 佐藤雄一郎 平成八年 / 部長 賛田悠、推薦賞 佐久間大輔 平成九年 / 部長 北川誉紀、硬筆展推薦賞 柿沼公二 平成十年 / 部長 野村亮太、硬筆展推薦賞 桜井克

書道部の過去を調べてみると、

部員数は決して多くはない。現在も同様であるが部員の頑張り地道な活動を続けている。書初めや硬筆展の推薦賞を紹介したが、その成績は優秀である。大学に進学後も書道部に入学する者、部の創設に参加する者、東京教育大、東京学芸大に進学し書道を専攻した生徒等、その後も引き続き活躍している。ありがたいことである。部員数は少なく多難だが、今後も立派な伝統を引き継いでいきたい。

(顧問 遠藤一郎)

航空部

米ソをはじめ、日本においてもロケットの研究が進められ、人工衛星が次々に打ち上げられてきた一九六四(昭和三九)年、石川正明先生を顧問に、部員二〇名をもって埼玉県でただ一つのクラブとして航空部は誕生した。

この年の夏休みには、早くも国際航空大学において、

一、航法

二、機体構造及び機体整備

三、L-5単発機の地上運転

などについて講義を受け、さらに後日調布飛行場においてセスナ機による体験飛行を行った。また、部員三名は自衛隊で航空学生として訓練を受けている。

こうしてスタートした航空部は、大きく分類して模型班(ラジコン、Uコン機の製作を主とする)、ホーバー班、ロケット班などに分かれて活動するようになった。

この年の文化祭においては、ホーバークラフトを製作し実験したが、浮上はしなかった。

その後研究を重ね、一九七〇(昭和四五)年の文化祭においては浮上に成功し、産経新聞の全国版に大きく報道された。ただ、このときは人を乗せずに浮上したのみであった。

予算不足、エンジン能力の限界、工作のための機械がないこと、工



ホーバークラフトと部員(1998年)

具の不足等があり、苦勞をしたが、本田技研の技士でホーバーを担当している方の指導をいただいたこともあり、一九七七(昭和五二)年にはパブリカ空冷八〇〇・三六馬力の中古エンジンを載せたホーバークラフトが完成し、部員二名を乗せて推進することもできた。その後文化祭において、何度か校庭で運転することができたが、現在は部員数が減少しており、残念ながらもなかなか披露することができない。少ない部員では

あるが、いつか再び上昇するであろう。ホーバークラフトの調整を主活動として行い、模型飛行機の製作等を通して大空を翔ける夢を見ている。

(顧問 高橋泰綱)

ラジオ部

一九四七(昭和二二)年創部。初期の頃はラジオやオーディオ機器の製作そして校内放送などで目ざましい活躍をした。昭和三十年代以降、アマチュア無線の活動が始まり、次第に主流になっていった。この傾向はその後も続き、時代による盛衰はあるが、現在に至っている。一九七一(昭和四六)年には夏期合宿で奥多摩の御前山に登っている。この頃の文化祭ではフオックスハンティングや電子計算機の基本的実験の展示なども行われている。

ところで、ラジオ部の部室はプールの北側の部室棟の二階にある。



QSLカード(1998年製作)

入ってすぐ左側の壁にタイトルが「昭和五十七年度卒業生」と書かれたイラストがビニールの額に入られ画鋲で留めてある。そこには当時の無線好きの部員たちが生き生きと描かれている。無線の個人局所有者が10人中9人と多いのに驚く。

昭和六十年代にもパソコンを利用した活動があったが、個人による活動の域を出なかったようである。一九八九(平成元)年から一九九一年頃は活動を活発にするために「無線の日」を設けたりしている。一九九一年にはコンテストで年間九〇〇以上の局と交信を行っている。

現在は伝統となっている無線コンテスト(年三回)に参加しつつ、パケット通信による交信を試みている。パソコンがより身近になった今、「肉声」による交信を大切にしつつ、新たな挑戦も始めている。

年間の主な活動は次の通り。
(一) ALL JAPAN テスト……四月二十八〜二十九日 校内に合宿し、二十四時間交信。

(二) フィールドデーコンテスト……八月の第一土・日に行われ、原則として校外合宿を行う。日高市の白銀平など。

(三) くすのき祭……公開無線運用や QSLカードの展示など。

(四) 全市全部コンテスト……十月九〜十日校内に合宿し、二十四時間交信。

(顧問 渋谷忠司・高23)

J R C

日本赤十字社の附属機関である J R C (Junior Red Cross) の「健康安全」「奉仕」「国際親善」の精神のもとに川高 J R C は一九五三(昭和二八)年に創設された。

当時部員は少数であったが、地区のトレーニングセンターへの参加を始め、積極的な活動がなされた。創設メンバーの意志を引き継ぎ、一九五九(昭和三四)年には五〇名の部員が集まり、埼玉県立盲学校での読書、点訳の奉仕、母子寮訪問、盲学校生徒との親善野球試合、台風による被災地への義援金集めなど、幅広い活動が展開された。また、対外的な活動のみならず、校内においては、花壇設置、

下足箱の清掃、除草作業、水飲み場への石けん配備など、地道な活動が行われた。

こうした奉仕的活動を軸として昭和五十年代、六十年代、平成へと、年によっては部員数が激減したときもあったが、地域とのかかわりを保ちながらの活動が続けられた。また、文化祭への参加によって、点字講習の場を設け、多くの人々に「関心」を訴えた。

一九九六(平成八)年、部員数二三名——。この年川越総合高校の呼びかけで川越地区のJRCの部員間の親睦を深め、またその活動をより充実したものとするため、主に学校単位で行なわれていた募金活動や奉仕活動を、以前各高校のJRC活動が活発な時期にならって組織的に行うこととなった。街頭募金は川越駅、川越市駅を中心とし、各校合同のチームを組んで実施された。年末にはクリスマスに合わせてレッドクリスマス(献血の呼びかけ)と歳末助け合い募金が行われ、JRC本部の援助

のもと、ユニセフなどに送られた。もちろん、川高JRC独自の活動もあわせて行われ、創設当時の精神を忘れずに、赤い羽根募金、書き損じの葉書、使用済みテレホンカードの収集などを通じ、老人福祉や、発展途上国への医療補助に積極的に取り組んでいる。

翌一九九七年度には川越地区のJRC部員による交流会が農業センターで催された。レクリエーション、非常時炊き出し訓練などを通して、生徒間の親睦を深めた。本校JRCとしては川越市福祉事務所主催の点字講習への参加、市内「いもの子作業所」でのチャリティーバザーの手伝い、ウォークラリー参加が実施されている。

なお、川高JRCの諸先輩が、定期的に書き損じの葉書や使用済みテレホンカードをJRCに託してくださるなど、多くの方の協力と支援をいただいている。これからも着実な活動を続けながら、益々の発展を祈るものである。

(顧問 大塚成子)

文芸部

歴史をたどってみたい。戦前は部主催で全校対象に著名人と呼んで講演会を開いたりして主導的な役割を果たしていた。一九三二(昭和八)年七月に創刊された校友会誌「榮丘」は文芸部長の発案、主導によるものだった。誌名は、記念碑「豊榮丘」から採られ、書評、郷土の歴史や伝説、詩、短歌、俳句をのせ、年三回刊行していた。

戦後は一九五二(昭和二七)年創刊された文芸部誌「ぶどう」の刊行を中心とした活動の中で、文化祭への参加、他校との交流、作家研究と、実績をあげていった。木島平治郎先生の指導を受け、活発に文集等が作られたが、当時の部長(前顧問の栗原進・高10)の功績も大きく、その影響は現在まで続いている。

一九五五年〜六五年にかけては

部員も常時三〇名前後を数え、川越女子高・熊谷高文芸部との交流会も行われていた。作家研究と並行して研究旅行も実施し、夏休みを利用しての信州方面への旅は大きな成果をあげていた。一九七五〜七九年には国文学部と文芸部が合併し、文芸部誌「ぶどう」も年三回定期的に刊行されていた。芥川等の作家研究に加え、川中出身の先輩打木村治(中20)についてもその文学的足跡を追い、まとめあげている。

部誌の「ぶどう」という名は島崎藤村の「若菜集」の序文に由来し、「我々は青いぶどうだがこれから成長していくだろう」という未来志向の夢多き青春の姿が示されている。

一時は年六回の刊行をみた「ぶどう」も後に「葡萄」と変わった。さらに文集「枕流」も一九八一(昭和五六)年より発行された。その後「葡萄」は一九八二(昭和五七)年より「望水」と変遷し、現在、定期的に刊行され、文化祭等を利用し

て広く読まれている。

現在は部員数も減少していて活動が停滞気味であるが、一人一人の文芸への想いは熱い。伝統と実績ある文芸部の歴史をさらにゆるぎないものにするため、互いに個性を發揮し新しい文芸文化を確立していきたい。

(前顧問 栗原 和彦・高17)

古典ギター部

古典ギター部の歴史を語るものといえば、まず毎年春爛漫の五月初旬に開催される定期演奏会があげられる。一九九八年五月三日で第二九回を数えた。私が関わったのは第二三回からであるが、川越高校の音楽ホールともいえるような川越市民会館がごく近くにあり、また格安で借用できるといふ地の利を強く感じている。

演奏会は、三部構成になっており、一部がクラシックで、前年度

夏合宿で鍛えた曲を中心に、四曲演奏される。二部は、各部員の持ち味を生かした独奏やバンド演奏、さらにはパートのチームワークを生かし、趣向を凝らしたパート紹介もある。いづれから始まったのかは定かではないが、部員たちは年々この出し物に凝り、衣装を自ら縫ったり、小道具の調達に余念がない。また、最近では学年演奏も入り、曲選びも各学年お任せで、意外に下級生の演奏がきかせてくれるものになるといった現象もおこっている。そして三部。ここでは、ポピュラーを主体にし、衣装も揃えて見せ場を作っている。なんとと言っても、我が古典ギター部の『伝家の宝刀』ともいえるJ・S・バッハの『トッカータとフーガ 二短調 BWV五六五』が最後を飾る。演奏後のOBを交えた反省会では、毎回「今年のトッカータは……」と評されるくらいに、部員にとってはその日の成功の鍵を握っているのが、この曲の演奏である。

三年生部員の演奏活動は、この春の定期演奏会がピリオドとなる。一年時のアナウンスや照明係の体験から始まり、二年半のギターとのつき合いは、顧問たちが考えるには余りあるほどの密度なのだと感じている。部室棟の片すみにあるすりきれた赤いジュータンの部屋が、すべてを語ってくれている。真夏のうだるような暑さの中、真冬の凍てつく寒さの中、一步部室に足を踏み入れた時に感じるあの熱気は、幾年月、人はかわるが多くの若者たちが魂を燃やしてきたあかしであろう。

古典ギター部にとって、二十年近くもコーチとして指導をしていただいている小林徹先生を忘れてはならない。コンクールの曲選びから、定期演奏会の最終のアレンジに至るまで、細かく面倒を見ていただいている。昔、部員たちだけで練習するのに飽き足らず、是非プロの指導者をということで来ていただいた先生と、そのころは本校生とも見違えるほどにお若く

ていらっしやった小林コーチ。想像するだけでも、現在の部員たちは微笑んでしまうことだろう。

最後にこの六年間の全日本ギターコンクールの成績を記して、足跡をたどる旅を終えることにする。

一九九三年…最優秀賞

一九九四年…最優秀賞

一九九五年…最優秀賞

一九九六年…金賞、J A E M杯受賞

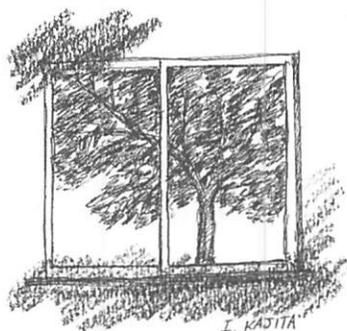
第20回全国高等学校

総合文化祭埼玉代表

一九九七年…最優秀賞

一九九八年…金賞、J A E M杯受賞

(顧問 山根 恵子)



カット・梶田 勇(高19)

将棋部

川越高校将棋部は、浦和高校将棋部と並んで県内屈指の名門クラブとして輝かしい伝統を保っている部である。過去にも素晴らしい時代があったと聞くが、ここ数年間は、第二の黄金時代といつてよいだろう。

一九八九(平成元)年の須田康夫の県大会優勝、全国大会出場から常に県ベスト8以上を維持し、とくに、平成五年のころから、高野大谷、澤村の三強を中心に大活躍をした。年に一度しかない団体戦を二年続けて制覇。埼玉県の代表として、全国高校将棋選手権徳島大会、新潟大会への出場を果たした。しかも、ベスト8、ベスト16と全国の強豪のなかで、あと一歩で全国優勝というところまでの活躍を見せた。全国大会の決勝は、麻布高校と灘高校が二年連続で戦

っていたが、川越高校もさらに飛躍し、県内の将棋名門校から全国的な名門校になることを望む。

また、個人戦についても多くの選手が活躍しているが、なかでも一九九四(平成六)年度全国高校将棋新人大会高知大会において、澤村一博が素晴らしい将棋を指し、全国ベスト4となった。

このように書いてくると、勝利至上主義の厳しい部活のように見えるかもしれないが、実はそうではない。

「週に一度以上将棋を指すこと」、「大会や練習試合に出場すること」を義務に、県内上位の力を持つ部員も多いが、一般の生徒に負ける者もかなりいる。放課後、ホームルームで将棋をやる風景があり、その中心に将棋部員がいるという、川越高校の「心のオアシス」としてあればよいと考えていた。

次の百年にもこの日本の文化と伝統の将棋を伝えて、楽しく将棋を指す生徒の多い学校であり部活であつて欲しいと考えている。

最近の主な戦績は次のとおりである。

- 一九八九(平成元)年度
県高校将棋選手権大会個人優勝
(須田康夫・高42) 団体戦四位
- 一九九〇年度
県高校将棋選手権大会個人四位
- 一九九三年度
県高校将棋選手権大会団体四位
- 一九九四年度
県高校将棋選手権大会個人四位
- 一九九五年度
県高校将棋選手権大会団体優勝
全国高校将棋選手権大会八位
(高野真也・大谷慎・澤村一博・高48)
- 一九九六年度
個人優勝(澤村一博)
- 一九九七年度
県高校将棋選手権大会団体二位
- 一九九八年度
県高校将棋選手権大会団体四位
- 一九九九年
県高校将棋選手権大会団体二位

51) 同個人準優勝(苗木俊吾・高)。その他囲碁班の全国大会出場もある。(元顧問 岡田 明)

軽音楽部

一九八七(昭和六二)年度に発足した軽音楽部は、川高の部活動の中でも新しい部の一つである。前身のフォーク同好会が部に昇格したものである。その「部昇格願」によれば、

- 一、名称―軽音楽部
- 二、目的―本校の教育目標のもとに、音楽活動を通じて協調性、自主性、創造性を高め、文化の発展に貢献しつつ、健全な自己実現に努める。
- 三、活動日、場所―火・木・金・土曜日。理科棟四階の普通教室、生徒ホールのミーティングルーム、社会科教室、視聴覚教室。

四、人数一、二年生で四二名。

五、活動計画―四月は新入生歓迎

会参加、七月はフィルムコン

サート、九月はくすのき祭参

加、十月はフィルムコンサ

ト。その他、各種コンテスト

に積極的に参加する。

等となっており、その後の活動の

基本を示している。

しかし、実際に音を出して練習

のできるのは、土曜日の放課後の

視聴覚教室のみである。兼部の者

を含め、四〇―五〇人の部員を擁

し、バンド数も増えて活動が活発

になると、練習時間と場所の拡張

が毎年の課題であった。土曜日

には、各バンドは一時間交替で寸暇

を惜しんで練習をした。夏休みの

間もフルに使用したが、冷房もな

く、窓を閉め切つての練習は蒸し

暑く、汗だくであった。それでも、

ほんとうに音楽の好きな部員たち

は、学習との両立を図りながら青

春の一ページを輝かせていた。そ

して、校内での練習の不足を、川

越市駅近くのスタジオ「チコ」で

補っていた。

練習の成果の発表の機会は、校

内向けには新入生歓迎会やくすの

き祭(卓球場及び中庭でのライブ

や後夜祭)である。その他、一九

九〇(平成二)年度には県民総合活

動センターで映視研部と協力して、

演奏風景の撮影を行うなど新しい

ことに積極的に挑戦していった。

演奏技術の向上にとめない、対

外的な活動も活発化した。一九九

一年度には、北坂戸中学校の学校

祭で演奏を披露した。卒業生が部

員にいた縁で招かれたのであるが、

地域社会に活動を示した最初の機

会で、有意義であった。そして、

一九九二年度には近隣の五校に呼

びかけ、「高校生によるロックバ

ンドフェスタ'93 in やまぶき会

館」を共同開催した。これは一度

で終わってしまったが、一九九四

年度の第一回定期演奏会につなが

るものであった。やまぶき会館と

の交渉や演奏の準備、プログラム

作成や広告の勧誘等を生徒の力で

やりとげ、自信をつけていった。

一九九五年度には第二回定期演奏

会を実施し、定着させていった。

ロック演奏を行う軽音楽部の活

動が理解され、定着していること

はよろこばしい。これも、新しい

ものに対して幅広い包容力で受容

する伝統校、川越高校ならではの

ことである。これからも、軽音楽

部がますます発展することを期待

したい。(前顧問 内野 進)

弦楽合奏部

弦楽合奏部が誕生したのは、一

九八八(昭和六三)年のことである。

その年の三月、期末考査後ののど

かな時期、理科棟一年B組の教室

で、四、五人の生徒が、なんとな

くエレキギターを空弾きしていた。

うるさい音楽ではなく、静かに

耳を傾ける音楽をやってみないか、

という私の誘いに、彼らはすぐに

興味を示した。どんなものかよく

わからないが、とにかくやってみ

よう、と話がまとまった。私も含

め全員、ワイオリンなど一度も

手に触れたこともないという、無

謀な、またのんきな発端であった。

四月六日、先ず鳩山高校に弦楽

の練習を見学に行くことにした。

武田大助など五名であった。同校

管弦楽部は当時、金子典之先生が

意欲的に指導し、すばらしい弦の

響きを聴かせていた。見学が終わ

って帰るとき、金子先生は心得顔

で、気前よく、ワイオリン一本とウ

アイオリン二本を貸してくれた。

文字どおり無からの出発にとつて、

ありがたい、お心遣いだった。こ

うしてなんとか音が出るようにな

った。

その後の活動は試行錯誤の連続

で、今から思うと、よく続けられ

たと思う。当時の川高生のエネル

ギーが偲ばれる。見学の後、メン

バーの出入りがあり、夏の合宿に

は、武田大助、菅原大輔、猪俣徹

也、中島雅博(高43)の四名が参加

し、くすのき祭での発表に向けて、

練習が始まった。同好会としても

認められた。くすのき祭の後、数名の入会員もあり、第一期は、平岡一志(高42)、小川裕紀、白鳥達也、永井瑞生、松崎善直、山崎一也(高43)が、合宿組の四名に加えられる。

その間、福岡高校の室伏正隆先生、新座高校の山川龍次先生に合奏や奏法を、酷寒の教室で教えていただいた。

翌年のくすのき祭では、川越女子高校から有志を募り、川高吹奏楽部員の協力を得て、モーツァルトの交響曲第二九番を演奏した。川高弦楽より川女有志の人数のほうが多かった。この参加メンバーを中心に、川女でも同好会が結成されたことは、喜ばしいことだった。情熱と緻密さを兼ねそなえた、中川淳(すな)先生の指導で、川女弦楽は飛躍的發展を遂げた。

川高弦楽の活動は、努力と経験を重ね、だんだん固まり、安定して行った。一九九三年には第一回定期演奏会が実現した。

現在、顧問の吉原武夫先生の指

導により、より質の高い演奏を目指して、日々練習をしているが、合奏室がないなど、悪条件の中で奮闘している。

(前顧問 加藤光昭・高20)

弁論部

弁論部は川高の中で最も新しく、しかも歴史の古い部である。というのも、それまで休部状態であった弁論部が一九九四(平成六)年に復活したからである。旧弁論部は、壇上発表(演説)を中心とする部だった。活動内容には発声練習も含まれていた。また、「初雁杯」という高校弁論の全国大会が川越で開かれていた。しかし、「シラケ」時代の到来とともに弁論部員は激減し、休部となった。

私が二年生だったとき(一九九三年)弁論部復活の話が持ち上がった。既存の部の中に私たちのやりたいことを自由に実現できる部

がなかったからである。私たちが望んだ理想の部、それは社会や自分が直面している問題をシラケずに、まともに話し合える仲間が集まる部だった。また、ディベートや演説だけにとどまらず、さまざまな方法を用いて学校や社会に考えを発信していく、という方向性をもっていた。

準備活動では顧問の募集からはじまり、新聞の発行、公開討論会、入学式のピラ配り(部員募集)などをした。その結果、福原勇先生、福内登茂栄先生が顧問を引き受けてくださり、新入生を含め三〇名を越える部に生まれ変わって登場した。

その年の弁論部はディベートを中心に進め、星野女子高校新聞部との討論会も行った。くすのき祭には、七三一部隊展全国実行委員の協力の下、展示を行い、部誌「辯」を発行した。そしてなにより弁論部の実力を示したのは、部員の森田睦(高47)が全国高等学校総合文化祭(愛媛県)の「弁論の

部」で入賞を果たしたことである。また、三月には退職された定時制の竹内忠好教頭先生(当時)による部落問題の講演会を開いた。この年の弁論部は川高の他のどの部と比べても、新しいことに次々に挑戦する、かなり活発な部であったといえるだろう。

卒業後、弁論部の所帯は小さくなったと聞くが、NHKに出演した後輩がいるなど、ユニークな部員が集まっているようである。後輩には、川越高校の中でキラリと光る部を作ってほしいと思っている。(松本創一・高47)



カット・岩田甲平(高14)

水泳部

戦前の旧制中学時代の活動も含め、一九七六(昭和五一年)年までの流れは、本校八十周年記念誌に元顧問の横田洋(高4)が、当時の様子を生き生きと伝えているので、ここではその後二十年の戦績と現在の水泳部を紹介していく。

☆一九七七(昭和五二年)

高校総合体育大会(県大会)：総合五位

二〇〇自由形(二位)：阿部良夫・高30)・二〇〇自由形・二〇〇

背泳・四〇〇メドレーリレー：関東大会出場

☆一九七八年

四〇〇リレー：関東大会出場

☆一九七九年

県新人戦：総合四位

☆一九八二年

一〇〇平泳ぎ：(沢口征司・高37) 関東大会出場

☆一九八三年

高橋徹(高41・平泳ぎ)二十四年ぶりの国体出場、四〇〇メドレーリレー平泳ぎ泳者として六位入賞に貢献。

国体二〇〇平泳ぎでの二分四〇秒四三は昭和五十八年度高校男子年度十傑第三位。

☆一九八四年

平泳ぎ：二〇〇・一〇〇(高橋徹 関東大会出場)

☆一九八七年

二〇〇・四〇〇個人メドレー(今野竹晃・高42)、八〇〇・四〇〇リレー(上原秀一、花岡伸也、矢倉正一・高41、今野竹晃 関東大会出場)

☆一九八八年

四〇〇メドレーリレー(上原秀一、花岡伸也・高41、今野竹晃、山田功・高42) 関東大会出場

☆一九九〇年

十七年にわたる少年刑務所への矯正事業協力に対し、水泳部、サッカー部に法務大臣より感謝状と記念品が贈呈された。

☆一九九二年

新人戦：六位 八〇〇リレー：関東大会出場

☆一九九二年

高校総体県大会：総合八位 新人戦：六位 一〇〇自由形(赤坂武洋・高47)、四〇〇メドレーリレー(河村健太郎、渡邊裕介、宮坂利幸・高46、赤坂武洋・高47) 関東大会出場

☆一九九四年

五〇〇・一〇〇自由形(赤坂武洋)、四〇〇リレー(赤坂武洋、小高隼、根本雅裕・高47、林田将明・高48) 関東大会出場

(以上、水泳部記録及びPT会広報紙より)

一九九八年の水泳部は部員二三名(一、二年生)、活動は五月から九月までは本校のプールを利用し、十月から四月までは川越スイミングスクールにおいて早朝練習を実施している。部長、副部長を中心に練習計画を立て、一九九七年の新人戦ではリレー全三種目入賞、個人でも二種目に入賞して総合八位入賞を果たした。現在は、一九九四年以降、道を閉ざされている関東大会、さらにその上を目指して、スイミングスクールを借りて週五回の早朝の水中練習と、二回の筋力トレーニング、一九九七年から二〇〇回を数えるミーティングを実施している。ミーティングの内容は泳法から運動生理学にまでおよび、屋外プールしか持たない不利を、練習の意味、効果を知ることによる練習の質的向上によって克服しようとしている。

一方、一九九七年で十年目を迎えたくすのき祭でのシンクロも好評で、毎年多くの観客を集めくすのき祭の目玉の一つとなっている。

(顧問 谷本幸隆)

川越中学開校以来、野球、柔道、剣道とともにつとも長い歴史と伝統を誇る「庭球部」であるから、

軟式庭球部

川越中学開校以来、野球、柔道、剣道とともにつとも長い歴史と伝統を誇る「庭球部」であるから、

その輝かしい戦績は枚挙にいとまがない。これについては今回「黄金期」の項目で語られているので割愛する。ただし、あえて重複することを覚悟の上で特記しておくたいのは、一九四九(昭和二四)年の芹沢良三・岡田立彦組の全国制覇の偉業についてである。

軟式庭球という競技はあまり周囲の注目を浴びることがないが、県予選から勝ち抜いて県外大会に出場する困難は、他競技と何ら変わるころではない。それを全国出場だけにとどまらず、優勝の栄冠を勝ち取っているのであるから、やはり特筆すべき記録といえるであろう。

次に最近の軟式庭球部の活動状況について記しておきたい。

四月、新入部員の加入で活気づくが、二、三年生にとっては、四月末から始まる関東大会の県予選会に向かって顔つきの変わるころである。最近では一九九一(平成三)年度の野田雅一・布施孝一組、九四年度の石井賢司・森竜彦組、

九五年度の牧野広・伊東克洋組、九七年度の須藤芳文・野崎祥三組、九八年度の篠沢州一・千葉由樹、坂本憲太郎・山田淳司組、須藤洋文・叶翔太組が埼玉県の激戦を突破して関東大会に出場し活躍している。なお一九九四年度と九八年度は団体戦においても関東大会出場を遂げている。

関東大会が終わると、今度は全国高校総体(インターハイ)の県予



1998年関東大会出場メンバー

選会である。三年生の最後の試合であるから、毎年高校生としてはハイレベルの試合が展開され全国への切符を手に入れるのは至難のわざである。その中で一九九一(平成三)年度の野田・布施組、九五年度の牧野・伊東組、九八年度の糸部尊郁・戸田宏明組が全国出場を達成したことは、やはり喝采に値するであろう。

七月、三年生が抜けて新チームでのスタートの月である。国体予選が行われ、八月の夏合宿となる。夏合宿は部員にとって精神的・技術的向上の絶好の機会である。この夏合宿には学生を中心として数十名のOBが後輩の指導に全国各地から集まってくる。彼らは合宿に限らず後輩たちを激励していくが、川高庭球部の伝統はこのあたりに脈々と生きている。

九月、新人戦の地区予選。夏合宿の成果が問われる。十一月、修学旅行の直後に新人戦の県大会が始まる。団体戦でベスト8に入れば十二月のインドア大会(全国選

抜予選)に出場できる。最近ではインドア大会にも常連となつているが、一九九七年度の準優勝止まりで、優勝は全国選抜に出場した一九八五(昭和六〇)年度までさかのぼることになる。

十二月から一月にかけては新年会などで「男の料理」を楽しみ親睦を深めている。トレーニングの増える冬場を越え、逞しくなった部員たちが最初に迎える試合が三月のカワサキ杯である。主に東日本のお数十の高校が集まるこの大会が春の訪れを告げる。部員はこの大会で自信をつけ、あるいは課題を見いだし、春の本大会に向けて仕上げていく。

以上、最近の軟式庭球部の活動状況を簡単に記してみた。

(顧問 五十公野順一・高27)

山岳部

山岳部の活動は、山行が中心と

なつて行われる。部の公式山行は年間八回、そのうち、合宿と呼ばれるのは、長期休暇に行われる夏山、冬山、春山の三つで、それ以外の山行は合宿に備えた準備、トレーニングの性格を持っていた。

まず、新部員を迎えての新人歓迎山行は、ポピュラーな山が選ばれた。ついで、夏山に備えて二回の歩荷訓練で技術の向上と体力の養成をはかった。山域は奥多摩、奥武蔵が多かった。

夏山合宿は最近十年間では南アルプス四回(北部二回、南部二回)北アルプス四回、尾瀬から平ヶ岳、朝日連峰で実施した。実動七日間の行程はかなりハードであり、毎年、泣き笑いのエピソードでいっぱいになった。夏山を体験すると、部員としての自覚もでき、山への意欲もでてくる。秋山は、テントを持たず軽装化し、山を楽しむことに主眼を置き、両神、奥日光、谷川、那須、武尊などで実施した。三回目の歩荷訓練で冬山に備える。



1995年夏山合宿。百間平から聖岳へ(南アルプス)

なる。雪が締まり、寒さも冬山ほどは厳しくなく、天候に恵まれれば、雪山の醍醐味を満喫でき、山の良さに身も心も奪われてしまう。巻機三回、白毛門、黒姫、磐梯二回、四阿、大笠(白山連峰)、会津駒で実施した。

これらの山行計画は、部員が調べ、いくつかの候補の中から選ばれて決まる。これが自分たちの山登りの原点である。こうした経験から一人前の山男に育っていく。

顧問は安全性をチェックし、職員会議を経て、高体連登山部に計画書を提出するという役割を持つ。

一九八四(昭和五九)年の夏山合宿では、南アルプス荒川小屋で、急性虫垂炎の部員がヘリコプターで救助されるということがあった。そのほかには、さいわいこの二十一年間無事故であった。

一九九八(平成一〇)年の高校総体では県代表となり、高知県の三嶺山系における競技に参加した。

なお、顧問を長く務められた松崎中正氏(一九六三〜七六年、川

高勤務)が出版した『わが山路』と『山おちこち』(ともに一九九六年、楽山齋発行)に、当時の山行記録、写真、紀行文が多く載せられている。

(前顧問 熊井昌男)

卓球部

卓球部の創設は古く、新制高等学校の発足当時にさかのぼる。昭和二十年代、三十年代の戦績には数々の県内大会での上位入賞、関東大会への進出の記録が残り、当時の本校卓球部が浦和高校などとともに、県内の高校卓球界において指導的な立場にあったことがうかがえる。

当時の卒業生津坂宗茂(高3)を記念しての「津坂杯争奪戦」が現在に至るまで毎年行われている。これは現役とOBの親睦対抗戦として行われるもので、OBと現役の交流と技術指導の場としてはき

わめて重要な行事である。

次の昭和四十年代から現在に至るまで、県内高等学校の増加や、全国レベルの有力校の台頭のまに、地区大会優勝、県大会上位入賞の記録は多く見られるものの、その戦績は一時を除いて決して華やかなものとはいえない。

その中で特記すべきは、一九七七(昭和五二年)の鳥取県で行われたインターハイへの出場であろう。県内強豪を押さえての全国大会出場は、現在に至るまでの卓球部の歴史の中での頂点といえるだろう。さらにこの昭和五十年代およびその前の四十年代に本校卓球部を巣立った卒業生の多くが、現在県内の中学校、高等学校において、卓球部顧問として活躍していることは忘れてはならないだろう。

昭和六十年代にはいると、練習設備と人材にめぐまれた私立高校の活躍が目立つようになり、公立高校の活躍の場が次第になくなる時代が続く。その中で、一九八五(昭和六〇)年、一九九〇(平成二)

年の団体県大会ベスト4、シング

ルス地区大会優勝(武藤国晶・高43)、ダブルス県大会ベスト8

(船本玄喜、武藤国晶、清水輝一、利根川崇・高43)などは際だった戦績といえるだろう。当時の顧問

・福田公明(高26・現鶴ヶ島高校)は「中学校ではさほどの戦績を持たない部員たちが、自分たち

だけで練習計画を立て、熱心な練習の末つかんだ県大会での大活躍

であった」と当時を振り返る。これは現在に至るまで、本校卓球部

員に共通する姿でもあり、いかにも自主自立の精神に満ちた本校生

らしく頼もしい。

一九九八(平成一〇)年現在、本校卓球部は体育館の改築に伴い、練習場所の確保にも事欠く状況で

はあるが、「自主自立の精神」に満ちた部員たちの真摯な努力によ

って、相変わらず近隣有力校を脅かす力を維持している。困難な状

況のなかで、県大会団体戦において好成績をあげていることは大いに誇れることであろう。何とか確

保した練習場所、潑刺として練習に励む部員たちの姿には、おそらく創設当時の部員と変わらないであろう卓球へのひたむきな情熱

が感じられる。

(顧問 吉原武夫)

籠球部

バスケットボール部の変遷と昭和初期から中期にかけての黄金時代については「八十周年記念誌」に詳しいので、ここでは昭和五十年代後半からの活動を中心に報告する。

昭和中期からの歴代顧問は、中西章(昭和三五〜五四)、酒井徹(昭和三六〜四二)、渡辺圭一(昭和四五〜五〇)、中川冽(昭和四九〜六〇)、渡辺耕造(昭和五三〜五七)、野沢啓之(昭和五七〜平成二)、畠山俊(昭和六〇〜平成元)、赤木秀次・高25(平成三〜平成一〇)、中根章介(平成元〜現顧問)、

高橋泰綱(平成二〜現顧問) 佐野正(平成一〇)、岡豊(平成一一)の各先生方である。

昭和五十年代後半の主な戦績は、一九八一(昭和五六)年度の関東大会県予選会と同年のインターハイ県予選会でベスト8となり、県のシード権を獲得している。また、一九八三年度の全国選抜大会県予選会では準優勝となり、古豪川高の面目躍如となる活躍をした。

しかしながら昭和六十年代以降、私立高校の目覚ましい躍進と、県内中学校の優秀選手が東京や他県の高校に流れる傾向が強まり、センスのよいガードプレイヤーや長身選手の獲得が困難になってきた。我が川高バスケットボール部も県大会へは出場するものの、いま一步のところまで力及ばず、県のベスト16が最高戦績となる年が続いた。そのような中でも、幸いながら男子校のメリットで部員数には恵まれ、毎年の新チーム結成時には四〇人規模のビッグチームを組むことができた。近年になり高校生の

運動部離れが叫ばれる中、このことは他校の羨望の的となった。

現顧問が指導を引き継いだ一九九一(平成三年)から一九九八年までの戦績は、私強公弱の傾向がさらに著しくなった高校スポーツ界の中で、川高も県大会に出場するのがやっとであり、県シード権奪還を目標としながらも、目覚ましい活躍がないのが残念である。しかし、一九九三年に倉浪清仁(高47)、一九九六年にガードの新井俊介(高50)が西部地区選抜選手となったことは、チームにとって大きな刺激となった。

また、矢島義正(高8)を中心とする諸先輩の尽力により、近々籠球部OB会も組織として正式に発足する運びとなった。OB名簿には、一九五六年にオリンピック、メルボルン大会の中心選手として参加した斎藤博(高4)も名を連ねており、プレーヤーとして最高峰の先輩諸氏と接する機会を頂いたことは、現役選手にとっては実に心強い限りと感謝の念に絶えない。

本校は県内防災拠点の中心校に指定され、その一環として一九九九年三月に合宿所、食堂、体育館の三つの機能を合わせ持った新体育館が完成した。

それまで生徒たちは、練習場がないため往復で八ヶ離れた市の総合体育館を利用し、不便ながらも県大会の上位進出を目指し毎日熱心に練習に励んできた。いつの日か必ずこの熱意が報われるものと信じてやまない。

(前顧問 赤木秀次・高25)

野球部

野球部は一九九九年四月現在、

一、二、三年生三八名で活動を続けている。明日の甲子園を目指し、部員一同、日々努力しているところである。また、ここ数年のうちに、本校野球部OBで筑波大学からオリックス・ブルーウェーブにドラフト一位指名で入団した杉本

友(高44)や、日米大学野球選手権で日本代表チームのメンバーに入った本校野球部OBで横浜国大の北川智規(高48)等、将来を大変嘱望される選手が出てきたことは誠にうれしい限りである。今後とも大いに活躍されることを期待したい。

さて、野球部には毎年十数名の部員が入部してくるが、特に格別の恵まれた者が多くいるわけでもないのが現状である。そんな中であって打撃の方は爆発的なパワーはさほど期待できないので、数少ないチャンスをもバントや走塁で広げていき、着実に点を取っていくことが要求される。そういう意味では、野球部の生命線はまさに「バント」と「守備」と言えるだろう。投手の出来、不出来が勝敗を左右することは言うまでもないが、投手を軸としての内外野の連係がしっかりとついていかないとなかなか勝ちに結びついていかない。相手にいかにして点を与えないかが大きな課題となっている。従っ

て日々の練習では、バントの徹底と守備力の強化を図っていくことになる。ボールから目を離さないように至近距離からのノックをする場合もあるし、適確な状況判断のもとに、全員で指示の声をかけ合ってプレイできるかに重点が置かれている。いずれにせよ、大差での勝利を望むよりは、僅差でも何とか勝ちきる展開にもちこんでいきたいものである。

本校の生徒の長所のひとつは、物事に真面目に取り組んでいける点である。野球部においても同じで、選手たちは皆、野球に対してひたむきに努力を重ねていける生徒たちばかりである。夏の猛暑の中での基本練習や冬の厳しい寒さの中でトレーニングは決して生易しいものではないだろうが、それを二年半にわたって乗りこえた者にはかけがえない財産となることであろうと信じている。ここ一番で集中力を発揮し、頭を使ったプレイで「さすが川越高校」と言われるようなゲームができるよ

う頑張っていくたい。

野球部を運営していく上での基本的な理念は、一言で言えば、「野球を通じて教育を行う」ということである。公式戦で勝つことは無論重要であるが、それ以上にそこに至る過程を大切にしていきたい。すなわち、自分の力を最大限に試合で出せるように、普段の練習において自分自身を極限まで追いこんで絶えず努力したかを評価していきたいのである。また、野球の中にある様々な事象を通して、人は一人では生きていけないこと、自分に関係なければそれでおしまいでなく、常に周囲に目を配ってバックアップし、お互いに協力しあっている姿勢、集団行動の大切さ、友情の堅い絆等々を教え、また同時にそれらを各自の中で育み、伸ばしていきたいと考えている。

終わりに、野球部の日常の活動に御理解、御協力をいただいている保護者の方々に、また側面から野球部をしつかりサポートしてい

ただいているOB諸兄に深く感謝申し上げたい。

(顧問 高橋克己・高31)

蹴球部

創部以来、昭和四十年代までは『八十周年記念誌』に記載されているので、昭和五十年代からの活動を追うことにする。

昭和四十年代までは、サッカーの専門的知識と競技経験のある方が指導にあたっていたのではなく、部員たちが互いに協力しながら練習に励んでいたわけで、そんな中で県大会ベスト16までに進出した年もあることは、当時の部員たちの努力がいかに素晴らしいものだったか容易に想像できる。五十年代に入り、石川誠さんというコーチに恵まれ、一九七八(昭和五三年)には、当時埼玉教員サッカークラブの中心選手として国体等で大活躍していた、小林武教諭(現高

体連技術委員長)が着任された。

小林先生の経験と情熱的な指導のもと、一九八〇(昭和五五年)年度の西部地区新人戦で優勝、その後二年間春季大会で県大会ベスト8に進出している。ここでまた、川越高サッカー部の一時代を築いたといえる。一九八四(昭和五九年)には、小林先生の後を受け、同じ埼玉教員サッカークラブでプレーしていた松村道彦が着任した。

翌一九八五年一月には、当時副



1997年高校選手権大会県予選会 ブロック決勝戦

顧問として指導にあたっていた吉沢優(高19)教諭(現日高高校長)の努力により、正式にOB会が発足した。初代会長は清水与四郎(中47)、副会長関谷清次(高2)、鈴木常雄(高4)、幹事横山司(高12)、永林惇(高16)、曾根光幸(高27)、正田純一(高34)の諸氏が役員として組織運営にあたられた。例年正月二日の初蹴りだけの活動だったが、年々活発になり、夏も現役部員の激励をかねて集まるようになっていた。現在、横山会長を中心に活発に活動が続けている。

昭和六十年代から平成初頭にかけては目立った成績はないが、蹴って走るだけのサッカーを全面的に否定し、しっかりとした技術を身につけ、意図的なプレーを心がけるチームスタイルは対戦チームからもよい評価を得ることができた。ただし、つなぐけれど点が取れず、押しても勝てない時代でもあった。

一九九三(平成五)年度には、技術、センスに優れ、スピードのあ

る選手が三年生に多く、春の高校総体予選でひとつのピークをむかえた。

地区大会を勝ち抜き、県大会一回戦でシード校の浦和西高を延長の末4対3で下し、二回戦草加東高に4対1で勝ち、県大会ベスト8入りを果たした。ベスト4をかけて浦和南高と対戦、全国大会から遠ざかっているとはいえず、松本監督率いる浦和南は勝負強く0対3で完敗した。その年の高校選手権予選はシード権をもちながら越谷南に敗れ、二次予選進出はならなかった。

翌一九九四(平成六)年度は、個人の能力はそれほど高くはなかったが、チーム戦術と粘り強さで結果を残した。

地区予選代表決定戦をPK戦で勝ち上がり、県大会一回戦、秩父農工にもPK戦、続く川口高にも押されながらもPK戦で勝ち、三試合連続PK戦でベスト8入りを果たした。ベスト4入りをかけて強豪武南高と対戦、粘り強さも通

用せず0対3で完敗した。この年の高校選手権予選もシード権をもちながら、二次予選進出はならなかった。

川越高サッカー部の課題として、高校サッカーのメインである高校選手権大会の秋の予選に、本来の力が発揮できていないことがあげられよう。大学進学を意識が強く、悩みながらも春の大会で身を引く三年生も多い。

一九九六(平成八)年度より諸田純一教諭(県高体連サッカー専門委員長)が着任され、目標を全国大会、国立競技場でプレーすること、と掲げ、多忙ながらも日々の練習、合宿、遠征等精力的に指導にあたられている。

その成果は、一九九八(平成一〇)年の新人戦で県ベスト32。関東大会出場まであと一歩である。課題を克服し、近い将来、サッカーの川越高と呼ばれる日が必ず来るであろう。

(前顧問 松村道彦)

体操部

体操部は、戦後間もなく校友会に取り上げられて発足し、県大会への出場は一九四九(昭和二四)年度秋季県民大会が最初である。

その年創刊された「生徒会報」によれば、「大宮公園の遊園地に設置された板敷の体操場及び一揃の器械は我々の湧き立つ青春の血潮を知ってゐる様に待ってゐた」とあり、実に、初出場にして三位に入り、関東大会出場権を獲得したのである。

草創期の体操部は、練習場、器械ともに極めて不十分な状況であり、それをもっぱら部員の熱意によつてカバーしていた。

例えば、鉄棒は当初固定式のものであった。最初の平行棒は、部員が檜の棒を削つて、グラウンドの隅に据え付けた。不足のマットを補充するために、川越女子高校ダン

ス部の協力を得て「体育の夕」を開催し、購入資金を作った。また例えば、他校で練習させてもらったり、一九五三年(昭和二八)年に体育館が建設される直前は武徳殿で練習をしたりした。

恵まれない環境下、部員数も多くなかったが、この時期が最も華々しい活躍を遂げた時期であった。

県大会団体総合優勝(一九五一年春・一九五二年秋)や個人総合優勝(一九五〇年・新井澄夫・高3)のほか、ほとんどが団体総合二位を獲得している。従つて、毎年のように上位大会に出場権を得ている。その中で主なものは、団体(チーム)では、一九五三年に関東大会七位、翌年には関東大会四位に入賞し、全国大会に出場した。また、個人では、一九五〇年には新井澄夫・毛須肇(高4)兩名が、一九五一年には毛須が、国体に出場している。

じつは、創立以来、恵まれない環境が、もう一つあった。それは

技術指導者がいなかったことである。映像機器が普及していなかった時代、もっぱら部員相互の研究・工夫と熱意によってこれをカバーしていた。

しかし、全国的、国際的に競技力が向上するにともない、高校体操界の競技難度が次第に高くなっていき、もはや部員だけの研究熱意によってだけではいかんともしがたくなり、戦績は不振の一途をたどることになる。

昭和三十年代の戦績は、団体総合(県大会)では一九五五(昭和三〇)年春の二位が最高で、その後は三位がほとんどで、さらに四位、五位と下降していく。団体で関東大会に出場したのは、一九五五年(二〇位)、一九五六年(八位)だけである。個人では、一九五五年に内野光吉(高8)が全国大会出場、一九五六年に県大会個人総合六位に岩井徳十(高9)が、八位に大野誠一(高9)が入賞し、岩井が国体出場を果たしている。一九五七年には、県大会個人総合二位の

水村宏(高10)が関東、全国大会及び国体出場を果たした。

その後は、一九五八年、関根清太郎(高11)が関東大会出場、一九六〇年県大会個人総合四位の金子憲二(高13)が関東大会出場、一九六一年県大会個人総合四位、鉄棒優勝の新井英晴(高14)が関東大会出場を果たしている。昭和五十年代に入り、田中聡(高31)は一九七八年関東大会出場を果たした。

平成に入り、高校入学後体操を始めた生徒が多い中で、関東大会県予選会の最終選考会にも数多くの生徒が出場したが、同大会への出場はない。しかし、大学進学後も体操競技を継続する生徒が増え、東北大の岸川仁(高46)はインカレに出場した。また、他にも東工大の主将を務めた後藤邦拓(高44)東北大の主将を務めた池田直樹(高45)なども、国公立大会で活躍した。

(稲田隆(高11)、前顧問小松晴彦)

剣道部

八十周年記念誌以降、剣道部の

活動は、一九八三年度まで、引き続き柴生田建司(高18)のもとに行われた。個人個人の長所に目を向け、それを伸ばすという基本線を押えながら、長年の経験に基づき、さらに円熟味を増した指導で剣道部の成果を上げた。主な試合結果をあげてみる(新人戦については前年度のもの)。

☆一九八〇年度

新人戦Ⅱ団体二位

☆一九八一年度

新人戦Ⅱ団体優勝

個人二位、森田智裕、三位、下

澤宏(高34)

春季学徒大会Ⅱ団体一位

関東大会出場(熊谷)Ⅱベスト16

全国大会予選Ⅱ団体一位

個人優勝Ⅱ土屋晴紀(高34)

全国大会出場(山梨)

☆一九八三年度

新人戦Ⅱ団体二位

関東大会予選Ⅱ団体五位

関東大会出場(千葉)

全国大会予選Ⅱ団体優勝

全国大会出場(愛知)

川越高校にとって昭和一九八一年度の新人戦団体優勝は現在に至るまでの唯一の優勝である。またこの年度の土屋晴紀選手(個人)、一九八三年度の団体を最後に、全国大会出場への夢は達成されてい

い。
一九八四年度より、一九九二年度まで、今栄亮一(高27)の指導のもとに活動した。今栄は柴生田の教え子であり、昭和四十年代の黄金期を支えた一人である。主な試合結果をあげてみる。

☆一九八四年度

関東大会予選Ⅱ五位

関東大会出場(神奈川)

☆一九八九年度

新人戦Ⅱ個人三位、森信和(高

43)

☆一九九三年度

新人戦Ⅱ個人二位、古澤明(高46)

この年度以降、私が今業の後を受け継ぎ、現在、近藤伸一(高20)と指導にあたっている。主な試合結果をあげてみる。

☆一九九五年度

新人戦Ⅱ個人三位、栗原崇(高48)

関東大会予選 五位

関東大会出場(東京)

栗原崇、福島国体、先鋒として

出場、五位

☆一九九六年度

新人戦Ⅱ団体二位

個人三位、長谷川潤(高49)

星野貴彦(高49)、国体関東ブ

ロック

中堅として出場

魁星旗争奪全国高校剣道大会

(秋田)Ⅱベスト16

☆一九九七年度

全国大会予選Ⅱ団体三位

☆一九九八年度

全国大会予選Ⅱベスト8

一九九三年にはOB会が発足、

水野仁(県剣道連盟副会長で範士

八段・高6)が会長となった。また、一九九五(平成七)年には保護

者を中心とした後援会も発足し、剣道部の活動に対してそれぞれの立場で支援をいただき深く感謝

している。水野会長よりつねづね指導していただくことは、「正しい剣道」の伝承と、剣道を通して

の「人づくり」である。まだまだ力不足を感じる日々であるが、毎

日の稽古を大切にして、伝統ある剣道部の発展を目指していきたい。

柔道部

(顧問 森田智裕・高34)

一九七八(昭和五三)年の輝かしい活躍から述べてみたい。この年の関東大会県予選、団体戦のレギュラーは、伏見隆一、山崎邦俊、池田隆人、大門康彦、三角泰一

(高31)らであり、決勝戦まで駒を進めた。決勝戦は、西部地区の強者、私立越生高(現武蔵越生高)

であったが、2-2の内容勝ちに

て、みごと優勝できた。個人戦では、三角がベスト4に入賞した。本大会の関東大会では、利根商高(群馬)、修徳高(東京)、映南高(山梨)を下し、土浦日大高(茨

城)には惜しくも敗れたが、ベスト8に入賞できた。また同年の全国大会県予選では、準優勝を勝ち取った。個人戦では、中量級の山崎、軽重量級の三角、

大門がそれぞれ三位に入賞できた。一九七九(昭和五四)年の全国大会県予選では、重量級の奥山昇(高33)が第六位に、中量級の橋本

上(高32)が第三位に入賞した。一九八一年の関東大会県予選では、個人戦無差別にて、主将である伊藤貴夫(高34)がベスト8に入賞した。また、この年の全国大会

県予選では、ベスト32まで進めた。一九八二年県選抜大会において

は、主将加山誠(高35)が中心となりベスト32まで残った。

一九八三年関東予選では、主将塩野谷浩幸(高36)率いる団体戦に

て、ベスト16になる。同年県新人戦においてもベスト16となった。

一九八四年関東予選では、ベスト16まで残り、個人戦無差別においても、宮川毅(高37)がよく頑張

り、ベスト8に入賞した。同年県選抜大会においてもベスト16を維持した。この頃は、中村健司、西幅孝弘(高37)、福江靖(高38)などがレギュラーとして、よく活躍

した。一九八五年全国大会予選、県選抜大会ともベスト16を守った。

一九八七年県個人大会、翌年の関東大会県予選では、ベスト16に

返り咲いた。それから数年が過ぎ、一九九三(平成五年)県新人大会では、四回

戦まで勝ち進みベスト32、当時の選手は、岡野豪、益村孝史、松林玄太(高47)、正木亨(高48)らであった。翌一九九四年新人大会において

もベスト32を維持した。一九九五年全国大会県予選では、五回戦まで勝ち進み、久し振りの

ベスト16に入ることができた。こ

の当時のレギュラーは、正木のほか、国分昭紀、加藤徹、斉藤肇一、大野裕介、松嶋俊紀(高48)、畑中伸道(高49)であった。同年十月の川越市内高校大会においても、久しぶりに優勝することができた。

一九九六年県選抜大会では、ベスト32となる。

一九九七年、春季西部地区大会では、小口耕太郎(高50)が六〇以下級で準優勝をし、国体二次選考会、全国ジュニア予選まで出場できた。また、この年の県新人戦では、ベスト32となる。レギュラーは、谷口俊郎、岩崎健一、遠藤正章、富田勝俊、長倉龍男のオール一年生であった。

一九九八年、全国大会県予選では、再びベスト16に入ることができた。レギュラーは、前述したオール一年生が二年生になったものである。また秋季西部地区大会では、第三位に入賞することができ、十五年ぶりの快挙である。

これからの川高柔道部は、これから二年生の双肩にかかっている。

彼らに期待をかけ、日夜、切磋琢磨していきたいと思う。

(顧問 二本松敬太・高27)

弓道部

一九九一年(平成三年)に顧問になったころの部の状態は、自立した弓道お楽しみクラブであった。二時間強というフレーズで部員募集し、実質は三時間の練習。それはいいが、私語は絶えず、五割的中があれば名弓会入りと讃えられ、四矢を道場床に置き、グループの立ち順が来れば射つ。試合会場である大宮公園に行けば、自分たちの代表の射も応援せず、公園のいちばん奥でマンガ、トランプ、単語帳。ただ、感心したのは試合の申し込み締め切りに合わせてメンバー表を万端整えて顧問に提出していた。部活終了時のミーティングでは活発に意見が飛びかっていた。実績は上がらなくても自主的

な運営による楽しい部活だったといえる。

一九九三年(平成五年)年頃から少しずつ意識変革が始まった。その秋の市民体育祭(於川越南高校)での戦績は出場全チームが予選落ち。その後、私の強制で川南体育館でミーティング。どうしてここま

で没落したか徹底的に話し合った。道場の管理の悪さ、練習の甘さ、研究心向上心の不足。当然、顧問の放課後の顔出しが少ないことも問われた。長いミーティングの終了後、即学校に帰って道場整備。そこから川高弓道部の再生が始まった。

練習試合など何年も知らなかった川高が黄金期の川越農業高校(現川越総合高校)に平身低頭して練習試合の申し込み。受けて頂いたのが嬉しかった。主将の五十里圭亮(高47)は市の弓道連盟に加入し教を部員にもたらすとともに、国体候補になるほどの活躍を残した。しかし、翌一九九四年も全体的には惨敗。新主将の川口真

寛(高48)はそうした中で真剣に部内改革に取り組んでいた。一言で

いえば、川高弓道部として誇りを持つて部活動でありたいということだったと思う。「先生、もうだめだよ、先生が前面に出て指導してくれなくては」という涙ながらの声は今も心に痛みとして残る。

農大三高や川越工業高校との練習試合。安土の全面補修。

一九九五(平成七年)から輝かしい戦歴が始まる。それは個人の活躍以上にその頃の内部の結束の成果だと思ふ。新主将の加藤智樹(高49)の活躍は素晴らしいものがあったが、それ以上にその学年の自主自立の建設的な部再建の動きは驚嘆すべきものがあった。皆が発言し、皆が部を一流にしようとして動いた。道場、矢道、部室、ロッカールーム、的、安土、練習状況に皆が気を配り、皆で改善していった。顧問や主将の指示がなくとも、部員の発想、発言で皆がまとまり動いた。その後の弓道部の活躍はその体質を基盤としている。

その頃には練習時間は二時間となり、的前は一手の持ち矢となっていたが、朝、昼休みの毎時間どこか自習があるので道場では常にだれかが稽古に励んでいた。

道場の建て替えのため、武道館や市総合体育館を借用していたが、新道場の完成により空き時間にはいつでも弓を引ける状態にもなった。

もう、三年のインターハイ予選まで引退する生徒も、試合日の代休を口にする生徒もいない。日曜でも練習試合に連れていってこれという生徒たちを、顧問の私が自分の試合もあるから調整させてくれという状況に、今後の真の黄金時代の到来を予感している。謙虚さと向上心を失わない限りその日は近いであろう。

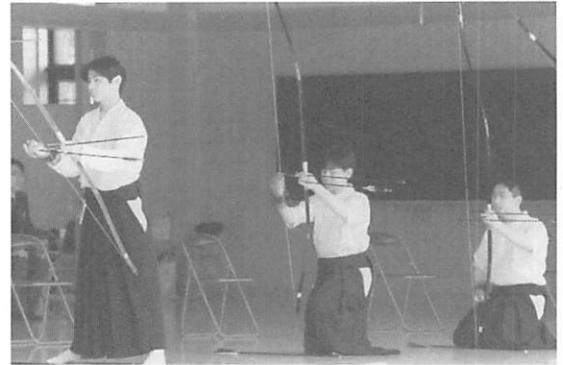
一九九五(平成七)年以降の戦績を紹介したい。

○一九九五年

四月―川越市内高校王座決定戦

個人優勝(加藤智樹)

六月―高校総体県予選



全国選抜弓道選手権大会(1997年)

団体優勝(栗原圭吾、左部敬人、

杉山俊之(高48)、大野治、

加藤智樹(高49)

個人二位(加藤智樹)

八月―西部地区夏季大会

団体優勝(大野治、まつざわ 沢沢明彦、

加藤智樹)

個人二位・三位・四位

○一九九六年

六月―高校総体県予選団体三位

十一月―全国選抜県予選

団体優勝(柳川勝巳・高50、村

田優佑、長岡武治・高51)

○一九九七年

三月―埼玉・岩手・静岡交流試合

優勝(柳川勝巳・高50、村田優

佑、長岡武治・高51)

四月―川越市内高校王座決定戦

個人優勝(村田和也・高51)

県下武道大会

団体優勝(村田優佑・濱崎正雄

・村田和也)

個人優勝(村田優佑)

六月―高校総体県予選

団体三位

七月―関東個人選抜大会出場

村田和也・長岡武治・村田優佑

十月―川越市民体育祭

個人優勝(依田崇史)

○一九九八年

四月―川越市内高校王座決定戦

団体優勝(島田進一郎・村田優

佑・長岡武治)

団体二位

個人優勝(中尾智昭)

個人三位(八位を川高が独占)

七月―国体埼玉少年男子代表選手

(村田優佑)

八月―全国高校総体出場

個人の部(村田優佑)
団体は県予選二位

九月―関東個人選抜大会出場(山

本裕也)

県民総体、団体・個人共に優勝

十月 市民体育祭

団体優勝(島田進一郎、山本裕

也、中尾智昭)

個人優勝(井川良太)

十一月―全国選抜県予選団体三位

武州大会優勝(川尻達郎) 高校

生優勝は史上初

(顧問 福内登茂榮)

陸上部

川越高校陸上競技部の発足は、「学友会報」等によると一九二八年ごろとされている。

この長い歴史の中で特筆すべきことは、一九三〇(昭和五年)、全国中等学校陸上競技選手権大会で鈴木聞多(中29)が一〇〇秒一・一秒一、二〇〇秒三秒八で二種目

No.	年度	開催場所	種目	氏名	記録
1	1980	愛媛・松山	400 $\bar{\text{m}}$	竹岡 圭志	50"6
2	1980	愛媛・松山	槍投	吉沢 光一	53M66
3	1981	神奈川・横浜	1500 $\bar{\text{m}}$ 障害	鍋倉 賢治	4'19"7
4	1982	鹿児島・鹿児島	4×400 $\bar{\text{m}}$ リレー	宇田川/浅野/佐藤/安達	3'21"7
5	1984	秋田・秋田	槍投	大島 和久	54M86
6	1985	石川・金沢	槍投	大島 和久	59M48
7	1987	北海道・札幌	三段跳 (第4位)	吉家 弘之	14M73
8	1988	兵庫・神戸	三段跳	吉家 弘之	15M23
9	1989	高知・高知	3000 $\bar{\text{m}}$ 障害	佐野 珍司	9'18"62
10	1990	宮城・仙台	3000 $\bar{\text{m}}$ 障害	佐野 珍司	9'18"38
11	1990	宮城・仙台	800 $\bar{\text{m}}$	矢島 雅之	1'55"22
12	1991	静岡・静岡	4×100 $\bar{\text{m}}$ リレー	中原/瀧武/金子/村田	41"90
13	1994	富山・富山	110 $\bar{\text{m}}$ ハードル	福田 達也	15"22
14	1996	山梨・甲府	三段跳	野呂 裕樹	14M37
15	1997	京都・京都	三段跳	野呂 裕樹	14M38

種目	記録	氏名	達成年月日	大会名	会場
100 $\bar{\text{m}}$	10"81	村田 浩司	1991.5.5	記録会	上尾
200 $\bar{\text{m}}$	22"18	瀧武 勝嗣	1992.4.27	高総体西部	上尾
400 $\bar{\text{m}}$	49"69	新谷 昌史	1996.5.19	高総体	上尾
800 $\bar{\text{m}}$	1'55"22	矢島 雅之	1990.6.24	関東高校	前橋
1500 $\bar{\text{m}}$	3'55"64	高岡 稔	1998.6.19	関東高校	上尾
3000 $\bar{\text{m}}$	8'57"5	栗津 一雄	1981.7.22	クラス別	上尾
5000 $\bar{\text{m}}$	14'41"4	佐野 珍司	1990.10.28	記録会	上尾
10,000 $\bar{\text{m}}$	31'40"9	田畑 和臣	1993.10.17	記録会	上尾
110 $\bar{\text{m}}$ ハードル	15"20	福田 達也	1994.6.17	関東高校	宇都宮
400 $\bar{\text{m}}$ ハードル	54"86	新谷 昌史	1996.5.20	高総体	上尾
3000障害	9'18"38	佐野 珍司	1990.6.23	関東高校	前橋
4×100 $\bar{\text{m}}$ リレー	41"90	中原/瀧武/金子/村田	1991.6.29	県選手権	上尾
4×400 $\bar{\text{m}}$ リレー	3'19"52	岡野/中原/渡辺/福田	1994.5.20	高総体	上尾
走幅跳	7M13	吉家 弘之	1988.5.15	高総体	上尾
走高跳	1M95	豊留 秀一	1991.5.15	高総体	上尾
三段跳	15M25	吉家 弘之	1988.5.16	高総体	上尾
棒高跳	4M00	伊藤 康司	1994.4.28	高総体西部	上尾
砲丸投	14M45	(新井 充)			
	13M52	小名木 真一	1984.4.30	高総体西部	上尾
円盤投	42M32	(津金沢 延弘)			
	40M22	小名木 真一	1984.5.1	高総体西部	上尾
槍投	59M48	大島 和久	1985.6.22	関東高校	笠松
ハンマー投	34M58	福島 敬司	1985.5.3	高総体西部	上尾
ロード10K $\bar{\text{m}}$	31'10"0	佐野 珍司	1990.12.9	秩父マラソン	秩父
高校駅伝	2:14'07"0	比能/山口/佐野/矢島/鈴木秀/増田/本間	1990.11.11	全国予選	東松山

優勝したことである。なお同選手はその後オリンピック選手として活躍した。

その後一九五一(昭和二六)年から一九五五年代前半にかけては川越高校陸上競技部の黄金期で、県内をはじめ関東大会、全国大会で

大活躍した。なお、黄金期については大河原光行(高6)により、323頁にくわしく書かれている。

表に示す川越高校陸上競技部最高記録および全国大会出場者は一九八〇年以降のものである。この間、全国大会に出場した者は一七

名である。その中で特筆されるのは、一九八七(昭和六二)年の札幌インターハイで吉家弘之(高4)が二年生ながら三段跳びで四位に入賞したことである。

最近では長距離選手の活躍が目立ち、県内の大会でも好成績をお

さめ、関東高校駅伝大会にも二回出場している。

川越高校の教育目標である「文武両道」を目指し、試合においては「人の背中を見て走るな」をモットーに連日練習に励んでいる。

近い将来、第二の黄金期が訪れることを期待している。

(前顧問 篠崎 誠)

排 球 部

バレーボール部の昭和五〇年代後半から平成にかけての活動状況を報告したい。一九七六(昭和五一)年の活躍については別掲(35頁参照)のとおりである。また、関東大会へは一〇回の出場を果たしている。

一九八〇(昭和五五)年に長年バレーボール部の顧問であった萩原秀雄先生が坂戸西高校に転勤となり、この年は新人大会県三位が最高で、関東大会への連続出場を逃

した悔いの残る年であった。しかし、三年の西村充(高33)が栃木国体の選手として活躍した。

次の年、前年の反省のもとに猛練習を繰り返し、まず地区優勝をしてみたいと思つたが、決勝で惜しくも敗退し、県大会でもベスト16が最高であった。しかし、三年主将、松澤伸好(高34)を中心に頑張つた。

この後の二年間は、私立高校の台頭や長身者が少ないことも重なり、あと一步のところまでシード校を追いつめながら勝てず、県ベスト16が最高位であった。関東大会予選では、第二シード校の川口北高校に2-0で負けはしたが、二セツトともジュースにもつれ込む接戦で川高の粘りのあるバレーができたと思つた。

一九八二(昭和五七)年二月にはオーストラリアジュニアチームとの試合も経験でき、生徒にはよい思い出になつたと思つた。

一九八三(昭和五八)年には、セッター林敏行などを中心に低身

長、キャリア不足でありながら持ち前の努力と練習量でカバーし、新人大会では第三シードの立教高校を相手にフルセツトの試合をし、選手の頑張りに胸が熱くなつた。

その後、一九八四年、八五年と部員不足が続く県大会へも進めず悔しい思いをした。一九八四年の一月から新入部員が入学する四月まで部員が四人だけ、部の日誌をみると毎日トレーニングと対人レシーブの繰り返しであった。この頑張りがいつか実を結ぶと信じながら練習をし、一九八五年に会場校としてではあるが県大会へ出場し、一回戦負けはしたがすばらしいゲームをした。

一九八六(昭和六一)年にやつとの思いで県大会へ駒を進め、国体予選では久しぶりに県ベスト8になり、二年平手尚隆(高40)が国体選手に選ばれた。

一九八七年のインターハイ予選では、シード校である埼玉栄高校を破つたが、ベスト8の壁は厚く、勝つことの難しさを痛感した。

一九八八年、八九(平成元年)と県大会へは出場するが、一回戦負けが続く悩んだ時期もあったが、ある程度生徒の自主性に任せる練習に切り替えたところ、一九九〇年の新人大会ではやつとの思いで十年ぶりに県ベスト4になることができた。

以後、顧問は村井恒夫先生に代わり、ベスト16の常連となつた。現在はベスト8(関東大会出場)をめざして健闘している。

以上、簡単ではあるが最近のバレー部の活動を報告する。

燃やせ 関魂 川越高校!

(前顧問 池之谷伸也)

バドミントン部

バドミントン部は、一九七七

(昭和五二)年に創設された、川越高校では比較的新しい部の一つである。それ以前も同好会としての活動があつたが、初代部長の山田

一博(高30)を中心に当時のメンバーによる部昇格への熱心なはたらきかけがあり、同年の生徒総会にて正式に部として承認された(顧問は、堀越俊男教諭、次年度より柏川優教諭)。

創設当時からしばらくは同好会時代と同様に旧重層体育館の三階ギャラリーを主な練習場所としていた。しかし、そこは天井が低く、また、ぎりぎりコート一面の広さしかなく、バドミントンの練習場所としては全く不向きであつた。そのような中でも、他校との合同練習をするなど練習場所の確保および技術のレベルアップに熱心に取り組んだ。一九七八年度の新人大会個人戦西部地区予選会では、ダブルスで石川一浩・堀貴男(高32組)が優勝を果たし、また、一九七九年度の新人大会団体戦西部地区予選会で優勝するなど、創設間もない部でありながらかなり健闘していたといえる。

創部から二十年余りたつわけであるが、県西部地区では上位校と

して毎年活躍しており、個人戦、団体戦ともに県大会出場の常連校の一つである。そのようななかで、最も優秀な成績をあげたのは、一九八五(昭和六〇)年の新人大会の団体戦である。正木孝英・佐藤秀紀・富田実・神山和良(高39)のダブルスを中心としたチームで西部地区優勝を勝ち取り、その勢いで県大会も勝ち登り、準決勝で優勝校の上尾高校に破れたものの堂々の四位となった。

次に近年の主な成績を紹介させていたたく(顧問は、一九八五、一九六一年度が細田宏・高25、一九八八、一九九一年度が海老名玄教諭、一九九二年度から現在まで、西見正・中村潔)。

○一九九三(平成五)年度/西部地区新人大会 個人戦ダブルス
||岡部洋志・根岸透(高47)組
第四位 (同)団体戦||ベスト8
高校総合体育大会西部地区団体戦||ベスト8

○一九九四年度/西部地区新人大会・高校総団体戦||ベスト8

○一九九五年度/西部地区新人大会・高校総団体戦||ベスト8

○一九九六年度/西部地区新人大会・高校総団体戦||ベスト8

○一九九七年度/西部地区新人大会 個人戦シングルス||後藤宏隆、優勝、ダブルス||後藤宏隆・小森敏治(高51)組 第三位
(県大会||ベスト16)、松本景・中黒清隆組、第七位

西部地区新人大会団体戦||準優勝
○一九九八年度/関東大会県予選会

団体戦||ベスト16、(同)西部地区大会 個人戦ダブルス||後藤・松本組、準優勝 小森・永井歩組、第七位

最後に、バドミントン部OB会についてふれる。それまでもOBによる後輩の後援活動はあったが、一九九四(平成六)年八月に初代の菅野裕之氏(高30)を会長として正式に発足した。会員は、一九九七年までで約二〇〇名である。毎年夏休み中にOB総会を行っており、今後もOBの親睦をはかり、

後輩の応援活動も続けていく予定である。

(顧問 中村 潔・高32)

ラグビー部

はじめに理念ありき

川高ラグビー創世記

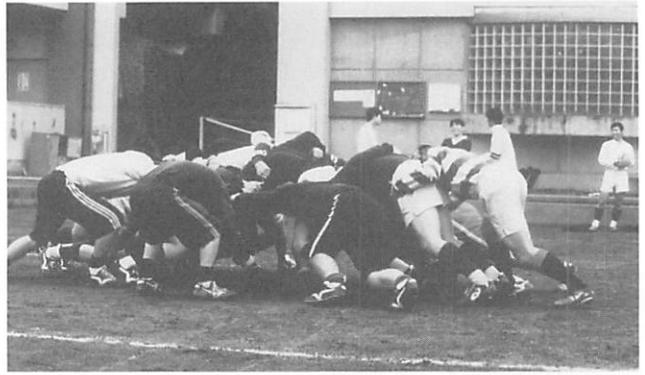
一九八四(昭和五九)年春、西部地区某高校職員朝会でラグビー部顧問意気揚々と「本校は昨日、川高生物部ラグビー班を粉砕し勝利しました!!」ン? と一瞬の静寂後、「何だそれは」というざわめき……。

川高ラグビー部公式戦デビューであった。

話は前年に遡る。不惑を過ぎた一人の教師が「日本全国、旧制中学出自の高等学校のほとんど全てにラグビー部は存在する。伝統ある川高に無いのは摩訶不思議、許されないことである」との思い強く転動して来た。その年の夏前に

はラグビーに思いを寄せた生徒一六名の同好会として生徒会の承認を得、職員会議の了解を求める運びとなった。練習場の確保、予算の減少等の危惧からわずかな反対はあったものの圧倒的多数の職員賛同を受け、必修クラブの関係から全員生物部に属し、ここに「生物部ラグビー班」が誕生したのである。

その創部の精神は勉学との両立は勿論、さらに多方面での活動を保障し、強く楽しいクラブ活動のあるべき姿を希求する事にある。その実現に向け週三日の練習、週末の練習試合で力をつけ、残る三日間には生徒会活動ほか、自らの個性を磨くための自主的活動をも要求されたのである。実践の過程では、プレイ中の一瞬の判断を個人的に正確にためし、真に自らのために楽しむ事により他者との喜びを共有し得るための Individualismと、一切の防具を付けず自らの肉体のみで相手と対峙しプレイし得る肉体と精神及びゲームジ



1998年のチーム（本校グラウンドにて）

を直ちに回復できる「野性」の復興としての Barbarism を確立することをモットーとした。

その理念に基づく活動の歴史を辿ると、創部の翌年（一九八四年）公式戦に初出場し敗れる。その年は全敗であった。翌一九八五年、部員は八〇名を超え秋の全国大会予選において行田高より待望の初勝利をあげたのである。この冬、新人戦でブロック二位となり

県大会出場権を得、翌春には県ベスト16まで進出した。新入部員も八〇名を超え、部昇格を果たしラグビーという運動文化は着実に川高の土壌に育ってきたのである。

この年の卒業生、主将高田宣治（高39）の大阪大はじめ、北大、金沢大（医）、東大などでラグビーを続け（東大では新見明久・高39が副将に、遅れて入学した佐伯洋・39は主将を務めた）、早・慶・明大等に進学した者は学業の傍らクラブチームでラグビーを楽しみ、後輩たちに良い刺激と動機付けを与えるものであった。

以後毎年四〇名前後の新入生を迎え、名実共に西部地区の強豪とはなったものの、県ではベスト16は維持するものの、ベスト8の壁を破れない数年間を経過した。この間卒業生は東大では木原達章（高43）は主将、村田祐造、小林智夫（高45）は一年よりレギュラーとなるなど毎年の如く、一橋大では新見哲也（高41）が主将、東工大でも一挙四名が一年より中心

となり、東北大、阪大などこれらの大学ラグビー部へ幾多の俊英を送り込んだのは本県では川越高を嚆矢とし、以後続く高校は現れないであろう。

一九九四（平成六）年に冬の新人戦で初のベスト8となり、春の関東大会県代表決定戦では行田工高に惜敗したが、秋、全国大会予選では第六シードとなり準々決勝で第三シードの伊奈学園と熊谷ラグビー場で闘った。一進一退の好試合のまま川高三ポイントで後半三〇分もすぎ、準決勝進出をテレビ中継の解説者も含め誰もが思った時、何故かレフェリーはノーサイドの笛を吹かず、その後五分間に十数回ペナルティを取られた後、遂に逆転され19-15で敗れたのであった。ラグビーにおいてレフェリーは絶対である。名キャプテン鈴木周平（高47）以下ファイフティーンは夕暮れのグラウンドに茫然と立ちつくし、胸に号泣を閉じ込め、素晴らしき敗者であった。小野章（高47）は埼玉県代表として

オーストラリア遠征に加わるなど好選手揃いであった。

一九九五年顧問を引継いだ佐藤茂夫教諭の好指導の下、再びベスト8となり、一九九七年は春から秋までベスト8を続け、関東大会代表決定戦では熊谷工高をあと一步まで追いつめる強豪チームとなった。野元重和（高50）は県選抜チームに選ばれた。

一九九八年は三年生の少ないチームながら、関東大会県予選、国体予選ともベスト16と健闘した。最近五年間で県ベスト8入りを三回果たし、西部地区から県の強豪チームへと、花園出場を視野に入れ、その理念の具現化に向け努力発展している。

（初代顧問 岡松 哲）



カット・原 教郎(美術部)

部活動の変遷

1930	(昭元)	1920	(大10)	1910	(大元)	1900	(明32)	部
				M41 第1回水泳教授 (房州北條町にて)				水 泳
							(学友会運動部として)	庭 球
		T8 第1回登山 (富士山)						山 岳
								卓 球
S4 初の公式戦出場								籠 球
							(学友会運動部として)	野 球
S2 蹴球部として創設							(学友会運動部として。創設時はフットボール部)	蹴 球
							(学友会運動部として。創設時は柔剣部)	剣 道
							(学友会運動部として)	柔 道
								相 撲
								弓 道
	T14 競技部	T7 学友会徒歩部として創設						陸 上
								排 球
								体 操
								バドミントン
								ラグビー
								新 聞
								応 援
								放 送
								吹 奏 楽
								英 語
								映 視 研
								写 真
								物 理
								化 学
								生 物
								地 学
								音 楽
								郷 土
								美 術
								書 道
								航 空
								ラ ジ オ
								J R C
								文 芸
								国文学部
								演 劇 部
								図 書 部
								人文科学
								古典ギター
								将 棋
								軽 音 楽
								弦 楽 合 奏
								弁 論

活動期 ————— 創設 ●
 草創期・同好会期 - - - - - 復活 ○
 休部・活動不明期

(昭30)

(昭20)

(昭10)

1960		1950		1940		部	
(第一期賞金期)							水泳
	S24 芹沢・岡田組全国大会優勝						庭球
							山岳
							卓球
							籠球
S34 甲子園大会出場						S6 選抜甲子園大会出場	野球
							蹴球
							剣道
	S38 個人国体出場 他						柔道
						S15 全国大会出場	相撲
							弓道
							陸上
							排球
	S27, 28 関東大会団体入賞						体操
							バドミントン
							ラグビー
	S25 7/28川高新聞創刊						新聞
	S26 応援歌制定						応援
							放送
							吹奏楽
							英語
	S22 校友会映画班→映西部						映視研
							写真
							物理
							化学
	S35 部報「むらさき」第1号						生物
							地学
	S39 NHKコンクール全国優勝						音楽
							郷土
							美術
							書道
	(ラジオ部より分かれる)						航空
	S39 「JAIYOB」開局						ラジオ
							J R C
	S27 部誌「ぶどう」創刊						文芸
							国文学部
							演劇部
							図書部
							人文科学
							古典ギター
							将棋
							軽音楽
							弦楽合奏
	S37 NHKコンクール優勝 (山川)					S9より本校主催関東雄弁大会開催	弁論

昭和17年からは、戦時色の強い以下の29班に改組された。
 進学班、学芸班、科学班、気象班、芸能班、図書班、興亜班、作業班、園芸班、籠球班、陸上競技班、蹴球班、野球班、剣道班、相撲班、庭球班、弓道班、柔道班、登山班、機甲班、国防競技班、喇叭班、防空班、射撃班、教練助教班、銃剣道班、滑空班、配給班、職業指導班

(平10)

(平元)

(昭60)

(昭50)

(昭40)

部	2000	1990	1980	1970
水泳			(第二期資金期)	(S41 50m プール完成)
庭球				
山岳				
卓球			S52 学総大会 (鳥取) 出場	
籠球				S43から三年連続関東大会出場
野球				
蹴球				
剣道				S43 全国大会初出場 他
柔道			S53 県大会初優勝	S41 個人団体出場 他
相撲				
弓道	H7 全国選抜出場			
陸上				
排球			S52 春高バレー 出場	
体操				
バドミントン				
ラグビー				
新聞				S46 第100号
応援				
放送				
吹奏楽				S43 関東大会初出場 (以後 金賞 5 回など)
英語				
映視研				S40 映画視聴覚研究部と改称
写真				
物理				
化学				
生物				
地学		S63 「神座川越風穴」 発見		S41 部報「あめつち」 創刊
音楽				
郷土				
美術				
書道				
航空				S45 ホーバークラフト 浮上成功
ラジオ				
JRC				
文芸				
国文学部			
演劇部			
図書部			
人文科学			
古典ギター				S45 第1 回定期演奏会
将棋			
軽音楽				
弦楽合奏	H5 第1 回定期演奏会			
弁論			

『それぞれの旅』(川越高校第五回生還暦記念誌)より

四十四年前の ビデオテープ

米山大恵(高5)



高校に入学したのは、まだ戦後の変動混乱が尾をひいている、渾沌とした時代だった。

上級生は旧制中学に入っ、この校舎で長年学んできたので、ずいぶんと大人に見えた。その上級生が、昼休みに「本校は質実剛健を以って建つのだ。君達、必ず運動部へ入部し給え」と演説をした。

授業では徳サンの国語、岡田先生の園芸、近藤先生の漢文(ほとんど漫談)が強烈だった。雨の平

林寺への吟行、毎月の句作、古典を読まされたり。だがこれは、後々の私の仕事に大いに役立ってくれたので、今でも感謝している。

上級生の演説にのせられて陸上競技部に入り、松本利雄先生から「本校陸上部の偉大なる先輩鈴木

聞多」の話を聞き胸踊らせたのが、昨日のように思い出される。運動場では野球、サッカー、陸上等の

各部が一緒に狭かった為か、陸上競技部は、時々県立女子高校のグランドへ出かけて練習を一緒にした。普段は覗くことさえ大事件であったその女子高へ大つぱらに入りできたのだが、放課後のことだから、運動部以外の女子高生に会えなかったのは、何とも残念であった。

二年生の夏休みに、十和田・八幡平駅伝競争に出場することになった。埼玉からは本校と浦和商業高校だったと思う。上野駅から夜行列車に乗り、床に寝ころんで、初めての大旅行だった。十和田湖畔の和井内ホテルに泊り、翌日は

山道を走ったが、実に長い区間でひどい目にあった。その晩は湯瀬温泉に泊ったが、川の流れが実に美しかった。

同学年に、中学時代から県下第一であった野口、東島、三上等が居たので、二年生の冬、駅伝競争で全国大会へ出場できたが、予選の後、十二月一日に私の家(寺)が火事で全焼してしまった。この時荒井校長に校長室へ呼ばれて、

「大変だろうから全国大会(十二月二十六日)へは無理に行かなくてもよい」と言われたが、どうしても大阪へ行きたかったので、「大丈夫です、是非行かして下さい」と頼んだ。校長は、家の事情や火事による動揺からの不調を心配されていることであつたのだろうか、そのときはそこまで気が回らなかった。大阪での宿は日本橋近くの京屋で、試合までの間、よくパチンコ屋へ行つたが、玉の出はあまりよくなかった。

いよいよ大会当日、大雨となり、シューズに穴があいていて、自転

車伴走の松本先生がそのシューズで大丈夫かと心配されたが、足に馴染んだものであり、無事に走り終えることができた。記録も上出来で本校は第六位に入賞し、翌年も全国大会に出ることができて、この時は第三位であつた。翌二十七日は好天気となり、松本先生の大奮発で奈良・京都の名所めぐりをしてきた。

一年生の終わりが二年生の始め頃、東島君と二人で東京大塚の、ハリマヤスポーツへマラソン足袋を買いに行ったが、生まれて初めての都電で料金がわからず、降りるときに「多分、十円だろう」と十円渡して歩き出したら、大声で「お釣りますよ」と呼ばれ、東島君には今でもそのことで笑われる。

講談社の「高校駅伝三〇年」や、柳川君に写してもらつたグランドでの写真を見ると、四十三年前のチームメイトが、沿道の人垣が、一緒に走つた他校の選手達が、鮮明に見えてくる。ビデオテープを見ているように。

初雁から翔く

百年間に輩出したOBたち約一〇〇〇名の活躍ぶりを

出身地域（一部居住地域）ごとに描く。

その活躍が広く海外に及ぶ人たちから、

地域で一隅を照らす人たちまで、

各地区初雁会や同窓会各回期幹事会などの多くの先輩たちの協力の下に、

編集委員会の責任において作成した。

しかし、限られた時間の中での編集のため遺漏も多いことであろう。

こんな人がいる、あんな人がいる——と、

多くの方が思われることだろうが、

それもOBたちの層の厚さの証明。

寛容と理解をお願いしたい。

「はつかり人物誌」は私たちが胸を張って誇れる一八名に登場いただいた。

「初雁から翔く」の編集方針

- ①地域割りは現在の通学区域に基づき一二地区とした。
初雁会の地区割りとは必ずしも一致しない。
- ②登場人物約一〇〇〇名は、すべて何らかの形でOBから推薦を受けた人物に限った。
- ③紹介するOBは原則として四〇歳以上（調査時点）とした。
- ④人物の役職・肩書きは、出来る限り最新のもの（一九九九年四月現在）とした。
- ⑤敬称は略させていただいた。
- ⑥卒業回期、略歴などについては正確を期したが、誤りがあった場合はお許しいただきたい。
- ⑦各地区の紹介人数の割合は、その地区の過去の卒業者数の割合に準じた。
- ⑧定時制のOBについては、情報提供も少なく、ごく少数の方に限られた。
- ⑨文体・編集の仕方は統一しなかった。

小川地区

笠山を背にいただき、清冽な槻川に育まれる小京都に育つ。

外秩父の山なみに囲まれた緑豊かな和紙の里、小川町は、埼玉県の中央部よりやや西に位置し、南は玉川村、都幾川村、西は東秩父村、北は大里郡寄居町に隣接している。

東武東上線とJR八高線の小川町駅前は、休日には外秩父方面へのハイキングの玄関口として、リュックを背負った若者たちから中年の夫婦までさまざまなハイカーでにぎわっている。

当地区出身のOBは、最近では増加傾向にあるようだが、過去においては、距離的に通学が少々困難であるためか、あまり多くない。そのような中で、小川町を離れ各分野において活躍している方々や、地元の小川初雁会で活動しながら、地域に密着した活躍をしているOBを紹介しよう。

小川初雁会が結成されたのは、一九八一(昭和五六)年十月十八日である。この初雁会の結成を誰よりも熱望していたのが、笠間証券代表取締役の笠間敬三郎(中25)であった。生前川越を愛し、川高の発展をこの上なく願

い、「初雁会を作ろう」と、何度もよびかけていた。その遺志を継いで、野沢恒雄(高4)と松岡正人(高7)が発起人となり、田中利夫(中25)を初代会長として、小川初雁会が結成された。以後、川高卒業生として固い絆を保っているのである。

初代会長の田中は、日本大学医学部卒業後、田中眼科医院を開業。長年にわたり学校医も務め地域医療に貢献。また小川町の教育委員としても活躍。一九八三(昭和五八)年春の叙勲では勲五等双光旭日章を受章している。そのほかにも、柳沢忠治(中15)が、柳沢内科医院長として活躍していた。

次に、現在地域で活躍中の医師を卒業年次順に紹介しよう。

日本大学歯学研究科卒の中村裕史(高20)は、中村歯科医院長として比企歯科医師会の副会長を務めている。弟の中村陽行(高23)は、中村産婦人科医院院長である。

東京慈恵会医科大学出身の瀬川豊(高21)は、都内日比谷病院勤務後、現在は医療法人

瀬川病院副院長として、消化器外科を専門としている。

北里大学出身の野崎信行(高28)は、埼玉県立がんセンター、東京医科歯科大学等に勤務後、小川町駅前の野崎耳鼻咽喉科院長となる。それぞれ、子どもからお年寄まで、住民の健康を守り、地域医療に邁進している。

次に、行政で活躍したのが、前述の初雁会結成の発起人の一人である(株)三星社書店代表取締役の野沢恒雄である。温厚な人柄で、地元の信望が厚く、小川町議会議員を務め、その間副議長職も務め、小川町商工会の理事としてその発展に寄与している。

野沢とともに、初雁会結成に尽力した松岡正人は、小川町役場で常に重要なポストにつき総務課長などを歴任した。

鈴木智(高17)は、東松山市役所総務部次長を務めている。在学中は音楽部に属し、NHK全国音楽コンクールで優勝したときのメンバーであり、その後も地域の文化活動に貢献している。

学術の分野で傑出しているのが、神部勉

(高10)である。東京大学大学院理学系研究科教授で、物理学、流体力学が専門であり、趣味として鳥や魚の運動についても研究している。日本流体力学会の会長職にもつき、学術論文約一〇〇編、著書二冊がある。

次代を担う子どもたちを育てる教育の分野では、戸口勝美(高9)がいる。進学ゼミ小川学習塾の代表者であり、母校、川高へ多数の生徒を送り出している。在学中野球部に在籍し、捕手として活躍した経験を活かして、小川町スポーツ少年団の会長として子どもたちを指導している。

松本寧(高15)は、生保、メーカーの経理を経て、県内私立の進学校、城北埼玉高校で経理を担当している。

原重敬(高17)も、NHK全国音楽コンクール優勝時のメンバーであり、現在は町立榎台中学校長である。

次に、地元のさまざまな分野で活躍しているOBを順次紹介しよう。

土地家屋調査士の大谷拓平(高8)は、川越市郭町の出身であるが、小川初雁会会長、ライオンズクラブ会長等を歴任し、小川町に密着している。

和装装履用コルク芯製造販売の(株)双葉

コルク代表取締役の並木武夫(高12)は、現在の小川初雁会会長であり、会をまとめている。地場産業である和紙の卸業、尾上紙店代表の尾上清(高12)は、在学中、軟式テニス部に属し、小川庭球協会の役員として活躍している。

野口晃則(高12)は、(有)丸正織物代表取締役であり、島崎紘一(高12)は、小川町駅前(有)カメラの秩父堂を経営している。

スポーツ用品販売の松本征万(高13)は、小川町体育協会理事を務め、また、二十五年の長期にわたり町の子どもたちへのテニスの指導を通じ、青少年の健全育成に努めている。

中出幸司(高16)は、日用品雑貨の小川屋を経営している。

小川町の銘酒、晴雲酒造株式会社代表取締役の中山雅義(高17)は、地元の有機農業生産グループとタイアップして、無農薬米使用の「おがわの自然酒」を生産。酒蔵を一般に開放し町を訪れるハイカーたちに、オアシスの場を提供し好評を博している。なお、前小川ライオンズクラブ会長も務め、奉仕活動でも地域に貢献している。

在学中、および大学の山岳部で活躍した田村昭雄(高17)は、小川信用金庫に入社、その後ヒマラヤ・メントーサ峰登頂を果たしてい

る。現在は、小川信用金庫主任調査役である。石川幹雄(高17)は、八和田郵便局長として、郵政事業を通じて地域住民にサービスを提供している。

イソダ石油代表取締役の磯田久雄(高19)は、小学校PTA会長等を歴任し、小川町ゴルフ協会副理事長である。在学中、山岳部に属し、現在も日本百名山に挑戦中である。

前小川町町長の長男、松本真一(高20)は、(株)「武州めん」の代表取締役であり、乾めんを中心に贈答品等を丸広、東武百貨店でも販売している。

外秩父、官の倉方面へのハイキングで、もう一つの下車駅である東武竹沢駅前で、酒、食品販売の利根川亭一(高21)の利根川商店は、ハイカーがよく立ち寄る店であり、大きな櫛一枚板の金文字看板がめじるしである。

小川初雁会で、若手に属する大塚裕史(高25)は、建築材料販売業(株)大塚専一商店の専務取締役として業績をあげている。

栗生田修彦(高29)は、東京外国語大学卒業後NHKに入った。NHK山梨勤務を経て、現在はモスクワ支局に勤務している。

*

次に小川町周辺のOBを紹介する。交通機関の不便さにもかかわらず、各地で

有力なOBを輩出している。

秩父市の宮前洋一(高4)は(株)チーズセル機器を経て現在(株)秩父ガス社長として、商工会議所副会頭、ロータリークラブ会長などを歴任し、地域振興に努めている。

寄居町の小山和彦(高12)は、比企福祉保健総合センター所長として県行政職となっている。

玉川村では、荻野勝治(高14)は神川町青柳郵便局長を務めるとともに地域のスポーツ少年団指導者協議会及び体協のリーダーや郷土芸能保存など、地域社会づくりに尽力している。

小澤達朗(高16)は、山岡鉄舟ゆかりの名飯「忠七めし」で知られる小川町の割烹「二葉」の支配人を経て、地元玉川に和風割烹

「こう達」を開店している。また小澤真明(高18)は、(株)丸広百貨店の人事部長として経営に関与している。

都幾川村では、内田正三(中22)が村議会議員、郵便局長、裁判所調停委員などの功績により勲五等瑞宝章を受章している。

高山宏(高11)晃(高13)茂(高15)の三兄弟は、埼玉大学を経て、それぞれスポーツ教育者として名高く、指導者として県代表にもなった。現在、宏は川越総合高校に勤務。晃は川越市立富士見中学校で、茂は鶴ヶ島市立藤中学校でそれぞれ管理職として尽力している。

岩田鑑郎(高14)は、JKCから(株)味彩の部長となっており、荒井保雄(高15)は地場産業の(有)荒井木工所を営み、産業振興や社会教育活動、教育委員長として地域教育

づくりに努めている。また野球少年としてならした大澤堯(高18)は、日韓親善野球には全日本チーム選手として出場、松山高校野球

部のコーチ、監督を歴任し、都幾川村役場助役を務める一方、スポーツリーダーとして活躍中。須永文男(高21)も役場課長職として地域行政に努めている。

作曲家の荻久保和明(高23)は、東京芸術大学、同大学院を経て、毎日音楽コンクール作曲部門第一位となり、合唱曲からピアノ曲交響曲まで幅広い音楽活動をしている。

鳩山町出身の小峰祿郎(高8)は、坂戸市教育長として同市教育行政に寄与している。同じ鳩山町からは、造形作家の岩田甲平(高14)が出ている。関根伸夫(高13)に師事し、現在、(有)造景工房を設立して活躍中である。

東松山地区

質実剛健の気風を今に伝える武蔵武士の末裔たち。

東松山地区と川越との縁

東松山市役所の一隅に「前橋藩松山陣屋

跡」の碑がある。川越城本丸御殿の造営や頼山陽の『日本外史』を刊行するなど、小江戸川越を創った松平大和守は一八六七(慶応

三)年前橋に移封となるが、その時比企郡を中心とする飛び地六万石を管理するために、現在市役所のある一帯に陣屋を置いたわけ

ある。

幕末の風雲急を上げる中で構築された前橋藩松山陣屋は江戸時代の最後にして最大規模のものであったが、翌慶応四年は明治元年となり、明治二年は版籍奉還、そして同四年は廢藩置県となっている。

松山陣屋はこのように短命であったが、現在東松山市が比企広域の中心となっており、同市初等教育の礎は川越藩に設けられた藩校の博諭堂である。こんなことを考えると比企地方における近世の黎明に川越が果たした役割は小さくなかった。川越に一八九九(明治三二)年中等教育機関である川越中学が誕生した時、そんな縁をたよって川中に学んだ人もいた。

例えば、溝井禎亮(中13)である。溝井は慶應義塾大学の理財科を出て、同窓の元外相藤山愛一郎氏との親交から大日本製糖に入社している。

川越中学と当地区との関係で逸することができないのは作家の打木村治(中20)である。打木は川中時代の想い出を『大地の園』全四巻に綴った。打木は川中出身の代表的人物の一人として「はつかり人物誌」で扱われるので、ここでは当地との関係のみを記すことにする。

打木の代表作『天の園』全六巻は、小学校時代を過ごした唐子村(現東松山市)が舞台となっている。唐子村の自然と風土、人情を背景に織りなす子どもの情景、それが『天の園』であって、打木はわが郷土を高らかに謳いあげた。打木は同著で芸術選奨文部大臣賞を受賞している。『天の園』は山本有三の『路傍の石』、下村湖人の『次郎物語』とならぶ児童文学の傑作である。

打木が存命の一九八五(昭和六〇)年ごろ、地元有志の間で『天の園』文学碑を建設しようということになり、趣意書までできたが、残念ながら実現に至らなかった。しかし、現在では日本スリーデーマーチを主催する同市に『天の園文学散歩コース』と名づけた遊歩コースが完成し、保少年の足跡を自分の足で確かめることができる(「はつかり人物誌」参照)。

小池喜孝(中32)は東村山市の生まれだが、現在は東松山市に住む民衆史家である。戦後高校教師として渡道、秩父事件の井上伝蔵の生涯を『秩父風』で紹介した。また、開拓の犠牲者、囚人、タコ労働者、アイヌや朝鮮人の人権を地域住民とともに回復する民衆史掘りおこし運動を提唱、民衆史道連(全道)を結成、自由民権百年全国集会代表委員となる。

主著に『鎖塚』、『常紋トンネル』、『北海道の夜明け』等がある。『北海道の夜明け』は、第二九回青少年読書感想文全国コンクールの課題図書になっている。

東松山地区は東松山市、嵐山町、吉見町、滑川町の一市三町で構成されている。この地区を一言でいえば、鎌倉武家政権成立に活躍した武蔵武士の根拠地である。すなわち、嵐山の畠山重忠であり、吉見の源範頼であり、東松山、滑川の比企氏である。ことに比企氏は二代将軍源頼家の外戚として権勢を振るつたが、北条氏の謀略によって一族は滅亡した。史上名高い「比企の乱」である。

比企能夫(中16)、弟、員馬(中17)はともに医師として活躍したが、この比企氏の末裔といわれている。

比企家の菩提寺である川島町中山の金剛寺には比企氏累代の墓がある。八〇〇年も前に歴史から消された比企氏であるが、地元では郷土の歴史を見直す中で比企氏への関心が高まっている。

この比企氏探訪ブームの火つけ役となったのは東松山松葉町郵便局長の高島敏明(高16)である。高島は同局開局十周年の記念事業として一九九三(平成五)年、比企氏をテーマとする歴史劇『滅びざるもの』を企画、

上演した。この劇は翌一九九四年、日本歩け歩け協会発足二十周年の記念公演として東京の日比谷公会堂で再演されたのである。

これを機に地元有志による比企一族顕彰碑が頼家の位牌のある市内大谷の宗悟寺境内に建立され、比企一族顕彰会が発足したのであった。同会では一九九六年『滅びざるもの』の上演、比企氏についてはじめてまとめられた著書『甦る比企一族』の発行、比企の酒「姫ノ前」の販売など、当地方の街おこしの一翼を担っている。

同会の事務局は東松山松葉町郵便局にあり、高島が采配を振るっている。

地域をリードした 川中の先輩たち

現在の吉見町が誕生したのは一九七二(昭和四七)年のことである。その前は吉見村であるが、この吉見村も東西南北の吉見村が一九五四(昭和二九)年に合併して誕生したものである。

この合併後の初代村長となり、また県議会議員として地元で、そして県政でも活躍したのが小高圭作(中15)である。小高は東京高等蚕糸学校を卒業後、松山町(当時)にあった蚕種会社社長となり、地域の農村経済の振

興に尽力した。

また小川明(中8)は東京農業大学を卒業後、現在の北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)に渡り、同地にあつて農業指導に尽瘁したが、その後教育界に入り、成鏡北道の高等農業学校校長を長らく務めた。終戦により、内地に引き上げる途中病に倒れ、一九四八(昭和二三)年惜しくも他界した。

高澤五郎(中10)は東京帝国大学農学部実科卒業後、久原鉱業(株)日立鉱山に勤務し、後に埼玉県庁に奉職して農林部長を務めた。

退職後は埼玉県信用保証協会専務理事として活躍、埼玉県選挙管理委員長等も歴任した。

現役最古参は嵐山町の篠藤惣次郎(中23)である。篠藤は埼玉師範学校を卒業して教職にたずさわり、地元の菅谷小学校教諭、玉川小学校長を歴任した。その後、嵐山町教育委員として二十年間、地元の教育行政や文化振興に尽力した。また、「嵐山町報道」の創設に係わり、報道委員長などさまざまな要職を兼任して、郷土の発展に貢献した。卒寿の今なお登壇としており、人の求めに応じて講話等もしている。

当地区は比企丘陵といわれるように起伏に富む田園が広がっており、交通の便も良いことから多くのゴルフ場がある。その草分けが

高坂カントリー(一九五八年オープン)であり、その創始者が馬場宗光(中14)である。

馬場は唐子村(現東松山市唐子)の旧家の出身で、仙台高等工業専門学校を卒業後、建設省に入った。この馬場は打木村治の従兄にあたり、『天の園』にも登場する人物である。

東松山市では柳沢宇一郎(中16)がいる。

柳沢は川中卒業後松山町役場に奉職し、収入役、助役を歴任した。また、一年志願兵に入隊して陸軍中尉に任官し、比企東部在郷軍人連合会会長を務め、一九四四(昭和一九)年には応召となった。戦後、柳沢は松山町(当時)の農業協同組合長となり、一九五四(昭和二九)年の町村合併後の初代東松山農協組合長となった。その後も農協の理事等を歴任し、市農協の発展に尽力したのである。また、柳沢は市議会議員も三期務めた。柳沢は地元の名士として幅広く活躍したのである。柳沢亡き後、夫人が夫の部隊の戦没者の墓参をし、その時のことを「遺族をたずねて」のタイトルで発行している。亡夫に対する供養でもあったのだろう。同書刊行後、夫人も間もなく没している。

明日を担う川高OBたち

一九三三(大正二二)年、旧制松山中学が

松山町(当時)に誕生した。県下で五番目である。当地区から川越中学校に学んだ人たちの多くは、下宿や寄宿舎を利用していたが、これを機に中学校に進学する当地区の人の大半は松山中学校に学ぶようになった。その後、学区制のこともあって、川中、川高に学ぶ人はこの地区では寥々たるものになってしまったようである。地元はその地区を代表するような川中、川高出身者が存在しなかったということが、卒業生の数は千名近くありながらこの地区に長く初雁会が存在しなかった主たる事由と思われる。初雁会が発足したのは、

一九九七(平成九)年七月のことである。母校川越高校が創立百周年を迎えるということにわかに初雁会発足の気運が高まってきたのであるが、そればかりでなく、ようやくこの地にも初雁の旗を掲げる人物が質量ともに育ってきたということである。そこで、東松山初雁会の誕生から話を進めたいと思う。

一九五九(昭和三四)年、川越高校が甲子園に出場した折、二年生の唯一のレギュラーとして活躍した嶋本正雄(高13)の学年は、嶋本を中心に内田昌治(高13)らの結束が固い。嶋本は明治大学卒業後家業の(株)シマモト紙製品を継いだ。嶋本は地元松山中学校の生徒会長をし、野球部に所属してピッチャー、四番打者として活躍、松中野球部に県大会初優勝をもたらしたヒーローである。

スポーツマンらしいさわやかさとマスクの良さに加えて人望のある嶋本は地元住民に推されて一九九一(平成三)年、松山市議会議員に初当選をした。その時のキャッチフレーズが「市政にクリーンヒットを！」である。

甲子園でクリーンヒットを打った嶋本ならではのキャッチフレーズである。嶋本は現在市議会二期目にして副議長の要職にある。嶋本に対しては甲子園で果たせなかった長打一発を望む声が市民の間で日増しに高まっている。同期の内田は応援部に所属していた。内田の言によれば、川越高校の応援歌に凱旋歌というのがあり、これを歌うと敗れるというジンクスがあったそうである。甲子園大会第二回戦、対高知商業戦の前日逗留先の大黒屋でこの歌を斉唱したという。

それはさておき、川越高校の甲子園出場に大声援を送った同期生は、今や市議会選挙での嶋本の応援団となっている。青春の血をたぎらせた高一三回生は今なお結束を誇る熱き集団であり、彼らが牽引力となって東松山初雁会が発足したわけである。

一九九七(平成九)年七月二十七日、東松山市総合会館において六〇名余の同窓生の参加と渋谷健同窓会会長、高山孝坂戸初雁会会長のご臨席の下に設立総会が開催され、ここのめでたく東松山初雁会が誕生したのであった。そして、同会を構成する一市三町から会長一名と副会長三名が選出されたわけである。会長に就任したのは伊田登喜三郎(高22)であり、副会長は中村善博(高17)、上野広(高17)、宮田栄(高21)である。全員が戦後世代である。

伊田は東松山市に本社のある総合建設会社伊田グループの総帥であり、(株)伊田テクノスの社長を務めている。いつもにこやかで人あたりのいい伊田は社長業という激務のかたわら多くの役職を引き受け、若いながら多方面で活躍している。東松山初雁会会長として役がまた一つふえたが、初雁会については二〇名近い幹事が控えており、伊田の負担にならないようバックアップしている。伊田は「私は川越高校の剣道部の出身です」と常々口にするように、在学中は剣道に打ち込み心身を練磨した。この剣道が伊田の人格形成のバックボーンとなっている。それというのも伊田の父親である先代社長勲三郎氏は敗戦に打ちひしがれた世相を憂え、「一剣を以て国を興す」の理念のもとに尚武館道場を建設し、地域に広く開放したのであった。その後、道

場があるのが縁となって(財)埼玉剣道連盟会長の橋崎正彦(剣道範士九段)氏らが入社してきたのである。こうした剣豪を慕って学生剣士の多くが同社に入社するに至り、同社は業界の多くの剣道大会で入賞するようになったという。ことに一九九七(平成九)年には関東実業団剣道大会で優勝、そして全日本実業団剣道大会二位という快挙を達成したのであった。この間、尚武館は二回の建て替えを経て名称も青少年研修道場明德館と改めた。明德館では現在五〇名余の豆剣士をはじめとして同好の士が県内各地から集い、剣道場として隆盛を誇っている。伊田グループではほかに例え、日本書道界の重鎮である吉田鷹村東京学芸大学名誉教授を招聘して書道塾も開講している。同社は地域の文化振興の一翼を担っているわけであり、企業メセナというべきものである。それというのも、伊田の祖父にあたる創業者勘三郎氏は二宮尊徳翁に傾倒され、報徳精神をもって自社の経営理念にしたからである。本社敷地内には二宮尊徳を祀る報徳神社があり、礼大祭を毎年挙行して報徳精神の涵養に努めている。報徳精神の骨子は勤労と分度、推譲である。伊田グループの地域における諸活動は報徳精神による推譲の実践ということであろう。けだし尊いこ

とである。

吉見町より選出された副会長の中村は芝浦工業大学卒業後父親の経営する総合建設会社(株)中村組に入社し、現在は専務取締役として事業に真摯に取組んでいる。やがて父親の後を継承することになるが、同町にあつて中村は若手経営者の代表格である。東松山むかしロータリークラブ会員として幅広い人脈を築いている。

滑川町選出の副会長上野は東北大学を卒業後大井町にある東燃化学(株)の東燃総合研究所に入所、現在石油化学製品研究所長の要職にある。忙しい仕事のかたわら地元地域活動にも積極的に参加し、宮前小学校PTA会長や森林公園駅南土地地区画整理組理事等を歴任した。

嵐山町からは宮田が副会長に選出された。宮田は工学院大学出身の一級建築士であり、都市及び地方計画の技術士でもある。現在、(有)宮田総合計画事務所の代表取締役をしている。宮田には日本建築士会連合会の設計競技での入賞歴がある。また、同町の役場庁舎建設審議会委員や桶川市の文化財調査委員、嵐山町まちづくり懇談会の委員を歴任している。その他嵐山町にある野外レクリエーション施設の設計も手がけた。「まちづくりには

善意と愛情が大切」というのが持論であり、「奇をてらった建物よりも精神に訴えかけるものを創る」という正統派である。

東松山初雁会の発足は厳肅裡に挙行されたが、乾杯の音頭をとったのは当日の参加者の中では長老格の宮坂忠彦(中41)であった。宮坂は秀才の誉れ高く川中時代は今でいう生徒会長をし、スポーツ万能、ことに陸上短距離では県下ナンバーワンであった。宮坂は東京大学を卒業後高校の数学の教師となった。長らく熊谷高校で教鞭をとり名物教師の名をほしいままにしたが、その後母校の川越高校に転任した。「やはり川越はいい」とは宮坂の弁である。往年の猛者も齢を重ねて里心がついたということか。

東松山初雁会では会報「奮え友よ」を発行した。題字を揮毫したのは小久保喜惣次(高7)である。小久保は在学中書道部長として活躍した。小久保は川島町の出身であるが東松山市にある(株)自動車機器に入社、同市を終(つひ)の棲家とした。また東松山初雁会の発足では高13グループの先輩として発起人代表の重責を果たした。小久保の二人の子息はともに川高に学び、野球部に所属、ことに次男の知之進(高41)は父親と同じく早稲田大学に進み、現在はテレビ朝日の人気アナとして

「トゥナイト2」や「女神のちからこぶ」に出演している。

東松山初雁会の設立総会は応援部出身の内田の指揮の下に校歌を高らかに斉唱して終えた。高校時代はスポーツであれ、学業であれ誰しもが全力投球する疾風怒濤の秋である。頭に霜をいたたく今、紅顔のころを想起して熱きものが胸に去来したことだろう。東松山初雁会の事務局は内田の所有する利幸ビル内にある。内田は会合等に自社ビルを快く提供するなど東松山初雁会発足の第一の功労者である。現在会員数は対象人員のほぼ四分の一にあたる二〇〇名ほどである。

川越高校はかつて陸上競技名門校としてその名を全国にとどろかせたことがある。名細村(現川越市名細)出身の米山大恵(高5)は全盛期の川越高校陸上部のメンバーとして活躍した。二年生の時には全国高校駅伝で六位に入賞、そして三年生の時には見事三位になったのである(ちなみに優勝校は熊本県の名高校、進優勝校は長野県の松本深志高校)。東洋大学に進んだ米山は箱根駅伝に四回出場また関東選手権大会優勝という輝かしい記録を持つ。米山は東洋大学体育研究室、同大図書館等に奉職したが、現在は嵐山町にある向徳寺の住職である。

東松山市における唯一の一部上場企業はゼクセル(旧ヂーゼル機器)である。ゼクセルにはかつて初雁会があり、活動していたという。現在でも川高OBは少なくないが、同社で活躍した者を紹介したい。荻野英夫(高3)は取締役で退任、現在は同市にある系列会社(株)不二精機の社長である。中村八州夫(高7)は(株)東洋冷熱社長、鈴木元(高11)は同社の取締役をしている。利根川宏(高10)は東松山市の出身で同社に勤務、現在はゼクセルとボッシュ社との合弁会社ジャット(株)の社長である。

東松山市にはゼクセルの系列会社がいくつかある。その一つが(株)高橋精機で高橋勤(高21)が父親の後を継いで社長となった。東松山市にある大手建設会社である中里建設は中里昱夫(高18)が社長となった。埼玉NTNでも父親の後を継いで小川栄一(高19)が社長となった。伊田グループをはじめとして地元有力企業の若手経営者に川高出身者が多いのである。

嵐山町の川高OBを紹介したい。山岸忠雄(高15)は(株)開隆堂出版の取締役出版副本部長をしている。関根利雄(高17)は関根測量登記事務所や塾を経営している。浅見一弘(高17)は(株)プチ・エトワール営業部長、

村田広宣(高20)は一級建築士であり、(有)村田木材の代表取締役である。小林良一(高16)は東京大学で美学を専攻、現在都立大学教授である。東松山市における唯一の大学として大東文化大学がある。片岡弘次(高12)は東京外国語大学でウルドゥー語(パキスタンの国語、インド公用語の一つ)を専攻、現在同大の国際関係学部の教授である。

滑川町ではブリチストーン(株)監査関連会社部長や関連会社の取締役を兼務している原健(高17)や(株)サイテック技術課課長、月輪土地画整理組合理事として活躍している篠崎卓見(高27)がいる。渡辺賢(高17)は東松山市の出身であるが、同町に居住して洋服のリフォーム「洋服美容室SHU」を経営、地元では元宮前小学校PTA会長として新風を吹き込んだ。また、少女サッカーチーム「FC滑川」のコーチを十年以上継続、一九九六(平成八)年には埼玉県少女サッカー大会で優勝に導いた。

吉見町では関隆(高24)と森田淳一(高25)である。関は東京医科歯科大学を卒業後同大歯学部助手を務めた後、関歯科医院を開業、現在比企郡歯科医師会理事。森田は埼玉医科大学を卒業後、先代からの森田医院を継承、

医院の充実、拡大に努めている。

東松山市の開業医である鋤柄稔(高18)は良心的な名医として世評が高い。鋤柄は信州大学医学部を卒業後、埼玉医科大学の助教授をしていた。

教職関係でも川高出身者は多い。そこで、二、三紹介したい。滑川町の大家基司(高19)は現在東松山市立桜山小学校長である。三九歳で教頭試験、四三歳で校長試験に合格、埼玉県教育界の期待の星である。小学校時代から続けている剣道は五段の腕前、小学生をはじめとする少年剣士の育成に尽力し滑川町剣道連盟会長、松山地区剣道連盟副会長も務めている。

井上治良(高1)は所沢市立三ヶ島小学校長、同市立林小学校長、滑川町立宮前小学校長を歴任し、小学校の国語教育の礎を築いた埼玉県教育界の重鎮である。

東松山市の石川勝利(高12)は現在県立与野高校長である。地元の人間として打木文学の良き理解者であり、馬場家の資料等も蒐集している。

次に、行政に目を転ずると東松山市には将来が囑望される若手が数名いる。助役の福田(旧姓島田)實(高3)は東松山市立病院の事務局長から助役に抜擢された。嵐山町では高

橋兼次(高16)が都市計画課長をしている。

高橋は民間企業でのキャリアを生かして同町の街づくりに取り組んでいる。特に鎌形小学校への旧日赤社屋の移築で「埼玉景観特別賞」を受賞した。現在は嵐山溪谷緑のトラスト二号地の整備保全に尽力している。

吉見町では高橋(野口)武志(高17)が福祉課長として活躍している。

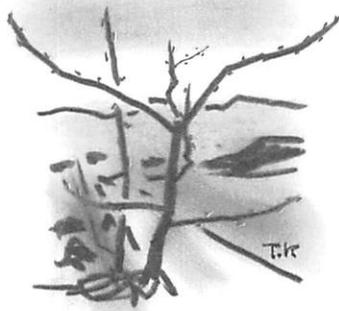
埼玉県では松崎孝也(高12)が土木部道路建設課長、加藤隆司(高13)が住宅都市部都市計画課長の要職にある。

最後に兄弟四人がそろって川高卒という村上家を紹介したい。村上徳太郎氏は戦前上海にあった東亜同文書院の衣鉢をつぐ東光書院という精神修養道場を開き、機関誌「回光」を発行してきた。この東光書院が一九五四(昭和二九)年縁あって東松山市の上唐子に移されたのである。そこで、子息武(高8)は高校二年で川高に転入したのであった。武は父徳太郎氏の遺志をついで東光書院第二代院主となり、混迷する日本人の精神作興に努力し、政治家等を啓蒙、指導している。安(高

11)は衆議院議員の宇都宮徳馬氏の秘書となり、世界各地に随行し、現韓国大統領の金大中氏が東京のホテルから拉致される事件が一九七三(昭和四八)年に起きた時、最も早く

現場に駆けつけた。忍(高14)は成城大学を経て西友ストアに勤務。アメリカで大規模店舗の経営方法を学んだ後、独立して量販店関係の経営コンサルタント会社(株)ムラカミ研究室を興し、日本国内はもとよりアメリカ、東南アジアなどへも活躍の場を広げている。厚(高20)は中国語を習うためにシンガポールの南海大学語学センターに留学。そのままシンガポールに居住して現在は英字紙、華字紙の要点を日本語に翻訳し、日本企業に配布するSEARサーチ(東南アジア研究所)をシンガポールで経営し、活躍している。

当地区の学業優秀者にとって川高は垂涎の的であり、現在かなりの人数が川高に進学している。我々にとっては誠に心強い後継部隊が存在するわけである。東松山初雁会発足の一端はこの辺にもあると思う。やがてこの地から翔く多くの同窓生の出現を期して本稿を閉じることとする。



カット・鹿山 孝(高18)

川島・桶川地区

地域のリーダーとして、あるいは、故郷の恵みをもとに国内・海外で活躍する。

(川島地区)

川島町は佐々木信綱作詞の「川島郷歌」に詠うたわれているとおり、周囲を荒川、市の川、入間川、越辺川の四つの川に囲まれ、現在も米、いちごづくりなどがさかんな農村地帯である。

一九七二(昭和四七)年に川島村(中山、小見野、八ツ保、出丸、三保谷、伊草の旧村)を統合、町制を施行し、一九九七(平成九)年に二十五周年を迎えた。今後は圏央道のインターチェンジの開通により、地域が一変することが予想され、自然と調和のとれた都市整備づくりを目指している。

周辺地域との交通はいずれかの川を越えなければならず、川越中学・高校に通う学生は釘無橋または落合橋を渡って通学した。川越まで鉄道がないが、距離的には近いので、ほとんどの学生は自転車通学していた。しかし、現在のように永久橋でない時代は、二つの冠水橋と堤防を越え、冬ともなれば、砂利道を

寒い北風に向かって毎日ペダルを踏むのが日課であった。こうした中、母校を愛する気持ち強く、また、ねばり強い性格で、多方面で活躍する者が多い。

〔政治・行政〕

国政で活躍したのは、小見野地区の山口政二(中3)である。早稲田大学法科卒業後、一九一四(大正三)年朝鮮総督府に勤務した。その後、一九二四(大正一三)年埼玉三区より代議士に立候補し、青壮年の支持を得て劣勢を挽回し、初当選した。行動的、先覚者型の人物であったが、一九二七(昭和二)年、国会開会中に倒れ不帰の客となった。四二歳の若さであった。

川島町の県政に関わった人物は三保谷地区出身者が多い。故猪鼻精寿(中6中退)は、一九四七(昭和二二)年から一九五一(昭和二六)年まで、地方自治法最初の県議会議員として活躍した。

同じく鈴木誠一(中19)は、三保谷村村長を経て一九五一(昭和二六)年から一九五五

(昭和二〇)年まで活躍した。氏は自宅の古文書を通して郷土史にも造詣が深く、六か村合併間もない一九五六(昭和三一)年に『川島郷土史』を著した。また、中国の戦場でなくなった弟、鈴木聞多(中29)の死を兄として悼み『聞多の記録』を一九四〇(昭和一五)年に著している。さらに、初代の川島中学校のPTA会長としても学校づくりに貢献した。

飯野武久(中33)は、八年間川島村の助役を務め、その後、一九六七(昭和四二)年から一九七九(昭和五四)年の三期十二年間県議会議員を務めた。また、県選挙管理委員長代理を四年務めた。このような地方自治への貢献により、一九九六(平成八)年には川島町名誉町民に推挙された。

染谷昭文(高6)は、一九九九(平成一一)年第一五代川島町長に就任した。父は初代川島村長である。県庁勤務の経験を生かし町政を担当する。

県の行政で活躍している人物には小見野地区出身の大沢彰(高7)がいる。一九八六(昭

和六一)年以降いくつかの課・所長を経て一九九三(平成五)年衛生部次長、一九九四(平成六)年自治研修センター所長を務めた。現在は、(社)建設業協会専務理事である。

長谷部真一(高15)は、県の農林行政畑を歩み、現在農林部林務課長を務めている。

川島町の産業の中心は米作りである。三保谷地区の猪鼻精一(中30)は、農業のかたわら町議会議員を二期務める一方、川島町農業協同組合の要職を長く務め、農業組合長を一九七八(昭和五三)年から一九八四(昭和五九)年まで二期務めた。

出丸地区の宇津木一雄(高8)は昭和三十年代に初代川島村青年団長、さらに比企地区会長、そして県連合青年団副団長として活躍した。当時、沖繩返還運動の高まりのなか全国の青年団との連帯を持ち、県代表として沖繩に出かけた経歴を持っている。町議会議員を経て、現在は川島町の社会教育委員長である。

宇津木忠征(高11)は町会議員二期を務めた。町のスポーツ振興と地域防災に長く関わって活躍している。高校時代は応援団長としても活躍した。

【産業】

地域の産業者としては、伊草地区の二人が

特筆される。片山翁次(中34)は、農機具製造の片山製作所会長として現在も活躍している。社長は子息の片山幸雄(高19)である。

川越に会社を設立し、高度成長期には大型トラクターも製造したが、現在は畑作用農業機械を製作している。

吉田稔(高6)は大宮緑化建設業協同組合事務局長。千葉大学卒業後造園業に入り、ホテル・学校・工場・住宅などの造園の設計と工事にあたり、現在吉田造園事務所代表取締役として、造園、緑地管理を生涯の仕事とし、後継者の育成指導も図っている。

笛木豊彦(高17)は、一九九七(平成九年)地元笛木醤油の第一代社長を襲名し、蔵づくりの店舗のもと、醤油製造業に新しい感覚を導入し事業を拡大した。弟の笛木弘治(高19)は、川越市に醸建築研究所を開設し、一般住宅のほか、市内の蔵づくり店舗の改築・改修を手がけた。新しい手法で作った店舗は二つ、埼玉県景観賞を受賞した。一九九八(平成一〇)年からは笛木醤油の社長でもある。

【教育】

出丸地区の斉藤茂三郎(中4・中退)は、児玉町出身の国学者・埴保己一の顕彰のための組織である(社)温古学会の創始者である。

川島町の教育長としては三人があげられる。

鈴木三郎(中24)は村内の小学校長等を務め、一九六八(昭和四三)年から一九七二(昭和四七)年の四年間教育行政に尽力した。

小高登(中44)は町制施行後の一九七二(昭和四七)年から一九七八(昭和五三)の六年間、温厚な人柄で町の教育行政にあたった。なお、小高家は二三人が川中・川高OBという、まさに初雁一族である。

関口武(中44)は、川島中学校長等を務め、専門の教育相談分野を生かし一九九六(平成八)年から課題の多い教育行政にあたっている。なお、関口は一九九七(平成九年)発足の川島・桶川初雁会初代会長でもある。

【地域医療】

川島町は交通不便な地域のため、医療は生活に関わる重要な問題であり、地域の人々の医院に寄せる期待は大変大きい。田口良男(中25)は東京帝国大学医学部を卒業後、軍医としても活躍し、復員後伊草地区で開業。六十年にもわたり、地域医療一筋で活躍した。晩年は菟園の号で書道・俳句でも地域の指導者として活躍した。また、伊草小学校の校歌の作詞を手がけ、二十数年経過した現在も生徒たちに愛され歌い継がれている。

中野進(中30)は、陸軍歯科医として務め、復員後八ッ保地区で開業し、現在まで歯科医

として活躍している。地域の小・中・高校の医も長く務めた。その間、埼玉県歯科医師会監事を十一年、比企郡市歯科医師会会長を五期務めた。

広原公昭(高6)は三保谷地区で親子二代にわたり開業し、地域の人から川島町診療所として長く親しまれている。

〔県外、海外で活躍している(した)人物〕

埼玉が生んだ世界的スプリンター、鈴木朋多(中29)は、川島の自然の中ではぐくまれ、少年時代から俊足であった。川中時代には全大会で一〇〇、二〇〇を走で優勝し、その後慶應大学に進学した。数多くの国際大会で活躍し、一九三六(昭和一一)年、ベルリンオリンピックの一〇〇を走と継走に出場した。吉岡隆徳の後継者として期待されながらも、一九三九(昭和一四)年、北支・河南での戦闘で二六歳の若さで亡くなった。このことは日本陸上界に大きな衝撃であり、かつまた大きな損失であった(「はつかり人物誌」参照)。

島村計治(中6)は中山地区出身で、東京帝国大学卒業後住友本社に入社し、一九三三(昭和八)年から新居浜製造所一筋に勤務し、戦後、一九四五(昭和二〇)年同製造所長を最後に退職し、その後、一九四六(昭和二一)年の七月から七か月間新居浜市長を務め

た。老後は市郊外の静かな山間の自然の中で余生を送り、九七歳で亡くなった。故郷の川島町の図書館には生前愛読した東洋文庫が家族により寄贈され、島村計治文庫として置かれている。

友光正昭(中28)は八ッ保地区出身で、早稲田大学を卒業後、日本経済新聞社に入社し、上海特派員を務めた。終戦から一九六〇(昭和三五)年まで日経の論説委員長を務めた。その後、一九七二(昭和四七)年まで役員待遇論説委員として退職まで活躍した。

長島恒雄(高3)は八ッ保地区出身で、新日本証券調査センター(常務取締役)を一九九七(平成九)年退職し、現在は(株)マクニカの常勤監査役である。この間、論文、著作等多数にのぼる。最近ではビッグバンに関する経済評論や講演で活躍中である。

矢部初男(高7)は八ッ保地区出身で、少年時代、アマチュア無線に熱中し、その後川越高校で、物理の那須、大川両先生の影響を受け、その道に進み工学博士号を取得した。

専門分野は電磁波工学で、現在東京電気通信大学教授として活躍している。また、米国電気電子学会役員でもある。

高野澄(高9)は伊草地区出身で、関西の大学でジャーナリズム学や日本近代史を専攻

し、大学の助手を務めた後、著述家として京都で活躍している。『徳川慶喜』『徳川慶喜評判記』『烈公水戸斉昭』『大石内蔵助の謎』など八〇冊をこす多数の著書がある。

長沢英俊(高11)は三保谷地区出身で、旧満州で幼年期をすごし、芸術をたしなむ祖父の影響で小さいときから絵を好み、高校でも美術部で活躍し、多摩美術大学に進んだ。その後、一九六六(昭和四一)年に、自転車によるユーラシア大陸横断の旅を企て、一九六七(昭和四二)年イタリアに着いた。そこで当時のイタリア美術の影響を受け、ミラノ郊外にアトリエを持ち活動するようになった。日本に紹介されるようになったのは、一九九三(平成五)年秋の水戸芸術館での回顧展が最初である。長沢の作品はイテアを具現化するため、素材もさまざまである。日本では東京国際展示場のアートワークに大理石製の「七つの泉」と称する作品がある(「はつかり人物誌」参照)。

(桶川地区)

現在、桶川市から川越市内の普通高校には学区制の変更により通学できない。しかし、以前は桶川市の中でも古い歴史を持つ川田谷地区から、多くの向学心に富んだ学生が通学

していた。もちろん自転車での通学であった。太郎右衛門橋を渡り、さらに川島の学生と一緒に二つの川を渡つての通学は苦しくもあり、懐かしい思い出である。今は後輩が断絶し残念であるが、OBは多方面で活躍している。

清水亮仁(中19)は、比叡山での修行の後、一九五三(昭和二八年)年、天台宗泉福寺住職として着任し、僧職のかたわら村役場の助役としても長く務め、さらに地域の要職も歴任した。地域の信頼も厚く、権大僧正として宗門教導にも務めた宗教育家であった。

内田静馬(中22)は、東京高等工芸学校(現千葉大学)卒業後木材工芸の教師として山口県と新潟県で教鞭をとり、終戦後地元

戻り版画の創作活動を続けている。二八歳の時、パリ展覧会出品作品がルーブル付属図書館に買い上げられた。現在も地元桶川・北本の教場は教え子たちにより活動が続けられている。日本版画協会名誉会員である。なお、内田家は四人が初雁家族である。

岩田英治(中19)は、明治大学卒業後、銀行に勤務したが、終戦後地元に戻り、村役場に勤務し、銀行の経験を生かし収入役として務め、桶川市に合併後も収入役として活躍した。この間、埼玉県市町村収入役会副会長も務めた。とりわけ市財政健全化のために厳しい態度であつたことは語り草になっている。産業界では、細田登美雄(中44)がいる。

早稲田大学卒業と同時に家業(父の経営する農機具販売)に従事した。その後、一九五五(昭和三〇)年に春日部市に細田農機を設立した。一九六八(昭和四三)年には、東部スズキ販売も設立し、現在は農機具販売業界のまとめ役、さらには全国団体の役員としても活躍している。

教育界では、谷口勇(中44)がいる。一九四四(昭和一九)年、土浦海軍航空隊に入隊し、特別攻撃隊員として三沢基地で終戦を迎えた。復員後、師範学校を卒業し、県の教育行政や小学校長を歴任した。現在、法務省更生保護施設の常任理事として更生保護事業の発展に尽力している。

坂戸・鶴ヶ島地区

堅実な生き方、地域に貢献する気風。あたかも武蔵野に咲く紫のごとく。

(坂戸地区)

坂戸市は、一九五四(昭和二九年)年七月、入間郡坂戸町、同三芳野村、同勝呂村、同入西村、同大家村の一町四か村が対等合併によ

り坂戸町となり、発展を続け、一九七七(昭和五二年)九月市制を施行して今日に至っている。

一八九九(明治三二年)開校の現川越高等学校とは、四・圏から一五・圏の中に位置す

る、若くまさに発展の一途をたどる地域である。その発展に貢献した方々、あるいは、地域から雄飛した方々を紹介する。

*

◎栗原勝次(中1) 三芳野村出身。卒業後家

督を継ぎ、大正十二年第一〇代三芳野村村長、昭和三年埼玉県議會議員。中小坂地区八町歩の開墾は、業績の最たるものである。

◎栗原彌作(中2) 三芳野村出身。卒業後農業に従事。大正十二年三芳野村収入役、昭和二年同村助役、同九年第一三代三芳野村村長。「村の発展は道路から」をモットーに道路の新設、産業振興のための養蚕の普及等に尽力。

◎大岡優佐(中4) 入西村出身。埼玉師範学校講習科に進み教員となる。入間川小学校、入西小学校等の訓導の後、大正六年弱冠二八歳で田面沢小学校長に抜擢された。二十六年間の校長生活を五四歳で勇退後は、入西村教育委員および公民館長を務めた。

◎田中朝三(中3) 大家村出身。千葉医学専門学校、海軍軍医学校に学び、海軍軍医となる。大正十二年米國留学、同十四年帰国。海軍省医務局員、軍医学校教官、連合艦隊軍医長等歴任する。大正十五年「家兔伝染性呼吸器病の研究」で東京帝国大学から学位を授けられる。昭和九年横須賀海軍病院院長兼横須賀鎮守軍医長、同十二年海軍軍医中將、続いて海軍軍医学校長となる。これらの功績により勲一等瑞宝章受章。退役後も中国大陸で活躍、終戦で帰郷、生涯医療活動に従事した。

◎栗原律三郎(中4) 三芳野村出身。卒業後

農業に従事。製茶技術を修め竹材・茶業・養蚕等の組合長となる。人望厚く、三芳野村村議會議員、昭和七年三芳野村助役、同十三年第一四代三芳野村村長に就任、町村合併後は、坂戸町議會議員に当選、町議會議長を務めた。

◎伊利信義(中5) 入西村出身。仙台医学専門学校(現東北大学医学部)に学び医師となり大正五年入西村竹之内の自宅で独立開業。以来、地域の医療活動に専念。この間、入間郡医師会理事、村医、国保運営委員等を歴任。晩年は婦人会等で、老人福祉や成人病予防等の指導にあたるなど、生涯を医療活動一筋に尽くした。

◎富沢寛介(中9) 入西村出身。卒業後農業に従事。昭和四年村會議員。同七年入西村村長に就任し、以来十三年間首長として活躍。入西村内の幹線道路の整備、入西耕地灌漑用の長岡堰改修工事等の業績を残した。

◎原 次郎(中12) 三芳野村出身。埼玉県公安委員長、川越商工会議所会頭、川越法人会納税貯蓄組合会長、埼玉県議會議員、三芳野村村長、三芳野農業共同組合長、武州瓦斯KK社長・会長等歴任。川越中学卒業後農業に従事。水害対策のため入間川水系規制同盟会を設立、会長となり、国の直轄河川編入に尽力す。その結果国費で治水事業が進められた。

◎大塚教識(中19) 勝呂村出身。大正十四年

藍綬褒章及び勲三等瑞宝章受章。

◎新井正直(中17) 勝呂村出身。卒業後農業に従事。勝呂村助役、勝呂村村長、勝呂農業共同組合長、埼玉県養蚕連・埼玉県信連理事、埼玉県組合長会会長、坂戸町合併農協初代組合長、坂戸市教育委員、勝呂公民館長、坂戸市文化財保護審議委員、坂戸市史編纂委員等歴任。勲五等瑞宝章受章。

◎丸 愛蔵(中18) 坂戸町出身。坂戸青年学校指導員。陸軍少尉。卒業後青年団長として青年啓蒙運動に率先。二〇代で坂戸町議會議員。大戦中在郷軍人分会会長を務める。戦後町村合併まで坂戸町の助役を務めた。

◎清水包治(中18) 坂戸町出身。埼玉師範学校(現埼玉大学)に進み教員となり小・中学校に勤務する。坂戸市立大家小学校長退職後、坂戸町議會議員。昭和二十八年九月から同四十二年四月まで坂戸町町長を務めた。

◎内田包寿(中18) 坂戸町出身。埼玉師範学校に進み教職につく。霞ヶ関小学校、勝呂小学校勤務後、昭和十六年北支派遣訓導として青島特別市の台西鎮小学校で日本語教官を終戦まで務める。帰郷後、朝霞青年学校校長、勝呂中学校長、入西中学校長および坂戸町教育委員会教育長を務めた。

◎大塚教識(中19) 勝呂村出身。大正十四年

智山勸学院大学卒業後、龍護山大智寺の法灯を継ぐ。智山派責任役員の要職を歴任後、権大僧正に栄進、智山枢機顧問となる。勝呂村長、埼玉県議会議員を歴任。組合立坂戸高等学校の国立移管を成功させた人物。

◎原口亭一(中21) 坂戸町出身。元坂戸町人権擁護委員・教育委員長。教職につき、東洋大学に学ぶ。坂戸小学校、組合立坂戸高等学校、入西中学校長、坂戸中学校長等歴任。勲五等双光旭日章受章。

◎浅見友治(中20) 坂戸町出身。学校法人坂戸幼稚園創設者。元坂戸幼稚園長。通信官吏練習所行政科に学ぶ。通信省事務官。野戦郵便局長等歴任。従七位勲六等瑞宝章受章。昭和二十四年郵便局長を依願退職後、坂戸幼稚園創設。以来終身を幼児教育に尽す。

◎小川浜吉(中22) 入西村出身。卒業後農業に従事、青年団活動に入る。入西村議会議員、警防団長、在郷軍人分会長。昭和三十年町村合併後初の町議会議員。入西農協組合長、坂戸町監査委員、保護司等歴任。

◎藤野多清(中23) 大家村出身。卒業後青年団の指導にあたる。明治神宮大会・関東府県対抗陸上競技大会で活躍。二〇〇リ23秒0は昭和二年から二十六年間、四〇〇リ52秒8は昭和四年から二十三年間それぞれ埼玉県記録。

坂戸町議会議員、坂戸市教育委員等歴任。

◎正木三亀夫(中24) 三芳野村出身。三芳野村収入役から三芳野村村長歴任。町村合併後は坂戸町福祉課長、坂戸町助役として活躍。特に一〇万都市建設に専心し、坂戸市発展の基礎作りに献身的に尽力した。

◎栗原貞雄(中28) 三芳野村出身。埼玉師範学校専攻科に学ぶ。小・中学校教員、校長、埼玉県教育局指導主事等歴任。退職後坂戸市教育委員会教育長二期八年。現在市内各種団体の依頼により、植物採集、薬草教室等の講師を務める。勲五等双光旭日章受章。

◎根本峰好(中28) 入西村出身。早稲田大学卒業後旺文社入社。新制大学発足当初、旺文社の傾向と対策シリーズで、国立大学志望者向けの『進学適性検査の傾向と対策』の著者。元旺文社副社長。

◎安斎豊蔵(中29) 坂戸町出身。(有)安斎書店取締役。坂戸市書店組合組合長。埼玉県書店組合理事。教科書供給協会埼玉県分会幹事。教科書供給業務功勞により文部大臣表彰及び黄綬褒章受章。

◎林 徳之輔(中31) 勝呂村出身。卒業後農業に従事。勝呂村村議会議員、同議長、町村合併後坂戸町町議会議員、同議長、坂戸町町長、坂戸市市長等歴任。坂戸市名誉市民。藍

綬褒章および勲四等旭日小綬章受章。

◎宮下辰夫(中31) 勝呂村出身。埼玉師範学校に学び教職につく。小学校訓導、埼玉師範学校、県立高校教諭、教頭、校長の後、埼玉県教育局指導課長となり、県教育行政に貢献する。川越女子高校校長、大井町教育委員会教育長等歴任。勲四等瑞宝章受章。

◎水村義一(中34) 勝呂村出身。卒業後農業に従事。勝呂村青年団および連合青年団の団長を務める。勝呂村村議会議員に当選以来、坂戸町町議会議長で勇退するまで二十一年間議員として活躍。坂戸市立図書館館長。勲六等单光旭日章受章。

◎原 宏(中41) 三芳野村出身。埼玉県公安委員長、武州瓦斯KK社長、坂戸ガスKK社長、県法人会副会長、県経営者協会副会長、県ガス協会会長、坂戸町議会議員六期務めその間議長等歴任。都市ガス業界をはじめ多くの功績で、藍綬褒章および勲三等瑞宝章受章。

◎土屋亮晃(中41) 大家村出身。大正大学に学び教職につく。天台宗西方山西光院西福寺住職とともに、坂戸市体育協会会長、同顧問、埼玉県立富士見高等学校の創設の時の初代校長、埼玉県立朝霞高等学校校長を歴任。

◎宮崎雅好(中42) 勝呂村出身。坂戸市長。海軍兵学校に進むも二年で終戦。帰郷後青年

団のリーダーとして活躍。入間地方連合青年団長、坂戸町議、収入役等歴任後市長（五期目）となる。埼玉県市長会副会長、同新市懇話会長、入間比企管内市長会代表。JA合併促進会長として、JAいるま野結成に貢献。

◎大塚正見(中43) 勝呂村出身。龍護山大智寺住職。大正大学理事。筑波大学付属坂戸高等学校に勤務するとともに、昭和二十九年から大智寺住職を兼ね、真言宗埼玉第一二区長を経て、元真言宗智山派教学部長。同二十九年アルミ合金主軸による前衛的な本堂建立。

◎松本俊雄(中46) 大家村出身。松本内科学腸科院長。消化器内科の世界的権威。日本消化器学会、日本消化器内視鏡学会評議員、日本遺伝学会等に所属。群馬大学に学び内科学となる。消化器癌の診断に専念、埼玉県胃癌

・大腸癌の検診員。実地臨床に基づいた研究で八〇編以上の論文を内外に発表している。

◎佐藤邦夫(中47) 大家村出身。坂戸市教育委員兼教育委員長職務代理。埼玉大学に学び教職につく。入間教育事務所指導主事ののち校長となる。入間地区中学校長会会長、入間郡中学校体育連盟会長等歴任。現在に至る。

◎大塚寛爾(高2) 勝呂村出身。長久寺住職。川越地区保護司会副会長。大正大学卒業後教職につく。県立狭山工業高校長を最後に定年

退職。昭和四十三年から保護司を兼務。その功績により藍綬褒章受章。

◎小川瑞穂(高2) 勝呂村出身。埼玉大学名誉教授。埼玉県ラグビー協会理事。「下等脊椎動物の適応の生理学と内分泌学」を研究分野とする。カナダ国立自然科学研究会特別研究員として二年間カナダで研究に従事。著書・論文に『腎の生物学』、『排出器官』、『魚類解剖学』の(一つの章)等。県体育功労賞受賞。

◎安川保雄(高2) 坂戸町出身。川越人権擁護委員協議会会長・埼玉県人権擁護委員連合会副会長。中央大学卒業後、家業の安川商事(株)に従事。昭和五十六年三月から人権擁護委員となり、各種研修会講師を務めるなど、委員の質の向上と人権思想の啓蒙に尽力。

◎宇津木輝勝(高6) 入西村出身。日本古武道振興会・日本武道学会会員。東京教育大学卒業後、一刀流宗家笹森順造氏に師事。昭和四十六年本目録。以来、日本武道館等が主催の各種演武会で小野派一刀流組太刀・神夢想林崎流抜刀術等を演武し、その伝承に貢献。

◎武藤脩二(高6) 大家村出身。中央大学文学部教授。同学研究科委員長。東京大学、東京外国語大学兼任講師。日本ヘミンクウエイ協会評議員、事務局長。著書に『アメリカ文

学と祝祭』、『一九二〇年代アメリカ文学』等。翻訳ではタナー『言語の都市』で日本翻訳文化賞受賞。他にモリス『視界』等。

◎渡部徳夫(高6) 入西村出身。タレント(芸名・新山ノリロー)。卒業後芸能界入りし、昭和三十一年漫才師。昭和五十年漫才協団千一夜に次ぎ、真打ち昇進。新山ノリロー・トリローで一世を風靡。

◎高山 孝(高7) 坂戸町出身。医学博士。高山歯科医院院長。埼玉県学校保健会理事、川越高等学校同窓会副会長、坂戸初雁会代表幹事。日本大学に学び歯科医となる。多年学校歯科医として活躍。埼玉県知事表彰受賞。

◎藤野隆司(高7) 大家村出身。東急ターンプイク(株)常務取締役。法政大学卒業後東急電鉄(株)入社。陸上競技部員として全日本陸上競技選手権大会等で活躍。昭和三十六年、八〇〇歳で日本歴代三位の記録、三二〇〇リレーで日本記録樹立。

◎渡辺庸久(高8) 坂戸町出身。毛呂山町教育委員会教育長。埼玉大学に進み教職につく。入間教育事務所指導主事、鶴ヶ島町学校教育課長、入間教育事務所指導課長、同所長、坂戸市立坂戸中学校校長等歴任。現在に至る。

◎高沢敏彦(高11) 坂戸町出身。坂戸市収入役。法政大学卒業後坂戸町役場勤務。教育委

くすの木ものがたり

川越高校の正門を入ってすぐに目にはいるのが巨大な二本のくすの木である。今や川高のシンボルともなったこのくすの木であるが、そのルーツについては諸説入り乱れており、これといった定説もなく、また科学的な検証も行われていないようである。しかし、本校『七十周年記念誌』にはこのことについての記述があるので、抜粋して紹介させていただきます。

昭和期に入ってから本校卒業生なら、異口同音に校門のそばに聳え立つ二株の巨大なくすの木こそは母校のシンボルだと述懐するであろう。ではこのくすの木は、一体どれ位の年数を経たものなのか、伝説めいた本校のくすの木にまつわることがらは、このままそつとして置いた方がよさそうだと考えたが、多少の推理的興味も手伝ってすこし追求してみることにした。

過日、本校にはいりしている植木屋に話してみた。「どんなに少なく見積もっても百五十年から二百年は経っているでしょう」。何のためらうことなく、くだんの職人はくすの木の樹令に対してこう答えたのである。専門の植木職の判断であれば、素人のわれわれにはそのまま信じたいのが人情であらう。

南方の暖地を原産地とするくすの木は、

川越高校のくすの木①

成長が頗る速やかで往々にして天を摩する巨木に達する。従って庭師にしてみれば普段あまり手掛けたことのないこういう木への即断は無理からぬことであらう。

川越小学校正門前、本校とは目と鼻の間にある所に、佐々木賢吉氏未亡人の寓居がある。賢吉翁は昭和四十二年、七十六才を以て他界したが、郭町界隈の草分けともいわれた彼が、生前その夫人に語った話はまことに興味が深いのでその一端を披露する。翁が六・七歳の折、当時入間郡役所に奉職中の知人清水某氏から、くすの木の実数を粒を入手し、その一つを自宅の庭先に播いたがその後幾星霜、今日同氏宅に聳える巨木に成長したのである。道路に面した若干の幹は、川越祭りの山車の通行に邪魔になるといいうので切落とされたが、根本近くの幹の太さも周囲二・六米を超え、本校のそれに較べてさほど遜色のない偉容を誇っている。

更に未亡人は語り続けるのである。殆ど同じ日にその種を一か所は川越中学校々庭に、他の一か所は御岳山（本校南方略五十米の所にある。戦前は無格社、祈禱師伊藤氏の掌る所）境内に播いたので、如上三か所のくすの木は全く同年代のものであるといふ。

員会教育次長、議会議務局長等歴任後、平成八年六月坂戸市収入役に就任、現在に至る。

（鶴ヶ島地区）

鶴ヶ島市は、明治以来村から町へ、町から市へ、近隣と合併することなく、今日の発展をみるに至った。

鶴ヶ島市脚折地区内にある田中省翁頌徳碑（鶴ヶ島出身埼玉県議會議員）に、川越中学校設立の一文がある。「……建議川越中学校設立大論地方教育之振興熱誠動人遂貫主張其有功……」（衆議院議長勲二等栢谷義三撰弁書）。地方教育の振興、人材育成に寄与した田中翁の功績は、鶴ヶ島の誇りであるとともに川越高校としても忘れることができないことである。

鶴ヶ島市は、かつては中学校が一枚であったが、昭和五十年以来、人口急増、現在は、中学校五校になる。川越高校入学者も激増している。

*

◎岸田定治（中10）鶴ヶ島村出身。旧家の長男として家督を相続し農業に従事。海外侵攻の戦時下、昭和十四〜二十年村長就任。村長時代の大きな出来事は昭和十六年の軍用飛行場（現富士見）の完成である。鶴ヶ島の土台

を築く。家庭内外での武勇伝は今も語り継がれる。

◎滝島武治(中19) 鶴ヶ島村出身。広島高等師範卒。東京・各県の旧制中教員、のちに静岡師範に奉職。終戦の翌々年、草創期の筑波大附属坂戸高校長となる。坂戸中学校長で退職。教育課程審議会委員・町教育長・教育委員長歴任。昭和四十八年勲四等瑞宝章受章。

◎岸田 長(中24) 鶴ヶ島村出身。埼玉師範卒。教員生活に入る。小中学校長として奉職。退職後数年間、自適の生活を送る。昭和五十〜五十八年町長として献身、人口急増期を迎え学校増設、新庁舎用地確保、鶴ヶ島高校誘致などに奔走。昭和六十三年勲五等双光旭日章受章。

◎新井 佑(中25) 鶴ヶ島村出身。卒業後陸士に進む。まもなく終戦。農業に従事。昭和二十七年村議。以来公職につく。村・町長歴任。関越道インター誘致・坂戸鶴ヶ島区画整理事業・工場誘致・町制施行実施。自治功勞に対し、数々の叙勲・知事表彰。鶴ヶ島名誉町民となる。

◎小川進一(中26) 鶴ヶ島村出身。旧家の家督を相続。農業に従事。三〇代半ばで終戦混乱期(昭和二十年以後)助役・村長・農協組合長教育委員。人心退廃回復の重責を負う。町

村合併問題・共栄地区開拓が主たる業績。酒豪でも知られ、ハイカラな一面も持ち合わせる。

◎藤縄惇一郎(中37) 鶴ヶ島村出身。卒業後、豊島師範本科二部へ進む。小学校教員となるも、一年後東京・台湾列車防空隊に召集。終戦後復員し、新制中学校教員。教頭、校長として、坂戸中、鶴ヶ島中、飯能中に奉職。鶴ヶ島校長会長。謡曲仕舞をよくする。平成四十年勲五等瑞宝章受章。

◎安斎 実(中41) 比企郡小見野村出身。卒業後、代議士秘書。後に兵役につく。戦後、東洋大学に学ぶ。昭和三十八年坂戸郵便局長。鶴ヶ島特定郵便局長。平成五年退任。市剣友会創設に尽力。二十年の長期にわたる市体育協会長の功勞に対して知事表彰受章。

◎岸田吉之助(中43) 鶴ヶ島村出身。東京農業大学に学ぶ。農業に従事。農地解放下、農業近代化を目的に酪農・養鶏を営む。農業委員会会長・家裁調停委員・小中学校PTA会長・町助役を歴任。町長を志し、半ばにして病に倒れ、五〇歳の若さで没す。

◎吉澤泰而(中47) 鶴ヶ島村出身。埼玉大学教育学部卒。地元中学校に勤務。その間東京大学に学び、所沢市立教育センター所長、県教育局、坂戸市立若宮中学校校長を経て、人口急増期に鶴ヶ島市教育長。鶴ヶ島市バレーホ

ール連盟会長。

◎玉之内淳(高2) 入西村出身。埼玉大学教育学部卒。浦和市立中学校教員、鶴ヶ島市立富士見中学校教頭、同市立西中学校長。入間地区校長会長、県教育機器研究会長として英語教育に尽力。退任後鶴ヶ島市教育長。弓道師範としても活躍。

◎中島良雄(高2) 鶴ヶ島村出身。卒業後、家業の農家を継ぎ、後、日航へ就職。当時から絵を志し、昭和三十三年個展(銀座)開催。以後絵に専念。行動美術等を経て、無所属の郷土の生んだ画家。川越丸広で個展(平成九年、六回目)。鶴ヶ島市文化団体連合会会長としても活躍。

◎岸田 徹(高4) 鶴ヶ島村出身。埼玉大学卒。上福岡第一小学校校長を最後に退職。鶴ヶ島市学校教育課長・県音楽連盟会長など歴任。子どもたちの情操教育を目的に太鼓連を結成、地域起こしの一翼を担い、その功績により「県しらこぼと賞」を受賞する。平成八年勲五等瑞宝章受章。

◎横山和夫(高5) 北海道出身。明治大学卒。川高在学中、陸上長距離ランナーとして活躍。鶴ヶ島村立第二小教員を振り出しに、町立中、近隣地域中学校に奉職。地元鶴ヶ島中学校校長を最後に退職。平成八年市教育長就任。多く

の教え子が各界で活躍。

◎持木昭男(高8) 鶴ヶ島村出身。卒業後、家業の運輸業を継ぐ。鶴ヶ島町議会、市議会議員として四期、その間二回議長に推される。鶴ヶ島中学校PTA会長、城西大学父母後援会長を歴任。また、鶴ヶ島市テニス連盟会長として尽力している。

◎川野 昇(高8) 川越市出身。日本大学医学部卒。義父の病院を継ぐ。以後地域医療に

励む。県・地区医師会の要職につく。平成四年市教育委員長となる。大きな社会問題であるいじめ・校内暴力ほか、教育の難問解決に力を注ぐ。市保健センター・図書館建設に尽力。

◎長峰宏芳(高13) 鶴ヶ島町出身。卒業後、家業の製茶業を継ぐ。緑茶は、農水大臣賞など各種の賞を受賞。埼玉県茶業協会副会長。地域の青少年育成にも尽力。PTA会長・消

防団長を歴任。鶴ヶ島市制施行時、議会議員。平成九年より県議会議員。

◎小川郁男(高18) 鶴ヶ島町出身。日本大学医学部(耳鼻咽喉専攻)卒。医学博士。在学中、山岳部で活躍。一九八七年ドクター隊員として日大北極点遠征隊に参加。さらに、二一次南極観測越冬隊ドクターに選ばれる。老人保健施設・鶴ヶ島ケアホーム理事長として老人医療、介護に力を注ぐ。

毛呂・越生地区

「華美にはならず…」の一節が似合うOBの多い地区。想いは川中よ永遠に。

(毛呂地区)

毛呂山町は、秩父連峰の尾根が幾筋にも分かれて関東平野に流れ込むように入ってゆく境にあり、首都から約六〇〇km圏に位置し、山あいには晩秋の陽に映えた柚子が美しい姿をみせてくれるときもある中山間地帯である。そして、春には桜に囲まれた鎌北湖が人々を誘い、九〇〇年余の歴史をもつ流鏑馬祭やささら踊りなどの伝統芸能が今なお受け継がれ

ている。

斯様な古今かわらぬ自然豊かな風土に培われて、数多くの優秀なOBたちを輩出し、その中には親子三代、あるいは兄弟三人とも川中、川高という方々も少なくない。この中から教育、医療、産業、行政、あるいは文化などで特に地域に根ざした活躍をした方々を紹介するが、何分にも遠い昔からの事柄でもあり、また後継の方がおつてもつまびらかでないところも多いので、看過した点の多さの感

みは尽きないが、その点ご寛容のほどを願う次第である。

*

掘江泰助(中5・中退)。毛呂山町史上欠くことのできない一人で、やむなく川越中学を中退し家業の木材業を継ぎ、村議会議員、ついで県議となり五期連続当選を果たし、県議会議長を務める。またこの間、荒川上江橋改修、越生鉄道敷設、正丸峠の開削、出雲伊波比神社本殿の国宝指定などの功績を残し、

正七位に叙せられ、頌徳の碑の建立を受ける。
内野徳治(中15)。愛知県立一宮中学教諭、

静岡県視学委員を歴任した。その間、旧浜松
二中在職中に作詞した校歌は現浜松西高校校
歌として歌われている。退官後は生地毛呂山
に帰り、農地委員、保護司、選挙管理委員、
教育長、人権擁護委員などに就任するなど、
町に尽した功績は多く、中でも、小・中学校
の防音校舎建設に尽した功績は高く評価され
ている。毛呂山町名誉町民に推戴後、勲五等
に叙せられた。

小峯甚作(中24)。若いころから信望が厚
く、消防団長、収入役、町議会議長など歴任
し、地域の発展に貢献した。また町長に選出
され、豊かな経験と知識を活用しての民主的
な町政で町の進展に大きな功績を残している。
村本達郎(中25)。京都大学文学部を卒業
し、埼玉師範、埼玉大学、埼玉工業大学の教
授を歴任した。著書には『埼玉新誌』『嵐王
記埼玉』『毛呂山町史』などのほか、教材用
地図の製作などの編集責任者として活躍した。
また埼玉県文化財委員、埼玉県自然環境保全
審議会委員も務めた。

秋馬邦夫(中27)。埼玉師範(現埼玉大学)
卒業後、約三十年間にわたり地元の小・中・
青年学校において次代を担う児童生徒の育成

に尽力し、小学校の校長を歴任後、その誠実
温厚な人柄を請われて、町の教育委員長を務
めるなど、地域の教育行政にその名を残した。

栗原 真(中28)。家業正絹仲買業などに
従事したが、毛呂山町議会議員に選出され、
その後役に就任、一九五五(昭和三十)年
の町村合併に際しては、町長のよき補佐役と
して活躍、その卓越した手腕は円満なる合併
を実現させた。合併後は再度助役として奉職
長く地方自治の振興に尽力し、毛呂山町の基を
築いた。また、人権擁護委員、保護司などを
歴任し、地域社会の発展に尽力した。

柴崎武夫(中28)。東京文理科大学(現筑波
大学)を卒業後、中等教育に関わったのち、
日本女子大学の助教授となり、その後教授、
名誉教授を経て群馬県立女子大学教授、名誉
教授として学長を歴任、教育に生涯を捧げた
人である。またその間、NHK基礎英語講座
を担当するなど、英語教育振興に尽力した。

丸木清美(中30)。日本医科大学を卒業後、
戦時体制中は海軍軍医少佐となる。その後、
社会福祉法人毛呂病院を設立し、地域医療お
よび社会福祉事業に身を投じ、各種関係審
議会委員を歴任、県議会議員となり九期その
重責を全うし、その間議長に就任する。その
後埼玉医科大学を創立、理事長となり川越市

に総合医療センターを開設、地域医療に多大
な貢献をした。これらの功績に対しては数々
の表彰褒賞の栄を受け、名誉町民にも推戴さ
れるとともに、勲二等瑞宝章叙勲の栄に浴し、
没後、従四位に叙せられた。

小山喜三(中31)。幹部候補の将校として
従軍、戦後は地域住民の期待をにない町議会
議員として地方自治の振興に貢献した。また
毛呂山町放送農業組合長に就任、有線放送の
発展充実に努めた。その後農業経営基盤の強
化を図るため、三農協の合併を実現し、いち
早く農業の近代化と合理化を図り農業の地位
向上に努め、長期にわたり組合長及び埼玉県
経済農業協同組合連合会理事を歴任した。

斎藤富吉(中31)。選抜校として甲子園出
場(昭十)当時の野球部で活躍し、卒業後一
時東京電力に入社したが、生家の農業を継ぎ、
農業協同組合に就職、退職後教育委員、教育
長として町の教育行政の発展に貢献した。

繁澤和夫(中35)。京都大学卒業後、通商
産業省技官となり、その後滋賀大学助教授を
経て京都大学教授、教養部長、名誉教授とな
る。『陶磁器原料の鉱物組織と特性に関する
研究』『岩石の風化作用、とくに風化過程に
おける鉱物の変化に関する研究』などの著書
がある。

繁澤静夫(中37)。北葛飾郡庄和町在住。東京大学農学部卒。林野庁林産課長退官後、日本合板検査会理事長となり、現在同会の顧問である。

勝俣福志(中41)。東洋大学卒業後、初等教育一筋に努め、校長職を歴任後、坂戸市教育長となる。また坂戸市とアメリカ合衆国ドーサン市との姉妹都市提携にともなう中学校の交換授業を始めるなど、国際交流にも貢献。

内野林郎(中47)。立教大学卒業後、衆議院事務局に入り、委員部、議事部の副部長、特別委員会調査室長、憲政記念館長、記録部長を経て退職。大半を議事の運営にたずさわった。退職後は生地毛呂山町において、農業委員会委員、人権擁護委員、特別職報酬等審議会委員などで、町政に尽力している。

小峰俊三(高2)。富士見市に生まれ、中央大学卒業後埼玉県庁に勤務、縁あって毛呂山町の住人となる。住宅都市部次長、埼玉県企業局長、埼玉県土地収用委員会委員などを務める。退職後、豊富な経験と卓越した行政手腕をかわれ、毛呂山町町長に当選、町民の希望をになって町政に尽力した。

紫藤研一(高4)。在学中は陸上部に属し、団体、インターハイなどに出場、走り幅跳びでは記録保持者でもあった。また早稲田大学

時代は、陸上競技部マネージャーとして、箱根駅伝などに活躍した。卒業後、河野一郎氏の秘書としても活躍、その後は東洋ラジエーター常務、また常勤監査役として勤務した。

島野実郎(高9)。中央大学卒業後埼玉県庁に入り、住宅都市部次長、議会事務局長、環境部長を歴任し、地方自治振興に至情を傾けた。ダイオキシソ対策には日夜尽力し、またさいたま新都心「さいたまスーパースタジアム」の建設には副社長として意欲的に取り組んだ。

初野克彦(高12)。生地毛呂山町に医院を開業し、住民から厚い信頼を寄せられている。予防衛生に専念するため、進んで往診も行ない保健思想の啓蒙に努めている。また学校医として、疾病の予防や保健指導を行い、児童生徒の健康の保持増進を図っているほか、入間地区医師会理事を務め地域の指導的存在である。

堀江快治(高16)。毛呂山町議会議員、体育協会会長、公民館運営審議会会長の要職にあった。町議会議員を五期務め、この間町議会議長も経験し、町を代表する一人である。

(越生地区)

豊かな樹木をたたえた山なみ。その起伏を

たどって流れる越辺川。みどりとせせらぎのまち越生町。

越生地区の先輩OB諸氏の活躍ぶりを、本校百年の歴史を通して概観すれば、戦前から昭和三十年代前半までの人たちは、それこそ「智を耕して徳をせし」いた地域密着型の先輩が多いと言えよう。経済の高度成長期に入った昭和三十年代後半以降の卒業生たちは「雄飛の翼養ひて」積極的に県内外に飛翔し、グローバルな視野をもって、教育、経済、スポーツ、芸術文化をはじめとする各分野で立派な功績を残している。

数多くの逸材を輩出してきた当地区ではあるが、ここでは地域に根ざした活躍をされた忘れ得ぬOBたち、現在も地域にあって、光を放ち続けているOBの方、そして大きく翔んでいる卒業生たちを紹介することとする。

*

越生の行政先駆者として欠かせない人物として深田喜一郎(中10)がいる。戦後公選制になっての二代目町長として、当町行政の基礎を築いた。子息の弘治(高4)は川越市で外科医院開業、誠一(高6)は日本包装資材(株)の経営者として活躍中である。

銘酒「来陽」の醸造元当主、新井正一郎(中37)は、齢七五歳ながら矍鑠として、伝統工

芸酒を世に送り出している。一方シルクロードに想いをはせる詩人でもあり、日本現代詩人会同人として、『羅旬の夢』、『タクラマカン越えるあたり』などの詩集を刊行、酒にロマンの味を加えている。亡父雄亮(中12)は、切憫の友誼亦厚き人で、級友たちが好んで越生に集まったという。新井一族だけでも当地区の「川中物語」は出来る。がその中で、亡弟良輔(中43・如雪会)の存在は、欠かさない。写真家、郷土史家として、奥武蔵をこよなく愛し、町の歴史の発掘に貢献。町民に敬慕される先輩であった。

戦後民主教育の一環として発足した教育委員会の委員は、一九五六(昭和三一)年までは選挙で選ばれていた。越生町の最初の公選委員となり、教育委員長を務めた長谷胎輔(中17・とな会)は、自然を愛した趣味人であり、俳句をよくした。「白きさるすべりありぬ城下町」(句集『黎明』)よりは、懐かしき良き時代の川越を詠んだ句。

地酒、銘酒「魁雪」の佐藤酒造は、越生梅林とともに名を知られている。二代目重吉・旧名義三(中20)は、晩年茶道、短歌をよくした文芸の人でもあった。昭和初期、醸造学を大阪高等工業学校、後、北海道大学農学部に学んだ。独特の酒の風味は、越生梅林に今

も漂う。重吉の著『十宜庵雑記』には、一九一三(大正二)年当時の川越中学の思い出が描かれている。越生から川越までの交通事情当時の先生、学友、寄宿舎の話など、往時を彷彿させる貴重な記録である。三代目重吉・旧名弥彦(中47)は、酒造りはもちろん町の教育行政でも活躍した。

「医療」の分野で活躍した先輩として、市川佑治(中26)がいる。昭和三十年代の物不足の時代、住民の健康保持に果たした役割は大きい。現在は子息正之(高18)が継承し、地域医療に貢献している。

越生町は、町制を敷いた順序でいくと県下で二番目の古い町である。戦前の絹織物隆盛の時代を偲ぶよすがもないが、町の商工業者は、それなりに頑張っている。そのリーダートとなっているのが町田至朗(中46)である。しにせ呉服店を隆盛に導くとともに、町の教育行政でも貢献している。弟晋作(高6)は岡三証券の役員。ビッグバンを迎えつつ証券界で奮闘、次の弟彰佑(高12)は航空業界(日航)で活躍中である。

教育、スポーツの分野で貢献した、または活躍中のOBたちに目を向けてみたい。まず教育功労者として一九九一(平成三)年藍綬褒章の栄に浴した新井清次郎(中34)

がいる。教職退任後、長年町の教育行政を担当、同時に浦和家裁調停委員、裁判所司法委員などの公職を歴任、現在も、町の高齢者生涯学習における指導的立場にある。

『新さきたま紀行』『埼玉の地学ガイド』等の執筆でおなじみの酒本忠雄(高6)は、若いころより、植物分類や地質調査に興味を示し、県教育センター指導主事、校長時代にも地道な研究に怠りなかった。現在町公民館長として、植物、地質等の現地研修会の先頭に立ち、地域住民の啓蒙にいそしんでいる。

石井正雄(高7)は長い間公教育に尽力、豊岡高校長を経て、山村女子高等学校の副校長として、私学教育の振興に力を発揮した。母校ソフトテニス部顧問として田中啓彦(高4)とともに熱心に指導した。

また教育界若手の旗手として、吉澤勇(高11)、吉沢優(高19)がいる。

吉澤勇は、現在川越南高校長、高野連副会長の要職をこなしている。昔とった杵柄で飯能市ソフトテニス連盟の会長として地域体育向上に貢献している。吉沢優は県教育改革室主幹を経て、現在日高高校長として、本県教育行政の変革期を担当する重鎮として期待されている。

さらに武蔵越生高等学校長、一川学園理事

長として活躍している一川高一(高15)をあげねばならない。建学の精神を地域社会の信頼に^{こた}応える全人的視野に立つ教育を重んじ、実戦力のある技術者の養成に置くという。生徒数一四〇〇名、恵まれた敷地と施設の中で、多くの若者が育つていくであろう。

スポーツ界には、昭和三十年代の私たちの熱き血潮を燃え立たせてくれた川高野球部甲子園出場者の一人、高野栄作(高12)がいる。名キャッチャーとしていまだ私達の脳裏を離

れない。その後ザーセル機器(株)に入社

軟式野球で活躍、地域にあつては少年野球指導者として町のスポーツ振興に活躍している。

最後に出版、マスコミ、芸術などの分野を俯瞰する。最近の映画界の話題をさらった

「シャル・ウィー・ダンス」の製作を手がけた加藤博之(高5)がいる。徳間書店に入社

「週刊アサヒ芸能」の編集長などを歴任、昭和四十年代の世相を鋭くえぐった。現在

(株)大映専務取締役として活躍中。

内田勝(高6)は講談社に入社、「少年マガ

ジン」の編集長として、一九七〇年代の学園闘争時代に手腕を発揮し、現在の漫画ブームの仕掛人の一人でもあった。

越生地区の逸材はこの稿に載らなかった方たちの中にむしろ多いとも言えるが、紙面の都合で割愛せざるを得なかった。川中、川高に寄せる思いは、皆同じ。入間の水同様、^お越辺の水の末長からんことを祈る。

飯能・日高地区

緑と清流の町飯能、高句麗文化が息吹く日高地区が輩出したOBたち。

(飯能地区)

「緑と清流のまち」を称する飯能市は、一九五四(昭和二九)年に市制を施行した。上流の名栗村に続く入間川(名栗川)の谷口集落を起源とする旧市街と平野部に、高麗川上流の吾野^{あがの}地域と青梅市に境を接する南高麗地区をあわせた広い市域を有する。

江戸期から物資の集散地として人口の集中

や商工業の成長があつたことから、教育に対する意識は高く、旧制中学時代から多数が母校を巣立ち、各界で活躍しさまざまな足跡を残している。その中から紹介する約五〇名を選ぶのは容易ではなかったが、各分野にわけて概観していくこととする。

「スポーツ、文学、学術、文化」

戦後の高度成長と国際化の進展の中、日本では東京、札幌、長野でオリンピックが開催

された。自国での開催のみならず、毎回日本選手の活躍は大きく報じられるところであるが、飯能地区出身の本校卒業生からもオリンピック選手が誕生している。

齋藤博(高4)は旧制中学に入学、二年次からバスケットボール部に所属した。立教大学三年の時から全日本のメンバーに選ばれ、数多くの国際試合に出場した。なかでもメルボルン(一九五六年、オーストラリア)、ロー

マ(一九六〇年、イタリア)のオリンピックに日本の中心選手として出場、活躍した。東京大会(一九六四年)でもコーチとして後進の指導にあたっている。現在、日本マリン(株)顧問。

若山牧水や三島由紀夫の作品の舞台となり、打木村治(中20・本名保)が晩年を過ごした飯能は、文学的な香りに満ちた土地柄であり、本業のかたわら趣味や習い事のレベルをはるかに越えた文学的業績を残している卒業生も多い。

なかでも赤田健一(中48)は在学中から石川信夫(中24・入間市出身)に師事し、短歌会「宇宙風」の創立に参画、編集同人として活躍した。一九七八昭和五三年には歌集『榛野』で埼玉文芸賞を受賞した。大戦末期の勤労動員がもとで病を得た体験から、戦争にこだわり、故郷飯能にもこだわって、『ぼくの軍国少年期』や『ふるさと写真集・飯能』なども出版した。また、飯能西中、原市場小の校歌も作詞したが、作曲は後に川越高校第二四代校長となった飯島武司氏であった。一九九八(平成一〇)年四月に急逝したのは惜しまれる。

学術研究の面でも、大学に残って専門分野を究め、活躍する人々が多い。

鈴木修次(中39)は、東京高等師範学校から東京文理科大学漢文科を卒業し、一九八九(平成元)年他界するまで各地の大学で教鞭をとった。母校である東京教育大学(現筑波大学)助教を長らく務めた後、筑波移転論争後広島大学総合科学部教授に転じ、同大学院(地域研究科、文学研究科、社会科学研究科)も担当した。停年後は大阪教育大学文学部教授、広島県立大学教授を歴任している。本稿執筆に際し、ご遺族より「鈴木修次業績目録」が寄贈された。

大浦一郎(高4)は海外に研究を広げて活躍している。青山学院大学院で財政学を修め、オーストラリア、ニュージーランドを中心に研究を深めた。『オーストラリア財政論』等著書も多い。日本財政学会理事、大洋州経済学会幹事。明星大学助教を経て、一九七五(昭和五〇)年から明治学院大学経済学部教授。

隔世の感もある急速かつ広範囲な発達をとげた放送文化の世界でも活躍する者がいる。

石井洋一(高12)は静岡大学工学部卒業後、NHK(日本放送協会)に入局、電子工学の専門分野を生かして技術畑を歩んだ。現在受信技術センター部長。二一世紀に向けて放送のデジタル化や衛生放送、ハイビジョン放送

の受信普及等を大きなテーマとしている。地域の文化的伝統や人々の心を支えてきた寺社にも卒業生は多い。

萩野昌巳(中27)は鳩山の出身で早稲田大学卒。天覧山の麓にある室町中期からの名刹武陽山能仁寺(曹洞宗)の住職を一九九〇(平成二)年まで務め、翌年他界した。住職のかわら飯能市議会議員としても活躍し、議長も務めたほか、飯能市観光協会会長、飯能製作所社長等として地域の観光や産業の振興にも貢献した。

大野邦弘(高17)は「竹寺」で親しまれる天台宗の古刹、神仏混交の残る医王山(天王山)薬王寺(薬寿院)の副住職。精進料理と俳句で人気の寺を書家としての腕も合わせて支えている。書を中心とした文化交流を中国に拡大し、文化講演会等でも活躍している。

【政治・経済】

労働運動の統合や再編が行われ、長びく平成の不況の中であらためて労働組合のあり方が問われているが、労働界の中枢にも飯能出身の卒業生が活躍している。

笹森清(高11)は、一九九七(平成九)年十月、日本労働組合総連合会(連合)の三代目事務局長に就任した。明治大学卒業後東京電力に入社。一九七二(昭和四七)年から労働

運動に入り、東京電力労働組合本部執行委員長、全民労働事務局、電力総連会長を歴任し、現職に推された。高校時代は庭球(現ソフトテニス)部に所属し、関東大会に出場した。労働省をはじめ、建設省、大蔵省等の各種審議会、調査会にも労働側の委員として加わり活躍している。

政治の分野では地方自治を中心に多数の卒業生が活躍し、全容を網羅しきれないほどである。また、兼職においても多様な業績がある人々でもあるので、紹介分野を異にした例もあることをあらかじめおことわりしておく。

市川宗貞(中27)は、南高麗地区の林業経営から村、町と発展する飯能の役場で収入役助役等を歴任し、町議会議員から県議会議員に当選、県議会議長も務めた。一九六九(昭和四四)年、飯能市長に当選。五期二十年にわたり飯能市の発展に尽力した。林業関係で農林大臣表彰、藍綬褒章、紺綬褒章、勲二等有功章等多数の受章がある。戦前の一時期組織されていた飯能初雁会の復興に努力し、現在も会長の重職にあつて母校出身者の地区内での連携、親睦の中心的存在である。

小山誠三(中47)は市川宗貞前市長の後任として一九八九(平成元)年に当選、現在市長二期目で活躍中である。農業とガソリンス

タンドの経営から市議会議員を二期務めた後現職。戦争末期の入学時のゲートルを巻いての通学等の思い出を語る時もある。

浅見忠重(中27)は、吾野地区からの市議会議員として活躍、副議長を務めた。その後飯能連合会長、都市計画委員長などの要職にもつき、勲五等瑞宝章を授与されている。

町田成夫(中44)は現在市議会議員二期目。飯能市役所企画財政部長を務めた後現職。母校から法政大学へ進み、一貫して陸上競技部(短距離)で活躍し、主将を務めた。市役所勤務のかたわら地元陸上競技協会の役員として尽力。一九六七(昭和四二)年の埼玉国体では飯能市がホッケー会場となり、国体課長として大会を成功に導いた。以来ホッケーとの縁が深まり、現在市ホッケー協会理事、県ホッケー協会理事長を務める。

吉田稻美(高2)も吾野出身。東京学芸大学卒業後、学校法人竹早学園理事長、国士館大学、東京家政大学の講師等を兼務しながら市議会議員として活躍している。また、神社庁氏子総代会入間郡市会長も務めている。

木村良次(高10)も市議会議員を務める。早稲田大学卒業後、大日本印刷系列に勤務し、米国講談社サンフランシスコ支店開店に業績をあげた。現在は飯能市シルバー人材センタ

ー理事も務め、高齢化社会に向かう地域に奉仕する団体育成を行っている。

新井景三(高14・旧姓大野)も市議会議員。立教大学を経て、飯能市の中心部にある米穀商の老舗中清商店の後継者となった。高校時代は剣道部で活躍し、若手を中心とする市内卒業生の中心の一人ともなっている。

村里泰由(高21)も市議会議員を務める。東海大学を卒業し、建築士として事務所と建設会社を経営するかたわら、「自然環境という豊かな素材を持つ飯能のまちづくり」をめざして市政に取り組んでいる。

【産業】

平野部と山間部の接点に位置する飯能は、江戸期から種々の産業が発展し、卒業生にもその流れをくむ経営者が数多い。

「西川材」と呼ばれる良質の杉を産する飯能の林業は、今新たに見直されつつある。

本橋九蔵(中20)は、早稲田大学卒業後、大字南の生家一帯の林業振興に尽力した。

大野勝男(中47)も林業一筋で現在も森林組合理事を務める。明治大学卒。消防団、自治会連合会、市体育協会、農業協同組合等の要職につき、ロータリークラブ会長や公民館長なども務めた。

本橋武久(高8)は前出九蔵の後継者。早

稲田大学卒。田中製材所代表取締役として木材業の発展に尽力した。西川木材業組合副会長。木材市場や森林組合連合会の役員である。

細田栄蔵(中9・中退)は江戸期から昭和三十年代まで地域の中心産業のひとつであった養蚕業をもとに織物業を創業した。後に毛織物業に転じ、織物組合長や関東羊毛事業協同組合理事長、飯能商工会議所会頭などを務めた。飯能町長から埼玉県議会議員を経て、一九四九(昭和二四)年衆議院議員に当選。紺綬褒賞、従五位勲四等を授与されている。

地場産業の織物業を背景とする呉服の老舗に吉田屋がある。吉田富雄(中37)は、飯能商工会議所副会頭や市議会議員を務めながら、大通り商店街の発展や大型店対策、市民福祉向上などに尽力した。

大沢正敏(中38)は母校東京工業大学で教鞭をとり、大沢工業を設立して所沢織物商工協同組合理事長としても活躍した。また、市議会議員、議長も務め、土地区画整理などにも尽力している。

前出の新井景三の養父が新井清平(中27)で、中央大学卒業後、中清商店を経営、一九八四(昭和五九)年勲五等瑞宝章を受章している。

増島良平(中32)は野球部で活躍。その後

の人生も野球との縁が深い。早稲田大学卒業後野球用具の製作販売を手がけ、学生野球会館の創設に尽力した。後に明治神宮外苑に勤務、総務部長、神宮球場長などを歴任した。

増島の野球部の後輩である中里光男(中39)は、明治大学卒業後、米軍基地の人事管理をはじめ、管理、人事の研修コンサルタントとして活躍した。後に市教育委員、教育委員長を多年にわたって務め、ライオンズクラブでも活躍。研修のプロとして手腕を振るった。

中里と同様に経営面でのコンサルタントとして活躍し、市教育委員長を務めたのは、加藤真三(中47)である。東京教育大学(現筑波大学)卒業後、埼玉銀行(現あさひ銀行)で活躍。退職後経営管理事務所を設立し、各地の商工会議所や銀行等へのコンサルタントを行っている。

清水邦男(高11)は、中央大学卒業後インテリア(室内装飾)業を手がけるかたわら、市議会議員としても活躍している。

市野彰俊(高17)は法政大学卒。一級建築士として建築事務所を経営するかたわら、中央工学校で建築設計の教鞭をとっている。また、空手六段まで昇進し、地元の少年の指導に心をくだき、市スポーツ少年団本部長、市

空手連盟師範・理事長として活躍している。さらに全日本空手道連盟審判長、母校法政大学工学部空手部監督も務めている。

【地域医療】

飯能地区から川越へ進学する者は旧制中学時代から現在に至るまで、各学校、各クラスの中で優良な学習成績と意欲を共に備える少数の生徒たちであった。したがって難関である医学への道を志す者も多く、市内の開業医、病院経営者にも多数の卒業生が活躍し、地域の医療に貢献している。

土屋正(中32)は東京慈恵会医科大学卒。内科医院を原市場で開業し、一九九七(平成九年)に他界するまで人口が急増する地区の医療に活躍した。

堀江庫次(中35)は昭和医学専門学校(現昭和大学)卒業後、毛呂山から飯能に移り、耳鼻咽喉科を開業した。飯能市医師会副会長を務めるとともに、市内の公立学校の学校医として定期健康診断をはじめ、医療相談等にも貢献した。

石井晃(中36)は日本医科大学を卒業後、飯能、日高両市にある複数の病院を経営する医療法人積仁会理事長として、一九九八(平成一〇)年一月に他界するまで地域医療の中心で活躍した。旭ヶ丘病院、富士見ヶ丘診療

川越高校のくすの木の樹齢については諸説あるようだが、『七十周年記念誌』からの引用を続けよう。前のコラムでは佐々木賢吉氏未亡人の話を紹介させていたのだが、今回はその話を裏付けるべく資料探しに出かけた話である。

未亡人はいかにも自信ありげな口調で語ってくれたが、賢吉翁の直話でないので、更に出かけた話を裏付ける資料を拾うべくすぐ足を御岳山に運んだ。

御岳山境内にある伊藤家は、当主が数年前に物故されたので、ここでもくすの木の話をして呉れたのはその未亡人であった。この伊藤家は本校の生んだ逸材、前川越市長伊藤泰吉氏（第十七回卒）の生家で、同氏が幼年時代実生のくすの木数株を鉢に栽植し、そのうち一本を自宅の庭（御岳山境内）に、二株を川越中学校庭に、又一本を前記佐々木氏宅の庭に移植したが、何れも見上げる巨木に成長したのである。

伊藤家で聞かされた話は、佐々木家のそれと較べると年代的には多少ズレているので、更に泰吉氏未亡人宅を訪れたが、くすの木に関する話は主人（泰吉氏）から一度も聞いたことがなかったとのことである。なお本校最寄りの古老数氏に尋ねたが、キメテになる話は得られなかった。こうな

川越高校のくすの木②

ると佐々木賢吉氏未亡人の話は大方間違いない所であろうか。だとすれば本校のくすの木の樹令は、百年はおろか七十年そこそこで、奇しくも本校創立の年代とほぼ同じにあたる。同時期に植えた樹木も環境の相違や、地下水の多少でその成長に格差を生ずるのは已むを得ない。本校のくすの木が前記三か所のなかで最も優勢で本校のシンボルにふさわしい偉観を呈している。

昭和四十二年夏、本校の沿革を語る座談会がもたれた。出席者は明治期の卒業生二十名ほどの集会であったが、談たまたまくすの木に及んだところ、席の一人が両手の指で弧を描き、その幹の太さが、ありふれた丸太程のものであったことを示し、勿論それが母校のシンボルなどとは思っても寄らなかったと述懐した。開校後間もない当時の校舎を取巻く木立の写真を見てもそれが裏書きされていよう。

『七十周年記念誌』では、このように結論づけているが、果たして本校のくすの木の樹齢は何年であろうか。この説が正しければちよほど百年ということになる。そろそろ科学的調査を考えてもいいのではないか。



所、飯能中央病院等の経営のほか、医師会会長、飯能看護専門学校校長として、医師のまとめ役、看護婦の育成等幅広い貢献をした。一九九三（平成五）年には勲四等瑞宝章を授与されている。

石井泰彦（中38）も日本医科大学卒。市内初の救急総合病院として飯能中央病院を設立した。院長として活躍するかたわら、県議会議員、飯能ライオンズクラブ会長、市相撲連盟会長等も務めたが早逝した。なお、後を継いだ夫人の石井道子氏は、現参議院議員、元環境庁長官。

小川文雄（中19）は東京慈恵会医科大学を卒業し、耳鼻咽喉科を開業し、地域医療に貢献した。

藤原裕哉（中43）は日本大学専門部歯科を卒業。歯科医院を開業するかたわら、幼稚園経営も行なっている。三年次から野球部に入部、野球用語が敵性語使用禁止で珍妙な日本語に変えさせられた時代を思い出として持っている。

関谷昭（中44）も歯科医。東京医科歯科大学を卒業。飯能初雁会副会長を務めるとともに、戦時中（昭和十六年～二十年）入学の飯能地区卒業生の会「ゲートル会」（命名は松田蘭風先生）の会長にもなっている。

石井道夫(高8)は東京慈恵会医科大学卒。勤務医を経て石井外科胃腸科医院を開業した。高校二年までバスケットボール部に所属した。緑で、飯能バスケット連盟会長を務める。高校三年で写真部を創部。写真は今も趣味として続けている。埼玉医科大学監事。

神田邦武(中23)は薬剤師として昭和薬局を経営するかたわら、飯能高校、第一小学校を校長、入間地区学校保健会副会長などを歴任した。千葉医科大学薬学専攻部卒。一九九三(平成五)年に他界し、勲六等単光旭日章を受章した。

〔教育〕

医師と同様、地域社会の教育にたずさわる卒業生も数多く輩出している。

澤田克郎(中40)は埼玉師範学校(現埼玉大学)卒。社会科教員として、また後半は管理職として、加治中学校長、入間地区中学校長、会長などを務めた。郷土文芸にも造詣が深く、打木村治(中20)の文学碑建立や加治中の校歌の作詞をはじめ、文化新聞(飯能市内の地域紙)歌壇選者、「文芸はんのう」「高麗峠」同人、飯能市文化協会会長と幅広く活躍している。

戦時線上げ卒業で澤田と同期で進学先も同

飯能からの通学方法(昭和十年代)

澤田克郎(中40)

飯能から川越への通学方法は(一)川越バス(二)電車A西武線、B川越線(三)自転車(四)下宿の四通りだった。そのうち利用者の多かったのはバスだった。現在の丸広の北詰に車庫があり、高麗、高麗川、高萩、霞ヶ関の客を拾い、川越久保町駅(現東京電力南側)まで運んだ。学校へは徒歩五分、一番便利だった。運賃は半年定期で二〇円だったかな。次が西武線稲荷山で降り、入間川駅迄三キロ程歩き、西武新宿線に乗り換え本川越へ。学校まで徒歩十五分。もう一つの電車川越線は私が五年生の後半開通した。八高線を高麗川で乗り換え川越駅へ。学校迄は三十分歩く。距離は一番遠かった。運賃はどれも大同小異だったろう。Yさんは五

年間自転車だった。下宿は名栗、原市場、吾野の面々、自宅から飯能への足が不便だったことに起因する(寮の建物はあったが、下が柔道場と兵器庫、上が各部室になっていた)下宿者は親戚等縁故をたよったようだ。通学方法はどれがよかったか人それぞれだが、バスは朝夕学生専用車を出してくれたが、上級生の受験勉強の邪魔にならないよう私語は禁物、きゅくつだった。お陰で私は詩歌集など説めた。そういう意味でのんびり通えたのは稲荷山を歩いた通学だったろう。同級生毎に三々五々ダベリながらあるけたから、なお西武線利用者には所沢廻りというコースも勿論あったが、部活動関係者や金持ち用だったかな。いずれ戦時下男女席を同じうせずなんて色気だかうるおいなんでさらさらなかった。白線帽のおかげで沿道の方々に大事にされたことを付記する。

じ滝沢充も飯能一中校長等を務め、一九八四(昭和五九)年度埼玉県教育功労賞を受賞している。陸上競技部に所属した経験を生かし、

市体育協会長も務めたが、一九九四(平成六)年に急逝し、勲五等瑞宝章、飯能市体育特別功労賞が贈られた。

村野守男(中41)も埼玉師範学校卒。国語科で県教育センターや入間教育事務所の指導主事を務めた。飯能西中学校長、市教育センター所長の要職を歴任するかたわら、公民館

の文学講座の講師を担当するなど幅広く活躍した。

東京まで一時間弱の地の利から、東京の教育界で活躍する者も多い。入子祐三(中43)は東京第三師範学校卒。東京学芸大学附属大泉小学校で算数教育を中心に活躍し、同校副校長から練馬区立石神井東小、開進第三小の校長を歴任した。関東甲信越地区小学校長協会会長、都算数教育研究会会長等も務め、一九八七(昭和六二)年度文部大臣教育功労者表彰

を受けた。停年後は相模女子大学小学部長を十年間務めている。

本橋藤治(高2)は國學院大学卒業後、一貫して豊島岡女子学園で国語教育にたずさわり、同校の理事、教頭的要職にあつた。一九九五(平成七)年には東京都学校教育功労表彰を受けている。

〔名栗村出身の卒業生〕

名栗川(入間川上流部の別称)の源流部の地域である。林業を中心とした山里からも遠く川越まで俊才が送られる。故郷に戻り地域の発展に寄与する者も多い。

柏木真八(中11)は村内初の川中入学者と考えられている。名栗村村長を務め、後年県議会議員にも当選し、地域の振興に寄与した。加藤國衛(中43)は郵政関係で村に多大な貢献をしている。卒業後一貫して村の郵便局を守り、一九五四(昭和二九)年以後、名栗郵便局長として、一九九〇(平成二二)年他界するまで活躍した。埼玉県西南特定郵便局長業務推進連絡会長、名栗村教育委員長も務めている。

柏木直(中36)は旧制松本高校から京都大学卒業。旧制松本高校時代のエピソードとして、一九三九(昭和一四)年、松本高校思誠

寮(後に作家北杜夫も入寮)の寮歌の作曲をした記録が残っている。「東、雪の筑摩野に西、憧憬の空遠み」で始まる三番までの歌詞の作詞は宋範儀氏とある。卒業生の多才ぶりを示すものと言えよう。

(日高地区)

古代高句麗文化が息吹き、清流高麗川が貫流する日高市は、一九五五(昭和三十〇)年に、旧高麗村と旧高麗川村が合併して日高町をつくり、翌年に旧高萩村もこれに加わり、さらに一九九一(平成三三)年に市制を施行して今日に至っている。市の東部は川越市と隣接し、古くから川越中学、川越高校への進学を希望するものが多く、これまでに数多くの卒業生が巣立っている。

ここでは、その卒業生の中から、顕著な活躍をしてきた人たち、および顕著な活動を現に続けている卒業生たちを、その活動の分野別に分けて紹介していきたい。

〔行政〕

この分野ではまず、日高市の前市長、駒野昇(中37)を取り上げたい。陸軍士官学校卒業、陸軍大尉の駒野昇は、復員して家事の農業に従事しながら、農業委員、町議会議員などを経て、一九七九(昭和五四)年に日高町長に

当選。以来、日高町長三期十二年、さらに続いて、日高市長としての二期目の当選も果たし、一九九九(平成一一)年四月、引退した。日高初雁会の会長でもある。

ここで、年代をさかのぼって過去の首長に目を向けると、旧高萩村では、奇しくも三人の卒業生が、連続して村長の要職についている。まず、村田鍊蔵(中5)が一九三三(昭和八)年から二期八年、そのあとを松本兵七(中6)が継いで一期四年、さらにそのあとの村長職を関儀市(中17)が継いでいる。村田鍊蔵と松本兵七は、ともに村長職の前に助役を経験し、松本兵七と関儀市は、ともに教職を長く経験したあとの行政職就任である。

一方、旧高麗村では、新井清治(中10)が、村議会議員などを長く経験したあと、一九三八(昭和一三)年から、村長の要職を一期務めている。

また、旧高麗川村では、武藤市郎(中20)が、助役を経て、一九四二(昭和一七)年から一期四年、村長の重責を果たしている。

武藤市郎は村長のあと、日高町議会議員も二期務めている。

さて、首長に続いて、その補佐役であるが、まず、大川戸清(定4)を取り上げたい。

町議会議員を長く務め、町議会議長の重責

も果たしたあと、日高町助役に就任、二期八年、駒野町政を補佐した。

また、橋本昭一(中43)は、日高市収入役のあと、日高市助役となり、一期四年、市政を補佐している。

さらに、中川博(高9)も、都市整備部長、総務部長などを経て、現在、日高市収入役として市長を補佐している。

一方、同じ行政でも、中央省庁や県行政に目を向けると、本市の卒業生たちの個性的な活躍が目にとまる。まず、北野茂夫(中39)は、東京大学を卒業して農林省に入り、農水省総務官を務めて退職。現在は農業技術協会の副会長などを務めている。

北野茂夫と同期の神田恒(中39)も、農林省に勤務し、全国の営林署、営林局を回って活躍、退職後は無農薬栽培の農業に取り組んでいる。

また、北野、神田と同期の清水義一(中39)は、中央省庁から県庁に移り、埼玉県民部長などの要職を歴任、退職後も埼玉県在宅サービス公社理事長などに就任している。

清水義一より一期あとの高篠平太郎(中40)は、東京大学を卒業したあと、ジェットロ(日本貿易振興会)に勤め、海外数十か国で活躍した。現在は新潟経営大学の講師を務め

ている。

さらに、高篠より一期あとの加藤英明(中41)は、埼玉県労働部参事などの要職を歴任して県職員を退職したが、退職後、日高市公平委員会委員長などの要職についている。

「行政」の最後に北野嘉重(中5)をあげておきたい。埼玉師範学校(現埼玉大学)を卒業したあと台湾に渡り、長く教職を経験したあと、現地の市立図書館長、市長などに任命され、台湾で他界している。

【教育】

この分野ではまず、小久保清治(中6)を取り上げたい。東北大学を卒業、そのまま東北大学に残り、淡水産のフランクトン研究に専心、理学博士となり、世界的な権威となった。東北大学教授を退職後は、埼玉大学講師などを務めた。

一方、公民館を通じ、地域の教育活動に専心した犬竹喜男(中19)は、高萩公民館を中心として、戦後の先駆的公民館活動を展開し、文部大臣表彰を受けている。日高町教育委員長としても活躍した。

公民館活動といえば、吉野武雄(中29)も、小学校長を最後に、長い教職生活を終えたあと、高萩公民館長に就任し、優れた実績を残した。書道の分野でも活躍している。

吉野武雄の二期あとの中島照光(中31)は、地元の高麗中学校長を最後に教職を退いたが、そのあと日高町教育長に就任し、二期目のはじめに他界した。理科教育、水泳指導などでも、個性的で顕著な実績を残している。

中島照光と高麗中学校で一緒に勤務したところのある平井輝夫(中37)も、地元の高麗川中学校長を最後に教職を退いたあと、日高町体育協会会長、さらに引き続き、日高市体育協会会長の要職に就任し、社会体育面で活躍中である。日高初雁会でも、副会長として、中心的役割を果たしている。

また、平井輝夫のあとを継いで、高麗川中学校長に就任した栗田良助(中45)は、教職を退いたあと、若い時からの趣味である文芸活動が実って、埼玉文芸賞(小説部門)と埼玉文化ともしび賞を受賞した。

さて、旧制中学から高校へ移って、駒井恒次(高2)は、鶴ヶ島高校長、県教育局主席管理主事、そして松山女子高校長を歴任したが、在職中の一九九一(平成三年)に他界した。文部大臣賞を受賞。

駒井恒次より一期あとの東敏雄(高3)は、東北大学を卒業して茨城大学に入り、現在、茨城大学人文学部教授である。大学の附属図書館長、人文学部長にもついている。

一方、前記の犬竹喜男の子息でもある犬竹郷美(高6)は、武蔵中学校長、高麗川小学校長などを歴任したあと、日高市教育長に就任し、現在に至っている。日高市俳句連盟会長でもある。

教育長といえば、鈴木秀昭(高7)も、所沢市の教育長を務めている。入間教育事務所長、県立養護教諭養成所長などを歴任したあと、教育長に任命され、今日に至っている。

また、水村博美(高8)は川越市立第一小学校校長、入間地区小学校校長などを歴任して教職を退き、日高市教育委員会などで社会教育指導委員、さらに市内の公民館長として活躍している。

水村博美と同期の山田勝雄(高8)は南高麗中学校長を最後に定年を迎えたが、そのあと日高市教育委員として活躍中である。

また、この分野には、三人目の母校OB校長となった大沢幸夫(高9)がいる。新座総合高校長、県高等学校教育課長などを経て、母校の川越高等学校長に就任。一九九九年三月定年退職後、私立山村女子高校校長として活躍している。

兼田(旧姓松岡)隆弘(高14)は川高在学中から化学に強い関心を寄せ、大阪大学大学院で化学を専攻。現在、大阪大学産業科学研究

究所の助教を務める。尺八(とくに虚無僧尺八)が趣味という。

【経済】

この分野ではまず、原田愛助(中20)を取り上げたい。東京商科大学(現一橋大学)を卒業したあと、埼玉銀行に入行し、埼玉銀行取締役を務めている。趣味の川柳づくりでも活躍した。

地酒「君が旗」の長沢酒造社長だった長沢泉一郎(中27)は、銘酒づくりに精進するとともに、裁判所の調停委員としても大いに活躍した。勲五等瑞宝章受章。

長沢泉一郎が他界したあと、そのあとを継いだのが、子息の長沢稔(高7)である。酒づくりはもちろん、日高市教育委員などの要職につき、多方面で活躍した。

市内の大清(金物・建材)店主であった大森慶次郎(中33)は、商店経営のかたわら、一九五九(昭和三四)年から町議会議員を二期務め、その間、副議長にも選ばれている。

一方、県下の酪農団体組織の一本化に奔走したという水村義夫(中42)は、埼玉県経済農業協同組合の酪農課長などの要職を務め、県下の酪農事業の振興に尽力した。

さて、旧制中学47回には、同期生四人の個性的な顔ぶれがそろっている。まず、あさひ

銀行頭取を務めた吉野重彦は、東京大学を卒業して埼玉銀行に入り、一九九〇(平成二二)年から六年間、合併後のあさひ銀行頭取として活躍した。現在はあさひ銀行特別顧問である。

二人目は、現日高市長の関真である。高萩村および日高町の農協専務や組合長を務めたあと、市議会議員に当選し、一九九二(平成四)年、市議会議長に選ばれ、さらに一九九九(平成一一)年、日高市長に当選した。

同期の三人目は、ムサシ建材工業社長の新井俊康である。社業に尽くすかたわら、民生委員などを務め、一九九六(平成八)年から市議会議員として活躍中である。

同期のもう一人は、日高農協組合長を務めた北野利夫である。一九九三(平成五)年から三年間、組合長の重責を果たし、現在、いるま野農協の理事を務めている。

ここで、旧制中学から高校へ移り、最初に取り上げたいのは、高校4回の弓削多光一である。弓削多商事を経営するかたわら、一九七九(昭和五四)年から日高町議会議員となり、通算五期務め、市議会議長としても活躍した。

一方、清水忠男(高9)は、(株)清水コンクリート社長として、社業はもちろん日高市の商工業発展に大きく貢献、現在日高市商工

会長を務めている。

清水忠男より二期あとの後藤隆治郎(高11)も、(株)河内屋商店の代表取締役として、社業をはじめ、多方面にわたって活躍している。日高ロータリークラブの会長を務め、現在は日高市国際交流協会会長。

さて、高校二三次には、注目すべき一人の卒業生がいる。一人は、ヤオコーの専務取締役、犬竹一浩である。三共製菓からヤオコーに移って、ヤオコーの発展に尽力、現在はフレッシュ・ヤオコーの社長でもある。

もう一人は、市内で牧場を経営している加藤忠司である。フリーストール方式の酪農が全国的に注目を浴びている。

「経済」の最後に、市内のサイボク・ハムで専務を務めている笹崎能輝(高18)を紹介したい。サイボク・ハムの営業部長などを務め、

食品開発に顕著な実績をあげ、現在も活躍中である。

【医療】

この分野ではまず、比留間高次郎(中4)を取り上げたい。千葉大学を卒業したあと、比留間病院を開業、地域の医療に務めるとともに、県議会議員に当選、県議会副議長にも選ばれている。

また、比留間高次郎の子息(養子)である比留間清治郎(中31)は、東京大学を卒業し、東京医科歯科大学の助教授などを歴任したあと、比留間病院を継ぎ、日高町の教育委員長などの要職も務めた。

一方、市内で開業し、市内小中学校の学校医などを長く務めている横田香苗(中41)は、地区医師会の役員としても活躍し、地域保健の向上に顕著な実績を残している。

さて、この分野の最後に、関口英輔(高3)の活躍を紹介したい。東北大学を卒業し、防衛医科大学、所沢国立病院などでの勤務を経て、現在、白十字会専務理事を務めている。赤血球代謝研究の権威でもある。

【報道】

この分野ではNHKチーフプロデューサー、大沢芳文(高14)の活躍が目立つ。アトラントや長野オリンピックの統括デスクを務め、サッカーワールドカップフランス大会も担当した。

【宗教】

高麗神社宮司の高麗澄雄(中44)は、高麗王若光からの系譜で五九代目となっている。現在、埼玉県神社庁長、埼玉県宗教連盟理事長などの要職を務めている。日高町教育委員なども務めた。

狭山地区

第一回卒業生は二名。そして百周年の春、二九人の新川高生が誕生した。

一九七四(昭和四九)年、狭山市は市制施行二十周年を迎えた。市の成人式を祝って

様々な記念事業が催されたが、『狭山市歌』の選定もその一つであった。歌詞は広く一般

から公募した。三六編の応募作品の中から見事、狭山市の歌に選ばれたのは、緑をうつ

す川面には、つつじの花びらあやをなす、入間の流れは歴史をのせて……”ではじまる、堀兼在住、尾崎勇治(中48)の作品だった。

このとき、審査委員の一人として尾崎の作品を推した水富出身の作曲家、関口重夫(中36)は、尾崎が戦死した川中同期生、尾崎米治の弟であることなど、知る由もなかった。

市の委嘱により、関口はよろこんで尾崎の詩に曲をつけた。『狭山市歌』は地元出身の川中OB二人の手によって誕生したのである。

尾崎は現在、『源氏物語』『今昔物語』の講演会を主宰、市民のための生涯学習にとりくんでいる。人権擁護委員でもある。

歌謡曲を中心に、すでに一五〇〇曲以上の作品を持つ関口は、母校水富小学校はじめ、市内小中学校六校の校歌の作曲者でもある。

『ミクロナシア共和国讃歌』というユニークな作品も手がけた関口は、現在、地元公民館などで主に婦人たちを対象に歌唱指導にあたり、尾崎同様生涯教育運動に熱心である。

狭山市の誕生とOB

狭山市の誕生は、一九五四(昭和二九)年

七月一日。入間川の清流をはさんで隣接する

入間川町と、入間、堀兼、奥富、柏原、水富

——五か村の合併によるものだった。

合併促進協議会会長として市制施行運動の

先頭に立ち、さまざまな困難を克服しつつそ

の実現にあたったのが当時の入間川町町長、

村上昇(中20)である。多くの市民が初代市

長は村上、と思っていたが、市長職務執行者

としての任務を全うしおえた村上は、市政か

ら身を引いた。

耳鼻咽喉科の医師で、第二次大戦には軍医

として応召、戦地で辛酸をなめた体験も持つ

村上は、その後、入間地区医師会会長、埼玉

県医師会副会長として地域医療の発展にその

手腕を発揮した。そのほか狭山市福祉協議会

会長、狭山医師会立衛生学院長など、多くの

役職につき、活躍は晩年まで続けられた。一

九九八年、長年にわたって社会文化の興隆に

功績があつたとして狭山市名誉市民に推挙さ

れている。

なお村上の長男享司(高11)、ふたごの二

三男光伸、忠也(高17)——二人の子息たち

もそろってOBで、ともに父と同じく耳鼻咽

喉科の医師である。

村上が町長職にあつたとき、収入役として

よく町財政の健全運営にあつたのが、三年

後輩の小川清一(中23)である。

敗戦の年、一九四五(昭和二〇)年の一月以降、収入役として引き続き二人の町長につ

向上賞

村上 昇(中20)

卒業式が近づいたころ、仲間同志の話の中で「今年は向上賞というのが出るそうだ。それじゃあ成績の悪いのがわかつちやっついていやだな」。ところが式が始まると「向上賞〇〇名代表村上きよし、村上きよし」と何回もいわれる。誰も出ない。

「お前だ、早く出ろよ、早く」と、押し出されてしまった。

受けた賞状にはちゃんと私の名前が書いてあった。安心はしたが、校長先生はじめ会場の人から「なにをもたもたしているんだ」と思われたにちがひなかった。なにしろ、会場の視線が自分に集中していたので。

現在、准看護婦学校創立以来三十数年間校長として「向上賞」を授与する時、チラツと昔の中学時代のことをいつも思い出します。

き、市政の発展に力を注いできた小川は、市制移行後もその職責を担い続けた。一九六六(昭和四一)年には助役に抜擢され、以来一九八六(昭和六一)年の引退まで、実に四十五年余にわたり町・市政の中核として貢献したことになる。

小川の長男智久(中48)は、立教大学経済学部を卒業後、民間会社勤務を経て一九八四年独立。物販・不動産業(株)「オガセイ」を創設した。一方、社会、経済問題についての

筆鋒鋭い評論活動でも知られ、近著に『実践の経営学』『住専』を斬る等がある。

一九六六(昭和四一)年、小川のとを継いで市の収入役についたのが、当時出納室長だった宮寺文一(中37)である。宮寺は四期十六年、狭山市が人口一〇万を超える近代都市へと発展していった期間、その職についていた。

一九五六(昭和三一)年、中央大学を卒業した山田和夫(中47)は、まだ播監期にあった狭山市役所に就職した。長らく社会教育、教育委員会関係の職務を担ってきたが、四五歳のとき市議会事務局の局長となる。さらに企画部長を経て、一九八七(昭和六二)年、助役に推挙された。文化行政との関わりで培った経験は、市が掲げた「緑と健康で豊かな文化都市づくり」という基本政策の推進に十分に生かされた。

山田の同期生に石川信男(中47)がいる。父求助氏は、かつて入間川町町長、そして初代狭山市長を務めた人だが、石川は学究の道へ進んだ。早稲田大学を卒業、さらに大学院商学研究科で経営論を専攻した石川は、卒業後青山山学院大学で教鞭をとる。現在、同大学経営学部教授。学部長職にあったこともあり、専門は労使関係論、労務管理論である。

一九九八年現在、町田市政下で狭山市の助役を務めるのは森田欣治(高7)である。森田は川越市の出身で、県総務部次長、(財)埼玉県公園緑地協会常務理事を経た後、現職に招聘され、狭山市政に参画することとなった。現在狭山市役所には、森田はじめ三〇名を越す川高OBたちが奉職している。彼等は「ぐるわ会」という親睦会を作り、ともに公職にある身の研鑽に努めている。小島一綱(高11)は都市整備担当理事、武藤勝(高12)は環境部長、濱野良一(高18)は都市事業部長として市民生活に密着した職務を遂行している。

川中草創期の先輩たち

「駅まで遠かった私は、自転車通学だった。雪の日など、田舎道をこいで学校までたどりつくのは大変だった。」

旧奥富村出身、塩野谷佐四郎(中42)の証言である。狭山市自治会連合会長として、各地域の市民生活向上に尽力してきた塩野谷は、現在狭山市社会福祉協議会の評議員であり、また狭山市遺族連合会の会長として、多くの遺家族たちの信頼を集めている。戦死した二人の兄たちに寄せる哀惜の念も、塩野谷がこの職務に熱心に取り組む理由の一つだろう。

一九九九年(平成一一)年四月の時点で、狭山市から川越高校に通う生徒の数は九二名。ほとんどが西武新宿線を使い、本川越駅に向かうとみていいだろう。

川越鉄道(現西武鉄道)入間川駅(現狭山市駅)の開業は一九九五(明治二八)年三月だった。一九〇三年、春、初雁から翔いた第一回卒業生二九名のうち、この駅に降り立った先輩は何人いたのだろうか。二人いた。ともに入間川町出身の小澤倍太郎と、斎藤半之助である。

小澤の末娘、ひで子さん(七八歳)の話も聞く。

「卒業後は、八幡神社の東側に新しくできて間もない小学校の教師になったそうです。のちのち町の実業界で活躍されるような人たちもたくさん教えたそうで、教師をやめたあとも、よく父を囲む会を開いてくれました。町会議員もやりました。」

斎藤もまた、町議、収入役などを務め町のために働いた。とくに戦後、農村民主化の重要課題であった農地改革の折には、農地委員会の委員長として「熱心に仕事にあたり、その目的を果した」と、町史に記録されている。斎藤の長男倉之助(中33)は、東京商科大学(現一橋大学)を卒業後、富士銀行に入社

取締役調査部長、常任監査役を務めた。現役時代から、金融・財政問題についてしばしば紙、誌上で論評するオピニオンリーダーの一人でもあった。

斎藤、小澤等、草創期の先輩たちの中から、ほかに室岡惣七(中4)、岡野郁三(中5)、増田菊三(中6)、杉田一郎(中9)の名をあげておきたい。

堀兼出身の室岡は、東京帝国大学(現東京大学)で建築学を学んだ。当時建築学科があるのは東京帝大だけで、同期生は一九名。必然的に日本建築学界の先駆者の一人となったわけである。司法省技師などを務めた後、室岡工務所を開設。以後、日本建築史に残る数々の作品を手がけた。川島町の遠山記念館、近隣の人びとに「西洋館」と呼ばれ親しまれている人間市の石川邸などで、今もなお彼の英才ぶりを目にすることが出来る。一九四一(昭和一六)年に建てられ、敗戦後撤去された、母校、川越中学の奉安殿も室岡の設計施工によるものだった。

岡野、増田の二人は、それぞれ生まれ故郷である水富村、奥富村の村長として、戦前から戦時下、厳しい農村行政を導いた。在職中、岡野はまた水富郵便局設立に奔走、一九四三(昭和一八)年、入間に次いで地域では二番目

の「村の郵便局」の開局を実現させた。

杉田は人間川町議、収入役、助役として長らく町政にかかわったが、彼が遺した仕事で記憶されるべきは、赤間川沿いの耕地整理事業だろう。もともと低湿地帯で排水が悪く、道路も整備されていないため農作業等に不便をきたしていたこの地域の改良事業は、一九四一年より、戦後一九五一(昭和二六)年まで、実に十年を費やす難事業であった。

耕地整理組合副長として、杉田は忍耐強く事業の遂行にあたった。一九五二年、杉田は提出する報告書に、誇らかにこう記した。

「工事施行の結果、湿地は乾田となり交通は至便となり(略)施行前に比し実に別天地の感がある。」

なお、このとき会計責任者としてよく後輩の事業推進を助けたのが、前出の斎藤半之助であった。

狭山市誕生の立役者、村上の同期生に市村義保(中20)がいる。一九四七(昭和二二)年人間川町議に初当選以来、市村は、市制施行後も市議として長い間町・市政にたずさわってきた。一九六七(昭和四二)年には県議選にうって出、以後二期連続当選を果たしたが、任期中で病死した。父の遺志を継ぐべく、補選に出馬した市村の長男栄一(高3)は、

見事当選したものの、不幸、半年後、父同様病に斃れた。

狭山市民の意を反映させるべく県政の場に臨んだ父子二代のOBが、志なかげでその職に殉じたことになる。

スポーツに賭けた青春

青田義雄(高16)が宮司を務める人間川の八幡神社は、毎年初詣や七五三の参拝客でにぎわうが、その境内と道をはさんで建っているのが狭山市立武道館である。かつて、ここには武限道場と呼ばれる柔道の訓練場があり、武限喜一(中24)・正平(中28)兄弟が、協力して指導にあたっていた。在学時代、ともに柔道部で活躍した二人は、卒業後、青年団の武道部長、武道指導者として近隣町村の青少年を指導した。

一九三五(昭和一〇)年、青年団主催の「スポーツ座談会」における一人の発言には、時代を超えた斬新なスポーツ観がうかがえる。兄「真のスポーツは勝敗に非ず、柔道も昔は武力の養成でありましたが、現在は体育修養に外ならない。」

弟「小学校では修身、作法等によって教育しているが、むしろ精神修養を目的とするスポーツによるのもよい教化法と思う。」

兄喜一は第二次大戦で戦死。一九七二(昭和四七)年の武道館の開設をみることはなかった。

狭山市に最初の野球チームが誕生したのは、一九二八(昭和三)年(昭和三)年ごろのことだったという。入間川町で結成された「東雲」がそれである。大野茂(中25)が監督兼投手であった。大野はその後、青年団長、町議会議員、同議長、入間川郵便局長、公民館長、市教育委員、同委員長など、郷土発展のため多方面で活躍した。一九五五(昭和三〇)年に刊行された『入間川町史』の編纂委員長も務めた。

水富地区には「北野スポーツ五人兄弟」がいて、有名だった。

長男北野幸也氏は、後に慶應普通部に転じたが、川中在籍時は短距離走者として鳴らした。

幸也氏の弟二人が、川越中学に学んでいる。次男淑男(中25)はテニス部で活躍したが、明治大学に進むと剣道の中山白道に師事、逆二刀流を駆使して全日本剣道選手権に優勝した。三男英男(中27)は野球部に所属、ホームベースを守った。立教大学時代はラグビー部でフルバックを務めた。

二人の甥にあたる北野昭也(高11)が野球

部で活躍した一九五〇年代後半は、部の第二期黄金時代ともいふべきときであった。昭也の最後の舞台となった一九五八(昭和二三)年夏の記念大会では、甲子園を目前に、決勝戦で大宮商に敗れた。昭也はショートストップ、二番を打った。翌年、後輩たちは甲子園出場を果たす。慶應大学に進んでからは二塁手。好守好打で注目された。卒業後サッポロビールに入社し、実業団野球界でも活躍を続けた。

『創立八十周年記念誌』によれば、一九二七(昭和二年)創部の蹴球部はしばらく休部の状態にあったが、三年後に再興されたという。その再興期、一九三二(昭和六)年時のキャプテンは、入間川出身の五年生、石川一郎(中30)であった。

今回、石川は「記憶に残るエピソード」として、蹴球部での思い出を綴った文章とともに、六十数年間大切に保管してきた朝日新聞の切り抜きコピーを送ってくれた。府立二中との熱戦を伝えるもので、見出しには「延長戦の後、川越中惜敗」とある。

石川は狭山市議を二期務め、市サッカー協会会長として、川中での青春の体験を地元青少年の健全なる育成のために生かした。

石川の長男誠(高15)は現在小学校校長、

その子智も高校四九回卒のOB。次男勝(高18)は出版社編集長で、その子優も高校四八回卒のOB。父子三代五人が初雁から翔いたことになる。

生涯を教育者として

毎年夏、狭山市では「平和のための狭山戦争展」が開かれる。一九九七(平成九年)八月、市役所ロビーの展示会場には、小久保好藏(中14)の肖像写真が掲げられていた。

一九四五(昭和二〇)年七月十日、小久保が校長を務める入間村立国民学校は、米軍機の襲撃を受けた。敵機米襲の警報を聞いた小久保は、教師を付きそわせて生徒たちを帰宅させ、遠距離通学の子どもたちとともに防空壕へ向かった。途中、御真影の奉還を思いつき、奉安殿の鍵を取りに引き返す。直後、投下されたロケット弾は小久保から右足を奪い取った。翌日、小久保は生まれ故郷、川越の病院で死去。新聞は「壮烈な殉職」と報じた。平成の代に学ぶ小久保の後輩たちのために付記すれば、御真影とは、「教育勅語発布前後から一九四五年の敗戦時まで、宮内省から各学校に下付された、天皇・皇后の写真」(『広辞苑第四版』)のことである。

狭山市歌の作詞者、尾崎勇治(中48)には

戦死した次兄米治の上に、長兄馨太郎(中30)がいた。埼玉師範(現埼玉大学)卒業後、小学校の教師となった後も研鑽を積み、とくに算数教育に関しては、日本有数の理論家、見識者として知られるようになった。長年、算数教科書の編纂にたずさわり、戦後、算数教育の指導者として復帰前の沖繩へ派遣されたこともある。

川越女子高校教頭から新設された坂戸西高校の初代校長に就任、その後、松山高校校長、県教育局高校教育課長を、浦和高校校長時には、県高等学校校長協会の会長を務めた長谷川隆志(中44)は、教職引退後、県教育委員として長い教育現場で培った豊富な識見を生かしている。委員長職にあったこともある。兄文皓(中42)は、東京高師(現筑波大学)の先輩で、四十年にわたる都下での教職、校長職生活をおえ、現在は、生地柏原の公民館長として地域文化向上のため努力している。

多彩な活躍とその結実

一九七四(昭和四九)年十月二十六日に開催された市制施行二十周年の記念式典では、市歌とともに前文と五項目からなる「狭山市民憲章」も発表された。

市議、社会教育委員であった片居木清一

(中41)は、その起草委員の一人として積極的に発言、案文の作成作業に真剣にとり組んだ。

所沢出身の片居木は、明治大学卒業、教師として入間川中学校に奉職、後、一九五五(昭和三〇)年、第一回狭山市議選に立候補し、二九歳の若さで初当選を果たす。以後六期二十四年間市議を務め、議長職にもついた。その間中央公民館長を兼務したこともある。

一貫して文教政策の立案実現に力を注いできた片居木は、現在も市社会教育委員会議長、県社会教育委員、県社会教育委員連絡協議会会長として、その豊かな経験を生かしている。市社会福祉審議会会長でもあり、特養老人ホーム「さやま苑」の理事長職にもついている。

一年後輩の斉藤達(中42)も、同じく所沢の出身だが、一九五七年以降狭山市に居住。眼科医院を開業するかたわら、今日までポイスカウト運動に熱心にとり組んできた。

三十年近く狭山ポイスカウト第一団委員長、育成会長として、多くの少年たちの心身の鍛練、健全育成に貢献。ポイスカウト埼玉県連盟名誉会議員でもある。

市社会教育委員会副議長として、片居木とともに地域文化教育の振興に努めているの

が小高誠太郎(中48)である。都下中学校の校長職を歴任、教職生活をおえた小高は、以後地元狭山市の自治会運動に積極的にかかわり、狭山市自治会連合会長を務めた。現在も入間川地区連合会長職にある。また狭山市社会福祉協議会会長、中央公民館運営審議委員会委員長でもある。

小高の同期生、広沢謙一(高2)も、市議会議員四期、社会教育委員、入間公民館長等、多くの公職につき、その職責を果たしてきたが、広沢が取り組んだ仕事のなかで特記されるべきは、二十年の歳月をかけ、一九九六(平成七)年ついに完結をみた『狭山市史』全一〇巻へのかかりである。一九七五年市議会採択されたこの大事業に、広沢は編纂委員長職務代理として参画、編集作業の進捗に心をくいだいた。『通史編』二巻のうち、敗戦以降の現代史は、広沢自らが執筆している。

歴史を「知る事によって人は初めて愛する心をもつものなのです。」——『現代資料編』の巻頭に、広沢はこう記している。

先に紹介した北野英男たち中学二七回の卒業生は、同期の集まりを「二七会」と称し、結束が固かったという。水富出身の山本(佐藤)秀順、入間出身の町田恒蔵も「二七会」の同期生である。

町田は狭山市誕生時、合併促進協議会の幹事役員として尽力、その後長期にわたって市教育委員を務め、委員長職にもついた。狭山地方を代表する名産品は狭山茶だが、町田はその有数の老舗、(株)「町田園本店」の会長として、地場産業の振興発展に努めてきた。

長い経験と知識をかわれ、県茶業協会の会長を務めたこともある。また一九六四(昭和三九)年に開設した自動車教習所「狭山モータースクール」の会長職も兼務し、県内トップクラスの教習実績をあげている。

山本秀順は、現在、兄佐藤盛秀(中28)が住職を務める水富の古刹、明光寺に生をうけた。病気のためやむなく卒業が遅れた兄に先んじて川中生活をおえた山本は、卒業後すぐに高尾山に入って修業。智山専門学校(現大正大学)に学んだ。松本市の名刹、兎川靈瑞寺などの住職を務めた後、請われて高尾山に戻る。大僧正、高尾山薬王院有喜寺の貫主として、長年信徒多数の信望を集めてきた。

世界を駆ける人たち

プレス、マスコミ界からは三人のOBを紹介しておきたい。

野上正(中37)は、上海にあった東亜同文書院を卒業後朝日新聞社に入社、もっぱら外

報部に籍を置いて刻々と変わる世界の動きを伝えた。一九六〇年代には、ニューデリー支局長、北京支局長として激動する東南アジア情勢の報道にあたる。とくに、あの文化大革命に揺れた一九六六(昭和四二)年、中国での正鶴をえた一連の取材活動に対しては、国際報道にたずさわるジャーナリストにとつて最高の荣誉であるボーン賞を授与された。後に論説委員となり、日本大学経済学部の講師も務めた。兄完一(中30)、誠(中33)、弟修(高2)と、四人そろつてのOBである。

敬愛する先輩、大沢実(中32)が教える早稲田大学文学部英文科に学んだ松井頼敏(高4)は、卒業後毎日新聞社に入社、「毎日デイリーニュース」の記者として、後に編集部長として世界の各地へとび、持ち前の語学力を駆使して旺盛な取材活動を展開した。「私の語学力の基礎は川中英語だった」と、寄せてくれたアンケートに記している松井は、現在、東洋女子短期大学の欧米文化学科教授、学科長の職にある。また日本英語検定協会の面接試験官でもある。

同じく早稲田大学政経学部卒業後、毎日新聞社に入社した樺橋勝信(高15)は、横浜支局を振りだしにプレスの道を歩む。本社に戻って政治部デスク。後に世論調査部部長、世

論・選挙センター室室長を経、現在は論説委員として健筆をふるっている。

21世紀へ翔く川高OB

一九五四(昭和四九)年、人口三万をわずかに超える田園都市としてスタートした狭山市も、21世紀を目前にした今、一六万数千を数える近代都市へと発展した。その間、生地狭山はもとより、より広い社会へと活躍の場を求めていったOBたちの姿が目立つようになったのも当然といえるだろう。川中期同様、それら全ての人たちをフォローするのは不可能だが、紙数の許すかぎり紹介していきたい。

狭山人形(株)を経営する小沢孝志(高3)は、市の労働福祉審議会の会長職にあり、所沢法人会狭山支部長も務めている。また、人権擁護委員としても活躍している。

小沢の同期生小林洋左は中央大学卒。県立狭山清陵高校校長、県の新教育モデル校として注目を集めた新座総合技術高校の校長を務め、学制公布百二十周年にあたる一九九二(平成四)年、川越女子高校校長在職時には、その長い高校教育現場での功績を認められ、文部大臣表彰を受けた。現在は山村女子短期大学の事務局長を務めている。

同じく高校三回卒の長谷川栄は、東京教育



1975年本館改築時のくすの木

前回では、くすの木の樹齢について「そろそろ科学的調査を考えてもいいのではなにか」と結んでバトンタッチされた。科学とは仮説に寄りかかっているもの、科学的とは断定しかねる物言いとご賢察の上、お読みいただきたいものと願いながら話を進める。

一九九八(平成一〇)年六月に百周年実行委員の馬場弘氏(高12)宅へ伺い大きな樟材を見せていただいた。地上約二・五mの幹周りが三層五八、年輪は七・二三。プラスは、偽年輪と疑われるものを考えているのである。この材の胸の高さの幹周りは四層一五であった。大宮産のこの木がどの

川越高校のくすの木③

ような環境で育つたものかは分からないが、貴重な資料である。この木の年輪の幅は平均〇・八二から〇・八五cm。つまりこれだけ一年間に成長したことになる。胸の高さの幹周りの年輪を推定計算すると、八九・六乃至九三・三となる。

川越高校のくすの木の幹周りを胸高で測ってみると、太い方は四層五〇、細い二本立ちの株は、二層五七と二層三三でその二分岐したすぐ下の幹周りは四層二三であった。上のように計算すると、太い方は八四・三乃至八七・四年、二本立ちの方は七九・二乃至八二・一という数値が出る。

さらに、近辺のくすの木も測ったので、幹周りと年輪数を比較してみることとする。

川越小学校 四層七〇

八八・〇から九二・四年

川越高校 四層五〇

八四・三から八七・四年

御嶽山富士見櫓 四層三二

八〇・九から八七・四年

三つの場所のくすの木が同時に植えられたと仮定しても、この計算方式によれば約十年の差が出る。川越高校のくすの木だけを見ても三年余の幅をもっている。科学とはしんどいもので、これでは結論が出たとは言いがたいので困る。

(元本校教諭 愛川敬武)

大学(現筑波大学)卒業後、一時坂戸中学校の教壇に立ったが、後に母校の大学院に戻り、修士、博士課程で教育学を修めた。新潟大学教育学部助教授を経て、東京教育大学助教授、筑波大学教授として、終始日本教育学界の発展のために研鑽を積んできた。現在、筑波大学名誉教授で、創価大学教授。著書に『現代学力形成論』、編著に『教育の方法と技術』ほか、論文多数を公表している。

早稲田大学理工学部、同大学院に学んだ中根甚一郎(高5)は、現在、教授として同大学、大学院で教えている。また早稲田大学システム科学研究所の副所長職も兼務。専門は経営工学で『MRPシステム』『ヒューマンウェアの生産システム革新』等、多くの著書がある。ボストン大学、オレゴン連合経営大学院の客員教授として、国際的な活躍を続け、英文による論文も多数上梓されている。

同期の吉崎秀一は川越市出身で、慶應義塾大学医学部卒。内科医として信州清里の診療所で山村医療に積極的になつたこともある。狭山市民となって二十年余、現在は入間川病院院長として地域医療に貢献している。

三輪修(高6)は京都大学工学部電子工学科を卒業、富士通に入社した。以来、終始コンピュータによる技術革新の時代を切り開く

旗手の一人として、その研究開発にあたってきた。その間、宮崎大学で講師を務めたこともある。理事、システム本部長代理を経て、現在は(株)富士通東北エンジニアリングの社長職にある。

三輪と同期の増田秀男は、明治大学、同大学院で英文学を専攻。現在、同大学文学部教授である。C・ティケンスを中心とした一九世紀イギリス文学が専門である。

東京芸術大学音楽学部を卒業した水村浩一(高7)は、名古屋芸術大学音楽部の教授として、専門の音楽理論を講じている。学部長職についていたこともある。

落合栄一郎(高7)は東京大学、同大学院を卒業。母校、応用化学科の助手を数年務めた後渡米、カナダ、アメリカの各大学で三十年以上にわたり、化学教育、研究にたずさわっている。現在、米ペンシルヴァニア州、ジュニアータ大学教授。落合の長年の研究成果は、生物無機化学という新しい学際分野の発展に大きく貢献してきた。落合は、「これからは経験を生かして日本の教育(とくに理科教育)の改善にも奇与していきたい」と、抱負を語っている。邦文による『生命と金属』のほか、英文による論文著作多数がある。

坂野好幸(高12)は東京農工大学、同大学

院を卒業後も母校に留まり、一九九三(平成五)年より同大学農学部教授。その間一九七三(昭和四八)年、大阪市立大学より理学博士号を授与。特別研究員として米アイオワ州立大学に在籍していたこともある。専門は農芸化学。『アミラーゼ 生物工学へのアプローチ』ほかの編・著書があり、その研究成果に対して日本澱粉学会奨励賞、日本応用糖質科学会賞を授与されている。

東京大学工学部都市工学科を卒業した島崎勉(高14)は、建設省に入り、都市計画、住宅建築に関する技術開発、安全対策の推進に努めてきた。現在、建設省建築研究所所長の要職についている。

島崎の同期、寅市和夫は東京電機大学を卒業後、北海道大学大学院工学研究科で電子工学を専攻。博士課程を終えて通産省に入省。工業技術院電子技術総合研究所で日本のコンピュータ技術発展のために尽力した。後に筑波大学に招かれ、電子・情報工学系の助教授、教授として後進の指導にあたり、日本独自の Wisdom Systems(寅市によれば「コンピュータにアメリカ流の知識」とは違う)の知恵をつけるための学問の研究開発にあたっている。筑波大学、先端学際領域研究センター(TARA)を支える七教授の一人

でもある。

在校時代、NHK主催の「青年の主張」全国コンクールに優勝した山川一陽(高15)は、日本大学法学部に学んだ。司法試験合格後アメリカに留学。帰国後、検事職に就いたが後に母校に戻り、法学部教授となる。主に物件法を専攻している。

大野惣平(高15)は京都大学工学部土木科を卒業。卒業論文ではつり橋の架橋技術論を追求したという大野の夢は、首都高速道路公団に入社後、一九九〇(平成二)年、大きく結実する。技術面の責任者として、そのプロジェクトにかかわってきた、東京の新名所、あのレインポー・ブリッジが完成開通したのである。現在、本社保全敷設部部长。

一橋大学商学部在学中、交換留学生に選ばれドイツに渡った増田正敏(高15)は、帰国後、さらに母校経済学部で修士入学、研鑽を重ねた。現在、東京国際大学商学部、同大学院教授。専門は会計学、租税論で、『財務諸表論』等の著書がある。

牛窪勲(高15)は東京教育大学(現筑波大学)卒業後、母校川越高校の教壇に立ち、書道科の教諭として十三年間後輩たちの指導にあたった。教職を退いた今は書道家として旺盛な作品制作発表を続けている。号は梧十。

日展会友。一九九六(平成八)年秋には特選入選を果たした。読売書法会の理事も務めている。

橋本信夫(高18)は京都大学医学部に進み、大学院卒業後も大学に留まり、脳神経外科の助手、講師、助教授を務めた。一九九三年より五年間、国立循環器病センター脳血管外科部長の要職を務めた後、一九九七年、京都大学に戻って教授となった。

同期生江原幸雄も、橋本同様水富地区出身。北海道大学理学部から大学院に進み、地球物理学を専攻した。しばらく助手として母校に留まったが、後に九州大学に移り工学部の教授となる。九重山(くじゅうさん)の火山活動の分析、そのエ

ネルギー利用策も含め、地熱工学の分野で精力的に研究を進めている。

山本卓(高18)は京都大学文学部仏文科の出身。現在、文京大学文学部独仏語研究室教授として、専門の現代フランス文学を中心に語学、文学を講じている。

「私の大学は、高校卒業後、小僧として丁稚奉公に入った北海道の老舗菓子店での四年間だった……。」

こう語るのは、水村清司(高13)である。父のあとを継ぎ、二七歳で家業の菓子店舗「かにや」の社長となる。店舗数二、社員七人だった経営規模を、近隣七都市に一二店舗七〇人までに発展させた。お客さんに喜んで

もらえ、自分でも納得できる銘柄は五〇に一つ、十年に一銘柄できればいい、という。

「そんなかわいい作品を他人にまかせるわけにはいきません。」

水村の経営の基本方針の一つは、大店舗内にテナントを出さないことだという。また、自分の体験をふまえ、すでにヨーロッパへ二〇名近く、京都へも数名、それぞれ三〜四年の期間で社員を留学、修業に出している。

*

一九九九年(平成一一)年、春、狭山市からは二九人の新川高生が誕生した。

入間地区

揺るぎない秩父嶺を望み、初雁に学び通うもの 入間の水のごとく連綿と。

入間地区の同窓生を紹介する前に、まず母校が創設された一八九九(明治三二)年当時の現在の入間市域をなす地域を紹介し、あわせて現在の入間市になるまでの成り立ちに簡単にふれたい。

母校創設時、当地域には一八八九(明治二二)年に実施された市制、町村制をもとに豊岡町、金子村、宮寺村、藤沢村、東金子村、元加治村(旧野田村、仏子村)、元狭山村の各町村があった。後に太平洋戦争中の町村合

併推進で一九四三(昭和一八)年、元加治村は飯能町と合併。戦後になると地方自治体の変革や一九五三(昭和二八)年の町村合併推進法の制定を受けて飯能町から分村した元加治村と東金子村とが一九五四(昭和二九)年

合併して西武町が発足。

一九五六(昭和三一)年、豊岡町、金子村、宮寺村、藤沢村、西武町の旧東金子村地区とが合併して武蔵町が発足。一九五八(昭和三三)年、元狭山村の東京都瑞穂町との合併に際し、元狭山村の一部の二本木地区が武蔵町に編入する。そして、自治法の一部改定を受けて、武蔵町は市制施行を準備し、一九六六(昭和四一)年入間市となった。翌年、西武町(旧元加治村の野田、仏子地区)が編入合併し、現在の入間市となった。

ついでながら当地区からの通学方法について簡単に説明したい。

初期は寄宿舍か川越市内に下宿して通学をしたと思われるが、当地区からの通学方法は一八九五(明治二八)年に開通した川越鉄道(川越 \rightarrow 所沢 \rightarrow 国分寺、現西武新宿線の一部)の入間川駅(現狭山市駅)までの交通手段の変遷に関わる。当時、入間川町から豊岡町、東金子村、金子村を通って青梅を結ぶ馬車鉄道があったが、入間川町(現狭山市)内の知人宅にも駐輪するなどほとんどは自転車であった。その距離は住む地域によって三^{*}から一五^{*}ほどであった。一九一五(大正四)年武蔵野鉄道(池袋 \rightarrow 飯能間、現西武池袋線)が開通すると元加治村、東金子村の一部のものは仏

子駅から稱荷山公園駅まで同線を利用し、同駅から約三^{*}の先の入間川駅までを徒歩で通った。その途上、上級生による鉄拳制裁も見受けられたという。他地区のものは相変わらず自転車利用であったが、豊岡町駅 \rightarrow 入間川駅間にバス便がでけると豊岡駅までは自転車で通学する方法もとられた。豊岡駅、稱荷山公園駅 \rightarrow 入間川駅間のバス便が充実してくるにつれてバス利用者も増えたが、ほとんどのものがバス便を利用するようになったのは昭和三十年代後半のころからである。

以上を踏まえて当地区では、開校間もないころの入学生・卒業生、三代にわたって卒業生(在学生を含む)を出した一家、四人以上の同窓生がいる兄弟、地場産業の振興に貢献した(している)同窓生、また地域に根差し「一隅を照らす」ような活躍をした(している)同窓生、そして入間初雁会活動に貢献した(している)同窓生などを中心に紹介して、母校と当地区の百年の関わりと同窓生が当地区に果たした役割が探れればと思う。

百年間の同窓生を百年後のものが紹介すると、どうしても近年の同窓生に偏ってしまう。百年の重みは大変なもので、七十年を遡るだけでも、往時を知る同窓生のほとんどは亡くなっている。一九〇一(明治三四)年には当

地区からの在校生は二三名であったというが、残念ながら消息を尋ねる術も無い。初期の同窓生、今回の編集にあたって探し当てることのできなかつた前述の内容に該当する同窓生と紙幅の都合上紹介できない各分野で活躍する同窓生にあらかじめお詫びしたい。

まず、当地区で三代にわたって同窓生をだした一家は残念ながら判明していない。

当地区から川越までの交通の利便性、普通高校の増加、母校が昨今ますます難関校になったこと、そして昨今の私学志向、少子化などが理由かと思われる。

当地区からのはじめての入学者は中沢阿栗(中 2 ・中退)である。第二元加治村村長を務めた中沢阿栗は元加治村から飯能町の飯能高等小学校に通い、川越中学には川越に下宿して通学したという記録がある。中沢は飯能実科高等女学校(現飯能高校)の新設に尽力。また昭和不況の中、失業対策のため農村振興事業を興し、水田灌漑事業として入間第二用水(現宮沢湖)の建設のため奔走した。

次に古い入学者は長谷部瑛三(中 3 ・中退)である。長谷部の父祖は幕末、日米修好通商条約(一八五八年)が締結されるといち早く、横浜に出張所を設け、米、生糸などの輸出を手がけ財をなし、当地の製糸業の先駆

をなした丸屋製糸を興している。

当地区からののはじめての卒業生は加藤恒吉(中4)である。

加藤は川越中学では常にトップクラスであったが、進学した旧制第一高等学校ではいくつ努力しても上位に食い込むことができなかったという。夏目漱石が英語の教鞭をとっていたが、授業ははじめに教科書を七、八頁ほどをスラスラいきなり読むと、あとは「君達は一高生だからこのくらい分かるはずである。」と言って、すぐに職員室に帰ってしまった。大変苦労したと述懐していたという。

父祖から数えて五代目の医者、坂本勉(中5)は金子小、中学校の校医を二十有余年間務め、いろいろな性格で診療の時は「坂本先生の面白い話」と地区の人々に親しまれた。地元文化活動にも積極的に参加、斗酒なお辞せず、自ら「白酔」と号し俳句を楽しみ、地元公民館長としても活躍した。子息の力(中33)も地元の医療に貢献。

第一三代元加治村村長を務めた宮岡茂助(二平・中10)は太平洋戦争下の極度に物資の不足した中、村政に大変腐心したという。当時の強力な町村合併推進運動の下、同村は飯能町と合併したため最後の同村村長となる。合併後は飯能町議として活躍した。

戦後の公選による初代金子村村長となった

加藤健三(中15)は食糧不足、農地改革、六三制への教育改革など、難問山積の村政に意欲的に取り組むが、残念なことに任期半ばで死去。

四人以上卒業生をだした兄弟は三組判明した。滝沢兄弟の五人は特筆すべきである。

秀夫(中31)、好夫(中33)、自営の達夫(中42)、会社員の康夫(中47)、会社員の素直(高6)の五人である。長男の風格と優しさを持ち合わせたという秀夫は中国で戦死、武人の無骨さを持っていたという海軍兵学校出身の好夫も二九歳でフィリピン沖にて戦死。

四人の同窓生をだした兄弟は旧制では福田四兄弟がいる。元入間市歯科医師会会長で、学校医として長年地域に貢献した功績で文部大臣賞、知事賞などを受賞した卓司(中40)、前入間初雁会副会長で市内の中学校長を歴任し、退職後は野草の保護育成に意欲的に取り組んでいる昇平(中41)、飯能地区歯科医師会会長を務めた博(中43)、寿夫(高4)の四人である。

新制高校では中学校教員の高山茂(高23)、県職員の次郎(高25)、会社員の信雄(高27)、市職員の勇(高32)の高山四兄弟がいる。在学中、茂、信雄、勇は野球部で、次郎はテニ

ス部で活躍した。

当地区の地場産業は昔から製茶と織物がある名である。製茶では市議、県議、県茶業協会会長などを務め、藍綬褒章を受章した県収用委員の田代甲子雄(中45)は、長男の紀邦(高24)、丸山武(高23)らとともに茶の品質改良で農林大臣賞を受賞し、狭山茶振興に尽力している。

織物では「世界のヒラセン」と賞賛され、後に昭和天皇も行幸した平仙レースを年若くして継いだ平岡仙之助(中43)は、旧制浦和高校在学中にレース工業会理事、東京大学在学中に所沢織物商工協同組合理事となり、技術開発や経営の刷新、とくに従業員の資質向上と教育訓練に努め、工場内に県立浦和通信制高校の共同学習場を設置、女子工員が働きながら学べる全従業員全高校生など、当時としては斬新な福利厚生を実践した。外貨不足の戦後にあつて輸出に多大な貢献をし、ヒラセンの名前を世界的に広めた。

県貿易協会副会長などを務めるかたわら、地元西武町の消防団長、商工会長などを務め、地域社会にも積極的に参加奉仕をしたが、惜しむらくは三九歳で不慮の事故死。葬儀には後に首相となる福田赳夫、栗原浩県知事らの弔辞があつた。勲五等瑞宝章を受章する。

また同社役員で県経営者協会副会長、県監査委員などを務めた川島村(現川島町)出身

の平田高美(中6)は、産業の振興と労働安全運動を推奨した功績で総理大臣賞、労働大臣賞など数多くの賞を受賞したほか、勲五等雙光旭日章、藍綬褒章、紺綬褒章を受章。

国内第二位の生糸出荷高を誇った石川組製糸場一族からは多彩な同窓生を輩出している。

武蔵野鉄道(現西武池袋線)の経営に役員として尽力した石川四郎(中12)。

昭和初期、歌壇に従来の潮流に挑戦した新興短歌運動がおこった。この動きは後にモダンリズム短歌とプロレタリア短歌にわかれていくが、石川信夫(信雄・中24)は昭和初期のモダンな風俗を反映したモダンリズム短歌運動の中にいた。早稲田大学中退後、一九三六

(昭和二)年歌集『シネマ』を発表。文芸春秋社入社後、応召中国へ。後に同社特派員となり中国各地を遍歴。一九五四(昭和二九)年、中国時代の歌、戦後の歌などをまとめ『太白光』を発表。一九二六(昭和元)年から一九

七五(昭和五〇)年までにつくられた短歌を対象に編纂された『昭和万葉集』(講談社刊)には一八首、戦後五十年を記念して編纂された『埼玉戦後万葉集』(埼玉新聞社刊)には五首所載される。またコクトー、ジャコブなど

の訳詩や数多くの外国作品を翻訳、紹介。草野心平らと親交を結んだ(49頁参照)。

信夫の弟で、肺結核のため慶應大学在学中から療養生活を余儀なくされた石川博(讓治・中27)は短編小説「水泳選手」「ペロスケ色の衣装」を発表。「蜂窩房」で三田文学賞を受賞した。評論、演劇分野でも将来を囑望されるが二九歳で没した。石川山治(中37)は

長年中国人留学生の支援活動を行っている。話はそれるが詩人といえば、現代詩の分野で野村喜和夫(高22)が詩集『川萎之』、評論『ランボー・横断する詩学』などを発表し意欲的に活動中である。

所沢織物組合理事の細田和男(高17)は織物の高付加価値化を模索し、織物界の活性化を担う。

次に「一隅を照らす」同窓生に触れたい。荻野豊(高19)はNPOの先駆的な団体「トトロの森」の代表者として、狭山丘陵のトラスト運動や日本野鳥の会の会員として自然保護運動を推し進めている。

当地区も戦後に人口が急増し、新設校が相次いだ。山畑雅廣(高8)は新設小、中学校のPTA、後援会を立ち上げ、その育成に長年にわたって関わる。

宮岡源一(高22)はその新設校の多い市P

TA連合会を会長として取りまとめ、また地元では新旧住民融和を図って、災害時でも互助しあえる新しい組織作りを情熱を注ぐ。

所沢市出身で長年市政に関わり県地区衛生組織連合会会長で市議の横田敬二(旧姓沢田・高4)は、県レベルで衛生向上のリーダーシップをとっている。

商工会会長、市議を務めた増子勉(中45)の後、市議の駒井勲(高21)も地元商店街の活性化に知恵をほっぽっている。

全国歴史教育研究協議会会長を務めた元都立大泉高校校長の友野正雄(中37)は、生まれ育った地域に恩返しをと福祉に、元中学校長の岩田一(中40)は地元文化活動に関わる。

友野の地区は前述した元狭山村の東京都瑞穂町への編入合併により、子どもたちの学校が突然、都内の学校となったため、その後都立高校に進まざるを得なくなったものがた。岩田力也(高11)は市のスポーツ振興に尽

力。大野勉(高25)は地元元子の若手の保存継承者として、また市民フェスティバルから大きく市の一大イベントと化した数十万人を呼び込む「万燈祭り」の仕掛け人グループの一人として町おこしの一翼を担っている。

ロータリークラブ、ライオンズクラブ、青年会議所に触れたい。

ロータリークラブでは教誨師として少年刑務所で長年青少年の更生のため地道な活動を行う一方、座禅会などを通じ積極的に寺を開放し、心のあり方などを説いている県教誨師会副会長、市保護司会会長で現人間初雁会会長の清水仁恵(中40)、漢籍や書に親しみ狭山地方交通安全協会、警察官友の会などの会長を務め、地域の交通安全、防犯運動を推進奨励して黄綬褒章を受章した坂戸市出身の齋藤金作(旧姓小島・中45)、八木一郎(高5)、

撰田順一(高9)前述の石川山治らが会長。

ライオンズクラブでは中山茂治(高26)が会長。保護司を務める不破隆夫(高20)、鈴木賢司(高20)、大久保秀男(高21)らが青年会議所理事長。青少年育成指導、国際親善交流などの奉仕活動を通じ、地元地域社会に積極的に関わっている。

高校時代剣道部で活躍し、地元では剣道を通じ青少年の育成を図り、二八歳で市議になった現県議の田中龍夫(高23)は、県政の舞台で活躍している。百周年記念事業遂行に力強い存在である。

毛呂山町出身の人間市医師会会長で現人間初雁会副会長の原田雅義(旧姓小室・中46)は、高度医療には看護婦と技師の養成が肝要と専門学校を設立し、その養成と地域の高度医療センターにかける。

*

人間初雁会では三五歳で金子小校長に、その後市内の小中学校校長を歴任、市選挙管理委員などを務めた初代会長柳内滋(中27)、井の頭公園、神代植物園園長等を歴任した初代会長野村辰雄(中32)らは、会の発足にあたって、当地区内の同窓生の自宅や会社を

訪問して会員の増強に尽力。現在の会の隆盛の基礎づくりに貢献した。

*

校歌を作詞した川越中学教師の古谷喜十郎先生は同窓生ではないが、市内鍵山の出身である。「秩父の嶺の揺るぎなく、人間の水の末長し」の一節は「一六号線と旧道の交差点の風景を写しているのでは」と川越中、川高と母校に四年余在学した孫の圭一(高4・東京理科大学教授)はいう。

先年の早春、人間初雁会では喜十郎先生の墓に詣でた。その年の五月、総会で柳内滋初代会長が校歌作詞者、古谷喜十郎先生は人間市出身であることを紹介した。

喜十郎先生の墓は人間川の流れにほど近い、秩父の山を望む市内の鍵山にある。

所沢地区

全OBの一割強を占める地域ならではの多彩な活躍ぶり。

所沢市の人口は、一九九八(平成一〇)年当初でおよそ三三万人。このうち、川高百周年

年記念誌編集委員会が把握している川中・川高のOBは、故人を含めて二七三九人。全O

Bの二・四パーセントであり、川越市に次いで二番目に多い。所沢地区は、委員会が集

めたアンケートに基づいて回期順に紹介する。

しかしアンケートの回答内容が簡単で、資料不足のものが多かったため、ほとんどの方に何度か電話で確認させていただいたが、ご回答いただいた内容、量によって紹介した行数に違いのあることを御了解願いたい。

【川中の部】

所沢地区の資料の中で最も古いOBは、一九二二(大正一一)年卒業の、平塚義角(中20)であった。平塚は、所沢市議会議員、同市教育委員長、市史編纂委員などの公職のかたわら、ドイツ文学、ロシア文学の研究や翻訳をしていた。また所沢の土を使った陶芸品を作ろうと野老窯(やろうがま)の会を主宰した。

次いで、斉藤裕一(中23)。耳鼻咽喉科の医師。埼玉県耳鼻咽喉科医師会の会長や社会福祉法人「皆成会光の園」の理事長などを務め、勲五等瑞宝章を受けた。

次は、平岡徳次郎(中24)。旧名庄一郎。織物卸業平岡徳次郎商店社長のかたわら、所沢織物卸商業組合の理事長などを務めた。また所沢市弓道連盟の創始者の一人で、長い間同連盟の会長をしていた。

平岡と同期の堀口申作は、耳鼻咽喉科の医師。東京医科歯科大学の教授を務めたあと長く同大学の名誉教授をしていた。その後国立

聴力言語障害センターの所長を務めるかたわら、自宅に「鼻咽腔炎研究所」を作り、ぜんそくや自律神経失調症、花粉症、頭痛肩こりなどの研究や治療にうち込んだ。著書に『原因不明の病気が治る』『Bスポットの発見』

現代医学がとり残した難病震源地Ⅱ(いずれも光文社、カッパサイエンス)などがある。一九七六(昭和五一)年紫綬褒章、一九八一(昭和五六)年勲二等瑞宝章を受章。

堀口らの三期後の平岡忠次郎(中27)は、国会議員。入間市出身であったが、所沢市に長く住んでおり、一九五二(昭和二七)年、衆議院選挙に当時の社会党公認で、埼玉二区から立候補して初当選。以後連続七回当選し、一九六九(昭和四四)年引退した。この間衆議院大蔵委員を長く務め、石炭対策特別委員長などもしている。勲二等旭日重光章を受け、正四位に叙せられた。

荒幡吉五郎(中27)は、川中卒業後の一九三〇(昭和五)年、南米ブラジルに移民して永住。広大な農場を経営して成功する。今なお健在、現地で活躍している。

また同期の中善寺登喜次は、橋設計KKの代表取締役。一九三三(昭和八)年から所沢市に住んで建築設計業界で活躍していた。主な建築設計には、浦和市にある埼玉県知事公

館、上尾市の上尾陸上競技場の建物などがあり、『住まいの設計ノートから』など著書も多数ある。また、国、県、市の建築関係委員会の役職を多数もった。

新井敬蔵(中28)。教育者。上尾市出身で、埼玉県教育局や入間教育事務所などに勤めたあと、所沢市立向陽中学校など三校の校長を務めて、退職。その後輩の梅沢定彦(高4)が経営している幼稚園の園長を五年間務めた。

渡辺暉邦(中32)。医師。東京慈恵会医科大学卒業後、教授として同大の教壇に立っていたが、一九六〇(昭和三五)年から一九六二年の第五次南極越冬隊に医師として参加し、活躍した。その後、社会保険大宮総合病院の院長を務めた。

平岡敬一郎(中33)。川中時代野球部員として活躍。その後家業の平岡織維会社社長のかたわら、所沢市体育協会、同野球連盟の会長などを務めた。

増岡高雄(中33)。朝日新聞東京本社勤務。「アサヒグラフ」記者などを経て、一九五一(昭和二六)年、家業の燃料商増岡商店の社長となる。一九六三(昭和三八)年、所沢市議会議員に初当選。以来連続七期二十八年間市議会議員を務める。この間通算四年議長を務

め、埼玉県市議会議長会の会長もしている。

一九九一(平成三)年に引退。同年勲四等瑞宝章を受章。

古谷菊次(中33)。一九四八(昭和二三)年検事に任官。東京、新潟など各地の地方検察庁の検事、検事正を歴任、一九七六(昭和五一)年退官後は弁護士として活躍。勲二等瑞宝章を受章、没後、従二位を追贈されている。

三上寿朗(中34)。料亭婦多佳美の代表取締役。一九五一(昭和二六)年から二期所沢市議会議員を務めたほか、所沢市観光協会会長、全国飲食業同業組合副会長など観光料理飲食業関係の要職を歴任している。一九九三(平成五)年勲五等瑞宝章を受章している。

関根弥(中34)。専業農家。旧柳瀬村の村議会議員を二期務めたあと、一九六七(昭和四二)年から二期所沢市議会議員を務めたほか、市の消防団長も二期務めている。従六位勲五等瑞宝章を受章。

細島博文(中35)。電気工学家。一九四八(昭和二三)年、運輸省に入省、旧国鉄の技術研究所主任研究員となり、国鉄初のインバーターによる回生制動を実施する際の変動設備を担当したあと、東京で新交通システムの開発などのプロジェクトリーダーをしていた。その後も電気工学関係などの企業の顧問をし

ている。

井関武七(中36)。衣料品販売業『いせき』の会長。一九八二(昭五七)年から十二年間、所沢市教育委員を務め、この間七年間委員長をしていて、同市の生涯学習の基盤づくりに尽した。また所沢商工会議所副会頭や所沢ロータリークラブ会長などもしていた。

小沢俊郎(中37)。一九四七(昭和二二)年から一時母校川中の非常勤講師をしたあと、都立千歳高校などの教諭を務め、一九七五(昭和五〇)年から京都教育大学教授(日本文学)をしていたが、一九八二(昭和五七)年死去。著書に『薄明穹をゆく』『蛙の詩三篇』などがある。また生涯宮沢賢治の研究に打ち込んでおり、筑摩書房発刊の『校本宮沢賢治全集』の編集委員をしていた。

荻野光男(中39)。医師。一九五四(昭和二九)年開業。一九六七(昭和四二)年、内科、外科、小児科、産婦人科の荻野病院に発展させ理事長になる。一九七六(昭和五一)年から四年間、所沢医師会長をしたほか、日本医師会の代議員、埼玉県医師会常任理事、所沢市公平委員などを務めている。一九九六(平成八)年、勲五等双光旭日章を受章。

肥田埜勝美(中39)。社団法人俳人協会の評議員。俳句グループ「阿吽」を主宰してい

る。

俳句をはじめたのは、胸部疾患の治療のため東京清瀬の療養所に入院中、石田波郷と出会ったのがきっかけ。会員は北海道から沖縄まで全国から集まっている。

下田迪雄(中39)。一九四三(昭和一八)年から都内の小、中学校の教諭を歴任。この間一九五〇(昭和二五)年から二年間、川越高校定時制所沢分校の教諭(数学)をした。一九七七(昭和五二)年から三年間、東京都初等教育指導課長を務め、一九八七(昭和六二)年、練馬区教育委員会教育長に就任した。一九九六(平成八)年勲五等双光旭日章を受章。

川合正徳(中41)。東京新橋にある電気製品販売会社「カナデン」の会長。一九五〇(昭和二五)年にカナデンの前身の神奈川電気会社に入社。一九八五(昭和六〇)年に社長になり、一九八九(平成元)年、東証一部上場の会社に仕上げた。大宮市出身。所沢で育ち所沢に住んでいる。戦後日本経済の復興に努めた一人。

田中政海(中42)。山口観音金乗院の住職。所属宗派の全国組織である教区長会会長や埼玉支部の会長などをしており、ロータリークラブ埼玉西地区の世界社会奉仕委員長を務め

ている。また、地元の文学者などの足跡を石碑で残すために境内を提供しており、打木村治(中20)、高橋玄洋氏ら文学者、地元の人々からの碑建設に協力している。

打木城太郎(中43)。一九九三(平成五)年立教大学教授(英文学)を退職後、同大名誉教授。また山梨学院大学教授のあと講師をしている。父親で作家の打木村治の影響を受けた文学者。特に、D・H・ロレンスの研究家で、一九八六(昭和六一)年から四年間日本ロレンス協会の会長を務めた。

新井昭雄(中43)。新井外科医院の医師。一九五三(昭和二八)年から出身校の東京慈恵会医科大学高木病理学教室、大井外科教室などで研鑽したあと医業につく。一九八四(昭和五九)年から所沢市医師会理事、埼玉県医師会社会保険医療担当指導員などを務めている。

鈴木禧八(中43)。一九六一(昭和二六)年裁判官に任官、横浜地方裁判所判事補をふり出しに、福岡、静岡、千葉などの地裁や支部で裁判官を務める。一九七三(昭和四八)年に退官して弁護士になる。第二東京弁護士会に所属。所沢商工会議所の顧問をしている。母校川越高校のPT会長も務めた。

伊藤勇(中44)。医師。医療法人伊藤内科

の理事長。一九九二(平成四)年から埼玉県公安委員をしており、一九九五(平成七)年から浦和市にある労働省埼玉産業保健推進センターの所長をしている。所沢市医師会長、埼玉県医師会理事、同副会長などを歴任。一九九六(平成八)年、藍綬褒章を受章。

伊藤と同期の河内昭次は、農業経営者。一九五九(昭和三四)年所沢市秘書室長に就任。一九六三(昭和三八)年から同企画室長になり、東京オリンピック所沢会場(クレイ射撃)の事務局長として活躍。一九六七(昭和四二)年から所沢市議会議員に五回当選、この間市議会議長、県西部地区議長会長などを務める。

この二人と同期の辻功は、教育学博士。一九六七(昭和四二)年東京教育大学(現筑波大学)講師になり、その後教授に。日本女子大学の教授も務め、現在は筑波大学の名誉教授。『日本人の学習』『生涯教育の可能性』など著書、論文多数。

この四四期には、もう一人増田昭世がいる。増田は、サン写真新聞社写真部、西武百貨店宣伝部、西友SM事業部長(取締役)などをしたあと、一九八六(昭和六一)年、西武線所沢駅西口に開設した再開発ビルの管理会社「ワルツ所沢」の社長をしている。

鈴木豊(中46)。医師。出身校の東京慈恵会医科大学付属病院で内科の医師、医長を十年務めたあと鈴木医院を開設。一九九〇(平成二)年から所沢医師会長、埼玉県医師会代議員会議長、所沢看護専門学校長などを務めている。また所沢市救急業務高度化推進協議会の会長など、主に医療行政関係の要職を務めている。

糟谷英二(中45)。元所沢市助役。一九四八(昭和二三)年に当時の所沢町役場に就職。生活環境部長などをしたあと、一九七五(昭和五〇)年に助役に就任。一期務めて退任した。米軍所沢基地跡地の返還運動や西武ライオンズ球場の誘致と開設対策などで活躍した。この鈴木、糟谷と同期の肥沼清之助は、製茶食品問屋肥沼商店の代表取締役。所沢市緑化推進会議会長などをしてきた。また特産狭山茶の製造販売に力を入れており、市茶業協会副会長、県茶業協会理事をしていたほか、市都市計画審議会会長などもしている。

桑田裕(中46)。一九五〇(昭和二五)年、小学館に入社。学習雑誌の編集にあたったあと、集英社、光文社に次々に編集者として迎えられる。少年雑誌『おもしろブック』『少年』の編集を担当する。このころ、学生だった手塚治虫の「鉄腕アトム」を発見して現在の漫

画文化のきっかけを作った。その後虫プロの役員に迎えられ、「ジャングル大帝」をはじめ、一連の手塚アニメなどのプロデュースをする。また「漫画著作権者協同組合」を設立し、フジオ・プロダクションの専務取締役に就任している。

一方同期の三上光雄は公務員。一九五一年(昭和二六)年に建設省に入省。荒川上流工事事務所などを経て、埼玉県土木部に移籍、一九七二(昭和四七)年、入間川水系ダム建設事務所長として、名栗村の有間ダムの建設を担当。一九八八(昭和六三)年に退職。一九九一年(平成三)年死去。従六位勲五等瑞宝章を受章。

【川高の部】

一九四三(昭一八)年の入学者は中学四七回生と高校一回生とからなる。以下所沢地区川高OBの部に入る。

片居木栄一(高一)。國學院大学講師、弓道家。一九五三(昭和二八)年、川高所沢分校の教諭をふり出しに、定時制の教諭を務め、一九九〇(平成二)年退職。大学では「スポーツ身体文化」を講じる。三十歳から始めた弓道で実力を発揮、現在(財)全日本弓道連盟の指導対策委員などを務めている。『弓道のすすめ』等弓道関係の著書多数。日本弓道

連盟の教士六段。

下田博之(高一)。元東京農工大学教授、定年後同大名誉教授。農業工学が専門で熱帯農業開発の研究と教育に力を入れてきた。この研究の関連で、日本とパプアニューギニア友好協会の理事を務めているほか、国際協力事業団青年海外協力隊の専門委員をしている。また所沢市の文化財保護委員もしている。下田と同期の滝澤茂樹(中47)は歯科医師。一九九〇(平成二)年、所沢市歯科医師会会長、市国保運営審議委員、同高齢者保健福祉推進委員などを歴任。一九九七(平成九)年文部大臣表彰を受ける。また一九四七(昭和二二)年に母校にできた山岳部の創設者の一人。

やはり同期の田中喜八郎(中47)は教育者。一九四九(昭和二四)年、大学在学中から教壇に立って四十二年間教育畑で過ごした。昭和四十年代から所沢市教育委員会に入り、市立図書館など社会教育関係の仕事をしたあと教育界に復帰、一九八四(昭和五九)年から八年間小手指中学校などの校長を務め、同市校長会長などをしている。一九六三(昭和三八)年埼玉県体育賞、一九九〇(平成二)年県教育委員会表彰を受ける。

また三人と同期の関口榮(中47)は税理士。

一九五八(昭和三三)年「関口税務会計事務所」を開設。一九九四(平成六)年、所沢市代表監査委員、同じころ所沢税務署管内納税貯蓄組合の会長に就任。このほか関東信越税理士会所沢支部長もしている。

斉藤武司(高2)は公認会計士。「斉藤公認会計事務所」の経営者。一九八〇(昭和五五)年から二年間、所沢市監査委員を務めていた。現在同市社会福祉協議会や同シルバー人材センターの監事などをしている。

中義智(高3)。神官。一九五五(昭和三〇)年入間市豊岡小学校教諭をふり出しに教職員生活二十八年。この間小学校長などをしている。一九八二(昭和五七)年腎臓をこわし、一九九五(平成七)年、腎臓移植手術に成功し、奇跡的に健康を回復した。この事情は著書『腎移植II 透析校長奮闘記II』(三省堂)にくわしい。所沢市都市計画審議委員や埼玉県神社庁評議委員など役職も多い。

新井澄夫(高3)。一九六三(昭和三八)年から十六年間県立浦和高校の教諭を務めるなど教職員歴三十年余り。川高在学中から体操の選手。一九五〇(昭和二五)年、三年生のとき国体に出場している。埼玉県体操協会、関東体操協会の理事長、全国高校体育連盟体操部の委員長などを歴任。日本体操界の草分

けの一人である。

前一人と同期の川合敏三も教育者。所沢市立山口中学校など同市内の中学校で教壇に立つ。一九八二(昭和五七)年から富岡中学校など三校の校長を務めたほか、所沢市教育委員会などで教育次長(一時教育長代理)などもしている。定年後の一九九二(平成四)年から四年間、所沢市民武道館館長を務めた。

梅沢定彦(高4)。教員生活のあと、一九六四(昭和三九)年、学校法人所沢文化幼稚園の理事長に就任。現在は六つの幼稚園を経営している。現在までの卒園者は約三万人余り。付属施設の雑木林を生かした自然観察園では、清流の宝石ともいわれている国の天然記念物「ミヤコタナゴ」の繁殖に成功、保存活動を続けており、同じ観察園で、毎年初夏にホタルを大量に発生させて公開し、自然の大切さを訴えている。県私立幼稚園退職金財団理事長なども務めている。

青木雄二郎(高4)。一九五七(昭和三二)年NKK(日本鋼管)入社。以来三十五年間同社の船舶海洋部門を担当。一九九二(平成四)年エヌケーケー総合設計会社の社長に就任。ICMES(国際マリンエンジニアリング学会)の日本代表委員もしている。

伊藤継善(高4)。一九五七(昭和三二)年

三井銀行入社、一九八九(平成元)年常務取締役で退職。その後さくらカード社長などを務め、さらに系列企業の監査役につく。経営哲学学会会員で『支店長の行動学』などの著者がある。

肥沼正之助(高5)。一九六一(昭和三六)年肥沼商店の専務取締役になり、オフィス家具会社の社長を続けている。一九八九(平成元)年所沢西ロータリークラブ会長を務める。

深田繁(高5)。司法書士。一九七一(昭和四六)年深田繁事務所を開設して、司法関係で活躍。一九九三(平成五)年から所沢簡易裁判所の民事調停委員をしている。

鈴木邦治(高6)。一九六〇(昭和三五)年外務省に入省、グアテマラ、ニカラグアの各大使館の参事官を歴任、一九九四(平成六)年からポルトアレグレ総領事を務めた。そして一九九七(平成九年)十二月、南米エクアドルの特命全権大使に就任した。

河野伸夫(高6)。県立所沢商業高校など、主に県西部の高校で教諭、教頭、校長と、あわせて三十八年間務め、一九九六(平成八)年に退職。所沢商業高校では野球部長として活躍。一九七六(昭和五一)年と一九七八年には、同校野球部を甲子園の全国大会に出場させた。埼玉県高野連会長なども務めており、

現在は所沢市教育委員。

遠山眞平(高6)。元NHK記者。一九五八(昭和三三)年入局。NHK浦和放送局を中心に社会部系の事件、話題の取材を続ける。一九六三(昭和三八)の狭山事件、一九八八

(昭和六三)年の宮崎事件(連続幼女誘拐殺人事件)など、戦後埼玉県内で起きた大きな事件をたびたび手がけている。一九九五(平成七年)退職、入間市博物館館長に就任した。

三芳義臣(高7)。神官。元所沢神明社宮司。一九五九(昭和三四)年、所沢市役所に入り、市民相談室長、広報課長などを歴任。一九八七(昭和六二)年、退職後は神職に専念した。

田中章介(高7)。新潟大学経済学部教授。川高時代はサッカー部で活躍。一九六一(昭和三六)年、経済企画庁に入り、総合計画局長、国土庁計画調整局長など国の要職を歴任して一九九四(平成六)年退官。一九九五(平成七)年から新潟大学経済学部と同大学院で、日本経済と経済政策の教授をしている。

斉藤博(高9)、所沢市長。一九七一(昭和四六)年、所沢市議会議員に初当選して以来、市議二期、埼玉県議を三期務め、一九九一(平成三)年所沢市長に当選、現在二期目。県西部の所沢、飯能、狭山、入間の四市で作っ

ている県西部地域まちづくり協議会の会長を務めるなど、役職多数。

鈴木宮夫(高10)。埼玉県出納長。一九六

県指定天然記念物の市内並木のくすの木の幹周りは、一九七七(昭和五二年)と十五年後の一九九二(平成四)年の記録がある。この数値をもとに前回と同様の方法で試算すると次のようになる。

一九七七年 四〇・二〇

七八・七から八一・六年

一九九二年 五〇・一〇

九五・五から九九・〇年

この十五年の間に年平均では〇・九五センチ(年輪幅)生育している。

もし仮にこれに「大宮」の数値を当てはめれば十六・八から十七・四年経過したことになる。つまり、「大宮」に比べて十五年で一・八年から二・四年の差異が生じている。九十年では十・八から十四・四年の差が出ることとなる。

次に、私が川越高校でお世話になったのは昭和四十年代のことです。その頃生物部の諸君とともに幹周り・枝張り・高さを記録し、後輩に伝えるよう依頼したことがある。嬉しいことに、これが途切れながらも同じ方式を守って生物部報「むらさき」に続いている。その中で一九七九年(昭和五

川越高校のくすの木④

二(昭和三七)年、埼玉県庁に入り、人事課、学事課、地方課、住宅総務課などに勤めたあと、新都市建設局副局長、政策企画監、地域振

四)年の「むらさき・一九号」の記録を引用させて頂く。この計測は前年(一九七八年)になされたものと推定する。そうだとすれば、今年でちょうど二十年経過していることになる。この記録によると、太い方の地上一筋の幹周りは三〇・八八と記されている。この度の胸高の幹周りは四〇・五〇、地上一筋では四〇・五八であるから、二十年間に七〇センチだけ生育したのである。

上と同じ計算をしてみる。川越高校のくすの木の年輪の幅は、大宮産の樟材に比べて小さく、二十年間の平均で〇・五六センチとなる。そこで、川越高校のくすの木の幹周りに両方の年輪幅を当てはめて計算してみると、

「大宮」の実測幅(〇・五八から八二)

で計算すれば八四・三から八七・四年

「並木」での推計幅(〇・九五)で計算

すれば七五・四年

「川高」での推計幅(〇・五六)で計算

すれば一三〇・二年

となる。(元本校教諭 愛川敬武)

興局長など県庁内の重要なポストを歴任して知事室長になる。そして一九九八(平成一〇)年四月出納長に就任。県三役の立場で、埼玉県の将来を見つめながら活躍している。

三上邑男(高11)。結婚式場・晨麓苑の経営者。一九六六(昭和四一)年晨麓苑を創業。今では年間四百組以上の結婚式や団体客をこなしている。所沢市食品衛生協会副会長をしているほか、同市体育協会理事長、同サッカ―連盟会長などもしている。

斉藤修(高19)。印章業・斉藤印舗経営者。一九八〇(昭和五五)年、所沢市民吹奏楽団を結成したのをきっかけに、社会教育やまちづくりにも多彩な活動をくりひろげている。同市器楽連盟理事長、社会教育委員など、役職多数。

小島寛(高27)。刀鍛冶。児玉町に在住。一九七五(昭和五〇)年一月柳川昌喜(源寿王直弘)に入門。一九九六(平成八)年五代目「直弘」を襲名。今までに三百本以上の刀を作ったという。

西山淳次(高29)。創価大学卒。代議士秘書・公明新聞記者を経て、現在、埼玉県議会議員を務めている。

※

集まった資料は以上だが、このほか所沢市

茶業組合長関藤一(中47)、企業公社事務局
長高野一雄(高15)、所沢市議会議員鈴木康

久(高9)、同藤本正人(高32)ら、紹介した
いOBは大勢いるが、ここに名前だけに留め

させていただく。所沢市出身の芥川賞作家奥
泉光(康弘・高26)については、506頁参照。

上福岡・富士見・大井・二芳地区

わが町にこの人あり…母校の歴史と伝統を礎に、功績を残す。

東武東上線の上福岡・ふじみ野・鶴瀬・み
ずほ台駅をはさみ隣接している二市二町は、
広域的には「入間東部地区」として位置づけ
られ、昭和三十年代後半から、首都圏三〇*
圏内のベッドタウンとして、急速に宅地開発
が進み、農村地域から住宅都市へと大きく変
貌を遂げた地区である。旧住民と新住民が交
差する中、多数の逸材を輩出している。その
中から、地域に根ざして活躍し、また顕著な
功績を残しているOBについて、各分野別に
紹介することにする。

〔行政〕

初めに「行政」の分野であるが、富士見で
は、一九五五(昭和三〇)年九月三十日、鶴
瀬・南畑・水谷村の三村合併後の行政の歴史
を語るに欠かせない人物として、当麻憲之
(中7)と加治幸輔(中20)がいる。二人は、

新河岸川をはさんで、優秀つけがたい熾烈な
選挙戦を展開し、おたがいに地方公共団体の
長として、二期八年にわたり政権を担当した。
その間、加治幸輔は「町制施行」にたずさわ
るなど、転換期の地域の発展に多大な功績を
残した。

また、当麻憲之も人口急増が続く中、行政
施策を積極的に展開し、その功績は高く評価
されている。

次に、国家公務員では、荒居茂夫(中36)
がいる。東北帝国大学(現東北大学)で物理
学を専攻し、一九四九(昭和二四)年六月に
警察庁科学警察研究所に就職した。そこで、
電子線による固体、ガスの電子状態の研究に
専念するとともに、電子のエネルギー損失の
研究により理学博士の称号を得た。また、声
紋による個人識別法の開発で科学捜査の推進

に関わる業績も残した。現在は、社団法人未
踏科学技術協会に籍をおいて裁判における科
学鑑定に従事している。

大沢正臣(高1)は長年にわたり、参議院
事務局に勤務し、このたび参議院参事として
の職務に対して勲章を授かったところである。

田端一晴(高20)は、早稲田大学を卒業後、
父と同じ警察官の道を歩み、埼玉県警察本部
に就職した。交通部交通指導課の主席調査官
として、県内で発生した凶悪なひき逃げ、当
たり屋、暴走族などの事件を捜査する特捜の
総括責任者として、人々の安全な生活を守る
ために活躍した後、現在秩父警察署の副署長
を務めている。

地方公務員としては、黒田充彦(高11)が
あげられる。富士見市役所で議会事務局長な
どの要職につき行政の発展に貢献している。

上福岡では、福岡河岸船問屋福田屋一二代星野仙蔵(五郎・中10)は、旅順工科大学を卒業後、満鉄に入社。敗戦後引き揚げ、東京ガス等の勤務を経て、会社を設立し社長となった。そして、一九四九(昭和二四)年に第一三代福岡村村長に初当選。造兵廠跡地活用では、自ら先頭に立って国会、大蔵省へ陳情に赴いた。

なお、東京調達庁交渉で役人たちを狼狽させた話は有名である。一九五二(昭和二七)年退任後も、旧造兵廠跡地活用運動に協力を惜しむことなく努力した。

また、玉田共瑞(中45)は、卒業後、土地改良区理事として地域の発展に努力した。その後、町議会議員を経て、県議会議員となり連続五期の当選を果たした。各常任委員長などを歴任し、副議長から一九九二(平成四)年には議長に就任した。

一方、自民党埼玉県連では幹事長代理、総務会長などの要職に就き、新河岸川の大規模改修計画に尽力した。

大井町では、駒井忠光(中31)が村の助役、村長そして町長として、長きにわたり行政のトップとして手腕を発揮、行政の発展、充実に尽力した。バラの花が大好きで自宅に五〇株のバラ園がある。役場にもバラ園を作り、

バラ町長として当時の新聞にとり上げられた。

三芳町では、荻島吉三郎(中31)は、一九六三(昭和三八)年四月から一九七一(昭和四六)年十二月まで長年にわたり、三芳町の収入役として行政の発展に貢献した。現在、不動産業、(有)三愛商事の役員をしている。

【教育】

続いて、「教育」の分野について、富士見から順次紹介することにする。

まず、米寿を迎えた木下正平(中26)は、この地区内の三芳中学校長などを務めた功績で、教育功労者として「高齢者叙勲」の栄誉を授けられた。

また、三芳中学校在職時に作詞した校歌は、三十余年経過した今なお、生徒たちによって愛され、歌い継がれている。養護教育推進の一助にと、十年間にわたり教材備品の寄贈を行うなど、その功績は多大なものがある。この篤志に対しては、富士見市から幾度となく表彰を受けている。

次に、岡田(旧姓井上)次郎(中36)は、坂戸市出身であるが管内の小中学校で教員生活を送り、上福岡市並びに富士見市で小学校長を務めた。

退職後は、市の体育協会の役員として体育振興に努め、埼玉県公立小学校長会の理事を

務めるなど、教育振興のため多年にわたり尽力した。

増田登(中40)は早稲田大学を卒業後、東京都の公立小中学校の教員、小学校長として長年にわたり学校教育の振興に尽力した。また、「望ましい学習態度の形成」の研究などで成果を上げ、「迷いをふっ切る父親学」などの著書もある。

川高になってからでは、細谷哲夫(高3)が、明治大学を卒業後、北足立教育事務所管内で小中学校長を務めた後、生まれ故郷の富士見に戻り、水谷、みずほ台の小中学校長を歴任、学校教育の推進に尽力した。ボランティア活動にも意を注ぎ、現在、保護司として活躍するとともに、教育委員を務めている。

水村和雄(高4)は、和光市内の小中学校長を務めた後、新座市の教育委員会に入り、学校教育部の次長として教育行政の発展に指導的役割を果たすとともに、市内の小中学校として個性を生かした思いやりのある教育の推進に努力した。

退職後は、幼稚園長として幼児教育の指導普及に努めた。

そのほか、川越出身である木藤隆太郎(高11)は、埼玉大学を卒業後、富士見市内の小中学校で教員生活に入り、以後、市の教育委員

会の指導主事を経て、現在、市内の中学校校長として教育の進展に努力している。

また、木藤が教諭時代生徒であった山崎志郎(高28)は、東京大学、同大学院に学び、福島大学経済学部助教授を経て、現在は、都立大学経済学部で助教授として日本経済史を講義するなど活躍している。

上福岡では、篠沢輝郎(中31)が、一九三二(昭和七年)、満州国建国の折、進路を外地に求め、京城師範学校に入学。卒業後、十二年間の朝鮮での生活を経て帰国。以後、入間管内の小中学校に勤務し、校長を務めた。また、上福岡市、鶴ヶ島市の教育長を歴任し、勲五等双光旭日章を受けた。その他、県の「文化ともしび賞」も受賞している。

現在、歴史民俗資料館の館長として活躍している。

続いて、日出間義男(中34)は、埼玉師範学校(現埼玉大学)を卒業後、教員生活に入り、小中学校長を歴任した。退職後、上福岡市教育委員会委員長となり、教育行政に貢献し、従五位勲五等双光旭日章を授けられた。

また、弟の日出間房寛(中37)は、陸軍士官学校に入学。沖繩戦で若くして戦死した陸軍少佐であった。

大井では、金井塚本次(中39)が、日本大

学を卒業後、教員生活に入り、入間教育事務所管内で中学校長として活躍した。また、入間地区中学校長会会長としても、教育の発展充実のために尽力した。川中在校時は、相模部創設に参画した。

また、永林惇(高16)は、早稲田大学、同大学院を卒業後の一九七三(昭和四八年)、大東文化大学に就職した。現在は、経済学部の教授として活躍している。今は、経済学の研究に時間を費やしているとのことである。

三芳では、細谷健治(中29)が、東京理科大学を卒業後、教員生活に入り、私立城北学園、城北高等学校・中学校で副校長を務めた。退職後は、住まいのある大井町で、教育委員会委員長として教育行政の発展充実のために尽力した。

高野進(中47)は早稲田大学を卒業後、教員生活に入り、地区内の三芳、大井で中学校長として教育行政の振興に努めた。その間、県校長会の理事などを務めた。

退職後は、大井町で人権擁護委員として活躍している。

続いて、窪田祥廣(高6)は、日本大学、同大学院で著名な教育史家と巡り会い、以来、日本の近現代教育史の研究を志した。現在は、日本大学文理学部の教授として活躍している。

また、教育史学の分野を中心に幾多の論文を発表するとともに、多くの歴史的編さん事業に参画し、近現代教育史に関する執筆活動を行ってきた。その結果、今日、埼玉県における教育史研究の第一人者としての地位を築いている。

主な著書には、『日本近代教育百年史』『埼玉県教育史』『三芳町教育史』等がある。

次に、小野澤政男(高7)は、埼玉大学を卒業後、高等学校をはじめ県教育局の職員として、教育行政の振興に努め、川口工業高等学校の校長を最後に定年を迎えた。

【産業・経済】

次に、「産業・経済」の分野について、富士見から順次紹介することにする。

まず、山田友七(中35)は、戦時中において陸軍東部軍司令部の経理をしていた。終戦を迎えしばらくしてから、読売巨人軍の本拠地である後楽園スタジアムに就職した。その後、才能を遺憾なく発揮するとともに重役の要職につき、専務として腕をふるった。

小杉雄(中38)は、東京大学工学部へ進み、専門分野として機械工学を学んだ。卒業後は、鉄鋼産業の大手である日本鋼管に就職し、勤務時代前半は技術部門、後半は調達、営業等の管理職として手腕を発揮した。現在は、賃

貸住宅等の経営者の生活を送っている。

また、時田佐左衛門(中40)は、稲作と酪農の混合農業に従事するかたわら、各種組合の役員を積極的になした。そして、一九八三(昭和五八)年五月から一九九三(平成五)年五月まで入間東部地区農業協同組合の組合長を務めた。その間、埼玉県内の農協でははじめに農協全支店に現金入出機の導入を行うなど、さまざまな営業施策を展開し活躍した。次に、大久保義海(高6)は、代表取締役として老舗の酒屋を経営するかたわら、富士見ロータリークラブ、パスト会長として、東南アジアの恵まれない子どもたちにも「人並みの教育を」と、寺子屋学校建設のためのボランティア活動に積極的に取り組んだ。富士見市商工会副会長としても活躍している。

続いて、坂間正衛(高10)は、明治大学を卒業後、一九六八(昭和四三)年に地元地域の水子に坂間税理士事務所を開設し、公正な税の申告のために地域納税者の力となっている。また、同期の野崎秀一は、(有)野崎商事の役員として事業を推進する一方、大久保義海らとともに、富士見ロータリークラブの一員として活躍している。

山田勲(高21)は、早稲田大学理工学部で建築設計について学び、民間の建築設計事務

所を経て、一九九一(平成三)年に山田都市建築事務所を開設した。主な業績は、富士見市庁舎の増改築など公共事業の設計業務が中心となっている。現在は、日本建築家協会埼玉部会等の理事を務め、建築設計の仕事並びにボランティア活動を通じて、地域のまちづくりの推進に寄与している。

その他、高校時代野球部であった吉川一行(高22)は、亡き父の不動産業を継ぎ、青年実業家としての道を歩んでいる。現在、(株)吉川産業の代表取締役として手広く経営手腕を発揮している。

また、先に紹介した小杉雄の子息である小杉徹(高23)は、航空大学校を卒業後、日本航空にDC-8航空機関士として入社。現在は、副操縦士として世界を飛び回っている。

また、知久博(高25)は、法政大学法学部を卒業後、多彩な職種を経験し、現在は川越市に知久司法書士事務所を開設し、登記関係の仕事で活躍している。

上福岡では、西川賢次(中33)は、(株)東京電力で役職に就任。退職後、その技術、経験を生かし、関東電気保安協会埼玉支部で活躍した。

続いて、星野仙蔵(中10)の弟の長男である星野重光(中36)は、東北大学を卒業後、

旧川越電気の社長となった。退任後も地元産業の発展に尽力した。

次に、塩野秀郎(中38)は、陸軍士官学校に入学。将校として奮戦、終戦と同時に異国の丘シベリアに抑留された。一九五八(昭和三一)年復員後、(株)西野通信工業に入社。電子機器分野において活躍した。

また、日出間敏一(中40)は、多賀高等工業専門学校(現茨城大学)応用金属科を卒業後、理研ピストリング熊谷工場(現リケン)の技術部長、工場長として社に貢献し、その後は(株)三信研機の社長として技術と経営にたずさわった。

さらに、坪井博(中41)は、参議院速記者養成所を卒業後、朝日新聞社に入社。記者、編集部において活躍し、特に新聞編集のコンピュータ化の先駆者であった。

そして、日出間迪夫(中44)は早稲田大学理工学部応用金属科を卒業後、(株)新潟鉄工所に入社。鑄造、機械、内燃機事業部等の部長、技師長を務めた。現在、OBとしてまた地域社会における自治会長等、各種役員、委員として活躍している。弟の日出間哲郎(高2)は、埼玉大学を卒業後、中学校教諭より厚生省関係の青少年教育にたずさわわり、「青年の船」で船上セミナーを行いながら東

南アジアを歴訪した。現在は、中部電力系列の会社で役員を務めている。

日出間和貴(高33)は東京外国語大学を卒業後、産経新聞社に入社。支局より本社編集部の記事となり活躍、特に、スポーツ関係においては海外取材が多く、紙上で「文責・日出間」の名を数多く見受けられることができる。

大井では、高校時代新聞部であった村山利喜(高3)が、中央大学法学部を卒業後、税理士試験の難関を突破し独立、現在は(株)MMCシステム代表取締役社長として、東奔西走の毎日を送っている。

続いて、塩野賀一(高5)は一九五三(昭和二八)年高校卒業以来家業に従事し、現在は(株)塩野運送代表取締役として、誠実・安全・信用第一を旨とし、顧客の引立てを受けている。また、埼玉県トラック協会川越法人会の理事として活躍している。

一年後輩にあたる金井塚清(高6)は、明治大学を卒業後、一九六四(昭和三九)年一月、豊島区西池袋に税理士事務所を創設し、現在は東京税理士会豊島支部の支部長として活躍している。人生楽しく明るくをモットーに、仕事、奉仕活動、趣味にエネルギーを三等分して頑張っている。また、同期の塩野芳雄は(株)キハク堂「えり美」の代表取締役

として、鶴瀬駅西口前で日本文化の伝統である着物の店「呉服店えり美」を経営している。

一方、住まいのある大井町では教育委員として教育行政に貢献した。現在は、富士見ロータリークラブに所属し、地域発展のために「大道芸チンドンによる交通安全運動」をはじめとするボランティア運動を展開している。なお、同クラブの会長としても活躍した。

さらに、同期の隈川(杉田)毅は、所沢市柳瀬の出身であるが、明治大学を卒業後、KDDに入社。その後、家業のハンズクマカワ(金物店)を経営している。一方、現在は大井町の教育委員、商工会の副会長として地域のために活躍している。

また、新井清(高10)は地元特産の狭山茶を製造販売するかたわら、大井町教育委員会委員長として、長きにわたり教育行政の発展充実のために尽力している。その他、各種団体の会長も務めている。

戦後生まれの榊原和夫(高19)は、中央大学を卒業後、税理士の道へ進み、現在、川越街道沿いに税理士事務所を開設し、地域納税者の力となり活躍している。

そのほかには、町のPTA連合会の会長を務めるなど、教育行政の進展に寄与した西山恵造(高21)があげられる。

三芳では、松本勝治(中31)は、地元特産の狭山茶を製造販売する一方、町の教育委員として教育行政の発展充実尽力した。

次に、荒田光男(高3)は、早稲田大学理工学部で応用化学を専攻した後、(株)日産化学工業に入社。一九八五(昭和六〇)年には本社部長を務めた。一九九三(平成五年)には、(株)日産ガードラー触媒で常務・技術部長として活躍した。退職後の現在は、地域コミュニティでの国際交流ボランティア活動に参加している。

終わりに、川高体育の名物教師として名を馳せた松本利雄先生の子息である松本長治(高17)は、「かみとめ幼稚園」の経営者として幼児教育の充実に努める一方、東入間青年会議所の理事長として、明るい豊かな町づくりのため地域に根ざした活躍をしている。

【医療】

続いて、「医療」の分野であるが、昭和三十年代を迎えるまでは、公的医療機関は各地区で数えるほどしかなかった。そのような時代において、住民の健康保持増進のために重要な役割を果たしていたのが「開業医」である。彼らは、交通手段がままならなかった時代に、患者の緊急な要請に対し、雨の日も風の日も、地域の人々の健康を守るために、喜

んで往診にかけつけたのであった。このように、地域医療の先端を担って活躍し、貢献した医師として、富士見では、晩年において糖尿病の研究を熱心にし、成果をあげた横田監物(中38)、上福岡では、内科医として地域に貢献した金子三喜三(中30)、また三芳では、内科・外科・小児科まで幅広い診療を行い、住民から厚い信頼を寄せられていた忽滑谷繁郎(中35)らがあげられる。

なお、大井では、新座志木中央総合病院の院長を務め、現在、出生の地で父の遺志を継ぎ、内科医院を開業する一方、入間東部医師会会長として地域医療の発展に貢献している島田早苗(中46)がいる。

次に、日高市出身である長澤徹郎(高13)は、日本大学医学部に学び、十三年間の大病院生活を経て、一九八一(昭和五六)年大井町に長澤外科胃腸科病院を開業。以来、院長として地方医療の発展に貢献している。

また、西山安吉(高19)は、東洋大学で接骨について学び、地元の大井に西山接骨院を開業。院長として接骨院の舵取りをする一方、町の教育委員として教育行政の発展にも寄与している。最近では、専門学校講師として後進の指導にもあたっている。

そして、塩野元美(高24)は現在、日本大

学医学部の助教授として活躍し、心臓外科の若手ホープとして期待されている。

【宗教・芸術】

宗教関係では、水宮三衛(中38)は、志木の敷島神社、富士見の水川神社、八幡神社などの宮司として、人々の願い事に対し、祈りを通じて幸いをもたらすべく奮闘している。また、長く人権擁護委員としても活躍している。

深谷雅良(高26)は、大正大学を卒業後、仏門に入った。一九八六(昭和六一)年には、父の突然の死に遭遇し、若くして真言宗智山派水光山大応寺の住職となった。現在は、多くの修業僧を育成する一方、夏休みには地域の子供たちを寺に招き、心の触れあい、体験学習を通じて「規則正しい生活習慣」の育成に努めるなど、地域に根ざした活動を続けている。PTA活動にも積極的に参加し、富士見市PTA連合会の会長も務めた。

芸術関係では、大井町に小野寺優元(高21)がいる。東京造形大学彫刻科に学び、彫刻家への道を歩んだ。大学在学中の一九七四(昭和四九)年、第二八回新作展に初入選。一九七八年の第四二回展では、新人作家賞を受けた。そのほか、一九八八年横浜市丘の造形展では、優秀賞を受賞するなど活躍した。作品は、日本文化の底に流れる自然崇拜の美

意識を根幹に、御影石を素材として制作している。一九九四(平成六)年の第一二回アジア競技大会では、広島ネオンシティ環境アドバイザーグループのメンバーとして記念モニュメント群の制作にたずさわった。現在、小野寺優元都市芸術研究所主宰者として、地域の街づくりへの参加など幅広い活動を繰り広げている。

その他、古橋正夫(高14)は立正大学を卒業後、シナリオライター、演出家として放送界で活躍して三十余年になる。その間、歴史ものはじめさまざまな演出に取り組み、今、福祉や老人問題など高齢化社会をテーマにしたラジオ番組のディレクターとして活躍している。なお、(有)シゲナスフォー代表取締役として宣伝ビデオの制作も手がけている。朝倉祐次(高23)は、中央大学を卒業後、シネマの世界に心ひかれ、今は亡き西村晃主演の映画『またぎ』の助監督を務めるなど、活躍している。

終わりに、金子勝則(高25)は、筑波大学を卒業後、出版社などを経た後、川高出身の美術家である長沢英俊、関根伸夫らの知遇を得て、川越で画廊を開いている。現在、(株)川越画廊の社長として「現代が一番おもしろい」をモットーに頑張っている。

志木・和光・新座・朝霞地区

伝統的に、都会的センスとスマートさをもったタンテイナーな卒業生が多い。

この地区は「東上線上り」と呼ばれ、東上線沿線に位置し、行政区域は北足立に属する。

中学30回までの卒業生

その昔、東松山市の脇本陣、吉田家から志木の川越藩御用達廻船問屋、井下田家の第七代当主として婿入りした井下田四郎(中11)がいる。第二次大戦以前は志木町町議、政務を担当する名譽助役、また在郷軍人会、消防団等々の役員を歴任した。戦時中は、町村合併による志紀町長、戦後再び町村分離した志木町長、宗岡村との合併により新たに発足した足立町長に就任した。なお家業では、志木通運社長、東上通運社長を務めた。三人の子息は大戦中、それぞれ、館山海軍砲術学校教官(海軍大尉)、松島海軍航空隊渡洋爆撃隊搭乗員(海軍中尉)、回天水中特攻隊隊長(海軍少尉)として活躍、「井下田の海軍三兄弟」と呼ばれ、町長として面目をほどこした。

朝霞町町長、朝霞市助役を務めた人物に、

大畑庄一郎(中17)がいるが、大畑家は朝霞市に代々続く名家であると同時に製粉業の草分けである。

火野葦平の小説『黄塵』に自動車部隊の隊長として登場するのは、森田長一郎(中24)。旧志木町時代に学務委員、保護司、在郷軍人北足立南部連合分会長を務め、陸軍中尉、また嘉永年間創業の砂糖・乾物商「角長商店」の店主であった。

志木町における明治以来の呉服商として、近隣に名の知られた「和泉屋呉服店」の主人であるかたわら、選挙管理委員長を長年にわたり務めたのが関根英太郎(中25)である。

並木磯(中26)、嶮(中27)、九(中36)の三兄弟。長兄は東京工業大学一期生で、卒業後王子製紙に入社、重役となった後、本州紙器の社長となった。次兄は中学卒業後日本力行会で学び、ブラジルに渡り農場経営に成功。

末弟允は日華事変の拡大に伴い、中学二年で海軍に転じ渡洋爆撃隊の搭乗員となり、若き血潮を燃やした。

書道家として著名な、宮原祥一(中30)。東京美術学校で書道を研修し、毎日書道展、日展等が入選、現在は東京書芸学園講師として後進を指導、また、大松林書道院常任理事、東京書道教育会理事である。

現在新座市で町内会長ほか各役職で活躍中の金子満彦(中30)は、中学、立教大学時代は陸上部のプリンターだった。卒業後、三菱重工に入社、資材部長より関連会社に出向、取締役で退社した。

鈴木正将(中30)はクラス担任、吉村勝敏先生の影響から先生の歩まれた道をたどった。すなわち、先生の母校、広島高等師範、広島文理科大学(現広島大学)で動物学を専攻、広島大学教授の後、アメリカ、ドイツへ留学した。ザトウ虫類、および蜘蛛類研究の学術報告は百編にも近くなる。そのほか『原色動物大図鑑』『日本産土壤動物検索図説』をも執筆している。現在、日本動物分類学会名譽会員、日本蜘蛛学会名譽会員、広島大学名譽教授である。

中学31回から47回まで

中学時代陸上部主将の神谷東太郎(中31)は卒業後、広大な所有地で農業に従事していたが、幼児教育の必要性を痛感して、自ら園長となり「柿の木幼稚園」を創設、今に至る。

その間衆望を担い、新座市議会議員を三期、市長一期を務めた、新座市の名家である。

井下田慶一郎(中35)は、父が進学を希望していた台湾学校(桂太郎が明治天皇の御内帑金により設立した台湾で働く人材の養成を目的とする)の後身である拓殖大学の中国語科に入学したが、第二次大戦が始まり半年短縮にて海軍第二期兵科予備学生として入団、台湾東港海軍航空隊、館山海軍砲術学校を卒業、海軍少尉に任官、直ちに戦地勤務。一年後に館砲校教官を命ぜられ戦地より帰還し、後輩学徒兵の術科教育にあたる。海軍大尉にて終戦復員、商店を自営し今日に至る。この間、志木青年会長、新座地区連合青年会長、北足立郡連合青年団副团长、県連合青年団理事を務める。なお、志紀町助役、志木町、足立町議員を歴任した。当時二七歳から三三歳の若さであった。この時期追放解除された父四郎は、再び志木町長を務めており、子息慶一郎が町会議員であったので、人は志木の

「父子鷹」と呼んだ。また志木法人会副会長、拓殖大学学友会関東連合会長、埼玉県支部長等歴任、現在は志木市土地開発公社理事長、志木市都市計画審議会委員、志木初雁会長等多数の役職につき、老いる間なしの状況である。

現在新聞販売店経営の神山博光(中36)は法政大学法学部に進み、終戦後、公選制第一回の志木町長選に出馬し、一敗地にまみれた。

その後二上吉之助氏が志木町長に当選するや、請われて助役に就任したが、町議会との対立(町立志木商業学校廃校、その校舎の志木中学校校舎への転用)により、三上町長とともに在職わずか三か月余りで退陣、その後志木市人権擁護委員を数期務めた。

室田淳郎(中37)は名門自動車教習所として名の高い、レインボーマータースクールの社長だった。北海道大学出身の元海軍技術中尉。

切り絵画家として有名な池田要(中40)は、埼玉師範(現埼玉大学)を出てから教諭十八年、教頭六年、指導主事三年、校長十一年と、一貫して中等教育に献身、現在は退職校長会の朝霞地区会長を務めている。また、切り絵は一流で内外の高い評価を得ている。

歯科医師の荻島浩(中43)は、一九九八(平

成一〇)年五月に発足した新座初雁会の副会長。生粋の土地っ子、現在地で長年にわたり歯科医院を経営し、診療に従事している。世界中、至るところに足跡を印し、その住民のみならず、動植物とまで語らった行動的国際人としての、国際派ボランティアとして著名である。

浅田光二(中43)は戦中の中学校生活を経て早稲田大学へ進学。在学中は、学生共済会副幹事長として活躍。家業(肥料商)に従事した後、損害保険の代理店として独立、現在に至る。現志木市選挙管理委員長の要職にあり、志木初雁会副会長でもある。

同期の内田幸男(中43)は東京大学医学部卒業後、東大助手、徳島大学助教授、東京女子医科大学教授、同大付属病院長と医学教育に尽くした。眼科が専門で、日本眼科学会名誉会員、東京女子医科大学名誉教授、同大学専務理事。著書も多数ある。

政界では並木利志和(中44)がいる。中学卒業後農業に従事、のち幼稚園を経営、現在に至る。新座市市議会議員を経て、埼玉県議会議員として地域のために活躍している。

細田金治(中45)は東京高等工芸専門学校建築科(現千葉大学工学部)を卒業してから特別調達庁、防衛庁建設本部、防衛施設庁建

設部と、一貫して防衛庁勤務。退官後は(株)奥村組東京本社営業部長を務めた。現在は志木市土地開発公社理事として奮闘努力中である。

早稲田大学出身の岡野静二(中47)は同大学院博士課程を終了、早大教授、跡見学園女子大学教授、副学長を歴任。現在は早大人間科学部教授として後進の指導に力を注ぐかわら、ボランティア活動の在り方について県内への普及に努めている。

郷土史研究家の神山健吉(中47)は東京教育大学(現筑波大学)出身。三十年間勤めた読売新聞社を定年退職後は、ベースボールマガジン社、東京読売サービス、読売エージェンシーに勤務。昭和四十年代半ばから郷土史研究にたずさわり、一九八四(昭和五九)年には埼玉県郷土文化会の副会長に就任。現在は志木市文化財保護委員長、志木市郷土史研究会長を兼ね、さらにコーラス活動でも活躍中である。

高校の卒業生

朝霞市出身で橋本日出松(高2)がいる。東京教育大学(現筑波大学)では言語学を学び、卒業後は日本経済新聞社に入社、日本初のコンピュータによる大新聞編集製作システム

の開発に貢献した。また朝霞市監査委員を務め、さらに外国語に堪能なところから国際交流に尽くし、現在米ミシシッピ大学南部文化研究センター研究員という要職にある。

志木市では横内洋(高5)。東洋大学を卒業後、足立町役場を経て学校事務職員となる。志木中、志木二中、新座市石神小学校と定年まで勤めた。その間、地区並びに県学校事務職員研究会の要職、県事務主幹・主査会会長等を歴任、同職の資質と地位の向上に努力した。現志木初雁会副会長として活躍している。

一期下に大木善男(高6)がいる。米穀商を営み、志木市町内会連合会会長、志木市土地開発公社理事等地域に貢献している。志木初雁会幹事でもある。同期の当麻康雄(高6)は、中央大学卒業後県庁入庁、川口県税事務所長、埼玉総合研究機構専務理事等歴任、現在埼玉新都市交通(株)取締役で、志木市土地開発公社理事、志木初雁会幹事を兼ねる。

一九五九(昭和三四)年川高が甲子園に出場した。その時の応援団長が、鈴木実高(高12)だ。今でも校歌、応援歌、エールのリードはさすが。志木市議会議員を務め、現在志木初雁会幹事。

一九九六(平成八)年に起こった北海道古平町のトンネル落盤事故のおり、NHKテレ

ビでもうい地質を解説、さらに全国の危険箇所を指摘し注目されたのが北海道大学教授、渡辺暉夫(高14)。北大出身の理学博士だ。現在札幌市在住。

法曹界の期待の星、武藤功(高18)は中央大学出身、弁護士、武藤総合法律事務所を開設、現在志木市人権擁護委員である。

忘れてならないのが多摩美術大学大学院出身の国際的彫刻家、関根伸夫(高13)だ。関根については「はつかり人物誌」参照。

和光市の卒業生

東京に隣接する和光市は、都内へ食料供給する農村から、戦後は理化学研究所の開設、そして文化と芸術の殿堂サンアセリアの完成によって文化都市に大きく変貌したのである。この和光市の英傑は、まず田中育三(中42)。中学では相撲部主将で活躍、早稲田大学卒業。和光随一の素封家。和光商事(株)社長で、和光ロータリー初代会長、和光市公平委員、丸山台区画整備審議会会長等を歴任した。

地元の篤農家に生まれた上原昭二(中43)は、その真摯な態度で地域振興に尽力。市議会議員五期、議長二年を始め、自治会長、小中学校PTA会長等の要職を務め、現在不動

産貸貸業を経営する。和光初雁会初代会長。

慶應義塾大学出身の細田金蔵(中47)は、

日立製作所勤務の後、(株)ホソグファアーネス

代表取締役社長、(株)細田興産取締役就任

あさひ成増会会長。現国際ロータリー二五七

○地区第二分区代理。人格識見人並優れ、その温和人柄と話術は他を引きつけずにはおかない。

柴崎育久(中48)は東京大学法学部卒業後

日本石油(株)入社。広報部長、東京地方支

いはそれ以上なのか判断しかねる。

しかし、仮に伊藤氏が五歳の時に六七

年目の苗、つまり自分より一二年上上の

苗を移植したとすれば、くすの木は芽生え

は明治三十一年のこととなる。佐々

木家の話と伊藤家の話は重なりあう。三本

のくすの木の樹齢と素性は伝え聞きが一致

するのはめでたいことで、両家で本家・本

元を唱えておられるのは微笑ましく、ただ

お聞きしていればよろしいこと。くすの木

だけが知っているのである。樟樹亭亭仰

止。

一八九五(明治二八年)、日清戦争の結

果台湾は日本に割譲されたが、翌年一月に

は台湾島民の叛乱があつて北白川宮能久親

王を長とする混成旅団が派遣された。同年

四月には総督府を置き民政に移管した。こ

の後は往来が盛んになり、台湾産のくすの

木が関東の各地に植えられた。埼玉県立第

三中学校創立はまさにこの時のこと、前の

言い伝えと一致するものである。
(元本校教諭 愛川敬武)

りの木もくのすく

前の二回にわたり、くすの木の計測値で樹齢の計算を試みたが、なかなかきちんとして採取したコアで、年輪を数える方法もあるが、やはり決定的な結果が出るものとは限らない。私は以前に、依頼されて実施したこともあるが、この手法は賛成できない。そこで再び言い伝えに戻つて考える。

まず、佐々木賢吉氏未亡人の話で、賢吉氏が六十七歳の頃、明治三十一年に自宅と川越中学校と御岳山とに実を蒔いたと伝え聞いておられる由。これはほぼ川越

中学創立の年に当たる。これが正確な伝え

聞きであるとするれば、まさに百周年記念の

年にその樹齢は百歳を迎えることとなる。

次に御岳山の伊藤泰吉氏の生家での伝え

聞きによれば、一八九九(明治三二)年生

まれの氏が、幼年時代に実生のくすの木数株を鉢に栽植し、その苗木を前記三か所に移植した由。この「実生の苗」が一年目なのか五年目なのか見当がつかないし、この「幼年時代」が四、五歳なのか一〇歳ある

⑤の木のくすの高校越川

店長を歴任。日石観光(株)社長を経て、一九九七(平成七年)退職。現役時代の業績に、エネルギー広報の意見広告の企画での朝日広告賞受賞、日本石油の「サンライズ」マークの開発等がある。百周年記念俳句大会の実行委員会の代表を務める。俳句に親しむきっかけは、川中時代の恩師・佐藤徳四郎先生との出会いにあつたという。

都市計画の専門家に柳下稔(高2)がいる。日本大学卒業後、東京都建設局に勤務。現在は三井建設(株)で活躍中である。

白子宿の商家に生まれた柴崎健治(高3)は早稲田大学出身。埼玉銀行(現あさひ銀行)入社、越生、坂戸支店長、東京法人部長を歴任。その後、(株)柴崎を設立、代表取締役就任、現在に至る。自衛隊朝霞駐屯地第一施設団懇話会初代会長、自治会会長等日々地域の振興に尽くしている。

歯科医師界の名門出身の相田俊孝(高3)。東京教育大学、東京医科歯科大学出身の歯科医。朝霞地区歯科医師会会長、朝霞地区歯科医師政治連盟会長を歴任。現在、朝霞地区寝たきり高齢者等歯科診療検討委員会会長として高齢者のためになる診療を目指して努力中で、歯科医師として地元民から絶大な尊敬を受けている。和光初雁会副会長。

柳下浩三大和町長を敵父にもつ柳下満(高3)は政治家を引き継ぎ、若くして市議会議員、議長に就任し地域の振興に尽力した。現在は後進の指導にあたっている。和光市教育委員、和光初雁会副会長。

市議会議員では田中秀之(高9)がいる。積水化学東京工場勤務、一九六六(昭和四一)年より市議会議員連続当選。「私は社会の矛盾を感じ市議会議員になり三十年以上になりました。苦しいこと、つらいことも多くありましたが、ひとつのことが実現できて住民のみなさんと喜び合えるのが一番楽しいことです。国民こそ主人公の社会実現もそんなに遠くはないでしょう」と、良識派市会議員として市民とともに活躍中。

環境問題を考慮に入れた農業経営・造林事業を行っている櫻井弘康(高12)は、駒沢大学出身の土地家屋調査士。地元小学校PTA会長、社会教育委員を経て和光ロータリークラブ会長。中国残留婦人の受け入れ、「埼玉北朝鮮の子供達を支援する会」の代表、また温かな心ある老人医療のあり方の探求等、地域に根差した活動を実践する社会派。和光初雁会事務局長。

「関東に敵なし」 高校陸上部の花形

志本市と朝霞市からは陸上の名選手が数多く出ている。以下は陸上部元主将伊得洋行(高15)の秘蔵する貴重な資料による。

志木中の韋駄天、三上政雄(高5)。中学時代まったくの無名だったが、高校に入学した一九五〇(昭和二五)、体育祭の一五〇〇mで彼は強豪先輩たちを尻目に、堂々優勝してしまった。開眼した三上は大坂の全国高校駅伝に二年連続出場、三年生の時はアンカーを走り、三位入賞を果たした。この年の関東大会では八〇〇mの成績を残し、卒業後は一九五八(昭和二三)年のアジア大会に競歩で出場している。

同じ志木中からは黒田栄次(高12)がいる。中学三年生で全国中学校放送陸上で一五〇〇mを四分二一秒で全国優勝。川高入学後は無敵を誇り、大宮での関東大会では一五〇〇m、五〇〇mに優勝、川高総合優勝に大きく貢献した。全国大会(国立競技場)においても一五〇〇m二位、五〇〇m三位に入賞、学校総合五位に入った。国体では五〇〇mで全国制覇をしているが、圧巻は日本選抜大会である。三分五九秒で二位、これは全国高校

ランキング一位、埼玉県新記録、そしてこの記録は十八年間破られることなく燦然と輝くのであった。東京教育大学(現筑波大学)に進学後は四年間箱根駅伝を走り、四年生の時大宮で開かれた日本選手権で一万mを二〇分一八秒で三位、惜しくもオリンピック出場を逸したが、一位はあの円谷幸吉選手だった。現在は川越総合高校教諭として後進の指導にあたっている。

朝霞中学からも陸上の名選手が輩出している。まず、小寺貞安(高8)。中学時代から長距離選手として著名であった。五〇〇m専門、二年生の県大会での一六分二秒二はこの年県ランキング四位、三年で一六分六秒と更新する。これは一九五五(昭和三〇)年、県高校一位の記録である。その後法政大学に進み、箱根駅伝、青東駅伝に出場、兵庫国体にも出場する。とくに神宮外苑の周回コース二〇・ロードレース東京選手権での優勝が光る。卒業後朝霞市議会議員を六期務め、現在朝霞幼稚園を経営する。

二期後輩に、橋本正彦(高10)がいる。中学三年の県大会で一五〇〇mで優勝、また県駅伝では最終区一五位から二位に一人こぼす抜きが記録に残っている。高校三年の県大会、八〇〇mを二分二秒五、一五〇〇mを四

分一〇秒で優勝した。立教大学に入った年のインカレ一五〇〇㍑を三分五八秒七で優勝、その年埼玉県の三〇〇〇㍑障害で優勝、富山国体に出場した。箱根駅伝は四年間走り、往年の勇姿はテレビ中継の合間に垣間見ることができ。現在朝霞市体育協会会長、フタバスポーツオーナー。

朝霞中出身でもう一人、須田秀夫(高16)がいる。中学校時代、二〇〇〇㍑で学徒大会、放送陸上県大会で優勝。高校時代は二五〇〇㍑四分七秒三(高校ランク二位)、五〇〇〇㍑一分一〇秒四(高校ランク一位)で山口国体出場。埼玉駅伝等各駅伝でそれぞれ区間賞を獲得している。立教大学進学後は箱根駅

大宮地区・その他

日に数本のSLとOBたちが渡った荒川鉄橋。今は快速電車がかるやかに。

荒川を渡って、指扇・馬宮(現大宮市)・平方(現上尾市)方面から、自転車や川越線で通学して、卒業後、その地域で活躍しているOB、および他の地区の出身者も含めて県外へ出て活躍しているOBは、多方面にわたっている。以下分野別に紹介したい。

【医学】

○「雨ニモマケズ 風ニモマケズ……」の詩人で童話作家、宮澤賢治の主治医、佐藤隆房(なかよき) (中7・栃木県那須出身)は、花巻共立病院長(現総合花巻病院)として、若くして亡くなった宮澤賢治の支えとなっていた。著書『宮澤

賢治』の序には「はじめは後輩であり、それから親友となり、逝きて畏友となった。」と記している。なおこの本の題簽は高村光太郎である(「はつかり人物誌」参照)。現在は子息の佐藤進氏が院長を務めている。

○在京初雁会会長、田中隆(中45・川越市出身・千葉県市川市在住)は、日本大学医学部卒業後同医学部の教授・附属板橋病院長を経て、現在客員教授(外科学)のかたわら、日本大学医学部同窓会会長・東京都医師会学術担当理事・日本医師会代議員として活躍している。

○上尾市平方に歯科医院を開いている秋山衛(中47・上尾市出身)は、東京歯科大学卒業後、東京慈恵会医科大学で公衆衛生学を専攻する。現在埼玉歯科医師会監事、国民健康保健診療報酬審査会委員などを務めるかたわら、地元青年団の野球監督をし、現在は北足立歯科医師会ソフトボールチームの監督。県大会で優勝するなど、地域で活躍している。

【学術】

○東京国際大学JSP客員講師、佐々木忠一(中32・入間市出身・東京都練馬区在住)は京都大学文学部卒業後、外務省通訳、文部省渉

外官、日本ユネスコ国内委員会専門職(文化担当)を経て、日本大学教授、国際ツアコンダクター旅行専門学院院长、ヒューマンアカデミー日本語学校長として活躍し、現在東京都教育庁生涯学習講師も兼任している。

○埼玉大学名誉教授(国文学)、俳誌「橘」を主宰する松本旭(中35・上尾市出身在任)は在校中に、飯田亮先生にひかれて国文学の道へ進んだ。東京文理科大学(現筑波大学)卒業後、浦和高校教諭、埼玉大学教授(同大学附属小学校長、図書館長併任)として子弟の教育にあたるかたわら、加藤楸邨について俳句の実作を始めた。著書『村上鬼城研究』など多数出版し、第一回俳人協会評論賞、埼玉文化功労者として知事表彰などを受け、一九九一(平成三)年勲三等旭日中綬章を受章した。俳人協会評議員である。

○オウム事件で名が知れ渡った「サリン」研究の国内第一人者、石倉俊治(高3・上尾市平方出身・千葉縣市川市在住)は東京大学医学部薬学卒業、同大学院博士課程修了。薬剤師・薬学博士で、東京理科大学教授になり食品衛生学を専攻した。新潟県阿賀野川の第二水俣病事件の際には、その汚染源の追究に活躍した。以来環境庁委員を歴任し残留農薬、ダイオキシンなど食品衛生の研究をした。著

書に『バイオ食品の驚異』『オウムの生物・化学兵器』など。

○レーザー濃縮技術研究組合専務理事、森岡昇(高3・東京都出身・小平市在住)は東京大学電気工学部卒業後、関西電力(株)に入社し英国留学した。三十年ほど前ニューヨーク事務所を設立して、関西電力初期の原子力発電所の開発に寄与した。一九八六(昭和六一)年同社支配人となり八七年現職につく。最近、電気代を安くするための原子レーザ法でウランを濃縮する新技術を開発した。

○元盛岡大学(教職専門課程)教授、山崎孝雄(高3・川越市三久保町出身・吹上町在住)は、中学時代から佐藤徳四郎先生の俳句班に入り徳門十哲の筆頭。國學院大学卒業後浦和高校教諭、NHK学園高校教諭を経て、一九八九(平成元)年盛岡大学助教となる。著書に『国文学の研究』(大修館刊)ほか国語学に関する著書数点あり。吹上町龍昌寺の代表役員であり、地元公民館などで講師をして、町の文化活動にも寄与している。

○正倉院宝物の保存、材質、技法など研究している永嶋正春(高18・上尾市出身・千葉県成田市在住)は、東京芸術大学大学院美術研究科(保存科学専攻)終了後、総理府技官(研究職)、宮内庁正倉院事務所を経て、現在、

国立歴史民俗博物館情報資料研究部の助教で、漆や赤色顔料の調査研究を行うことで日本歴史の一端が解明できるものと、研究活動を進めている。

【教育】

○与野市教育委員会教育課長、柴崎信光(高18・大宮市出身在任)は、國學院大学卒業後、最初は千葉県松戸市の小学校に勤務し、後に与野市の小学校、同市立教育センター、同市教育委員会指導主事、北足立南部教育事務所管理課主任管理主事、下落合小学校校長などを経て現職、明るい・楽しい・秩序ある学校づくりを目指している。

【官庁】

○元会計検査院事務官、小高利貞(高4・富士見市出身・浦和市在住)は、在校中は郷土部で民俗調査や遺跡発掘に活躍。早稲田大学商学部卒業後、会計検査院へ。現在(財)日本穀物検定協会の参与である。祖父は大正時代に川中の校医を務めた。

○社会福祉法人蕨市社会福祉事業団レインボ―松原所長、宝野昭次(高7・坂戸市出身・浦和市在住)は、明治大学商学部卒業後蕨市役所に勤め、在校中の排球部での経験を生かして、市役所や地域のママさんバレーの指導をし、地域スポーツ振興で埼玉県体育賞を受

賞した。

○埼玉県労働商工部工業振興課長、波多野肇(高13・大宮市出身・川口市在住)は、中央大学法学部卒業後、埼玉県庁へ入庁し、現在に至っている。

○元林野庁東京営林局長、小峰正(高18・大宮市出身・東京都杉並区在住)は、東京大学法学部卒業後農林省へ入省し、前記東京営林

これも柔道部

中神定衛(中41)

昭和十二年入学。運動部に入ろうと、憧れの庭球部室を訪ねたら、顔見知りの先輩が「敏捷で運動神経がなければ、無理だなぁ」と嫌みたっぷりという。途端に嫌気がさしてふと横を見ると、「どうだ、柔道部は」と老けた顔の上級生がいう。この温顔が気に入って「是非、お願いします」と言ってしまった。ところが、身体も小さく力も得意技もなく、結局は、練習要員の員数でしかなかったが、こちらにしてみれば、寒稽古や、猛練習に音を上げたものだった。

でも予想通り、あの梅沢という上級生はいつも優しく、前田先生も無言の指導で、居心地の良い部生活だった。受験勉強を理由に三年限りで退部したが、その後入った郷土研究部では、記憶に残るような活動は何もない。せに、後輩に囲まれて上級生ぶった写真が残っているのが、何としても不思議でならない。

局長を務めた後、一九九五(平成七)年より生物系特定産業技術研究推進機構の監事である。

○真岡税務署統括国税徴収官、清水晴雄(高22・大宮市出身在住)は、明治大学法学部卒業後、浦和・川越・大宮・所沢税務署、関東

信越国税局を経て、真岡税務署に勤めている。そのかたわら、在校中野球部で培った力を地域の少年野球の指導にあて、現在浦和市スポーツ少年団指導者協議会(野球部会)総務部長をしている。大蔵大臣永年勤続表彰を受けた。

政治

○元埼玉県議会議員、馬宮村村長、斉藤祐哲(中11・大宮市出身)は、間宮地域発展のために、また、埼玉県発展のために活躍した。

マスコミ

○長い間NHKに勤めて、現在(株)笠仙監査役、中神定衛(中41・長野県塩尻市出身・東京都三鷹市在住)は、東京大学法学部卒業後、一九五〇(昭和二五)年NHKに入社。外国勤務などを経て、一九八二(昭和五七)年(財)保健会館健康教育推進本部長となり、一九八五年現職につき、評論家精神は死ぬまで衰えまいという。

○木下英雄(中41・坂戸市出身)。東海高等通信工学校卒。日本放送協会、東京電設サー

ビス(株)、全日本テレビサービス(株)大宮保守センターで技術畑を歩む。現在坂戸市入西第六老壮クラブ副会長を務めている。

○元朝日新聞ニューヨーク支局長、松山幸雄(中47・川越市出身・東京都世田谷区在住)

は、東京大学法学部卒業後、朝日新聞社に入社。前記のほか同社アメリカ総局長、取締役論説主幹を経て、現在、共立女子大学総合文化研究所教授、ハーバード大学国際問題センター評議員である。政治、外交分野で活躍し、ボーン国際記者賞、日本記者クラブ賞、吉野作造賞、石橋湛山賞、ベストマン賞、N・Y・ジャパンソサエティ賞などを受賞している。

文学

○元「ベトナムに平和を! 市民連合」(ベ平連)事務局長、吉川勇一(中47・川越市出身・保谷市在住)は、東京大学文学部中退後、日本平和委員会常任委員、一九六五(昭和四〇)年前記事務局長となり、現在は「市民の意見30の会・東京」代表である。また名古屋学院大学、日本ジャーナリスト専門学校、代々木ゼミナールなどの講師を務めた。著書に『市民運動の宿題』など、訳書に、D・テリンジャー『「アメリカ」が知らないアメリカ』などがある。

○(社)俳人協会会員、宮崎敏昭(高3・坂

戸市出身・大宮市在住)は、在校中は長距離ランナーで、佐藤徳四郎先生の俳句の宿題を忘れてよく叱られたという。長年教育出版(株)で検定教科書の制作にたずさわるかたわら、俳句の勉強をした。著書に句集『流鏑馬』がある。俳誌「一位の実」同人。三期生の還暦の文集『おい桶の木よ』の編集委員でもある。

○ 詩人・評論家の菅谷規矩雄(高7・東京都出身)は東京教育大学(現筑波大学)卒、東京大学大学院修士課程修了。ドイツ文学専攻。一九六〇年代前半、最も先鋭な詩運動のリーダーとなる。全共闘運動の高揚期、大学教員を辞し、その後は著述に専念。『埴谷雄高』『萩原朔太郎』などで原理論的な批評の新領域を拓いた。詩集『六月のオブセッション』などがある。

【経済】

○ 埼玉東部ヤクルト販売(株)社長、北田光平(中45・狭山市出身・大宮市在住)は、早稲田大学商学部卒業。現在、全国ヤクルト経営者協議会副会長、関東ヤクルト協会会長を兼務している。囲碁三段、ゴルフは、ハンデ18の腕前である。

○ 埼玉県経済同友会専務理事、横田祐輔(中47・大宮市出身在住)は、慶応大学法学部卒

業後埼玉銀行(現あさひ銀行)に入社し、秘書室長などを経て一九八三(昭和五八)年埼玉県経済同友会事務局長となり、現在専務理事である。また「さいたま新都心建設促進協議会」の幹事長、「さいたま政令指定都市推進協議会」の事務局長を兼務し、埼玉の中枢拠点都市づくり活躍している。

○ 東京フラワー証券(株)社長、宇津野正章(高3・東京都出身・川越市在住)は、浦和中学、佐渡中学、新潟高校を経て、高校三年の時に本校へ転入して来た。青山学院大学卒業後、東京都民銀行に入社し、日本橋支店長、とみん土地建物(株)代表取締役常務などを経て現職につき金融界で活躍している。

○ 大宮肥料(株)代表取締役社長、横田昌明(高4・大宮市出身在住)は、高校卒業後現在の職業につき、大宮青年会議所理事長、大宮中央ロータリークラブ会長などについて、県南地区の振興に貢献している。また野球部の名内野手で、卒業後も全所沢、全川越、全大宮などの選手として、都市対抗野球大会に出場した。

○ 海外にも広く知られた大宮盆栽村の一角に「九霞園」を開いている村田勇(旧姓若林・高7・川越市出身・大宮市在住)は、埼玉県農業講習所卒業後、盆栽業に入り、伝統盆栽の

保全と新時代の盆栽を求めて尽力し、皇居と宮家の盆栽も管理している。著書に『四季の盆栽』『皇室の盆栽』などがある。「九霞園」は武蔵野の自然を残した静かな盆栽園である。

○ 小峰征三郎(高14・坂戸市出身・東京都在住)は学習院大学卒。海外経済協力基金の業務第一部長を務めた後、(株)日本国際協力機構へ。現在専務取締役である。

【宗教】

○ 大宮市中釘にある秋葉神社の宮司、宮本栄(中43・同所出身)がいる。本殿には関東三大彫刻の下り龍を持ち、さらさら獅子舞が有名である。

○ 大宮市指扇の古刹、福正寺の住職、木本清玄(旧名清史・高21・大宮市出身)は、大正大学大学院卒業後同寺に勤め、現在代表役員で、誰もが自由に参加できる座禅会や講座を開いている。

【法曹】

○ 弁護士の高橋信良(高3・大宮市出身)は、中央大学卒業後、革新系の弁護士として活躍していたが、惜しむらくは早逝してしまった。

【その他】

○ 大宮市二ツ宮の荒川河川敷にある東京健康保健組合大運動場の管理者、安藤福衛(中37・大宮市出身在住)は、鉄道教習所を出て国

鉄勤務三五年、現在は前記の管理者のほか、大宮市馬宮地区社会福祉協議会会長として、地域の社会福祉活動で活躍している。

○元日本航空のパイロット、木本榮司(中36・大宮市指扇出身)は、第二次世界大戦中輸送機の機長を務め、海面すれすれに飛んで敵

機の追撃を逃れたという逸話の持主。戦後は日本航空の機長となり、昭和天皇訪米搭乗機(DC8)の機長を務めた。

川越地区

わがふるさとに母校あり。各方面に翔き活躍するOB四〇〇余名の足跡。

スポーツ

川越高校の長い歴史の中で、スポーツの分野ではいろいろな方面での活躍が見られるが、とくに野球、陸上競技、剣道、テニス等それぞれに目立ったものがある。川越地区の出身者で、スポーツの分野で活躍した主な卒業生を卒業順にあげてみたい。

北村博学(中23)は埼玉師範学校卒業後、県下の小・中学校に在職、川越市立初雁中学校長を最後に退職した。その後は初代川越武道館長を務めた。川越明信館で間中鹿太郎先生の教えをうけ、川越中学在学時から剣道を名をあげた。一九二六(昭和元)年の第三回明治神宮体育大会青年の部で個人全国優勝したのは、埼玉で初の剣道全国制覇として有

名である。一九七八(昭和五三年)に範士となった。一九七七(昭和五二年)に勲五等双光旭日章を受章した。

一九六五(昭和四〇)年より十年間川高同窓会長を務めた。

また、剣道では間中門下で、中嶋直二(中26)がいる。当時、東京高等師範学校に埼玉出身の高野佐三郎先生がおられたので、同校に進んだ。卒業後、東洋大学で体育および剣道を教えた。教士、七段。北村らとともに川越剣道連盟を創設し、剣道の普及に努めた。

間中先生の長男間中武彦(中31)は川中在学中、一九三一(昭和六年)の第六回明治神宮体育大会剣道一般少年の部で、準優勝した。残念なことに卒業後まもなく夭折した。

野球では山本三郎(中29)がいる。昭和初

期の川越中学野球部黄金時代に遊撃手として活躍し、卒業後、東鉄の野球部で活躍した。戦後、県野球連盟の理事長として県下野球界に貢献した。また一九四七(昭和二二年)より四年間母校の監督を務め、OB会長でもあった。

一九三一(昭和六年)川越中学は全国中等学校選抜野球大会に出場したが、そのときの投手は熊谷幸夫(中30)で、その剛速球と大きなドロップは超中学級と言われた。卒業後、横浜高等商業学校(現横浜国立大学)を出て、熊谷経理事務所を経営した。

捕手は綿貫惣司(中31)で、立教大学卒業後、セネタース(現オリックス)に入団、プロ野球界で活躍した。戦後、豊岡物産に入り、監督兼一塁手として後樂園での都市対抗野球

大会で天覧試合に出場したことは、多くの人の記憶に残っている。その後、新日鉄室蘭の監督として、社会人野球で活躍した。また、大鉄工業常務取締役を務めた。

横関夏夫(中32)は、選抜出場ときは、新三年生のため補欠であったが、五年生で主将を務め、川中黄金時代になった。後に満鉄に入社、戦後、豊岡物産に入り、一九四七

(昭和二二)年の都市対抗天覧試合に綿貫とともに出場した。その後富士製鉄室蘭に入社、補強選手として都市対抗に出場した。現在は「指庄の横関」を自賞、また自治会長として地域に貢献している。

家村相太郎(中34)は選抜出場の年の四月に川越中学に入学し、投手として活躍、その後プロ野球に入団。戦後、川高野球部の監督を務めた(「はつかり人物誌」参照)。

川越中学は川越地方では最も早く、一九二七(昭和二)年からサッカーを始めたが、猪鼻利喜郎(中35)は初期のサッカー部(当時は蹴球部)で活躍した。卒業後、政法大学に進み、サッカー部でレギュラーであった。卒業後川越工業高校の教諭としてサッカー部の指導に当たったが、一九四五(昭和二〇)

年川越蹴球団を作り、地区のサッカーの振興に努め、一九七二(昭和四七)年より十年間、

川越サッカー協会の会長を務め、川越サッカーリーグを興した。

斎藤玉太郎(中47)は、日本大学卒業まで野球には縁がなかったが、川越工業高校で野球部の監督となって、その指導力で夏の甲子園大会に二回出場させた。とくに一九七三

(昭和四八)年の大会では、小さな大投手といわれた指田を擁し、準決勝まで進んだ。庭球は戦後黄金時代を迎え、その伝統は今も受け継がれているが、そのなかでも一九四九(昭和二四)年の第一回全国高校庭球選手権大会で優勝した芹沢・岡田組のことは忘れることはできない。後衛の芹沢良三(高2)

はその後、東京ガスに入社し、庭球部で活躍した。前衛の岡田立彦(高3)は日清紡績にはいり、同様に活躍した。

陸上競技は松本利雄先生の指導の下、優れた成績をあげたが、川越地区出身者としては武村好惟(高2)がいる。武村は一九四九年の国体高校スウェーデンリレーに出場し、二位となった。同年の埼玉二〇傑二〇〇ぶで四位となっている。

竹間正雄(高4)はプロゴルファー。(社)霞ヶ関カンツリー倶楽部専属プロ。川高卒業後霞ヶ関CCに入社。日本プロゴルフ協会理事、関東プロゴルフ協会副会長を経て、現在日本

プロゴルフ協会代議員、埼玉県プロゴルフ協会名誉会長。一九六九(昭和四四)年には関東プロゴルフ選手権で準優勝した。

また木村昭夫(高6)は、駅伝のメンバーとして、全国高校駅伝で一年生とき六位、二年生で三位にはいった。また、五千円で、関東高校陸上で二年時、三年時に連続優勝し、三年時は全国高校陸上で優勝した。社会人となって日米対抗陸上にも出場した。

水野仁(高6)は剣道部で活躍し、三年生のとき県で個人優勝をなしとげている。その後、政法大学に進んだ。現在剣道範士、八段。埼玉県剣道連盟副会長、全日本剣道連盟六・七段審査員等を務めている。また、川高剣道部OB会長として後輩の育成に力を入れている。現在(株)美濃屋専務。

水泳では江森秀男(高7)がいる。江森は二年生で県高校選手権で二〇〇ぶ自由形で優勝し、同年の高知国体、翌年の奈良国体に連続出場した。明治大学卒業後、川越市役所に勤め、現在は川越水泳協会会長として、川越市水泳界発展のため努めている。

小林博美(高7)も水泳部で活躍し、中央大学卒業後は川越市役所に勤めた。一九六五(昭和四〇)年より埼玉県高校野球連盟審判部審判委員となり、一九八八(昭和六三)年の

第七〇回全国高校野球選手権大会に、関東地区選出審判委員として甲子園に出場した異色の人。一九七五(昭和五〇)年より県高野連審判部西部地区責任者として活躍している。

また、横田浩一(高12)は小柄な体格にもかかわらず、埼玉県高校水泳の自由形全種目を制覇し、種々の大会で県記録を塗り替えた。一年時、二年時には国体にも出場した。

一九五九(昭和三四)年は川高野球部が初めて夏の甲子園に出場した年であるが、このときのナインで川越出身者は、投手の丹代(吉田)富保、一塁手の内沼稔、遊撃手の近藤育二郎で、ともに高校一二回卒である。吉田のそのときの県予選での全試合四七インニング無失点の記録は有名である。

片倉博巳(高12)は、川高在学時は剣道部主将を務めたが、東京教育大学に進みそこでも活躍した。卒業後、教育大学付属高校に勤めたが、後に埼玉県の県立高校に移り、国体の教職員の部で次鋒として全国優勝に貢献した。県高校剣道専門部長も務めた。小野派一刀流の笹森道場に入門し、本目録をもらうまでに至った俊秀である。

高橋義徳(高14)は川高在学中庭球部で活躍、一九六〇(昭和三五)年には茂木・高橋組で、翌年には関根・高橋組でそれぞれ埼玉

県で優勝し、関東大会、全国大会に出場した。卒業後は立教大学に進み、庭球部で活躍した。今井博(高19)は川高在学中は野球部で活躍したが、早稲田大学卒業後はプロゴルフファーストとなり、現在では高坂C・Cに所属して、主としてレッスン活動を行っている。

柔道では松本豊二(高19)がいる。松本は一九六六(昭和四一)年、第二一回岐阜国体高校の部に出場、早稲田大学では柔道部主将を務めた。一九七二(昭和四六)年の第二六回国体一般の部では四段で準々決勝まで進んだ。さらに第三〇回国体では五段で三回戦まで進んだ。

谷中博史(高19)は川高在学中は地学部で山野を歩いていたが、中央大学卒業後は、(株)毎日企画センターに勤めながら、ハイキング等の指導をした。この方面の多くの著書がある。現在は(株)読売神田広告取締役企画制作部長として活躍している。

バレエ部では大島晃(高24)がいる。大島は川高、青山学院大学とバレエ部で活躍した。大学卒業後、大塚製薬に勤めたが、一年で退職し、海外青年協力隊員としてチュニジアに行き、現地の青少年にバレエボールを教えた。二年半後、帰国して日本大学の教育学部で学んだ後、埼玉の県立高校に勤めた。そして再

び海外青年協力隊員としてモロッコに行き、二年してカナダに渡り、現在は高校の体育教師としてバレエボールの指導にあたっている。かねた金谷多一郎(高30)は川高在学中の二年、三年の時連続して全日本ジュニアゴルフ選手権大会で優勝。米国で行われた世界ジュニアゴルフ選手権大会に出場し、第四位に入賞、最優秀外人選手賞を獲得した。また、二年時には日米対抗ハワイジュニアゴルフ選手権大会で優勝した。日本大学でもゴルフ部の主将を務め、現在はプロゴルファーとして試合出場のかたわらテレビの解説等でも活躍している。

文学・芸術

〈文学〉

安部^{あべ}達人(中10)は路人と号す。東京医学専門学校卒業後、精神科医師として出発。一九二八(昭和三年)、東京医学専門学校助教授、二九年教授と次第に精神科教授としての色を濃くしてゆく。

路人の歌歴は、非常に長く、大正初期は、万葉集に傾倒し、これを模する一時期を経やがて窪田空穂に師事。一九二二(大正一〇)年、愛子夫人を迎えて静かな落ち着いた歌風となる。一九二八(昭和三年)、蘆笛短

歌会を主催。これは、石黒宗吉(中22)、浅野誠一(中24等)によって受けつがれて、現在に至っている。養寿院境内に歌碑がある。

城下町の古き鐘楼に撞く鐘のくもり夜空に春めきてきこゆ

佐々木信治(中25)はコスモス短歌会所属、関口正雄(中28)はまひるの短歌会所属も、それぞれ本業のかたわら、歌会で活躍する。

柳沢篤義(中5)。俳号は東丁。仙台医学専門学校に進み、米國留学。帰国後、医院を開業。かたわら、俳句を作り、山口青邨に師事する。川越市俳句連盟会長。句集『月白』がある。喜多院境内に句碑あり。

秋風や直ぐなる故に道さみし

同じ川越市俳句連盟会長をやった人に岡村進一(中34)がいる。戦後、俳句の普及に尽力した佐藤徳四郎教諭の下、多数の俊才が輩出したことも注目される。

原田(北野)愛助(中20)。川柳は、一九二七(昭和二)年からはじめ、毎日ハガキに三句ずつを投句しつづけた。号は寿南史。一九八二(昭和五七)年二月のよみうり文芸賞に入選した句は、次の如し。

小正月思ひ出された賀状来る

岡部一雄(中33)は智山専門学校卒業後、善福寺住職。松山高校、所沢高校などの教職

にあつたが、そのかたわら、同人誌「文芸首都」「芸象」「武蔵野ペン」などに寄稿。所沢新民報紙に、連載小説「黒板太平記」随筆「火の見櫓」「ことわざ新聞」等を執筆。著書に「新釈坊ちゃん」「櫓城」がある。その深い学識に裏付けられた名文は、広く親しまれているところである。

小島良夫(中45)。早稲田大学商学部卒。

日興証券調査部、投資信託会社で社記事、証券記事などを調べているうち、物書きの道にのめり込み、ダイヤモンド社で雑誌「プレジデント」の編集にたずさわる。父の死後、その業を継ぎ川越にひきこもるが、「武蔵野ペン」「文芸川越」「習志野ペン」ふるさと紀行と「川越朝日」で活躍。「若き日の群像明治編」「川中意外史」「あの町この町」など内外を問わぬ広い視野での著作がある。

日下英元(高16)。ペンネーム山木育、東京大学法学部卒、株式会社アム・ビー・シー

取締役、東京大学陵禅会理事。「地球は有限である」と言われるようになってから「経済基盤はデフレ」であると考えた。デフレ経済学は、日本の江戸時代の経済思想として完成していた。その研究を自らの仕事を通して進めている。近著『紀伊国屋文左衛門の生涯』『住友のルーツ』『石田梅岩』『山片蟠桃』な

どは、この線に沿ったものと思われる。

小澤克巳(高20)。(社)日本ペンクラブ会員。大宮市在住。(社)俳人協会会員として俳誌「遠嶺」を主宰し、同「沖」の同人として、四〇代の俳句作家として嘱望されている。一九九八(平成一〇)年の俳人協会埼玉支部俳句大会の実行委員長。著書に句集『オリオン』ほか多数。百周年記念俳句大会の実行委員を務める。

盛田隆二(高25)。明治大学卒業後、びあ社に入り、編集部副部長などを経て退社、執筆に専念。処女作『ストリート・チルドレン』の評判がよく、以後、『夜の果てまで』『日本の狩猟期2008』『サウゲージ』『ラスト・ワルツ』『金曜日には君は行かない』など。さらにエッセイもこなし幅広く活動している。一九九八(平成一〇)年からは、早稲田大学文学部の講師もしている。

〈芸術〉

美術では、近藤洋二(中14)。一九一六(大正五)年中卒業後、小学校の教諭となるが、絵心やまず、上京。働きながら本郷洋画研究所に通う。夫婦、子供連れでパリに行き、サロン・ド・トヌヌに入選、続いて帝展入選の報を得て帰国。以後、太平洋画会で活躍、同会で主催する太平洋画学校で後輩の指導にあ

たる。

岩崎勝平(中21)。一九二二(大正一一)年川中卒業後、上京。近藤と同じ本郷洋画研究所で、岡田三郎助の指導を得る。やがて上野の東京美術学校に入学、藤島武二につく。一九三六(昭和一一)年二二歳のとき、新文展に出品した「小憩」が特選となり、翌年の新文展でも二百号の大作「たき木はこび」が特選主席となり、以後、無鑑査の地位を得た。しかし迫りくる戦時色になじめず、芸術への情熱は、次第に屈折したものとなった。戦後、画塾を開くなど、芸術活動を再開したが、一九六四年不遇のうちに没した。

橋本次郎(中35)。川越埼玉病院の初代院長・橋本定五郎氏の二男。最終学歴は、パリ大学ソルボンヌ校卒。彫塑家。早稲田大学講師、東京学芸大学教授などを長年務めた。作品に川越市役所前の太田道灌像など多数。

大澤寛(中39)。東京美術学校卒後、母校川越高校の美術教師として三八年。この間、二科会で活躍する一方、多くの教え子を育てる。

高木茂夫(高6)川越市に美術館を建設する会会長、木下重美(高11)川越市に美術館を建設する会事務局長、などがいま川越美術界で中心になって活躍している。

一九九七(平成九)年には、関根伸夫(高13)らが中心となって川越の街全体を美術館として、彫刻を中心に、コンサートや講座などを通して、街とアートの関わりを考えるイベント「ストリート・ミュージアム'97」が開かれた。橋本次郎(中35)、岩田甲平(高14)、鈴木英明(高16)ら川高OB彫刻家も参加し大いに気を吐いた。(関根伸夫については「はつかり人物誌」参照)。

書道では、小林庸浩(中31)。号斗と龕あん。一九二七(昭和二年)十一歳のとき、篆刻書法に志し、爾来七十年、一九九三(平成五)年篆刻界で初の芸術院会員に選ばれる。日中友好にも尽力、中国各地でも個展を開いている。一九九八(平成一〇)年文化功労者に選ばれた(「はつかり人物誌」参照)。

山本清光(中45)。業績は、日展入選、県展特選など。鈴木翠軒に師事、川越書道協会会長なども務めた。

吉沢義和(高8)。日展入選八回、読売新聞社賞二回を受く。山本清光と同じく翠軒門下で、異彩を放っている。

音楽では、斎藤勇(中47)。市川芸術学院院長。東邦音楽大学作曲科卒業後、全国ギターコンクール第一位となり、ギターにのめり込む。スペインに渡り、イエペスに師事。帰

国後、ギタリストとして全国にてリサイタル。斎藤楽器博物館を開設。自己開発の18弦双頭ギター、アルペジオーネ、百済琴など一〇〇点を展示している。

野本高平(高6)。ペンネームは野本高たか平へい。作詞家。石本美由紀門下。演歌を中心とした活動をしている。北島三郎、八代亜紀などの作品も書いた。日本音楽著作家連合常務理事。

岡部申之(高18)。東京芸術大学卒業後、音楽家の道を歩む。東京混声合唱団に所属。パート・リーダー、コンサート・マスターなどをこなしている。高校時代は、牧野純、小高秀一(高11)両先生の薫陶を受け、合唱に創造の喜びを知る。NHK合唱音楽コンクールで、二年次に全国優勝、三年次に準優勝した。

服部正美(高28)。ブラジル音楽系打楽器奏者。川高のプラスチックバンドでパーカッションをやったのがきっかけでこの道に入ったという。一九八一(昭和五六)年、サンバ・グループ「コンボ・トウシュー」でデビューし、一九八五年渡米、帰国後フリーとして活躍中。

その他では、近藤宏(中41)。俳優で日本大学芸術学部卒。東宝、日活を経てフリーに。一九四五(昭和二〇)年、長谷川一夫主演の映画「後に続くを信ず」でデビュー。多くの

映画に出演。テレビでは、「大岡越前」「水戸黄門」など時代劇の悪役を演じた。一九八四(昭和五九)年、映画功労賞を受けた。

引間(栗原 稔(中32))。観世流謡曲を川越に広めた功労者の一人。坂戸市出身。梅沢仙洲(中11)、佐々木信治(中25)、島田久三(中25)、中島豊(中27)、綾部善三郎(中32)、白木修輔(中38)、松本匡史(正自・高5)らも観世流謡曲を川越に広めた功労者である。

政治

川越出身で、国政、県政、市政各方面で活躍していた人、活躍している人は多くいるが、政治のみならず、実業界等でも著名な人が多い。

染谷清四郎(中8)は(資)角大本店、(株)埼玉不動産、喜多製作所等の社長として、また西武信用組合組合長として実業界で活躍したが、政治の方面では一九二二(大正一一)年川越市市制施行第一回の市議会議員選挙で、川越公会会より、川越中学の先輩安部立郎とともに当選し、以後四期連続市政にたずさわった。次いで一九三二(昭和七)年政友会に属して県議会議員を一期務めた。戦後は、日本自由党(現自民党)より出て、一九四七(昭和二二)年から一九七一(昭和四六)年まで連

続七期県議会議員を務めた。その間、一九四九年、一九五三年、一九五八年には議長を務め、県政界の重鎮として活躍した。また、党県連幹事長も務めた。県政、川越地方の産業開発への貢献で藍綬褒章、また勲四等瑞宝章を受章し、のちに正五位勲二等瑞宝章を贈られた。

岸野伯太郎(中11)は川越中学卒業後、父のつくった古谷村(現川越市古谷)購買組合に勤めた。一九二七(昭和二)年より同組合長。一九四五(昭和二〇)年辞任したが、戦後古谷農業協同組合と改組された組合の立て直しのために要請されて一九五二(昭和二七)年に組合長となった。一九五七年に埼玉県信用農業協同組合連合会理事、次いで専務理事、会長職務代理等を歴任し、通算四十年にわたって農協運動に尽くした。また、その間古谷村長も務めた。川越市合併後、市議会議員となり、一九五七年議長となった。従六位勲五等瑞宝章を贈られた。

林織善(中12)は川越市鯨井の出身。旧姓勢。坂戸・赤尾の林家に入婿。勝呂村村長、坂戸町初代助役を歴任。郷土史研究家としても知られた。安部立郎(中1)らと同志会をつくって郷土史の研究に努め、多くの論文を発表した。

俳優 近藤宏 加藤英明(中41)

卒業以来五十年余り、あの世に旅立った同級生も四〇人近い。その中に近藤宏君がいる。彼は人も知るテレビ時代劇悪玉の代表。彼の死を報じた当時(平成四年)の新聞はこぞってこの名優の早逝を悼んだ。

彼は中学時代は浪曲が大の得意、いつも休み時間には教室の真ん中に陣取って最も得意とする虎造節を披露した。私も虎造は大好きだったので病蒼胃に入るの例えどおり、己の創作にかかる次郎長外伝を彼に提供し、お互いが悦に入っていたものである。

暗い太平洋戦争前夜であった。近藤宏の存在はいかほど当時の中学生生活を明るくしたところか。

発知公太郎(中14)は霞ヶ関村会議員を務めたが、合併後川越市議会議員として市政で活躍し、一九六〇(昭和三五)年から一期市議会副議長を務めた。

伊藤泰吉(中17)は東大在学中に高等文官試験にパス、朝鮮総督府に入り、重要な職にあったが、終戦で川越市に戻り、一九四八(昭和二三)年より五期十九年間川越市長を務めた(「はつかり人物誌」参照)。

坂本光雄(中21)は卒業後、農業を営んでいたが、福原村議会議員、同副議長、一九五

五(昭和三〇)年川越市合併で市議会議員を四期務めた。その間一九七〇(昭和四五)年から一期議長を務めた。また、中台地区で、上覧囃子連組頭、八雲神社氏子総代等を務め、地区に貢献した。

鈴木啓介(中30)は川越市市議会議員として市政で活躍し、一九七〇(昭和四五)年から一期副議長を務めた。

森田栄(中33)は卒業後、福原村で農業を営んでいたが、村会議員を一期務めたのち、川越市合併後、川越市議会議員を五期二十年間務めた。その間、一九七五(昭和五〇)年から一期議長を務めた。また、埼玉県市議会議長会会長、関東市議会議長会副会長、全国議長会理事等を歴任した。川越市消防団長、埼玉県消防協会理事を務め、地域の発展に尽力した。一九九四(平成六)年地方自治功勞者として勲四等瑞宝章を受章した。

鈴木弘一(中36)は川越市市議会議員として市政に尽力し、一九六一(昭和三六)年から一期副議長を務めた。

宇津木清蔵(中39)は福原地区で農業・畜産業を営んでいるが、川越市市議会議員の後に埼玉県議会議員として県政で活躍した。また、埼玉県監査委員、県高校PTA連合会会長等も務めた。川越市囃子連合会会長として

地域の伝承文化、川越祭への貢献もよく知られている。本校の創立八十周年では八十周年記念事業実行委員会委員長を務めた。

山口茂(中40)は戦時中特攻隊員であったが、戦後早稲田大学に復学し、卒業後県立高校教諭、衆議院議員秘書を経て、埼玉県議会議員を三期十二年務めた。また、社会福祉法人真理茂会理事長として二十一年間社会福祉に貢献した。現在は私立山口市学園理事長、埼玉高等学校、埼玉平成中学校、国際情報経済専門学校の校長として学校の経営にあたっている。

細野浩平(中43)は古谷地区で農業を営んでいるが、川越市市議会議員として市政に尽力し、一九八四(昭和五九)年から一期議長を務めた。

山田貞男(中43)は東京農林専門学校を卒業後、農林省に務めたが、後に南大塚で農業を営んでいる。その間川越狭山工業住宅団地の造成事業の推進に努めた。一九七二(昭和四六)年市議会議員に当選。また、西福寺の檀信徒総代を務めるなど、地域の発展に貢献した。

鮎川金次郎(中47)は鮎川財閥の創始者鮎川義介の次男であるが、戦時中に学習院から転校して来た。政治の面では、父の創設した

日本中小企業政治連盟から参議院議員に立候補して当選。一年足らずして辞職し、残念なことに若くして他界した。

伊藤義郎(中47)は(有)伊藤洋服店の経営にあたっているが、現在まで川越市議会議員を八期務めている。その間一九七八(昭和五三)年から議長を一期務めたほか、埼玉県市議会議長会会長、関東市議会議長会会長、全国市議会議長会副会長を務めた。また、川越青年会議所理事長、川越商工会議所常議員を務め、地域の発展に貢献した。一九九六(平成八)年藍綬褒章受章。

矢島恒夫(高2)は埼玉大学卒業後、県立高校教諭を務めたが、一九七八(昭和五三)年川越女子高を退職して、参議院議員選挙に共産党より立候補して当選。現在まで参議院議員一回、衆議院議員二回の計三回当選。その間に大蔵委員、科学技術委員、商工委員等を歴任し、現在予算委員、通信委員、また党中央委員を務めている。

中野清(高6)は明治大学卒。川越菓匠くらぶくり本舗会長として三五店舗の経営にあたっている。川越市議会副議長、埼玉県議会議員を経て、現在埼玉七区選出の衆議院議員として活躍している。石特委理事、商工委員、財政特別委員を歴任、また、地元では川越市

商店連合会会長、商工会議所常議員として地域の発展に貢献している。川高同窓会の副会長も務めている。

江田俊雄(高13)は中央大学卒。一九七九(昭和五四)年より川越市議会議員を六期連続務めている。その間、副議長、川越市監査委員を務め、市政発展に貢献した。

江田肇(高14)は農業を営んでいるが、川越市議会議員、川越市遺族会副会長として地域の発展に努めている。

吉敷賢(高17)は東洋大学工学部を卒業後、建設会社、国会議員秘書を経て、吉敷商事を創立、代表として経営にあつている。一九八七(昭和六二)年より現在まで川越市議会議員として市政発展のために尽力している。

石川隆二(高19)は中央大学卒業後、毎日新聞社出版局に勤めていたが、一九九一(平成三)年より川越市議会議員となり、現在三期目で、地域の発展に努めている。

行政

〈中央官庁〉

◆郵政省

藤井信夫(中35)は、長野郵政局貯金課長で退官後、関東通信退職者同友会埼玉県支部副支部長をはじめ郵政事業に引き続き関わり、

一九九〇(平成二)年春には勲五等双光旭日章を受章。現在は川越郵政会顧問である。

◆厚生省

佐々木典夫(高12)は、入省後、老人保健制度の立案・創設、エンゼルプラン(子育て支援施策)および障害者プランの策定といった福祉分野の第一線で活躍。一九九七(平成九)年から実施された基礎年金番号制度の導入には特に精動した。社会・援護局長などを経て、社会保険庁長官となり、現在は医薬品副作用被害救済・研究振興調査機構理事長である。

◆外務省

鏡武(高14)は、大臣官房文書課長、国際協力事業団の企画部長を経て現在はシリア大使で赴任中。

◆法務省

小林順行(高14)は、現在法務省公安部に勤務している。

◆文部省

柿沼肇(高14)は、現在、東京大学史料編纂所勤務である。

鳴崎和男(高19)は、初等中等教育局特殊教育課長などを経て、現在は奈良国立博物館次長である。

◆気象庁

安斎(宇津木)政雄(中30)は、気象庁業務課長で退官後、気象協会に勤務。現在は気象関係の執筆活動中である。

◆宮内庁

中島(高橋)卯三郎(中6)は、宮内省で御用係を勤め、日本大学では教べんもとつた。有山余志三(中9)は、川越市公平委員を四期(二六年間)務め、期間中、三期の委員長経験を持つ。その後は文化財保護の分野で活躍。創立七十周年記念誌では「川中学生同志会と安部さん」という表題で学生同志会が創立運営された経緯について寄稿している。

田中直(中37)は、文部省に入省後、一九六五(昭和四〇)年に宮内庁へ出向。その後、一九八九(昭和六四)年まで昭和天皇の侍従として勤務。現在は皇太后陛下の御用掛を務める。

◆警察庁

佐々木英文(中37)は、国家地方警察本部(現警察庁)に入庁。約二十年間警視庁と警察庁で勤務。担当した主な事件には、第一次安保、学園紛争、阪大医学部不正入試事件、千日前デパート火災などがある。大阪府警察本部刑事事部長、警視庁刑事局参事官などを歴任。神奈川県警察本部長で退官。一九九二(平成五)年秋には勲三等瑞宝章を受章。現在は

(株)セントラル警備保障相談役である。

◆総理府

松津修造(中40)は、川中時代野球部に在

籍し、一九四一(昭和一六)年には県大会決勝戦まで進むが敗退。終戦後、総理庁(現総理府)に入庁。人事院管理局管理課長で退官。

本校のくすの木とは直接関係のない話ではあるが、興味深いデータが手元にあるので少しばかり勝手な分析をさせていただく。

一九九八年の二月から七桁の郵便番号の使用が始まったが、その半年ほど前に郵政省提供の全国の地名と新郵便番号のデジタルデータを手に入れることができた。さっそく愛用のデータベースに読み込みいろいろと検索を楽しんでいるうちに、「楠」という文字を含む地名が全国にどのくらいあるのか調べてみたくなった。新郵便番号では全国を約一二万件の番号に区分しているので、ほぼ日本全域の地名を含むものと考えられるが、あくまでもこのデータの範囲でわかったことのみを記したい。

くすの木ものがたり

言うまでもないことだが、都道府県名に「楠」という文字を含むものはない。市区町村名になると全国に二万所、三重県三重郡楠町と山口県厚狭郡楠町である。では、さらに細かい町名・字町ではどうであろうか。さっそく検索をしてみると……なんと一二八件もあるではないか。楠・楠町・大楠・楠川・楠原・楠元町・若楠・楠新田・楠根・楠本・楠城・楠島・楠葉丘……等々。

日本各地の地名に見る「くすの木」

紙面の都合上全てを並べることは出来ない。ので、都道府県ごとに検索された件数のみを北から順に紹介させていただきます。

北海道	1	群馬県	1	千葉県	2	神奈川県	2	新潟県	2
富山県	2	山梨県	1	岐阜県	2	静岡県	3	愛知県	9
三重県	5	京都府	2	大阪府	28	兵庫県	9	和歌山県	6
鳥取県	2	岡山県	1	広島県	2	山口県	6	徳島県	3
香川県	1	愛媛県	2	高知県	5	福岡県	10	佐賀県	4
長崎県	4	熊本県	8	大分県	2	宮崎県	1	鹿児島県	2

樹木の図鑑や百科事典などによれば、クスノキは本州の関東以西、四国、九州、台湾、中国に分布するといわれる。また、「楠」という文字は「木偏に南(南の木)」と書くわけなので、おそらく南の方にこの文字を使った地名が多いだろうとは予想したが、見事なまでに予想は当たったのだ。この中で例外的とも言える北海道と突出して件数の多い大阪府が興味を引くが、ここではとくにふれないことにする。

このほかにも独立した郵便番号が与えられていない場所があるかもしれないが、だいたいの傾向はつかめるのではないだろうか。

一九九四(平成六)年秋には、勲四等旭日小綬章受章。現在は(財)人事行政研究所参与である。

◆衆議院

伊藤昌夫(高4)は、永年衆議院事務局(運輸委員会調査室)に勤務。一九九七(平成九)年春には勲四等旭日小綬章を追贈される。

◆人事院

道祖土武(高7)は、人事院入省後、人事院給与勧告における俸給表改訂を長く担当。国家公務員の給与制度について大きく貢献。俸給表づくりの専門家である。川高PT会長、後援会長を務め、百周年記念実行委員会行事部委員長として川高発展のために活躍中である。現在は(財)日本行政研究所事務局長である。

◆国立国会図書館

石黒宗吉(中22)は、国立国会図書館を退職後、同志会の幹事長を務めた。

◆知事等

児玉(小幡)政介(中7)は、戦前は、奈良県知事、秋田県知事等を務め、地方行政のトップとして恪勤(かつぎん)を尽くし、戦後は、中央社会保険医療協議会長、自治省地方財政審議会議長等を歴任した。

◆海上自衛隊

海上自衛隊

小林利久(高15)は、防衛大学校を卒業。

海上自衛隊に進み、艦艇乗組員を経験するほか航空機の開発などにたずさわる。現在は海上自衛隊一等海佐である。

〈地方官庁〉

◆埼玉県庁

奥山昌美(中47)は、七人兄弟の末子であるが、兄はすべて川中のOB、姉も川越高等女学校卒というすばらしい家庭で育つ。労働部部長で退職。現在は埼玉県建設工事紛争審議会委員である。

関口一郎(高5)は、埼玉県の廃棄物対策、自然保護行政に励み、環境部長、総務部長を歴任。一九九三(平成五)年から一九九五年にかけ、副知事として県行政に尽力した。その後埼玉県高速鉄道(株)代表取締役社長として埼玉県内の地下鉄開通に向け精勤した。

浅田豊彦(高5)は、主として、水道事業、宅地造成事業などの公営企業を担当。退官後は埼玉県熊谷福祉センター館長を務めた。

西島昭三(高6)は、奉職以来、地方課、財政課を通じて約三〇年間地方財政関係の仕事を担当。その後埼玉県出納長として財務会計の一環である県の出納を預かり、現在は関口一郎の後を継いで埼玉県高速鉄道(株)代表取締役社長に就任している。

大河原光行(高6)は、建築課に奉職。一九六二(昭和三七)年の川越高校全面改築計画策定にたずさわったほか、東京オリンピックの施設、埼玉国体の施設建設など、建築、都市計画行政に深く関わってきた。現在は埼玉医科大学理事長補佐である。

川上康夫(高8)は、庁内のコンピュータ導入に参加し、職員として最初のシステムプランナー・プログラマーとして勤務。その後、自然保護、水質保全などの分野で活躍。現在は(財)日本生態系協会参与である。

奥富定(高8)は、「県民とともにある警察」をモットーに警察官として勤務。交通部長、浦和警察署長などを歴任。安全で安心して暮らせる街づくりの一翼を担うべく、現在は(財)埼玉県交通安全協会常務理事である。

渋谷憲一郎(高11)は、環境部水質保全課長を経て、坂戸文化会館長を務め、現在は、埼玉県総合リハビリテーションセンター事務局長である。

斎藤憲彦(高15)は、幼少のころから生物の動きや美しさに魅了され、小学生のときには、さまざまな生物の観察日記をつけ始める。川高では生物部に席を置き、獣医学に進学。在学中は馬術部に所属し、馬と生活をともにする。農林部畜産関係に奉職すると同時に埼玉

玉国体馬術競技に出場経験を持つ。現在も熊谷家畜保健衛生所所長として畜産行政にたずさわる。

塩川修(高20)は、サッカー部に所属。部活動に熱中し、在学中ひたすらボールを追いかける青春を送った。地元に貢献という強い思いを持ち入庁。以来、財政畑一筋。現在は予算編成に直接たずさわる教育局管理部財政課長である。

◆県関連施設

宮崎正紀(高14)は、現在、道路公社技師長である。

唯岡陽一(高18)は、現在、河川公社事務局長である。

白子幹夫(高19)は、現在、西部生活センター副所長である。

◆川越市役所

奥平巧(中1)は一九二五(大正一四)年に川越市役所に入り、一九三一(昭和六)年から一九三九(昭和一四)年まで川越市の収入役、続けて一九四五(昭和二〇)年五月まで助役に就任し、また、市監査委員として戦前戦中の川越市政をささえた。退職後は木屋製作所専務取締役を務めた。なお、一九四七(昭和二二)年に発足した川中PT会の初代会長でもある。

畑尾源太郎(中10)は、一九四五(昭和二〇)年から川越市の収入役、一九四六年から一九四七年まで助役を歴任し、市政の発展に努めた。

岸藤三郎(中19)は、一九四八(昭和二三)年から一九五二(昭和二七)年まで川越市の助役として勤務した。

福田春雄(高4)は、川越市政策審議室長で退職。在職中は「川越市総合計画」策定等に関わり、広域行政の推進に努めた。現在は(財)川越市施設管理公社常務理事をはじめ、各種審議会委員を兼ね、地元川越の発展のために活動中である。

神田寿雄(高7)は経済部長、都市計画部長を歴任し、企画財政部長で退職。現在は川越市都市開発(株)の専務である。

榊筒亮介(高8)は、実家が天台宗の寺院ということもあり、大学ではインド哲学を学ぶ。教育委員会指導部参事を務めた。

田中明(高1)は、下水道部長、安達元孝(高5)は市民部長を務めた。

森田幸太郎(高5)は、経済部長で退職後、(財)川越市勤労者福祉サービスセンター常務理事を務めた。

小倉博(高8)は、議会事務局長を務めた。富田兵吉(高8)は、環境部新清掃センタ

ー建設事務所長を務めた。

石井功(高11)は、教育委員会事務局管理部長を経て、現在は市議会事務局長を務めている。栗原秀美(高11)は、現在経済部長。

尾崎勝美(高11)は、市民部長を経て現在、教育委員会生涯学習部長。また、市剣道連盟事務局長はじめ市美術協会公員、島崎藤村学会評議員と公私ともに市の発展のため活躍中。

大石勇夫(高15)は、現在、教育委員会参事兼中央公民館長、川村光房(高17)は、市民部長、戸口元夫(高18)は、経済部次長である。

初野敬彦(高17)は、音楽部に所属。顧問であった牧野先生指導の下、一九六四(昭和三九)年のNHK合唱コンクールで初優勝したメンバーの一人。市長公室長を経て、現在は川越市助役を務めている。

高梨耕治(高17)の弓道部時代は、道場がなかった。練習は一般市民に混じり、武徳殿で川越女子高校、川越工業高校などの合同稽古。その後、顧問松葉先生の指導のもと、旧講堂の南側を整理して野立の弓道場を完成させた。本人いわく「文化財保護法に違反する行為だったので」と回顧している。水道部長を経て現在は環境部長である。

仲清明(高19)は、現在、政策企画部長として地方分権時代に対応した個性的な政策を展開すべく方策を練っている。

◆その他市役所

猿幸純(高8)は、新座市企画総務部長を最後に一九九五(平成七)年に退職後、以前より考えていた臨海のまちへの移住を実現。現在は瀬戸内沿岸の岡山県笠岡市に在住。

岸學(高10)は、すべての物事に対して積極的姿勢で取り組むことを信条とし地方行政に携わってきた。現在は、上福岡市収入役として市の出納を預かっている。

経済界

〈地元で活躍の経済人〉

◆川越商工会議所

川越商工会議所会頭として川越経済界をリードしたOBを就任順に紹介する。

第三代会頭が鈴木徳次郎(中5)。会頭就任期間〓一九三二(昭和七)年一月―一九四一(昭和一六)年三月。就任期間中、上海事変、日中戦争、第二次世界大戦勃発等々幾多の事変に遭遇するなか、地場産業推進の基になる人材育成を図るため、一九三二年に県立川越工業高校・木工科の設置について尽力した。また、川越線敷設促進、工場誘致対策、

同業種組合の設立等々の功績がある。

第六代が伊藤長三郎(中21)。会頭就任期間一八九四(昭和二三)年十一月一―一九六三(昭和三八)年八月。旧高沢町の砂糖・塩・肥料の間屋として知られた「小川長」を継ぐ一方、第八十五銀行の監査役、ついで埼玉銀行の監査役、取締役を歴任し、川越地方の経済界で活躍した。また、政治への関心から「愛市同盟」をつくり、会長となった。そして市議会議員二期、市議会議長も務めた。文化への愛情もつよく、若いとき、藤原義江などを川越に招いて無料のコンサートを開いたりした。戦後、重要文化財の喜多院の解体修理にあたって修理委員長に推され、これを完成した。氏を会長とする「川越叢書刊行会」の業績も忘れられない。川高の同窓会長を一九五九(昭和三四)年より七年間務めた。

第七代が原次郎(中12)。会頭就任期間一八九三(昭和三八)年九月一―一九八〇(昭和五五)年四月。一九六三年の川越商工会議所と川越工場協会との合併に尽力、川越税務署管内小規模納税者税務指導協議会を発足、集団求人事業、川越狭山工業団地の完成、川越商工会議所創立七十周年記念会員大会の挙行等々数多くの事業に貢献した(「坂戸・鶴ヶ島地区」でも紹介)。

第八代が小島金三(中26)。会頭就任期間一八九〇(昭和五五)年四月一―一九八四(昭和五九)年七月。川越商業の近代化を期するため、川越卸商団地の拡充、川越駅東口再開発事業の推進に尽力した。工業においては、川越工業団地の完成等々多くの事業に貢献した。

第一〇代が岩堀徳太郎(中44)。会頭就任期間一八九六(平成八)八月一現在。川越商工会議所の副会頭を経て会頭に就任。二一世紀を展望した商工会議所として事務局の意識改革とともに、部会・委員会の改革、建物改修にも着手した。川越商工会議所は、一九〇〇(明治三三)年に設立されており、二〇〇〇年には百周年を迎えるが、その準備で多忙の日々を送っている。

◆川越青年会議所

四〇歳以下の若い会員によって構成される団体で、会員のなかに本校卒業生が多数いる。その中から理事長を務めたOBを就任順に紹介する。

第八代理事長が鈴木一夫(中48)。企業アンケート調査、献血運動の推進、盲学校親善野球大会、従業員ボーリング大会、優良運転手表彰、第一回壮年体力テスト、鉄道の三線合同問題に取り組み公式文書の発送、「川越

JCと企業」発行等を実施した。

第九代が伊藤義郎(中47)。防衛問題の研究、安保問題討論会、全学連全共闘との対話水資源問題の白書の発表、市議を囲む座談会等を実施。また、市長選立候補者と市民のビジョン討論会を開催し、その報告書を作成配布し、当選者に公約を守らせた。

第一〇代が江原清治(中47)。十周年記念式典を開催、その記念誌を刊行した。地域市民との対話集をかさね、市長および部課長を囲む市民集会を開催。交通安全アーチ水銀灯を三基設置したほか、伊佐沼に二百本の柳を植樹し、伊佐沼運動の発端となった。埼玉県青年会議所副会長も務めた。

第一一代が石井一(高5)。「市民の森」を伊佐沼に建設し、市民の森から緑の町づくりと呼びかけ、一人千円の記念樹を市民の手で一七〇〇本植樹した。川越市民憲章制定推進特別委員会が発足すると趣意書をつくり、推進パレードへと運動を盛り上げ、その後、市民憲章が制定された。

第一三代が関谷芳弘(高8)。緑の基金づくりの調査、川越の未来についての討論会、街並み保存と活用研究、日本建築学会との川越の街づくりコンペ等を実施。夏祭り第一回歩行者広場を開催した。第二回埼玉会員大会

を主管し、その記念事業として野外音楽堂を建てることに決定した。関東地区会長も務めた。

第一四代が岩堀弘明(高8)。地元役員と伊佐沼公園計画の問題点を検討した。友情・協調・郷土愛のシンボルである三本の柱に支えられた野外音楽堂を建設、竣工記念音楽祭を開催した。伊佐沼公園推進市民の会を組織した。関東地区運営専務も務めた。

第一五代が長尾武(高5)。フェスティバル・イン伊佐沼、青少年キャンプ大会チビッコ稲づくり大会、野外音楽堂客席土盛りと芝張り、歴史的街並保存写真コンクール展、トークイン蔵づくり、妻籠視察等を実施した。

第一六代が戸田道行(高8)。冒険の森建設のため、フィールドアスレチック視察に始まり、企画・調査・研究・建設委員会の発足等を経て、完成にこぎつけた。そのオープンの日は五万人の人出でにぎわい、伊佐沼に入る国道16号は、車で埋まった。

第一八代が山田春久(高8)。公園市民集会を開催したり、伊佐沼公園づくりを他の街にも広げようとコミュニティセンター推進市民のつどいを開催したりした。若宮公園タル小屋図書館を建設した。街づくりで賭けた青年たちの対話と行動の記録集『汗と土と理想

の火』を出版した。

第一九代が吉田矩康(高13)。伊佐沼サンシャイン計画を推進。若とび会の協力を得て「水遊び広場」づくりに取り組み、その資金集めのために余剰品バザールを開催した。また、冒険の森補修工事を行い、池の中央に彫刻を設置した。その完成披露には多数の人々が来場した。この運動は市民参加の公園づくりということで表彰をうけた。埼玉県の会長も務めた。

第二〇代が千村貞次郎(高12)。創立二十周年記念式典を開催し、その記念誌を発行したほか、記念モノUMENT「川越城図」を市役所前に設置した。また、伊佐沼公園入口アーチを設置した。川越都市構成基盤調査報告書「街づくり・あらたなる出発」を作成した。

第二一代が金子憲二(高13)。「二十一世紀の川越を考える市民協議会」設立準備に始まり、発起人総会、創立総会を経て設立にこぎつけた。「川越に生きる」のスライドづくりのほか、しあわせ広場の開催、歩行者広場への手づくり神輿参加、JC会館の建設計画の推進等も実施した。

第二四代が笛木豊彦(高17)。西部地区八JC共同「むさしのH1プラン」を展開、入間・比企地区の八市の市長を一堂に集めて対

話集会を開催、現在の市長サミットの基礎をつくった。

第二五代が岡野行麻(高17)。創立二五周年式典を伊佐沼公園において開催。記念誌を刊行した。人間優先道路「ふれあいの路」を提唱し、その運動を展開した。

第三二代が原田定明(高24)。市制七〇周年記念事業の委託を受け、夏祭りに合わせ「パーク・バスライト」事業を実施した。

◆ロータリークラブ・ライオンズクラブ

地域社会のなかで、奉仕の理念に基づいて活動している団体に、ロータリークラブとライオンズクラブがある。

この二つのクラブは、ともにアメリカのカゴで誕生、日本にわたってきて半世紀の歴史を刻んでいる。よく似た団体とも言えるが、ロータリークラブでは、個々が奉仕の単位となっており、ライオンズクラブでは、クラブのチームワークによって奉仕する、つまり、クラブが奉仕の単位になっているという違いがある。

川越市内には、五つのロータリークラブと五つのライオンズクラブがあり、旧町名を表した石を建てたり、桜の苗木を入間川堤に植えるなど、地域に密着した活動を展開している。これらの団体に所属し、地域発展のた

めに尽くしている本校卒業生は多数いる。その中から各団体の会長として活躍したOBを紹介する。なお、他の分野でも紹介されているため、ここでの紹介が簡略になっているOBもいることをお断りしておく。

(1) ロータークラブ

川越ロータリークラブは、埼玉県内では一番古く、創立は一九五一(昭和二六)年である。

会長就任の順に紹介すると、「小川長」当主の伊藤長三郎(中21)、「亀屋」当主の山崎嘉七(中7)、「はつかり人物誌」参照)、木屋製作所社長の水村善太郎(中24)、武州瓦斯社長の原次郎(中12)、歯科医師の小杉太郎(中20)、「吉寅」当主の吉崎寅之助(中21)、平田高美(中6)、「オジキン」当主の小島金三(中26)、田中賢司(中34)、岩堀建設社長の岩堀徳太郎(中44)、石川製紙社長の石川秀夫(中26)、東洋ニット代表取締役の牛窪栄吉(中38)、川越自動車学校社長の荻原勝彦(中48)、江原製作所社長の江原清治(中47)、日の出薬局当主の飯野三徳(中41)、西川医院院長の西川瀨八(中36)、関谷建設社長の関谷芳弘(高8)、カニヤ時計本店の可児一男(高7)、小川金属化研社長の小川正夫(中39)が会長を務めた。

川越南ロータリークラブでは、第四代会長

が飯野プランニング代表取締役であった飯野行雄(中33)、第二三代長峰金物店専務取締役の長峰邦夫(中48)、第二四代が細村の代表取締役を務めている細村淳(高8)である。

川越東ロータリークラブでは、第二代会長が東京ココカラボトリング相談役を務めた久住裕(中33)、第八代が後藤歯科医院院長であった後藤國男(高4)、第一〇代が丸紅食器設備代表取締役の和田宏士(高5)、第一一代が三上工務所社長の三上泰弘(高9)、第二二代が小山材木店代表取締役の小山吉信(高6)、第一六代が永倉外科胃腸科病院院長の水倉幸平(高6)である。

川越西ロータリークラブでは、第五代会長が光陽建設代表取締役の関根光雄(中44)、第一六代が井上医院院長井上誠一郎(高7)、第一七代がスズキ代表取締役鈴木映男(高9)である。

川越中央ロータリークラブでは、第二代会長が山田歯科医院院長の山田隆(高6)、武蔵野総合病院院長の小室勝男(中42)も会長を務めている。

(2) ライオンズクラブ

川越ライオンズクラブでは、第一五代の会長が仁興薬局を営んでいる松本勝輔(中

38)である。

川越初雁ライオンズクラブでは、第二代会長が石井商工代表取締役の石井昭三(高9)、第一六代が松本事務器代表取締役の松本秀男(定9)、第一九代が川越双葉幼稚園理事長の山本元晴(高15)、第二〇代が西部綜合サービス代表取締役の金子正之(高11)、第二一代が三上工務所専務の三上修司(高15)、第二二代が加藤仏壇仏具店専務の加藤高(高24)である。

川越葵ライオンズクラブでは、初代の会長が松本医院院長の松本正自(高5)、第二二代が妙昌寺住職の沼田正順(高10)、第三二代が大庭電気商会代表取締役の大庭尊治(定2)である。

川越中央ライオンズクラブでは、第三代会長が大東京火災海上の代理店を営んでいる林龍三(高11)である。

川越リバイライオンズクラブでは、第二代会長が埼玉副知事を務めた関口一郎(高5)である。

〈地域を支える経済人〉

次に、川越経済界のさまざまな分野で活躍し、地域を支えるOBの姿を回期順に紹介する。

竹内榮吉(中17)は大阪高等工業学校卒。

鏡山酒造(株)社長で、埼玉県酒造組合会長を務めた。川越市教育委員長、川越市監査委員長、川越市選挙管理委員長、川越女子高校PTA会長等多くの役職についていた。川越市議会副議長にもなった。

吉崎寅之助(中21)は一八七七(明治一〇)年創業の川越の洋食の草分けともいえる「吉寅」の三代目の当主で、ロータリークラブの設立に協力しただけでなく、ボーイスカウトの設立や育成にも尽力した。また、長年裁判所の調停委員も務め、その功績にたいして日本調停協会連合会、東京裁判所長官、最高裁判所長官の表彰を受け、また、従六位勲六等瑞宝章を受章した。

小谷野章次(中24)は埼玉県文具紙製品卸商業(協)理事長、川越商工会議所副会長、全国卸商業団地協同組合連合会副会長等を歴任。川越市議会議長を務めた。勲四等瑞宝章を受章。

石川秀夫(中26)は現在の川越市立図書館の所にあった石川製糸社長として川越の経済界で活躍し、製糸工場の閉鎖後は、川越給食センターの理事長を長年にわたって務めた。また、川高のPTA会長でもあった。

浅海弥一郎(中28)は慶應義塾大学経済学部卒。浅中紙商事(株)相談役。紙卸商一筋

に活動。戦後、埼玉県に紙卸商の団体を設立。「鶏口となるも牛後となるなかれ」を人生のモットーとしている。過去六回優良法人として表彰されている。

小川正夫(中39)は神明町のファミリーマールヒロの土地所有者として知られている。川越ロータリークラブ会長のほか、商工会議所法人会等の役職にもついている。

岡野郁郎(中39)は東京工業大学卒。岡野会計事務所所長。一九八四(昭和五九年)から一九八九(平成元年)まで関東信越税理士会川越支部長を務めた。

平野政利(中41)は川越中学校卒業後農業に従事。一九八一(昭和五六年)より農協の常勤役員となる。一九八七(昭和六二年)川越市内一J A合併。副組合長(のちに組合長)となる。一九九六(平成八年)入間郡下一J A合併。組合長となる。一九九七年J A埼玉県中央会各連合会会長に就任した。

石山豊(中46)は青山学院大学卒業後、家業を継いだ。一九六二(昭和三七)年公認会計士登録、翌々年税理士登録をし、石山会計事務所を開いた。川越高校同窓会の副会長を長く務めている。また、民生委員として地域に貢献している。

江原清治(中47)は江原製作所社長で、川

越青年会議所理事長を務めた。現在、商工会議所常議員や川越工業団地協同組合理事長をはじめ姉妹都市交流委員会や二一世紀を考える市民協議会代表を務めるなど、地元の各方面で頼りにされている存在である。

長谷部恒夫(高4)は日本大学卒。長谷部税理事務所所長。現在川越税理士会会長、関東信越地区税理士会川越支部長を務めている。

可児一男(高7)は一八七七(明治一〇)年創業、札の辻のカニヤ時計本店の四代目当主で、市内三八の商店街・二〇〇〇店が加入する川越商店街連合会の会長を務めている。一九八三(昭和五八年)年創立の川越蔵の会の初代会長も務めた。なお一番街理事長時代には町づくりに大いに貢献した。

関谷芳弘(高8)は関谷建設社長。アメリカンホームズの社長として輸入住宅販売を始めている。川越青年会議所理事長、日本青年会議所の関東地区会長などを歴任した。川越市姉妹都市交流委員会会長を務め、セーレム(アメリカ)、オッペンバッハ(ドイツ)、棚倉(福島県)、小浜(福井県)との交流の民間代表として忙しく活動している。

岩井徳十(高9)は川越高校卒業後三代続く家業の「芋十」を継ぎ、現在芋十代表取締役社長を務めている。また、川越商工会議所

常議員、川越市観光協会副会長として川越市の発展のために尽くしている。母校川高の同窓会副会長も長く務めている。

三上泰弘(高9)は中央大学卒。三上工務所代表取締役。川越商工会議所常議員、川越東ロータリークラブ会長、埼玉県建設業協会理事、川越市建設業協会副会長等の役職についている。

馬場弘(高12)は共和木材社長。川越蔵の会の会長。一九八三年創立時の会長・可児一男(高7)の後を受け、全国街並み保存連盟川越大会、小江戸サミットの川越開催を成功に導いた。本校同窓会の副会長を長く務め、百周年記念事業実行委員会副委員長、同事業部会委員長として母校の発展のためにいっそう尽力している。一九九八(平成一〇)年十一月、川越商工会議所副会頭に就任した。

〈地元を離れて活躍の経済人〉

今まで地元川越で活躍のOBの姿をみてきたが、最後に、川越の地を離れて活躍のOBに目を転じてみたい。とは言うものの、この項に該当するOBを捕捉するのは容易ではない。日本各地で、また、中には国際舞台で活躍するOBの数が相当数にのぼり、情報が得にくいからである。遺漏の多いことをあらかじめお断りしておきたい。

ここで紹介するのは、「OB紹介のお願い」や「アンケート」等によって情報の寄せられたOBに限られる。したがって、ごく少数のOBしか紹介できないが、中には大企業・有名企業のトップとなったOBたちもあり、川越の地を離れても本校OBとして大いに気を吐いている。紹介方法は、職種ごとに、回期順とした。

◆卸売業

藤野忠次郎(中17)。一九二五(大正一四)年東京大学卒。三菱商事社長・会長を歴任、数々の業績で勲一等瑞宝章を授与された(「はつかり人物誌」参照)。

小野章昌(高10)。東京大学工学部卒。一九六二(昭和三七)年三井物産入社、その後米国コロラド鉱山大学大学院で学びながら、ウラン資源について調査を進める。日本の原子力発電の黎明期で日本向けの原子燃料の調達の手を探る。日本側の独自性を保ちつつ安定供給の道を開く。現在同社理事・原子燃料部長。

◆食料品

浦島亀太郎(中9)。子どもから大人まで知らない人はいないほど有名な明治製菓の取締役社長を一九五四(昭和二九)年から十年間、一九六四(昭和三九)年から一九七〇年

までは会長を務めた。大正から昭和、そして戦争中の困難な時代を乗り切り、今日の明治製菓に育てた。

恩田和也(高1)。東京教育大学(現筑波大学)卒。在学中は剣道部、野球部などで活躍。一時母校の定時制講師も務める。博報堂を経てカナダドライボトリング社長、清涼飲料製造販売会社エースタードリンク(株)代表取締役。他方スポーツでは全日本柔道連盟広報委員会や教育普及委員会でも要職を務めた。

◆銀行

井上勝(中46)。東京大学経済学部卒。一九五三(昭和二八)年安田信託銀行入行、一九八七(昭和六二)年同行副社長就任、一九八八年退任し都市未来総研社長に就任。信託銀行入行当時は業績不振であったが、高度成長期とともに業績が最もあがった時期に退任。都市計画に関わる計画立案やコンサルタント業務を通して各地の自治体に貢献した。一九九二年からの川越西口再開発の具体策の作成にも関わっている。

野口元二(高2)。一九五〇(昭和二五)年埼玉銀行(現あさひ銀行)入社。在職中には新所沢周辺(日本住宅公団)、小手指地区(西武鉄道)、川越霞ヶ関団地、千葉志津団地(角栄建設)などの開発行為にたずさわった。

一九八七年退職後は高齢化社会ニーズへの対応のため、会社などの求めに応じ年金教室などを開講した。現在埼玉県厚生年金受給者協会川越支部役員。

天笠保治(高4)。早稲田大学卒。銀行、リース業界にたずさわり国際金融業務を研究し実践した。あさひ銀行サプライ(株)代表取締役を務めた。他方学生時代より継続している趣味として囲碁五段、長唄では稀音家六慶治としてこの世界でも活躍している。

田中正(高6)。慶應義塾大学卒。一九五九(昭和三四)年埼玉銀行(現あさひ銀行)入行。練馬、ニューヨーク支店長等を歴任、一九九二年には協和埼玉銀行専務取締役埼玉営業本部長、一九九四年あさひ銀行副頭取を経て一九九七(平成九年)に会長に就任、現在に至っている。

川田明美(高8)。慶應義塾大学卒。一九六二(昭和三七)年埼玉銀行(現あさひ銀行)入行以来銀行業務にたずさわる。一九七〇年公認会計士試験合格、一九九五年あさひ銀行常取締役退任後は関連のあるあさひ銀行事務サービス(株)社長に就任、一九九七年同社会長。

◆鉄鋼・機械・電気機器

中貞雄(中17)。東京大学卒。元新潟鐵工

所(株)社長。一高在学中は剣道部主将として活躍。新潟鐵工所社長時代はニクソンショックといわれた経済不況、為替変動相場制への移行という困難な時代であった。一九六四年新潟地方を襲った新潟地震でも大きな被害があつたが、震災からの復興に手腕を發揮した。

山田繁夫(中33)。元山田照明(株)代表取締役社長。一九四六(昭二一)年山田照明(株)を創業、わが国の照明器具業界の先導的役割を果たした。白熱電灯を主体とした照明器具作品群は宮内庁をはじめ大手ホテル、主要商業施設から一般住宅に至るまで幅広く活用されている。同社の製品「Zライト」は代表的なロングラン商品として知られている。本校の照明設備設置にあたっては同社の製品を多数寄贈していただいたことがあつた。

星野猛(中41)。東北大学卒。卒業後の何年かは学徒出陣で中国へ駐留するなど多難な時代であった。一九四八(昭和二三)年日本金属工業(株)入社。主として営業部門に従事し一九八七年同社専務取締役で退任。

原富啓(高4)。早稲田大学卒。アイロックス・NKK代表取締役社長。一九五六(昭和三一)年NKK(日本鋼管)入社、鋼板の表面処理技術の研究開発企画を手がける。自動車用の鋼材や缶詰用の材料の開発など、生活

に密着した部門に関わつた。同社の鉄鋼研究所副所長などを歴任し一九八七年に日本金属学会功績賞、クリーンセンター通産大臣賞など数々の賞を受ける。一九八七年関連会社に移り、現在に至る。

◆化学・製紙

坂田圭司(中17)。東京大学法学部卒。元王子緑化(株)取締役顧問。一九二七(昭二二)年富士製紙入社。一九三八年王子造林(株)のちの王子緑化)に創立とともに転じ、同社取締役、監査役を歴任。趣味の尺八(都山流)では八高邦楽会、東京大学竹水会などを育てた。また、在京初雁会の創立以来三十年にわたり役員として活躍し、晩年は名誉会長を務めた。

大川解(高3)。法政大学卒。一九五七(昭和三二)年まだ日本ではカラー写真のプリントが珍しかった時代にカラーフィルムの現象所を設立し、後のアジアカラー(株)に育てあげ、取締役会長として一九八八(昭和六三)年まで在職。カラーフィルム現象所として日本有数の技術力を持つまでに至る。関東カラーラボ協会会長、全日本カラーラボ協会副会長を歴任、感剤メーカーとともに業界の発展に寄与した。

本橋孝夫(高10)。千葉工業大学卒。(株)

アイビー化粧品取締役相談役。一九六三年外資系総合化粧品会社レブロンに入社、製法・研究分野を修業する。その後エステイローグ

ー日本支社技術担当責任者として同社の設立発起人として参加。一九七七年(株)アイビー化粧品設立。安心・安全・自然・愛情・信頼をモットーに化粧品の製造販売にたずさわっている。

◆海運・輸送用機器

矢部義一(中23)。東京商科大学(現一橋大学)卒。ゼネラル海運社長を務めた。また、在京初雁会の運営に尽力し、同会の今日の隆盛の基礎を造った。

加藤俊彦(中33)。横浜高等工業専門学校(現横浜国立大学)卒。中島飛行機(現在の富士重工)入社。日米戦争のおり陸軍の戦闘機疾風の設計に参画した。戦後は再開された航空機産業で工場の企画、米国メーカーとの技術提携などに従事した。

栗原達夫(中41)。海軍兵学校卒。一九四八(昭和二三)年埼玉日産(株)入社。以後自動車販売、整備と会社経営にあたり、一九八二年同社取締役社長に就任。一九九〇年退任まで務める。埼玉自動車販売協会、同自動車整備振興会の副会長を歴任、今日の自動車隆盛の時代の先駆けとして業界発展のため

に尽くした。

遠藤房雄(中43)。東京薬学専門学校(現東京薬科大学)卒。中学は三年で中退し、甲種予科練生として海軍に入隊。終戦後薬専に入学し卒業後は薬局を開業し、現在は狭山市においてドラッグストア・エフケイ(株)代表取締役を務めている。

松本孝(中47)。慶應義塾大学卒。経営評論家・経営コンサルタント。藤沢薬品工業(株)入社。その後ボンズ化粧品日本支社創業時に同社に移籍。一九七二(昭和四六)年経営コンサルタントとして独立。その後日中貿易にたずさわり中国河南省貿易委員会日本代表部顧問として従事。一九九二年より中小企業経営相談室副代表、全国自然環境保全協会副会長などの要職にある。

竹村節雄(高4)。名古屋市在住。昭和建物管理(株)取締役会長を務めるほか、(株)日本ホテルサービスはじめ数社の取締役社長(財)建築物管理訓練センター副理事長、(財)愛知県体育協合理事、愛知県ボウリング連盟会長等、数々の役職についている。母校・川越高校への思い入れが強く、数年前体育館のトレーニング機器を寄贈した。一九九一(平成三)年四月藍綬褒章を受賞。

馬場璋造(高5)。早稲田大学卒。(株)建

築情報システム研究所代表取締役。国内外にわたり建築界の情報チャンネルを引き受け「新建築」誌の編集長を務める。建築設計者選定(コンペ)のプロデュースを行い、奈良市民ホール、さいたまアリーナ、横浜港国際客船ターミナルなどの国際コンペをはじめ各地の設計コンペに関わる。彩の国さいたま景観賞選定委員長、(社)日本建築学会理事、同委員長を務めている。

関根伸一(高19)。中央大学卒。(株)千代田交通代表取締役、(有)吉見タクシー取締役。一九七三年(株)東通入社、その後一九七六年千代田交通入社。坂戸市においてタクシー業を営み現在に至る。また西部ハイタク青年会の会長、乗用旅客協会地区役員、坂戸ライオンズクラブ会員として業界発展のために活躍している。

学術・教育

川越高校の卒業生は社会の各方面に進出しているが、とくに学術・教育界では多くの人々が活躍している。

安部立郎(中1)は川越中学在学中に「青年文庫」、「健脚隊」を組織し、その発展として「同志会」をつくった。早稲田大学卒業後は、「公友会」をつくり、第一回の市議会

議員となり、川越市政に参加した。郷土史にも強い関心を持ち、『人間郡誌』を著した。また、川越図書館を通じて地域の文化の発展に努めた（「はつかり人物誌」参照）。

岩沢新平(中1)は早稲田大学卒業後、川越高等女学校(現川越女子高)、栃木中学(現栃木高) 教諭等を経て、一九二八(昭和三年)より市立川越図書館長を務めた。一九四二(昭和一七)年川越中学校初代父兄会長。戦後、川越市文化財保護委員・審議委員、喜多院檀徒総代、東照宮・日枝神社氏子総代として川越の文化財の保護に力を尽くした。

柳井淑人(中2)は川越中学卒業後、川越南尋常小学校(現中央小学校)に勤めた。一九〇六(明治三九)年九月二十日生徒達を古谷の荒川畔に連れていったが、その中の一人が溺れたのを助けようとして殉職した。二十歳の若さであった。当時の川越町では町葬を行い、また後に埼玉県知事堀内秀太郎の筆になる「柳井准訓導殉職之碑」が建てられた。鈴木孝志(中4)は米国に渡り、サンフランシスコの金門学園長となった。戦後、川越高校で生徒に講演し、感銘をあたえた。

井上(榊原)善十郎(中9)は第一高等女学校から東京帝国大学医科大学に入った。川越中学在学中は同志会で安部の影響を受けた者の

一人である。大学卒業後、伝染病研究所に入り、一九二六(大正一五)年第一回国際連盟交換留学生として欧州留学。パストゥール研究所、ソルボンヌ大学で衛生学を学んだ。帰国後、北海道帝国大学で衛生学講座を担当し、公衆衛生学で数々の功績を挙げた。一九四五(昭和二〇)年同医学部長となった。また、一九四九(昭和二四)年第一回日本学術会議委員に選出された。一九五三(昭和二八)年には北海道医師会長となり、北海道労働科学研究所長を兼任した。没後、これらの功績により勲一等を贈られた。

鯉沼(肥沼)寛一(中20)は東京帝国大学で物理学を学び、卒業後気象研究所に入り、長年の間、気象の研究に励んで、さまざまな業績を残した。のちにその功績により勲二等瑞宝章を贈られた。退官後、城西大学理学部教授を務めた。

小山辰吉(中20)は埼玉師範学校本科二部を卒業後、一九二四(大正一三)年小学校教員となり、以来県視学、小・中学校長を勤め、その間教育部門の文部大臣表彰を受けた。退職後、朝霞市教育委員長、川越市行政相談委員等を務めた。勲五等双光旭日章受章。

水村(保野)善太郎(中24)は東京工業大学卒。工学博士。木屋製作所取締役会長、東京

工業大学教授(機構学)、埼玉県教育委員、埼玉県公安委員会委員等を歴任した。一九五五(昭和三〇)年特許制度七十周年記念全国表彰において発明賞を受賞した。勲五等双光旭日章受章。

中島豊(中27)は埼玉師範学校本科二部卒業。川越尋常高等小学校(現第一小学校)訓導を振り出しに、各地の小学校、青年学校、入間教育事務所、県教育局等に勤め、最初の勤務校川越第一小学校の校長で退職した。その後は川高同窓会の役員としてその活動に貢献した。

岡田芳之助(中30)は埼玉師範学校に進み、卒業後、川越市・狭山市の小中学校に勤め、川越第一中学校長で退職。その後、三芳町の教育長を二期務め、西部地区の教育界に足跡をのこした。その後は、地区自治会長等で大東地区の発展に寄与した。埼玉県教育功労賞、勲五等双光旭日章を受章。

仲栄(中30)は西部地区の小中学校に勤め、また、県教委指導主事、学務第一課長等にも在職した。校長で退職後は、県退職校長会副会長、また、専門の国語国文を生かして、地区の文化の発展に努めている。

山口登(中31)は戦前戦中は職業軍人であったが、戦後、教育の必要性を痛感し、川

越ひばり幼稚園を設置した。現在は第二ひばり・川鶴ひばり幼稚園の園長を務める。また、中・高校、専門学校をふくむ学校法人山口学園の理事長として教育に専念した。そのほか一九七二(昭和四六)年より五期川越市議会議員を務め、その間市監査委員、各常任委員長、市議会議長、埼玉県市議会議長会副会長等を歴任した。

内田一正(中32)は東京物理学校卒業後、京大助手、千葉県立^{まぎ}匠塚高校教諭等を経て一九五二(昭和二七)年より母校川越高校で三十年間教鞭をとった。その間化学を教え、名物先生として卒業生の中でその名を知らぬものはいない。

小松崎兵馬(中34)は埼玉師範学校卒業後、川越山田小訓導を振り出しに、戦後埼玉大学付属小学校教諭を経て県教委指導主事となり、一九七二(昭和四六)年より十九年間浦和市教委教育長を務めた。その間、県都市教育長協議会会長、全国郡市教育長協議会常任理事等を歴任した。その功績により、文部大臣、県教委、全国市町村教委連合会等から表彰された。勲四等瑞宝章受章。

椎橋武信(中34)は埼玉師範学校卒業後、狭山市入間小学校に二十一年間勤め、その後入間教育事務所、入間青年の家所長、各地の

小学校長等を勤め、狭山市入間川小学校長で退職した。その後は、狭山市中央公民館長、県退職校長会の役員等を務めた。

新井秀雄(中35)は東京物理学校卒。一九四二(昭和一七)年より内閣中央航空研究所について戦後は日本国有鉄道技術研究所に勤めて、鉄道・道路の雪害対策の研究で業績をあげ、一九八三(昭和五八)年日本雪氷学会功績賞を受賞した。また、海上風の研究でも実績をあげ、本四連絡橋技術調査委員会の委員としても活躍した。川越中学在学時には剣道部で活躍、県で優勝したメンバーでもある。

田中(小島)義之(中35)は旅順師範学校を卒業後、ハルピン花園小学校で教えたが、現地召集を受けた。終戦後、現地で兵隊の帰国に努力し、また、本人も帰国後、県西部の中学校で数学を教え、数学教育で業績を挙げた。中学校長を退職後、シルバー人材センターで活躍し、シルバー観光ガイドとして市長から表彰された。

加藤一朗(中37)は京都大学大学院在学中にシカゴ大学に留学、エジプト学を修めた。大阪大学、京都大学助手から、関西大学文学部教授となった。以来、関西におけるエジプト学研究の拠点となり、活躍する。一九五七(昭和三二)年にはイラン高原遺跡調査隊長を

務めた。剣道五段。勲四等旭日章受章。

橋本誠司(中37)は早稲田大学卒業後、台湾の公立学校訓導となったが、戦後狭山・所沢地区の小・中学校に勤め、入間教育事務所所長等を歴任、川越第一中学校長を最後に退職した。その間川越市校長会長・研究会会長、埼玉県中学校長会長、全日本中学校長会理事等を務めた。この功績により、県教委教育功労表彰、文部大臣教育功労表彰、勲五等瑞宝章を受ける。

野村敬造(中37)は東京外国語大学より東京帝国大学に進み、卒業後、シェル石油に勤務したが、後にフランスに留学した。帰国後、金沢大学に勤め、教授となった。専門はフランス憲法学。定年退職後、東海大学教授となった。

佐久間勇次(中38)は九州帝国大学卒。獣医学が専門で、農学博士。東北大学助手を経て日本大学教授となる。動物の生殖医学を研究し、一九五二(昭和二七)年、日本における動物の試験官ベビー(胚移植)第一号をウサギで生ませた。それらの研究成果は家畜の改良と人の不妊治療における胚移植の技術開発に大きく貢献、また、クローン動物誕生の基礎研究にも役立っている。

細田宏一(中38)は広島高等師範学校を卒

くすの木ものがたり

クスノキは分類上、クスノキ科クスノキ属に属し、その学名は *Cinnamomum camphora* というらしい。英語では *camphor tree* という。手元の辞書によれば *camphor* とは樟腦のことであり、「貞節の象徴」との説明が付されている。それでは、クスノキ科とはいったいどのようなものだろうか。専門書により引用させていただく。

【クスノキ科】

主として熱帯地方に産する芳香のある常緑高木だが、暖帯から温帯にかけては落葉性のものである。また、低木のものもあれば、寄生する草本もある。雌雄同株または異株。世界に約40属1500種ある。

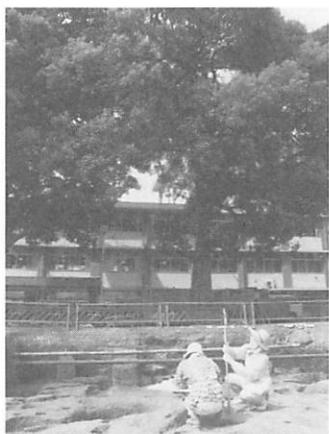
日本産の主な属は、クスノキ、タブノキ、クロモジ、シロモジ、シロダモ、カゴノキ、ハマビワで、寄生する性の草本はスナヅル属で屋久島から熱帯に産し、シナクスモドキ属は九州南部以南台湾および中国に産す。

岡本省吾著『標準原色図鑑全集8樹木』

(保育社)より

クスノキ属にはクスノキのほかヤブニッケイ、タブノキ属にはタブノキ、シロモジ属にはシロモジ、クロモジ属にはクロモジのほかタンコウバイ、ヤマコウバシなどの種が属する。また、ゲッケイジュ属もク

くすの木の仲間～クスノキ科の樹木たち～



スノキ科に属し、その代表選手はもちろんゲッケイジュである。ゲッケイジュは葉に芳香があつて、羊肉のように特殊の臭気のあるものには、これを入れて料理し、その悪臭を消すのに使われたり、古来勝者の頭にその枝葉を冠としてつけたということから、オリンピック競技などではとくに名譽のしるしとされてきたことは有名である。ところで、カゴノキ属にはカゴノキのほかには面白い名前のある木がある。その名も「バリバリノキ」である。アオカゴノキとも呼ばれるらしい。

上記の図鑑によれば、この種は本州の関東南部以西、四国、九州、琉球の暖帯に生ずる常緑樹だが、あまり利用価値がなく、ゲタにしても黒変して悪く、まきにするくらしいのだそうである。名前の由来はよくわからないが、機会があつたら調べてみたいものである。

業後、海軍兵学校で教鞭をとっていたが、戦後埼玉県に戻り、川越高校の教頭も務めた。校長職を十一年務め、松山高校長を最後に退職した。勲四等瑞宝章受章。

大川明治(中39)は東北帝国大学卒。戦後、川越高校でしばらく物理を教えていたが、転身して、アジアカラー(株)の社長となった。そして「写真パタンの統計的処理による最適露光の決定」の研究にあたり、特許も数多く取った。また、その間に東京大学生産技術研究所の研究嘱託も務めた。

滝嶋壯三(中41)は埼玉師範学校卒。県下の小・中学校に四十一年勤め、その間に県教委指導主事、川越市教委学校教育課長等を務めた。校長職も長く、県中学校長会会長を務めた。また、国語教育にも力を入れて県国語教育研究会会長も務めた。

加藤進(中44)は京都大学卒。大気科学の研究が専門で、一九六七(昭和四二)年から二十六年間京都大学教授を務めた。また、その間にオーストラリア国立研究所研究員、カリフォルニア大学客員教授等を歴任。日本学士院賞、英国王立協会アッポルトン賞受賞(「はつかり人物誌」参照)。

大久原秀雄(中44)は中央大学卒。川越女子高から母校川越高校にうつり、十九年間英

語を教えた。その間野球部の部長として一九五九(昭和三四)年に甲子園に出場した。新設された狭山経済高校の校長として、新しいタイプの商業高校を創った。定年後、山村女子短期大学の事務局長を務め、一九九五(平成七)年より川越市教育長を務め、川越市の教育の発展に努めている。

船戸英夫(中46)は立教大学英文科を卒業後、川越高校の定時制教諭として勤めたが、後に立教大学にうつり、英文科教授を務め、文学部長となった。専門はイギリス宗教学・イギリス文化論で、その方面の著書、訳書が多数ある。また、酒通としても有名でその方面の著書もある。

梅沢嘉一(中46)は東京高等師範学校(現筑波大学)の出身。数学が専門で、川越高校には十七年在職した。県立熊谷高校長で退職。その間、県教委指導主事、県高校数学教育研究会副会長等をつとめ、教育功労者として文部大臣表彰、県教育委員会表彰を受けた。川越中学在学時に戦後第一回の県高校軟式庭球大会で優勝し、川高庭球部黄金時代の先駆けとなった。

斎藤彰勇(中47)は東京高等師範学校(現筑波大学)の出身。最初、川越高校に勤め、二十一年間在職した。狭山清陵高校長

で退職。その後、山村女子短期大学で教えている。校歌の作詞者としても有名で、県下小・中・高校一九校にもおよぶ校歌を作詞した。また、書、俳句をよくし、書道研究会、師範(雅号・白雪)、筑波大学国語国文学会、平安書道研究会の会員でもある。

渋谷健(中47)は東京高等師範学校卒業後、川越高校に社会科の教師として赴任し、十一年在職したが、高野連役員としても活躍した。その後県教育局に入り、課長補佐、また、高校教頭、校長を務め、川越高校長として岡田校長以来二番目の卒業生の校長となった。その間、日本高校野球連盟副会長、埼玉県高校野球連盟会長、埼玉県高校文化連盟会長、埼玉県高校長協会副会長等を歴任した。現在は学校法人武陽学園理事長・西武台高校校長、日本学生野球協会監事を務めている。一九九三(平成五年)より川越高校同窓会長。現在百周年記念事業実行委員長として尽力している。

小山隆(中47)は中央大学を卒業後、大井町、和光市等の小中学校で教えた後、大井町教委の教育長を務めた。その後、川越市内の高階中学校長等を務めて退職したが、現在は民生委員として地区の青少年の育成に努めている。

船戸英夫君の思い出 井上勝(中46)

船戸君の亡くなったのは一九九四年四月、享年十六五歳。長生きではなかったが、その生涯は非常に充実したものだった。よく彼の話になると酒好きだったイメージで語られるが、川中在学中は庭球部の選手で鳴らし、立教をでてからは母校川高の教諭もしたが、やがて英文学者として立教の教授となり、著作も多い。英国の現代詩をはじめ中世の魔女、英国宗教学、キリストの探究など、作品を発行順に読んでみると、自分で納得できないものは絶対許さない、彼の心の軌跡を見る思いがする。余技に酒のエッセイや参考書も書き、立教の他、早大の講師も務め、晩年はかなりの忙しさに疲れもたまっていたようだ。性格的にはシニカルなジョークを好む反面、川越を愛する優しい心の持ち主で、川中時代の昔話や家族のことを語る口元の笑みが思い出される。

彼から贈られた『詩人イエス』(訳本)の中表紙には、手作りの版画で「EX LIBRIS」と題された仏像風の聖母子が描かれ、小さく「小江戸、船戸英夫」と記されている。因みに彼の洗礼名はルシアン・トマスである。

井上浩(高2)は東京教育大学(現筑波大学)卒。浦和高校、松山高専等で教えていたが、一九九二(平成四年)より館長としてサ

ツマイモ資料館に勤めている。サツマイモの文化史の研究に力をそそぎ、『サツマイモの話』等、多数の著書がある。日本にも類研究会副会長。

山下文司(高3)は埼玉大学卒。川越市教委学校教育課長、人間教育事務所長等を経て川越市立初雁中学校長で退職。その間、埼玉県中学校長会副会長を務めた。県知事表彰、県教委表彰を受ける。現在、県教育公務員弘済会常任理事、川越市バスケットボール連盟会長、全国修学旅行協会評議員を務める。

斉藤弘行(高3)は早稲田大学大学院で経営学を学び、東洋大学経営学部教授として活躍している。また、亜細亜大学、大東文化大学等でも教えている。経営学に関する著書も多数あり、現在東洋大学大学院経営学研究科委員長を務める。

武田侃蔵(高3)は中央大学法学部を卒業後都政新報社に勤め、その社長となり、新聞一筋の道歩んだ。現在は都政企画社長である。地元の邦楽活動を通して市民の文化活動を支援し、川越市文化団体連合会会長、市社会教育委員を務めた。

山村健(高4)は東京大学大学院で教育学を専攻し、東京大学教育学部助手を務めた後、大正大学の教授となり、また奈良教育大学の

教授を務めた。一九八九(平成元)年より山村女子短期大学の学長、教授として、山村学園の教育、経営に努めている。

星野博(高4)は星野学園の経営者の一人、ほし幼稚園長、星野学園理事長、川越東高等学校長等を歴任し、学園の発展に力を尽くした。

田中啓彦(高4)は東洋大学を卒業後、西部地区の県立高校で国語を教えた。母校にも十四年間に在職し、その間軟式テニス部長としてテニス部の黄金時代をつくった。県南教育センター広報室長を経て入間向陽高校、所沢高校の校長を務めた。その間、県高校体育連盟ソフトテニス部会長、埼玉及び全国高校文化連盟吹奏楽部会長等を務めた。

吉田満(高9)は川高在学当時、陸上部で活躍し、全国大会にも出場した。埼玉大学卒業後、川越市内の中学校で教えた。大東中、霞ヶ関中、城南中の校長を歴任したが、その間市内の中学校体育の発展に寄与した。

星野誠(高9)は法政大学を卒業後、星野学園の経営に当たっている。一九八四(昭和五九)年新設の川越東高等学校長となり、男子進学校に育てた。次いで星野学園理事長となり、星野女子高校長となった。また、浦和家裁の家事調停委員、浦和地裁の民事調停委

員も兼ね、地域にも貢献している。

宮崎龍雄(高16)は東京大学大学院を出て筑波大学で、生物科学系の講師、ついで助教となった。さらに千葉大学理学部付属海洋生態系研究センター教授となり、水圏の生態学、特に植物プランクトンの競争、窒素循環などについて研究、業績をあげている。

高橋好次郎(高16)は中央大学卒業後、教育界に入り、上福岡市教委学校教育課長、人間教育事務所主任管理主事、川越市立野田中学校長を経て、大井町教委教育長を務めた。入間郡町村教育長会会長も務め、教育行政及び学校教育に貢献している。

小川義和(高30)は筑波大学卒業後、埼玉の県立高校教諭を経て、国立科学博物館教育部科学教育普及官を務めている。

『教師のための博物館の効果的利用法』などその方面の著書も多数ある。日本ミュージアムマネージメント学会制度問題研究部会幹事も務め、その方面でも活躍している。

医学・歯学・薬学

〔医学〕

柳澤篤義(中5)。一九一一(明治四四)年東北帝国大学医学部卒。一九一六(大正五)年米国に留学。当時日本ではデモクラシーの

運動が始まり、内務省が看護婦規定を公布したところである。一九二六(大正一五年)年父病弱のため川越に帰り、野田町に赤心堂病院を開設した。東丁と号する俳人としても活躍した。

吉川英作(中6)。一九一六(大正五年)年東京帝国大学医学部卒。産婦人科を専門として一九二二(大正一〇)年開業。優生保護法審査委員長、埼玉県母性保護医会会長、日本産婦人科学会評議員等を歴任。一九四七(昭和二二)年川越市医師会会長に就任。

佐藤又蔵(中8)。一九一五(大正四年)年東京帝国大学医学部卒。一九一七(大正六年)年中原町に小児科医院開業。そのかわら一九三〇(昭和五年)年より一九四六(昭和二一年)まで川越市議会議員四期、一九四六年より一九五一(昭和二六年)まで川越市医師会会長。一九五四(昭和二九年)年には埼玉県医師会会長に就任。一九五四(昭和二九年)年藍綬褒章受章。一九六五(昭和四〇)年勲四等瑞宝章に叙せられた。

大河内要三(中9)。一九一七(大正六年)年千葉医学専門学校(現千葉大学医学部)卒。一九二二(大正一一)年耳鼻咽喉科開業。一九五一(昭和二六)年川越市議会議員。一九五二(昭和二七)年川越市医師会会長に就任。

須永西馬(中13)。一九二三(大正一二)年九州大学医学部卒。一九二五(大正一四年)年東京大学内科入局。その後川越市通町に須永病院を開設、院長として一九七七(昭和五二)年まで医療に従事。川越市議会議員も務めた。

広澤輝雄(中20)。東京帝国大学医学部卒。一九四七(昭和二二)年度より一九五九(昭和三四)年度まで川越市医師会理事。一九六〇(昭和三五)年度より一九七一(昭和四六)年度まで川越市医師会副会長。一九七二(昭和四七)年度より一九七五(昭和五〇)年度まで川越市医師会会長として活躍。

浅野誠一(中24)。慶應義塾大学卒。心臓内科医として著名で、慶應義塾大学の教授となった。また歌人としても知られ、蘆笛短歌会会長として活躍した。狭山博愛病院院長、浦和市立病院院長等を歴任した。

井上彦二郎(中25)。日本大学医学部卒。軍医大尉としてフィリピンに出征。一九四五(昭和二〇)年十二月に帰国。日本大学医学部第二生理学教室助教授、日本医科大学生理学教室助教授として生理学分野で活躍。川越市医師会第一期理事。また川越市議会議員四期、市議会議長一期と政治面でも活躍した。勲五等瑞宝章受章。

岸憲夫(中25)。日本医科大学卒。日本赤十字病院産婦人科部長、陸軍軍医中尉として中国に出征。終戦後帰国し、川越市南町に産婦人科病院開設。一九四七(昭和二二年)川越市医師会監事となる。一九五二(昭和二七年)年十月より一九五五(昭和三〇)年四月まで川越市教育委員長に就任。医師と教育委員長を兼ねて活躍した。

山口秋(中25)。日本大学医学部卒業後、川越に医療法人山口病院を開設。理事長兼院長となり診療に励んだ。母校川越高校のPT会長も務めた。従五位勲四等瑞宝章を受章。

橋村尚(中28)。東京医科大学卒。川越市仲町に橋村病院内科・小児科開設。一九六四(昭和三九年)年より一九七一(昭和四六年)まで川越市医師会会長を務めた。川越市体育協会会長(大学時代テニスの選手として活躍した)、川越市教育委員長も務めた。

時田信(中28)。昭和大学医学部卒。一九四三(昭和一八年)年より一九四五(昭和二〇)年まで軍医として華北に出征。終戦後同愛記念病院耳鼻科勤務のち、一九四六(昭和二一年)川越市松江町に耳鼻咽喉科開業。一九五二(昭和二七年)年より一九五五(昭和二〇)年まで川越市医師会理事等を務めた。埼玉県身体障害者保護対策難聴部会長、川越高校耳

鼻咽喉科校医等も務めた。

岡田利介(中31)。東京医科大学卒。東京深川病院勤務のち、一九四三(昭和一八)年華南に出征。帰国後川越市松江町に岡田耳鼻咽喉科開業。現在川越市医師会顧問。一九六〇(昭和三五)年より一九六三(昭和三八)年まで川越市医師会理事、一九六四(昭和三九)年より一九七一(昭和四六)年まで川越市医師会副会長を務めた。

村本俊郎(中31)。慶應義塾大学医学部卒。軍医を志願し軍医少佐となる。終戦後大学に復帰。立川病院、吹上共立病院院長等を歴任。昭和三十年代はじめ川越市内に内科・小児科医院を開設。川越医師会理事、同副会長を経て一九七六(昭和五一)年度より一九七七(昭和五二)年度まで会長を務めた。

橋本一郎(中32)。昭和医学専門学校卒。一九五八(昭和二三)年度より一九七五(昭和五〇)年度まで川越医師会の監事を務め、その発展に寄与した。埼玉病院理事長・院長、同人会病院理事長を務めた。

行定崇治(中36)。東北大学医学部卒。一九五一(昭和二六)年八月、川越市内に医療法人行定病院を設立。一九六五(昭和四〇)年八月より一九八〇(昭和五五)年三月まで川越市医師会理事を務めた。その間、埼玉県

対癌協会検診医、埼玉県医師会公衆衛生委員、川越市人権擁護委員、埼玉県医師会理事を歴任。一九七八(昭和五三)年四月より一九八〇年まで川越市医師会会長を務めた。

西川溟八(中36)。東京帝国大学医学部卒。公衆衛生学を専攻。東京大学医学部助教授を経て日本大学教授、日本体育大学教授に就任。日本大学名誉教授。その間、日本学術会議会員、日本産業衛生学会理事、日本交通科学協議会会長、日本公衆衛生学会理事、日本人間工学評議員等を歴任。学術の分野に大きな業績を残した。

清水堅次郎(中38)。日本大学医学部卒。外科学専攻。一九六一(昭和二六)年坂戸中央病院開設。一九六五(昭和四〇)年日本歯科大学外科学教授に就任。一九七五(昭和五〇)年より埼玉県議会議員三期連続当選、企画財政委員長に選任され、一九八四(昭和五九)年副議長に選任される。埼玉県医師会常任理事、入間地区医師会副会長、坂戸医師会会長などの要職につき地域医療、救急医療等に多大な功績を残した。厚生大臣表彰、埼玉県医師会長表彰、藍綬褒章受章(一九八六年)、勳四等旭日小綬章受章。

西川光彦(中39)。東北大学卒。軍医学校二五期生。陸軍中尉として軍務に服す。西川

医院開設後五十年を経た。川越市医師会顧問、埼玉県医師会代議員として医師会に貢献。川越市医師会長賞、埼玉県医師会長賞、県知事賞、厚生大臣賞、文部大臣賞等を受賞。川越高校の校医を長年務めた。

森田重雄(中40)。日本医科大学卒。川越に森田医院開設。一九七二(昭和四七)年より一九七七(昭和五二)年まで川越市医師会理事。一九七八(昭和五三)年より一九八三(昭和五八)年まで同副会長。長年の学校医としての功により、川越市長より表彰され、また教育功労者として埼玉県知事の表彰も受けた。

田口健次郎(中41)。東京大学附属医学専門部卒。国立所沢病院、川越保健所勤務のち、川越に田口医院を開設。一九七六(昭和五一)年四月より一九九八(平成一〇)年三月まで川越医師会理事、一九八四(昭和五九)年より埼玉県内科医会副会長、一九九六(平成八)年より川越市内科小児科精神科医会会長を務める。知事表彰、埼玉県学校保健会長表彰を受く。

関根迪式(中42)。慶應義塾大学医学部卒。一九六一(昭和二三)年坂戸中央病院創設時点で副院長に就任。一九八七(昭和六二)年には院長となり現在に至っている。入間地区

医師会会長を長く務め地域医療に貢献。厚生大臣表彰、知事表彰等を受けている。現在も現役で活躍中である。清水堅次郎(中38)の実弟。

小室勝男(中42)。日本医科大学卒。小川日赤病院、社会保険池袋中央病院、新宿第一診療所副院長を経て、一九六六(昭和四二)年川越の地に武蔵野外科病院を創立。現在、医療法人武蔵野総合病院の理事長・院長として救急医療に取り組み(二十数年間年中無休)。その功に対して厚生大臣、埼玉県知事より表彰される。一九八四(昭和五九)年より表彰される。一九八七(昭和六二)年まで川越市医師会理事を務めた。

加藤太吉(中43)。東北大学医学部卒。内科学専攻。東北公済病院内科医長、同検診センター所長、仙台支払基金委員、結核審査会委員等を歴任。

西川巖(中43)。群馬大医学部卒。産婦人科学専攻。日本産婦人科学会会員、地域医療学会会長。東大分院産婦人科医局長を経て現在神津島診療所所長。過疎化した神津島に東京衛生局の推挙で赴任。医師一人で全科に対応。島での分娩を可能にし、島の人口が増加した。第二回医療功労賞受賞。一九九六(平成八)年には、長年離島医療に尽力した功

により天皇、皇后両陛下下拝謁の栄に浴した。

吉川英一(中44)。日本医科大学卒。産婦人科学専攻。吉川産婦人科医院を開業。院長となる。一九七四(昭和四九)年より一九八九(平成元)年まで川越市医師会理事。一九九〇(平成二)年より一九九五(平成七)年まで川越市医師会副会長。川越産婦人科会会長、社会保険診療報酬審査委員等を歴任。勲五等瑞宝章受章。

岸篤(中45)。東京医科大学卒。日本医科大学、国立沼津病院内科、武蔵野日本赤十字病院産婦人科等を経て現在、財団法人日本漢方医学研究所附属渋谷診療所所長。一九八六(昭和六二)年より無形民俗文化財・石原のさら獅子舞保存会会長。また日蓮宗埼玉県檀信徒協議会監査役等、医学以外の分野でも活躍している。医学書も多数執筆している。

柿沼英雄(中45)。慶應義塾大学医学部卒。内科学専攻。一九六二(昭和三七)年内科医大出版。「一隅を照らす」を信条として日常の診療に従事しているという。

須永俊明(中47)。東京医科歯科大学医学部卒。同大学第三内科講師を経て佐賀医科大学内科学教授に就任。メリーランド大学神経内科客員教授、テューク大学内科客員教授を

歴任。「須永教授の診察室」というタイトルで佐賀新聞に連載された記事は多くの人に愛読された由である。一九九五(平成七)年医学における長年の功績により従四位・勲二等に叙せられた。

佐々木雄司(高3)。一九四五(昭和二〇)年川越中学に入学したが、学制改革のため川越高校に移行。その後武蔵高校に転校したため川高は卒業していないが、一般同窓会に入会した。東京大学医学部を卒業後、琉球大学教授、東京大学教授などを歴任。宗教精神医学、コミュニケーションヘルスの我が国のパイオニアであり、WHOコンサルタント等で国際協力にも貢献している。

島田桂吉(高5)。神戸大学医学部教授。専門は顔面顎口腔科学。東京医科歯科大学を卒業後、東京大学医学部口腔外科に在籍し、講師を経て、神戸大学口腔外科に転じ、現在に至る。学生時代にヨットおよびボート部に所属し、インカレに出場した。囲碁は五段の実力者である。

関根毅(高6)。東北大学医学部研究科(外科学専攻)博士課程修了後、東北大学医学部講師となり、フロリダ大学外科学教室留学を経て、現在埼玉県立がんセンターの病院長として活躍している。消化器疾患の外科に

関する著書、論文多数。消化器癌の手術は一五〇〇例を超える。

小林正幸(高15)。順天堂大学医学部を卒

わが国に自生する樹木は千種ほど、草のような「セリリョウ」から三〇以上に及ぶ楠の大木まで実に豊かである。

たりがもの木のすく

『日本書紀』第一巻に五三種の樹木の名が出てくる。素戔嗚尊が頸髭を抜いてパツと散らすと地面につき刺さって杉の木になり、胸毛を抜いて散らすと楠になった。次に髪の毛を抜いて散らすと楠に、ちよつと下品なところの毛を抜いて散らすと槇の木になった。そこで素戔嗚尊は杉と楠は舟に使い、楠は宮殿に、槇は棺桶に使いなさい、と教えた。最近の古代史ブームで発掘されたものを見ると、神話時代から現代まで素戔嗚尊の指示が引き継がれてきたことがわかる。日本書紀に書かれていることは、民族が昔から木材もよく使いこなしてきたことの証でもある。たとえば、伊勢神宮の遷宮に使われる木はすべて内地産楠で、一四〇〇年ほど前に建立された法隆寺も楠造りである。こうなると、素戔嗚尊がまるで菅林の元祖ということになるが、「木材」の適材適所の教えはそのまま「人材」にも当てはまるのではないか。会社を始め、あらゆる組織の人事の成否とは、つまり「人材」の

業後、埼玉医科大学総合医療センター第二外科助教を経て、一九九五(平成七)年一月一日より同センター救急センター教授に就任。

樹大をさえる天

適材適所がうまくいつているかどうかということである。

いずれにせよ、豊かな森が日本の文化を育んできたといえる。

「グスノキ」には楠、樟のほかに榎・櫟の字がある。木偏漢字の一字が木の形、性格、所在などを示しているとも思える。

「彩の国」は楠の北限に近いが、より温暖な兵庫県、佐賀県、九州の熊本県などは「県の木」として楠を選定している。

楠千年更に今年の若葉なり 井泉水

楠の若葉は黄紅色で美しい。五月ごろに黄白色の小花をつける。

楠の新芽に喜寿を励まされ

という句がある。ゆらゆらとわか葉のさゆらぐさまに力を与えられた人も多い。ただ黙々と天をささえ、まぶしい陽光が葉に照り返り、風に語りかけ、時には雨のなかで瞑想する姿もまたよい。井泉水の句を受けて

さらに百年天さ、えたる大楠樹

校門の「くすの木」に、目先にとらわれない人間教育、人間完成を託してみた。

(高山 孝・高1)

現在県救命救急の第一人者として活躍している。

開業医として地域医療の分野で活躍しているOBを紹介する。川越市医師会の現役理事には、松本正自(高5)、井上誠一郎(高7)、佐藤治邦(高12)、犬竹庸二(高12)、浅野裕幸(高15)、山口現朗(高15)がいる。

川高時代山岳部に所属していた井上誠一郎は、川越市元町で井上医院を開業している。ボーイスカウトでは、埼玉県の指導的立場にあり、川越地区の地区委員長などを務めている。

犬竹庸二は、川越市大手町で犬竹医院を開業しており、一九九七(平成九)年四月より母校川越高校の校医をしている。

山口現朗は、先代山口秋(中25)の後を継ぎ、川越市脇田町で山口病院を開業。そのかたわら、埼玉ゴルフ協会副理事長、川越市ゴルフ協会会長として青少年の育成にあたっている。

その他紹介すべき医師は多いが、アンケートへの回答のあったOBを中心に紹介した。

(歯学)

川越歯科医師会は、「齢の会」から川越歯会へと、そして川越市歯科医師会が設立された後、社団法人として認可された経緯がある。

公衆衛生事業も、歯科検診を出発点として年ごとに充実拡大し、現在では乳幼児、学童そして成人歯科検診を実施し、埼玉県の先駆けとして、寝たきり老人の訪問歯科医療に取り組んでいる。ここに至る過程において、当会を支えた二〇名の歴代会長のうち一名が本校同窓生である。その活躍ぶりを順次紹介してみよう。

稲生実(中20)。新制川越市歯科医師会を設立した功労者である。子息の義彦(高3)は会の専務理事、監事を歴任し貢献した。

小杉太郎(中20)。ノースウエスタン大学歯科を卒業した紳士会長であり、小学校児童に初のフッ素塗布を実施し、埼玉県歯科医師会の副会長としても活躍。それ以上に特記すべきは、川高野球部の後援会長として部員の面倒をみ、下宿させたこと。お世話になった部員が数多くいたはずである。子息の国武(高15)は一一六名の代表として老人の訪問歯科治療に率先して活躍している二世会長。

山田辰三(中20)。工場を対象に歯科検診を実施した学者肌の会長として活躍した。

大塚久(中21)。歌にあわせて一、二、三と小学児童に歯磨き指導を行った。子息の尚昭(高8)は母校の歯科校医を引き継ぎ現在に至る。

大塚達郎(中24)。埼玉県歯科検診車「ふじ号」にて幼稚園児の検診を実施した会長であり、埼玉県歯科医師会の監事としても活躍した。

関口正雄(中28)。同じく「ふじ号」にて学童の集団診療を実施した会長。

山崎良作(中32)。山崎が会長の時、川越市歯科医師会は社団法人の認可を受けた。また予防歯科センター設立にも貢献した。子息の耕一郎(高19)は青年会長として会務を統括する一方、「走る」歯科医師として有名。

加島忠道(中33)。山崎と同期。休日急患診療を開設し、埼玉県歯科医師会の専任審査委員としても活躍した。

石井一(高5)。歯の衛生週間行事を広域的に実施すると同時に、ファクシミリを全会員に導入した。また、川越青年会議所の理事長時代、伊佐沼に「市民の森」を建設したり、県立川越女子高校のPTA・後援会会長として教育の振興に貢献した異色の会長である。現在、川越市の公平委員の要職にある。

大橋良昭(中45)。石井と同時期に副会長であった。埼玉県歯科医師会の代議員としても活躍する一方、埼玉県警察協力医の要職を兼務。

〈薬学〉

一八九五(明治二八)年埼玉県薬剤師会が創立され、初代会長は川越・志義町在住の綾部惣兵衛氏であった。氏は日本薬剤師百年史に不滅の名を残した。以降、川越地区からは大正・昭和にかけて県薬業界発展の礎を築いた有為な先人たちが輩出している。

このような風土を背景に、薬業の未来に夢を馳せ、本校に学びその後、薬学の分野で活動している人は多い。しかしごく限られた人々しか紹介できないことをお許しいただきたい。

間坂哲太郎(中4)。千葉薬学専門学校卒。一九二一(明治四四)年、父祖の業を継ぎ、間坂薬局を開設。薬種問屋として卸業を拡充し県内一円の薬局・病院に医薬品などを供給する。戦時中は県医薬品統制会社の設立にかわり初代社長。幼少より川越・明信館で剣道に親しみ、川中四年生の時、真心影流の兵法目録を許される。一九三四(昭和九)年剣道錬士となり晩年までこの道の継承に努めた。

堀内慶治(中40)。明治薬学専門学校卒。一九四五(昭和二〇)年、終戦で海軍薬剤官を退官。同年九月父業を継ぎ堀内薬局を自営。最近は処方箋調剤を主とする保健薬局業務にあたる。一九四九(昭和二四)年、川越市衛生委員、学校薬剤師を依頼され、生活環境改

善や学校保健向上のほか公害防止関連の活動を約半世紀にわたり実施している。一九八八(昭和六三)年より本校の学校薬剤師となり、環境面から学習環境整備に助力している。川越市学校薬剤師会々長、県学校薬剤師会副会長、川越市公衆衛生協議会々長などを歴任。長年の地域活動により厚生大臣表彰(昭和五二年)ほかを受けた。

間坂宏(中42)。前橋医科大学卒。その後明治薬科大学に学び、学業と家業継承を兼務しながら医師と薬剤師の資格を取得。一九五四(昭和二九)年から一九八八(昭和六三)年まで、間坂薬品(株)取締役社長。その間埼玉県麻薬協会副会長などを務め、父業を発展させ、県内有数の医薬品提供卸業として地域医療に寄与した。

前出の父哲太郎の長子で、明信館で修行し川中剣道部の勇将として活躍。一九七三(昭和四八)年、剣道教士となり川越市剣道連盟会長を務め、今日まで道を極めていく。一九七四(昭和四九)年、川越市民家事調停委員に任命され、長年その職務にあたる。一九九六(平成八)年藍綬褒章(調停委員功績)受章。

飯野三徳(中41)。明治薬学専門学校卒。一九四六(昭和二二)年、父業を継ぎ、(有)ヒ

ノア薬局代表取締役として自営。一九七七(昭和五二)年より二十年間、川越市薬剤師会会長を務め一九九七(平成九)年退任。地元医師会との協調関係を深め、地域医療発展に尽くす。現在、埼玉県薬剤師会常務理事。厚生大臣表彰(平成二年)。

遠藤浩良(中47)。一九五三(昭和二八)年、東京大学医学部薬学科卒。一九五八(昭和三三)年、同大学院・化学系研究所で薬学を専攻して卒業。現在、帝京大学薬学部の薬学部長として薬剤師養成の指導にあたっている。日本唾液腺学会会長、日本薬学図書館協会会長、神奈川薬事審議会会長などの要職にある。主な業績は、一九六三(昭和三八)年、日本薬学会奨励賞、一九七〇(昭和四五)年、日本薬学会アボット賞を受賞。『生化学』『薬学概論』『ホルモン』など著書多数を発売、その他 Nature (イギリス)、J. Biol. Chem (アメリカ)など著名国際学術誌に論文を発表。

法曹界

保野昭一(中42)。東京大学法学部卒。保野法律事務所長。一九五一(昭和二六)年司法試験合格後、農林省、林野庁、食糧庁を経て、一九七六(昭和五一)年東京弁護士会所

属の弁護士となった。法律扶助委員会副委員長のほか、各種委員となり、土地行政事件を得意分野としている。

岡村了一(中43)。明治大学法学部卒。名川・岡村法律事務所長。元川高同窓会長。現明治大学理事。一九五九(昭和三四)年東京弁護士会所属の弁護士となり、名川法律事務所を継承した。日本弁護士連合会常務理事、法律扶助協会会長、日本法律家協会常務理事を歴任し、東京音楽大学客員教授など各方面で活躍している(「はつかり人物誌」参照)。

奥平守男(高3)。中央大学法学部卒。一九五八(昭和三三)年裁判官に任官。法務省参事官(訴訟検事)になったこともあるが、熊本、甲府、東京(地方、高等)、浦和の各裁判所を経て、福岡家庭裁判所判事から熊本地方裁判所長となった。福岡高等裁判所長官を定年退職後は、横浜簡易裁判所判事として裁判一筋の道を歩んでいる。

中村生秀(高3)。中央大学法学部卒。中村法律事務所長。一九五七(昭和三二)年東京弁護士会所属の弁護士となり、紛議調停委員長、税務特別委員会委員長、日本弁護士連合会税務委員ほかを歴任した。民、商、刑事事件を扱う弁護士活動を展開している。

宇津木浩(高8)。中央大学法学部卒。宇

津木法律事務所長。一九六六(昭和四一)年東京弁護士会所属の弁護士となり、国選弁護士副委員長ほかを歴任。その後、埼玉弁護士会所属となり、同副会長を歴任。現在地元川越で活躍中である。

関根秀太(高8)。東京大学法学部卒。東京青山法律事務所員。この法律事務所は、世界各国の法律事務所と連携している渉外法律事務所である。その中心的な所員として国際法務の場で活動している。

細田初男(高18)。早稲田大学政経学部卒。川越法律事務所長。一九七五(昭和五〇)年埼玉弁護士会に登録し、人権擁護委員長や、日本弁護士連合会人権擁護副委員長などを歴任。一方、川越市オンブズマンや建築審査会長を務めるなど、地元密着型の活動を展開している。埼玉弁護士会会長を務めた。

川合善明(高21)。早稲田大学政経学部卒。飯田橋法律事務所長。一九七九(昭和五四)年東京弁護士会に登録。飯田橋に事務所を置き、東京都内の仕事と自宅のある川越市方面の仕事の両方を手がけている。『誰にもわかる会社役員の法務と税務』(新日本法規出版)の編集代表を務めるなど活躍している。

高橋毅久男(高22)。中央大学法学部卒。高橋法律事務所長。一九八七(昭和六二)年

埼玉弁護士会所属の弁護士となり、川越市役所近くに事務所を構え、民事・刑事を中心に事件処理にたずさわる。一方、川越市選挙管理委員会の委員長などの公職でも地元のために尽力している。

小島延夫(高30)。早稲田大学法学部卒。東京駿河台法律事務所員。一九八四(昭和五九)年東京弁護士会に登録。日本弁護士連合会の公害対策環境保全委員会環境法部会長や国際人権問題委員会アジア部会長を務めるなど、主としてアジア地域における公害環境問題に取り組み活躍している。

マスコミ

矢部謙次郎(中1)。一八八四(明治一七)年生まれ。早稲田大学卒業後、国民新聞、時事新報記者を経て、NHKの前身である東京放送局に社会事業部長として一九二六(大正一五)年入社。大阪、仙台の放送局長を歴任し、一九四三(昭和一八)年、東京放送局事業部長、四四年には常務理事、国内局長に就任した。一九四五(昭和二〇)年八月十四日には大橋八郎会長とともに宮内省を訪れ、終戦の詔勅の玉音放送を録音するという歴史的な役割を果たした。

東郷博(中25)。一九〇八(明治四一)年、

医師の家に生まれたが文学を志し、法政大学卒業後、毎日新聞社を経て読売新聞社に入り戦時中は海軍報道班員として南北太平洋に従軍した。戦後は三鷹事件、下山事件のキャップとして活躍、社会部記者として生涯を貫いた。一九七五(昭和五〇)年、川越在住の文化人、知識人をつのって「川越ペンクラブ」を結成し、代表幹事に推された。同クラブは同人雑誌として季刊「武蔵野ペン」を発行し、一九九八(平成一〇)年十二月現在95号を数えている。郷土のため文化事業の基礎を築いた東郷氏の功績は大きい。

松本博一(中37)。旧満州建國大学を卒業して戦後、毎日新聞社に入社。韓国特派員、モスクワ支局長、論説委員、論説副主幹、顧問などを歴任した。モスクワではフルシチョフからブレジネフ時代のソ連・東欧報道にあたった。一九七九(昭和五四)年より日本大学国際関係学部教授、九二年より国際学院埼玉短期大学教授を務めた。著書に『国際関係思想史研究』(一九九二年、三省堂)などがある。現在川越ペンクラブ代表幹事。

野村昌次(中39)。文化学院卒。NHKアナウンサーとして活躍。人事部中央研修所教授、広報室視聴者センター担当部長を歴任した。除夜の鐘放送で中央局長の表彰をうけた。

一九八〇(昭和五五)年、定年退職後リクルート人材センターの研修トレーナーとして活躍したが、一九九四(平成六)年に退職。以後絵手紙教室などを開く。

岡村和夫(中45)。早稲田大学卒。政治評論家、元NHK解説委員長として著名である。NHKの「国会討論会」は、その時々の政治動向を知るうえでの好番組であるが、その司会者は綿密周到な準備と、臨機応変の柔軟さとウィットが求められる。岡村は困難のともなう「国会討論会」の司会を十八年間の長きにわたって続けた。ニュース解説や「NHKスペシャル」をも担当し、明快な語り口で知られた。一九八六(昭和六一)年にはジャーナリスト最高の栄誉の一つである日本記者クラブ賞を受賞した。

田中崇(高3)。千葉大学印刷科卒。大日本印刷を経てダイヤモンド社制作本部長をつとめ、子会社・ダイヤモンドプランニングサービスの社長となった。その後日本政府のODA技術援助によって世界各地(二〇か国)で印刷技術・経営の指導にあたっている。国内でははやくから専門学校で教えている。

松村祐二(高3)。早稲田大学政経学部を卒業すると同時に日本経済新聞社に入社。営業、販売部門で活躍した。販売局総務を経て、

日経総合販売(株)代表取締役社長を務めた。さらに日経BP販売(株)の代表取締役社長。現在は同社監査役を務める。高校時代は郷土部に所属し、先輩の小山誠三(中47・現飯能市長)や吉川勇一(中47・元ベ平連事務局長)らの指導で、歴史、民俗、地理調査などに励んだ。誠実な人柄が周囲をひきつけてやまない。

加藤忠義(高5)。早稲田大学政経学部政治科卒業。一九五八(昭和三三)年、日本教育テレビ(現テレビ朝日)に入社、以来主に報道分野でニュース、ドキュメンタリー各種報道・情報番組にたずさわる。ケネディ暗殺、ロッキード事件、浅間山荘事件、人類月に上陸、昭和天皇死去などにかかわった。一九九五(平成七)年退職。

川瀬裕伸(高5)。日本大学芸術学部卒、NHKに勤務して一九六七(昭和四二)年退社、川越市でユタビ商事を設立し、書店業、喫茶店、旅行斡旋業に従事した。

川村哲也(高5)。千葉大学卒。川高時代はラジオ部に所属し、ラジオに興味をもっていったことが、そのまま仕事に結びついた。一九五七(昭和三二)年NHKに入社したが、このころはテレビ放送の普及時期にあたり、全国の放送設備、とくにNHK自前のマイク

口回線建設で設計、建設管理を担当した。また放送センター(渋谷)の建設時にはスタジオ関係、設備の設計、工事にもたずさわった。一九九〇(平成二)年よりNHKアイテック、放送・通信事業部主幹。

菅間昭(高6)。東京大学英文学科卒。一九五九(昭和三四)年、NHK仙台局報道番組のディレクターとしてスタートしたあと、一九六〇年代後半は報道局外信部にあつて、激動する世界情勢や人間の宇宙への進出をフォローしつづけた。一九七一(昭和四六)年にはベトナム戦争下の現地取材し、戦争の実態を伝える報道特集「インドシナ報告」、NHK特派員報告「ダナン―基地と民衆」を制作した。一九七四年以降は海外の放送機関との協力関係業務を担当した。一九九八年四月よりフォーリン・プレスセンター勤務。

浅見忠司(高17)。一九七〇(昭和四五)年慶應義塾大学卒。NHKにアナウンサーとして入局。鳥取、岡山、山形、福岡、東京、京都局に勤務した。一九九一(平成三)年から一九九四年にかけてNHK日本語センターに勤務。大学、企業、自治体などで日本語の話しことばについて研修指導。またバンクーバーのカナダ国際大学(CIC)で日本語表現の教育指導を担当した。現在NHK放送セン

ター情報局副部長。

灰野文亨(高18)。早稲田大学政経学部卒。読売新聞社に入社、福島、神奈川、青森などの各支局に勤務し報道にあたる。現在は読売新聞社総務局厚生部次長。川高では三年間、水泳部で体力作りに励んだことが、記者活動に役立つた。

岸宣仁(高19)。一九七三(昭和四八)年東京外国語大学卒業後、読売新聞社に入社。横浜支局を経て経済部記者として活躍。大蔵省、通産省、農水省、経企庁、日銀、証券、経団連、機械重工クラブなどを担当した。一九九一(平成三)年、読売新聞社を退社。駒沢大学経済学部講師、総合研究開発機構(NIRA)客員研究員などを歴任し、現在経済ジャーナリストとして月刊誌などに健筆を揮っている。主な著書は『大蔵省を動かす男たち』(東洋経済新報社)、『巨大銀行の誕生』(プレジデント社、共著)、『検証・大蔵省崩壊』(東洋経済新報社)など。

山本浩(高24)。東京外国語大学卒。NHKアナウンス室チーフアナウンサー。サッカー、アルペンスキーなどの中継放送で活躍。一九九八(平成一〇)年の長野冬季オリンピックでは悪天候に悩まされながらも、アルペンスキーを担当した。

小野沢三雄(高29)。立命館大学卒。NHK大阪局、浦和、放送センター(東京)の受信技術部門を担当。現在NHK広島放送局営業推進センター受信技術主任を務める。ハイビジョン放送、BS放送の普及と地上放送の受信環境確保に業績がある。

中出博二郎(定・高9)。明治大学政治学科卒。フジテレビ編成部長、報道局長を経て現在専務取締役報道本部長として活躍。文化放送ブレーンの代表でもある。十五歳の春より川越市内明文堂書店に勤務しながら定時制を卒業した。「店員時代から他人への思いやりと、自分への厳しい自覚を、苦しくとも、不安があっても明日を信じて、ひたすら自分を失うことなく生きて来ました。もちろん、多くの人々の絶大なる支援が今日の私を支えて下さっております」という。

鈴木勇(高7)。東京教育大学(現筑波大学)卒。博報堂雑誌局長代理を務めた。広告代理業務のベテランで、博報堂を定年後もTBSフリタニカ広告部で活躍している。川高時代は投手として鳴らし一九五四(昭和一九)年夏の高校野球県大会で優勝し、野球部出身で初めて生徒会長に選ばれた。筑波大学でも投手として活躍した。

内藤豊(高21)。法政大学中退。プレゼン

ト社広告副部長からオレンジページ広告部長、騎虎書店代表取締役副社長を経て独立し、現在マガジンプランニングを設立。代表取締役として広告業界で活躍している。趣味の剣法では新陰流兵法剣術内伝印可、柳生制剛流抜刀術皆伝印可、新陰流杖術目録印可という強者で、本業よりも剣法の方が有名とか。

宗 教

〔寺院〕

城下町川越はお寺が多く、仏門で活躍するOBが少なくない。

天台宗 塩入亮善(高3)は天台宗関東総本山喜多院の住職。川越市仏教会会長を二期務めた。仁平信海(中34)は同じ天台宗別格本山中院の住職。川越ペンクラブ同人。季刊誌「武蔵野ペン」に「釈尊物語」を連載した。県指定重要無形文化財餅つき踊りで有名な西福寺の住職は奥山圓準(中43)。長く教職にあり、中学校の校長を務めた。

曹洞宗 戦前本校の英語教師を務めた梅沢仙州(中11)は善仲寺の前任住職。現住職の梅沢正寿(中46)も本校で教鞭をとっていた。曹洞宗埼玉第一宗務所長。同窓会の監事を務める。副住職の梅沢一雄(高29)と三代統一で本校出身である。

山本道隆(中21)は前長喜院住職。埼玉県
仏教会会長、全日本仏教会副会長を歴任。川

越市議を三期、議長も務めた。現任職山本元
晴(高15)は宗派布教師として全国を巡回。

地元ライオンズクラブの会長も務めた。

『枕草子』に「花の木ならぬは」という
章段がある。(伝本によっては「木は」と
あり、章段の位置にも相違がある)。檜の
木・楓の木・椎の木・白樺・柏木などと並
んで、「くすの木」が登場する。

その前半、

☆「楠の木は、木立多かる所にも殊に交じ
らひ立てらず、おどろおどろしき思ひ
やりなごうとまじきを、…」

「くすの木は、多くの木立にも殊に交じ
らず立っています、鬱蒼とした葉の茂り
を思いやると、不気味で親しみがもてませ
ん」と、あまり好感を抱いていないような
筆致である。

だが、と清少納言は続ける。

☆「千枝に分れて、恋する人の例に言はれ
たるこそ、誰かは数を知りて、言ひ始
めむと思ふにをかしけれ」

と、文を結ぶ。前半とは趣を異にして、

☆和泉なる信田の森の楠の木の

千枝に分れて物をこそ思へ

(『古公六帖』一一・森)

「和泉国の信田の森(現大阪府和泉市信
太山にある森)の楠の木のように、千本の
枝に分れて、あれやこれや恋の物思いに悩

くすの木と清少納言と

んでいる」を引き、屈折して広がるくすの
木の枝々に、千々に乱れる恋心のもだえを
見る。そして、「いったい誰が、物思う枝
の数を千本と数えて、千枝と言いだめたの
だろうと考えるとおもしろい」と、機知を
働かせて締めくくる。

くすの木の枝の、乱れて伸びる姿に恋の
煩悶を感じるといふ発想と、例えば、『日
本大歳時記』(講談社刊)所収の、

☆千年の楠の大樹の金若葉 高橋悦男
に見られる、明るく華麗な現代俳句の発
想とを比較すると、王朝人の感覚に違和感
を覚えないでもない。

それはさておき、繊細な神経の持ち主の
清少納言は、くすの巨樹の葉の茂りに、あ
る種の驚きと恐れを感じたのである。しか
し、彼女の鋭敏な頭脳はすぐさまそこから
飛躍する。くすの木の枝ぶりに目をとめ、
その「千枝に分れて物思ふ」姿態に、恋の
乱れ模様を感じ取って詠んだ古歌を思い起
こして、とっさに洒落た一文に仕上げた。

そのあたりの手腕はさすがである。
ユーモアに富んだ、平安王朝随一の才女
の面目躍如たるエッセイではある。

(元本校教諭 関口 弘・高4)

石塚邦光(高9)は東光寺住職。東光幼稚
園の理事長。広濟寺住職笠松猷一(高9)は

川越市仏教会の副会長を務める。養寿院住職
金剛秀房(高10)は同窓会副会長。川越市仏
教会会長を経て県仏教会の理事。川越市文化
財保護審議会委員を二期務めた。

日蓮宗 高校一〇回卒同期の二人が活躍し
ている。在学中剣道部で鳴らした星光諭は本
応寺住職。日蓮宗宗議会議長、財務部長。妙
昌寺住職沼田正順は川越市仏教会長、日蓮宗
県宗務所長。ともに、日蓮宗の要職にある。

浄土教系 時宗東明寺住職朝日龍幹(中
36)は陸軍航空士官学校卒。第二次世界大戦
に参加、戦後は民間航空機のパイロットとし
て活躍した異色の経歴の持ち主である。同じ
く時宗常楽寺前住職米山知謙(中23)は、県
立盲学校校長を十七年間務め、この間、関東
地区盲学校校長会会長、文部省特殊教育課程
審議委員として盲人教育に尽くした。現住職
米山知行(高9)は時宗県宗務所長、財務部
長として活躍している。

浄土宗蓮馨寺住職久米原恒久(高20)は元
全日本仏教会国際部長。宗派布教師、教誨師
川越茶・華道連盟会長を務め、大学では仏教
学を講じている。

〔神社〕

川越市出身の神社宮司などとして活躍した
主な人々を紹介する。

山田勝利(中26)は國學院大学国史科卒。

川越氷川神社名譽宮司。一九八〇(昭和五
五)年四月二十九日勲五等瑞宝章受章。川越

氷川神社宮司ほか一社宮司を兼務。県立川
越高等女学校(現川越女子高校)に奉職。埼

玉県神社庁長。庁長在職中に埼玉県社会館
建設に尽力した。埼玉県文化財専門調査委員

川越市文化財審議会会長。一九七四(昭和四
九)年五月十二日川越市文化財保護協会を創

立し初代会長となり、機関誌「川越の文化
財」を発刊。埼玉県文化財保護協会会長。埼

玉民俗の会会長。『川越の民俗』(川越叢書第
四卷)などの著書がある。

金井(小池)俊雄(中26)は國學院大学文学
部卒。川越市古谷出身。青梅市御獄山御獄神

社宮司。宝物殿を建設し、畠山重忠着用国宝
赤威大鎧を収蔵。一九八〇年北村西望に依頼

し、清廉の武將重忠の像を社前に建立した。
関山教純(中35)は國學院大学卒。増形白

山神社ほか三社宮司を兼務。大東東・狭山東
中などに奉職。

新井真治(中40)は皇學館大学卒。古尾谷
八幡神社ほか九社宮司を兼務。川越市文化財

調査委員。

岡本一夫(中41)は國學院大学卒。連雀町
熊野神社ほか三社宮司を兼務。

原章(中45)は國學院大学卒。毛呂山町出
雲伊波比神社奉務。一九四八(昭和二三)年

八月静岡県登呂遺跡発掘。一九六九(昭和四
四)年三月十二日大雪による西部新宿線電車

脱線転覆事故の際人命救助。上福岡第三小学
校長。川越市文化財調査委員。川越市子ども

会等少年団体育成指導員。川越市卓球連盟副
会長。埼玉県神社庁入間支部川越分会事務局

員。副読本『かわごえ』、『川越の板碑調査
報告書』、『川越の地名』など川越市教育委

員会刊行出版物に執筆協力した。
新井雄治(中46)は皇學館大学卒。古尾谷

八幡神社・堀兼神社など二社の宮司を兼務。
埼玉県神社庁入間支部支部長。川越市農業協

同組合理事。
山田春久(高8)は國學院大学文学部卒。

川越氷川神社ほか一社宮司を兼務。氷川会
館館長。川越市青年会議所理事長。埼玉県神

社庁教化委員長。埼玉県神社庁入間支部支部
長。川越氷川の社新能実行委員会事務局長。

埼玉県神社庁副庁長。社前に日本一の大鳥居
の建立を企画し準備を進めたが早世した。

『神社仏閣効能ガイド』(アロー出版)、『企画

立案の仕方』(交鈴社)、川越青年会議所創立
二十周年記念誌『汗と土と理想の灯が』など
の著書がある。

中野誠(高10)は國學院大学卒。八咫^や神社
など一社宮司を兼務。埼玉県入間郡市連合

神社氏子総代会川越分会事務局長。東京医薬
品(株)特販部長・総務部長などを務めた。

〔キリスト教〕
キリスト教では英国・米国聖公会の流れを

くむ日本聖公会で活躍している二名を紹介す
る。

片岡常吉(中10)は小学校教員の時受洗し、
牧師になるべく立教大学神学科に学び、司祭

に叙任。後ニューヨーク・セネラル神学校に
留学。帰国後、山形聖ペテロ教会主任司祭、

香澄幼稚園長のほか、民生委員を務めるなど
生涯を地域社会と教育に捧げ、教育功労者と

して表彰された。
森紀旦(高10)は東松山市出身。立教大学

大学院博士課程、聖公会神学院を卒業し、司
祭となる。ボストンの聖公会神学校にも留学。

長く母校のある川越にて司牧し多くの青年を
導く。その後聖公会の東西の神学校長を歴任、

中部教区主教に選出され、現在活躍中。著書
多数。今広く読まれている『新共同訳聖書』
の訳者の一人でもある。

*

卒業生はいろいろな分野で活躍しているが、その中には一般的な分類に入らないような分野で活躍している人、あるいは表面にはでないで世の中を支えている人もいる。ここではそのような卒業生にスポットをあててみたい。

小山(太田)三省(中7)は川越中学卒業後、南町小山商店(煙草元売捌業、現蔵造り資料館)に養子入りした。市議会議員、商工会副会長等を務めたが、川越市の各種の調停委員として尽力した。その方面の業績が認められ、藍綬褒章を受章した。

川目太郎(中13)は陸軍大出校の出身。関東軍司令部参謀を経て終戦のときは第三四軍参謀長(陸軍少将)として北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)威典にいたが、シベリアに抑留され、一九五〇(昭和二五)年にハバロフスク州ホール地区病院で病死した。

松崎忠夫(中21)は時計貴金屬商(有)「きんかめ」の社長で、川越専門店会の設立に努力し、設立後は副理事長として商店会の発展に貢献した。川高野球部の熱烈な応援者としても知られている。

嶋田勝郎(中22)は戦時中は川越市在郷軍人会の会長等を務めていたが、戦後は初雁中学校PTA会長、川越農業高校PTA会長、

入間第二用水土地改良区理事、青年団団長、市議会議員、選挙管理委員長、文化財保護委員等と幅広く地域のために貢献した。

根本正(中34)は南古谷の出身で、父、兄、本人と川越中学の卒業生である。また、祖父、父、兄、本人、長女と四代続いた教育者の家系でもある。『川中・川高人物史』を著し、川越中学・高校の歴史について研究した。

山下義雄(中35)は寺尾の出身で、陸軍士官学校を卒業した。外モンゴル、ノモンハンの日ソ戦に戦車隊小隊長として参加した。戦後は東京で自営業を営んでいた。

奥平俊夫(中41)は市内六軒町の民主委員を永く務め、また、川越市の古い史料もいろいろと提供している。

長島栄治(中43)は星薬科専門学校に進んだが、途中で家業の(株)長島商店を継いだ。川越市社会福祉協議会第一〇地区会長として社会福祉に力を尽くし、六軒町二丁目自治会長として地区の発展に尽くしている。

山根豊(中44)は芝浦工業専門学校で機械工学を専攻し、シチズン時計に勤めた。長く川越市少年補導員を務め、現在民生委員・児童委員として地域に貢献している。川越高校の同窓会副会長も長く務めている。また、ステンドクラスの研究者としても知られている。

木村定雄(中46)は旧制松本高等学校から東京大学を出て、家業の(有)吾野屋を継いだ。松本高校在学中に長兄木村恒作(中26)の友人で川越中学、松本高校の先輩小松彰(中26)から、小松が使った昭和初年の独和辞典を贈られた。当時は戦後の辞書等が貴重品の時代で、川越中学の先輩後輩の絆を語るエピソードである。

桜井陽一郎(中46)は中学45・46回同窓生の名物幹事。全体の同窓会では監事を務め、元会長岡村了一(中43)の秘書役として活躍した。武蔵大学卒業後、山一証券に入社したが、途中退職後は川越の蔵造り町並み保存のため尽力した市民活動家でもあった。

松岡章次(高3)は早稲田大学理工学部を卒業後大型冷凍機メーカー前川産業(株)で冷凍機械およびそのプラントの普及に務めた。母校川越高校にたいする思い入れが深く、高校第二回卒業生の文集『おーいくすの木よ』の編集に力を尽くした。

斉藤恒(高3)は東京交通短期大学を卒業後、西武鉄道に勤め、営業で活躍した。松岡とともに三回生のまともに努めた。この同期は併設中学より六年間在学したが、併設中学時代の生徒の消息を調べてその名簿の確定に努力した。

伊藤楨二(高7)は慶應義塾大学を卒業後、小川長保険事務所を経営し、川越ロータリークラブ、ボーイスカウト等を通じて地域の発展に努力している。また、川高PT会副会長として母校に尽力した。

森田稔郎(高10)は明治大学の応援団で活躍した。一九五九(昭和三四)年に川高野球部が甲子園に出場したとき明大の二年生であったが、川高応援団のリーダーを務め、その見事な指揮ぶりは当時の朝日新聞に大きく載せられた。その後、明大応援団でもリーダー長を務めた。

矢幅宏至(高13)は母校在学中は野球部で外野手として活躍し、甲子園にも出場した。日本大学を卒業後、父の経営する初雁衛材(有)を引き継ぎ、青年会議所の活動を通じて地域の振興に積極的に取り組んだ。川越市PTA連合会会長を務めた。

野沢達也(高15)は東京学芸大学卒業後、県立高校等の音楽教師であったが、一九八二(昭和五七)年より初雁幼稚園園長を務めている。その間川越私立幼稚園協会会長、全日本私立幼稚園連合会評議員等を務めていて、幼児教育の発展に尽力している。その他、専門の音楽では川越フィル団長、また、アマチュア合唱団の指導にも力をいれている。

独和大辞典 木村定雄(中46)

退役陸軍中尉小松国三郎氏は軍事教練の教官であった。参謀本部の五万分の一の地図「川越」の見方も初めて教えられた。と同時に我々新入生には訓練全般の師でもあった。先生は昭和十八年二月に亡くなった。敗戦後の窮乏時代、昭和二十二年松本高等学校理科に進学した私の元へ先生のご長男彰氏―川中26回卒・松高文乙出身―から先生の遺品帝陸軍大礼服軍帽とすっかり使いこまれた戸張信一郎著独和大辞典(昭和四年六月一〇日三版大倉書店発行)とが届けられた。軍帽は帽子屋に手直しさせ二本の白線と校章を付け松高の制帽に生まれ変わった。在学中三年間、制帽を被り、またドイツ語学研修には必携の友として辞典は愛用した。その後居所が変わり惜しむべき学帽は紛失したが、辞典は七十年の古色を帯びて、今も書棚の隅に収まっている。



木村定雄所有の独和大辞典



カット・藤野達也(中43)

各 地 区 初 雁 会 の 歩 み

飯能初雁会

飯能地方における初雁会の歩みを顧みますと戦前、飯能町ほか一二か村の川越中学校を卒業した諸氏が、一九三二（昭和六）年四月四日「西部初雁会」の名称で、発会しております。その時の参集者二四名であり、その後のこの地方の政財界に君臨された方々でした。

旅行や懇親会を通じて、団結を深め、時には先輩の海軍軍医閣下の引率により横須賀港に停泊中の軍艦「山城」を見学したこともあったとかで、戦後昭和三十年頃まで活動しておりました。

その後第二次世界大戦中、飯能方面から戦鬪帽にゲートル巻のスタイルで通学した中学四回から高校四回卒までの先輩諸氏が「飯能初雁会ゲートル会」という親睦会を創って、会合をしまいに



岡村和夫氏の講演



創立20周年記念会旗

した。このような経緯と母校創立八〇周年が相まって、ここに飯能市、名栗村の全卒業生が母校の発展に寄与し同窓生の親睦を計ることを目的として一九七八（昭和五三年）五月二十八日に開かれた創立総会で、約二〇〇名参加のもとで、「飯能初雁会」が誕生しました。一九九七（平成九年）年に満二十年を迎えた当会は、発足以来毎年五月の最終日曜日に総会を開催し、NHK解説委員岡村和夫先輩の時局講演会が恒例行事であります。

また事業の剰余金積立による飯能市立図書館への一〇〇万円の寄附による「初雁文庫」の設置も、第三回文庫寄附にむけ、目下積立中です。また一九八八（昭和六三年）秋には、奥武蔵グリーンラインに山毛櫨ぶなの苗木の植樹をし、平成九年飯能初雁会旗も作製しました。このようなニュースや会員の動向等は、発刊二〇号を迎えた会報「はつかり」で報道しており、県下第一号初雁会として、努力してまいりたいと存じます。

事務局長 渡辺 肇（高10）

日高初雁会

日高初雁会は、一九八一（昭和五六年）年に発足。会員は、川中・川高の卒業生と現・旧教職員で日高市に在住する方だが、実際には三〇歳以上の方であり、会員数は約二〇〇人。会員相互の親睦を計り母校の発展に寄与するため、毎年七月第一日曜日に総会・講演会・懇親会を開催している。総会は、金子健（高

具、竹細工を産し、中世から鎌倉街道及び秩父往還の産物の集荷市場として発展してきた街である。

年数回の懇談会は、川高の思い出話やOBそれぞれの貴重な体験談を語りつつ地酒を堪能する。そして最後は校歌と「奮え友よ」の応援歌で次回の再会を期す。

皆さんも是非訪れて、感じてみませんか、ふるさと小川の豊かな自然と濃やかな人情を。

幹事 石川幹雄(高17)



設立間もない頃の総会にて(1983年)

入間初雁会

街角で偶然出会った斉藤義信(高15)、井花富男、森田孝一(高17)、田中龍夫(高23)らの立ち話から初雁会設立の話が持ち上がり、さっそく諸先輩にご相談、力強い賛同と激励を得た。田中は毎晩夫人と炬燵で同窓会名簿(昭和53年版)をもとに市内在住の五四〇名のOB名簿を手書きで作成。一九八四(昭和五九年)四月十二日市内のホテルで柳内滋(中27)、斎藤金作、田代甲子雄、原田雅義(中45)、横田敬二(高4)、野村進(高17)、駒井勲(高21)、関谷稔(高33)、前述の四名らが出席し設立準備会開催。五月十三日市民会館に宮島秀夫川越高校校長、市川宗貞飯能初雁会会長ら来賓を迎え設立総会を開催。初代会長に柳内滋、副会長に野村辰雄(中32)を選出。

斎藤金作が揮毫した墨痕鮮やかな「入間初雁会設立総会」の紙製の垂れ幕(現在布製)は十余年間総会のために「設立」の部分に伏し使用した総会の花。懇親会の乾杯、大々な挨拶を当日一番若いOB、一番早く来たOB、或いは遅刻したOBにお願いする伝統



入間初雁会設立総会記念(1984年)

もこの時から始まった。恩師が講師の時は教え子のOBのこともある。現会長は清水仁恵(中40)、副会長は原田雅義。設立以来、前述OB以外に福田昇平(中41)、西沢孝二(高6)、山畑雅広(高8)、大久保祐治(高9)、岩田力也(高11)、大久保浩一、栗原和彦、齋藤秀雄、細田和男(高17)、不破隆夫、細田剛(高20)、宮岡源一(高22)、大野勉(高25)、諸井宏行(高26)らが会運営に関わっている。総会後の講演の講師は本校で小泉功、渋谷健、松本利雄、小川禎三の諸先生方、山本秀順高尾山山主、佐々木忠一元同窓会会長、小宮悦子様、木村時夫早大教授、三笑亭笑三師匠など。

幹事 井花富男(高17)

坂戸初雁会

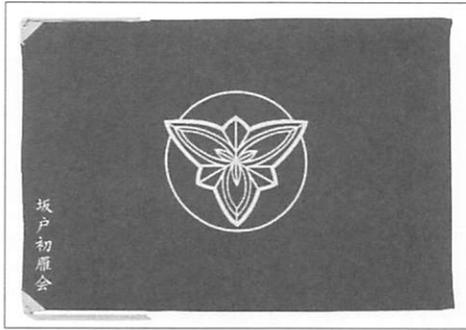
坂戸初雁会発足の心は、と問われれば、「少年の心」と答えたい。正門の天を支える大楠樹が大志を抱く同窓生の支えであったことはまちがいない。

一九九二(平成四)年十一月二十八日、佐々木忠一同窓会長、宮崎雅好坂戸市長(中42)のご臨席を願って会員数百人を擁する坂

戸初雁会が発足した。近隣初雁会と同じく発足が予定されている志木初雁会の諸氏にご列席をいただき、以後同窓の誼よしみを重ねている。

社会に出るとお互いが赤の他人のように、ほとんど交流がなく関心も薄い。どんな人物が活躍し、伝統が育っているか、川高の名を冠しているのだから何か共通点があるだろうぐらいしか思いが浮かばない。入会すればどんなメリットがあるかと思えば聞かれるが、その発展に役立つ妙案を考えただけでなく、自ら実行し、先頭に立つことが大切である。行動力と情熱を持ち合わせていけば大歓迎とした。坂戸初雁会旗、バッジ作製は会員の結束を示すもので、総会の講演者は同窓より選び熱のこもったお話をうかがうとともに、懇親の実をあげている。

開校五十周年を迎える地元中学校に次々と楠を植える事業を実施、目先にとられることなく人間教育、人間完成を楠



坂戸初雁会会旗

に託している。また有志が「楠募金」を要請母校へのたえざる思いを基金として会員に募っている。母校の発展を心から切望してやまない。

初雁行

手に手をとる

棹さおになり

鉤かぎになり

天空を翔けよう

少年のころもて

(坂戸初雁会・発会あいさつ)

会長 高山 孝(高7)

和光初雁会

県内六番目の初雁会として誕生した「和光初雁会」も、数多の方々と手を携たすえて運営を営り二年有余となります。幸いにして元浦和高校校長の鈴木勲二先生が、本会の顧問になつてくださり、何かとご指導を賜りますこと、誠に心強く、心から感謝いたしております。

発足して日も浅く、まだまだ発展途上にある会でございますので、これといつて大きな事業を持つことは出来ませんが、七月の定例総会、秋の合同散策会への参加、そして新年

祝 和光初雁会設立総会



設立総会であいさつする上原会長

懇親会を毎年開催し、さらに会報も発行し、組織の充実と会員相互の親睦を図っております。そして機会あるごとに卒業生のどなたかに講師をお願いして、一日を有意義に過ごしております。

設立当初の調査によれば、和光市に在住の勤の卒業生は二〇〇名余りであり、少なくとも六、七〇名の加入を期待して発足いたしました。現実はずかしく三五名という誠に淋しいスタートでございました。これも会長の

不徳の至りであり、卒業生の理解が得られなかった結果であると思います。そして一方では、和光市は東京に隣接しており、卒業生の考え方がそれぞれ異なるという地域性にもあると思います。

そしてさらに最近の傾向として、地元の中卒卒業生に都内への私志志向が強く、優秀な生徒が川高への進学を敬遠するということは誠に淋しい限りです。

しかし皆様にお世話になりせっかく設立した初雁会でございますので、その貴重な灯を消すことなく前向きに進んでまいれる所存です。

いよいよ創立百周年記念事業も目前であります。二十世紀とともに歩んで来た母校百年の足跡をしるし、さらに大きく将来を展望した輝かしい大事業の完成を心からお祝い申し上げ、報告と致します。

会長 上原昭二(中43)

志木初雁会

志木初雁会設立は一九九三(平成五)年二月二十八日、第七番目の初雁会として誕生した。これに溯ること三十有余年、川越中学校卒業生有志による親睦会が結成された。現会

長の父君で、前町長の井下田四郎氏が会長に就任。だがこの会は長くは続かず、自然消滅の形で姿を消した。機を得ずということか。そして平成四年に至りようやく会設立の気運高まり、井下田慶一郎氏を設立準備委員長に委員会の結成、数度にわたる会議の結果、志木初雁会の発足にこぎつけたのである。会の組織、運営、会則の制定等、先輩の坂戸初雁会のご指導をいただき、井下田氏父子二代ここに設立より今日に至る志木初雁会の足跡を簡単に記しておく。



1993年2月28日、設立総会当日の井下田慶一郎会長

平成五年は「設立総会」を二月二十八日に開催し、五月九日には「元気で歩こう会」を、母校同窓会総会に合わせて実施、志木市役所から川越高校まで一六人が徒歩で踏破した。平成六年には「秋の夜長を語る会」で親睦をさらに深め、そして平成七年には同窓会の事業である「秋の散策会」を主催、晴天の下、九二人の参加を見た。これは散策会が始まって以来の記録と言われた。川高百周年が近づいた平成九年には「母校見学会」を実施、母校の現状と、百周年記念事業に対し、会員の認識を深める事ができた。また会報は平成五年の創刊で、現在九号まで刊行している。

会を運営する現役員は、会長、井下田慶一郎(中35)。副会長、浅田光二(中43)、横内洋(高5)。幹事は新藤邦泰(高3)以下一二人。監事は細田金治(中46)、細田金蔵(中47)の諸氏である。

副会長 横内 洋(高5)

毛呂山初雁会

毛呂山町は奥武蔵の山並が関東平野に溶け込む境に位置し、その山あいにある鎌北湖は四季の生み出す変化を湖面に映し、また毎年

十一月三日には九〇〇年以上の歴史をもつ流鏑馬祭りが行なわれ、静けさを増す秋の一日をにぎやかに彩り、いまだ自然との調和を残す町である。

当初雁会は、一九九五(平成七)年十一月に発足し、会則上は毛呂山町在住及び在勤者で川越中学校並びに川越高校卒業生を会員とする旨規定しているものの、現実には中47(高1)一名から高33までの五二名である。



小峰町長を迎えるの発足総会

発会から日も浅く、行事としては、八月に総会を兼ねて町長小峰俊三氏(高2)を囲み「これからの毛呂山町政」についての話を聴きながら懇親を深めたほか、平成九年度の同窓会秋季散策会を担当し、町内にある武者小路実篤とその同志により建設された「新しき村」を散策した後、山間の鎌北湖畔に「いぶた鍋を囲んで」の席を設けて、先輩後輩との再会、懇親に一助をなしたことである。

会長 内野林郎(中47)

鶴ヶ島初雁会

会設立にあたり、有志各位より話が出てから十年を経て、漸く一九九六(平成八)年二月二十五日、「鶴ヶ島初雁会」結成総会開催となる。会員は川中・川高(定時制を含む)卒業生で、市内在住者とし、設立趣旨を創立百周年を迎えるこの機会に、母校発展に寄与し、並びに校友相互の親睦を図ることとした。会員募集にあたり四〇歳以上の同窓生を対象とし、吉澤泰而会長(中47)を先頭に賛同者七六名で発足。

設立後、日が浅く各地区同窓生のお仲間を紹介するほどの活動もなく、一年半を経過す

る。

活動の一端を、ここに記す。

一、平成八年二月二十五日、結成総会。規約
予算、役員承認。来賓として、同窓会会長
洪谷健先生並びに近隣の坂戸、日高初雁会
長各位に列席を願ひ、教訓を拝聴する。

二、平成八年十一月九日、講演会開催。講師



第2回定期総会であいさつする吉澤会長(1997年)

に同窓会会長洪谷健先生をお迎えする。演題
は「母校川中・川高の今昔」で、内容盛りだ
くさんの話題を聴講する。

三、平成九年六月十五日、定期総会開催。来
賓として、同窓会会長洪谷健先生、大沢幸夫
校長、坂戸初雁会、日高初雁会にご列席願
つた。平成十一年の百周年記念行事が間近であ
ることを実感する。

この他、役員会を随時開催し、不定期であ
るが会報の発行も実施している。

滝島幸昭(高5)

東松山初雁会

通学区で東松山地区と称される東松山市、
嵐山町、滑川町、吉見町の地には、一〇〇〇
名近い卒業生がありながら、初雁会が誕生し
たのはごく最近の一九九七(平成九)年七月
末のことです。そこで、現時点におい
ては御報告できるような歴史や活動もござい
ません。つきましては、東松山初雁会発足の
経緯と今後の取組み、抱負について申し上げ
ることといたします。

一九九九(平成一一)年、母校川高が栄え
ある百周年を迎えるということで、当地でも



会報「奮え友よ」第1号(1997.10.1発行)

初雁会を発足させようという気運が高まって
まいりました。一九五九(昭和三四)年、川
越高校が甲子園に出場した折、二年生の唯一
のレギュラーとして活躍した嶋本正雄(現市
議会副議長)の学年(高13)は、嶋本を中心と
して内田昌治、関田哲彦、伊藤敏行、柴生田
伸利らの結束が固く、このメンバーが核とな
り、先輩の小久保喜物次(高7)、岡部繁(高
11)らの支援のもと発起人会が結成され、一
九九七(平成九)年七月二十七日、当市の総
合会館において六〇名余の同窓生の参加と洪
谷健同窓会長、高山孝坂戸初雁会会長ご臨席
の下に設立総会が開催され、めでたく東松山
初雁会が誕生いたしました。そして、不肖私
が若輩ではありますが会長に選出されました。
事務局は会員の内田昌治の厚意により(有)

利幸商事に置かれています。

本会では目下、年一回の総会と二、三の親睦会、勉強会を計画いたしております。会報「奮え友よ」も発行いたしました。題字を揮毫されたのは小久保喜惣次です。この会報を同窓生に配布して会員を募ったところ、さつそく二〇〇名近い方の御参加をいただくことができました。発足したばかりの本会ですが、真打ち登場の気概に燃えています。

会長 伊田登喜三郎(高22)

川島・桶川初雁会

川島町は川越市の北に隣接し、江戸時代から堤防(大田堤)で囲まれた地理的に一つのまとまった地域である。そして、現在も商業交通は川越との結びつきが強い地域で、学生は川越市内の高校に通う者が多い。

一九九六(平成八)年、百周年記念誌編集地区協力委員会が発足し、川島・桶川地区から委員四名が選出された。委員は、各地区で活躍する同窓生を推薦するにあたって、地域の同窓生の連携のないことによる情報不足を痛感した。そこで、この機会に川島・桶川初雁会を発足させたらとの話題が持ち上がった。



渋谷同窓会長を迎えての発会式

多くの方に相談すると是非との声が強く、発足の準備を八月より始めた。同窓会事務局よりお借りした名簿で、四〇歳以上の方で、川島・桶川在住の方一七六名に発足趣意書である案内をさしあげた。参加の連絡があった方は三〇名に達し、その後、詳細な案内をさしあげた。十一月二十二日、川島町広域福祉センターで、二七名の参加により、発会及び総員選出、自己紹介と無事一時間余りで終了し

た。その際、記念誌に推薦するOBの様子も伺うことができ、多方面で活躍する同窓生の状況が改めて確認された。その後、渋谷同窓会長をお招きして、町内で懇親会がもたれた。四〇歳から八〇歳までの同窓生による楽しく、また、充実した会であった。

今年度の役員は以下の通りである。

〈会長〉 関口 武

〈副会長〉 矢部敬一郎、笹木豊彦、矢部 彰

〈幹事〉 宇津木忠征、田中茂夫、菊池建太、

岡部政一、今井茂夫、片山幸雄、内田紀成

〈会計〉 中村正宏、黒島芳幸

〈監事〉 斎藤寿実穂、宇津木一雄

事務局 菊池建太(高17)

新座初雁会

まずは我が新座市を簡単に紹介致します。

埼玉県の最南端に位置し、南から西にかけて東京都の練馬区、保谷市、東久留米市、清瀬市に接し、東に県内の朝霞市、北に志木市、三芳町、西に所沢市に接しております。

東上線の志木駅、朝霞台駅、西武池袋線の清瀬駅、東久留米駅、ひばりが丘駅、またJR武蔵野線の新座駅、北朝霞駅が交通機関と

して利用されております。

市内には平林寺があり、二代將軍・家光の参謀で初雁(川越)城主・松平信綱公をはじめ、数々の名將が祀られております。

さて、新座初雁会は、一九九八(平成一〇)年の五月二十四日に設立したばかりであります。



1998年5月24日 新座初雁会創立総会(なみきの幼稚園にて)

したがいまして、まだ実績も活動もございませんが現在、第一回目の会報を発行すべく努力中であります。

母校が、栄えある百周年を迎えるこの機会に当市でも「初雁会」を発足させたいと、今年四月上旬に、一九四五(昭和二〇)年卒業の並木志和(現県議)が提起し、さっそく、賛同者が発起人会を結成し、数回の会合を経て、同窓生に参加を呼びかけ、五月下旬に創立総会が開催されたのであります。

創立総会および懇親会は、五十余名の同窓生の参加と渋谷同窓会長、大沢幸夫校長をはじめ多くのご来賓の方々の御臨席のもとに開催。皆様のご理解、ご協力を得て、盛大に、ここに「新座初雁会」が誕生したものであります。

誕生してまだ日も浅いのですが、今後、先輩初雁会のご支援、ご協力をいただきながら種々活動していきたいと考えております。

会長 金子満彦(高30)

朝霞初雁会

川越高校創立百周年おめでとうございます。幾多の先輩と教職員の先生方のご努力によ

り築きあげられた伝統、そして二一世紀という新しい時代に向かって躍進を続ける川越高校の同窓生の一員として創立百周年を迎えられることを誇りに思っています。

朝霞初雁会は、一九九八(平成一〇)年十月二十四日に同窓会会長の渋谷先生、校長の大沢先生をはじめ近隣の初雁会会長の皆様のご臨席をいただき、会員八三名で発足いたしました。

設立にあたって、小寺貞安(高8)、橋本正彦(高10)両氏が提起。(ともに川高時代は陸上競技部に属し、長距離選手として一時代を築いた)。その両氏を軸にほかに四名(陸上競技経験者)を発起人に加え準備に入りました。もちろん、発足まで家族的雰囲気の中にも陸上競技スピリットをもって順調に進みました。

設立総会、懇親会は、昭和八年卒の大先輩から平成七年卒の新鋭までが参加、定時制からも朝霞分校があったことから多くの同窓生が参加しました。中には夫婦や家族同伴での参加もあり和気藹藹のうちに終了しました。

本会は発足したばかりですが、「出席して良かった。楽しかった。次回も参加したい」と思える会にしたい。そのためにも気軽に参加できる事業を実施し、同伴での参加も大い

に歓迎し、会員相互の親睦を図っていきます。
また「学び舎」を、「師」を、そして「友」
を思う心で団結し、同窓の輪を広げ母校の発
展に寄与したいと思っています。

◎平成十年度事業（十月より）

- 一、設立総会
- 二、役員会
- 三、懇親会
- 四、会報の発行
- 五、朝霞初雁会設立記念事業（川越高校創立



女性・家族も参加の懇親会

百周年記念事業へ金一封進呈

六、その他本会の目的達成に必要な事業

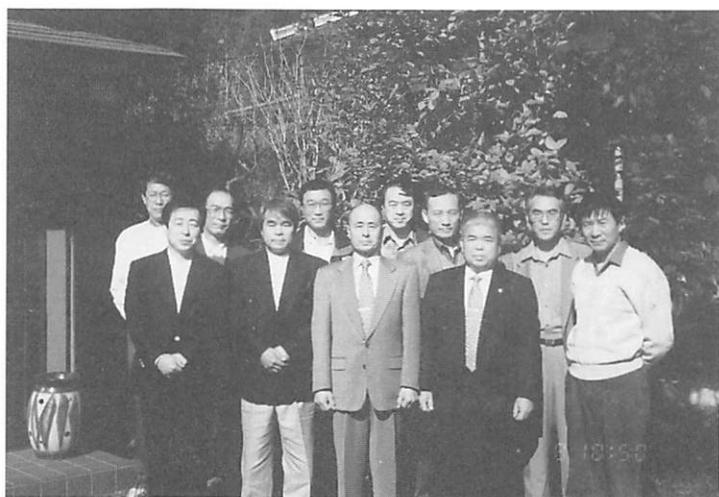
◎役員

- 会長 小寺貞安(高8)
- 副会長 橋本正彦(高10)
- 幹事 須田秀夫(高16) 比留間明(高18)
- 曾根田満康(高19) 陶山憲裕(高21)
- 千葉満(高24)
- 会計 橋本芳博(高19) 渡辺利昭(高25)
- 監事 荒木幸男(高9)
- 事務局 朝霞市溝沼一八七〇二三(橋本)
- (電話) 〇四八四六五一八〇〇

嵐山初雁会

嵐山町は川越市の遙か西方に位置し、このため当地から川越高校(旧制中学校)への進学者は少数だが、それだけに卒業生の同窓意識と交流は深く強いものがある。

一九九八(平成一〇)年五月に有志一六名での懇親会席上で母校創立百周年記念事業計画が話題にのぼり、卒業生の親睦のため当地にも初雁会を結成しようとの提案があり、直ちに結成のための準備委員が選出された。準備にあたっては一年前に発足した東松山



会の運営を担当する幹事会スタッフ

初雁会役員からいろいろとご助言をいただき、発会式を十月二十四日と定めた。

当日は同窓会本部理事、東松山初雁会副会長のご臨席をいただき意気盛んにスタートした。

嵐山初雁会はこのようにして誕生したばかりだが、今後の活動方針としては会員の一層の拡大、会報の刊行、年に一度の総会と数度の懇親会、木曾義伸、畠山重忠など当地の歴

史、文化に関する探訪と勉強会、さらにはいろいろな分野で活躍の当会会員による講演会などを通じて親睦と交流を深めていきたいと考えている。

また、会員の親睦にとどまらず相互の繁栄に協力しあって地域の発展に大いに寄与したいとも願っている。

当地から川越高校への進学者の増加を願うとともに、嵐山初雁会が発展しつつ永続し、やがては母校の創立百五十周年、さらには二百周年の記念事業に少しでも協力できるならば大変うれしいことである。

会長 米山大恵(高5)

近畿初雁会

同窓会名簿の発行をきっかけにして、有志により近畿二府四県に在住の初雁会会員の調査が行われた。そして有志のよびかけにより、近畿初雁会が誕生した。役員、規約等がきまり、活動も始まった。年会費は二〇〇〇円と決定し現在に至っている。主な活動としては、年一回の総会、総会後の懇親会、近畿初雁会員名簿の作成、「川高同窓会報」等の配布、会員の「近況報告」等の発行である。現在の

会員数は約六五人。

総会と懇親会は年一回、春から秋に行われている。会員の出席数等は、記録によると次の通りである。

第一回 一九九〇(平成二)年八月八日

八幸 九人

第二回 一九九二(平成三)年七月二十七日

たかつガーデン 三二人

第三回 一九九二(平成四)年八月二十三日



近畿初雁会の発会に際して(1997.8.22)

たかつガーデン 二三人

第四回 一九九三(平成五)年十月十六日

メルパルク 一四人

第五回 一九九四(平成六)年七月三十日

メルパルク 一七人

第六回 一九九五(平成七)年六月二十七日

本むさし会館 一二人

第七回 一九九六(平成八)年八月二日

本むさし会館 一五人

第八回 一九九七(平成九)年八月二十二日

本むさし会館 一四人

近畿初雁会の発足以来、現在までの主な活動は以上のとおりであるが、今後の活動方針について、検討していきたいと考えている。

代表幹事 根岸光明(高4)

在京初雁会

東武東上線を利用して都内へ通勤している川中・川高の同窓は、昔も今も大勢いる。一九五二(昭和二七)年の暮、通勤の車内で浅海倭夫(中21)が菅間六郎氏(中17)と会い、「戦前、在京の川中出身者が年に一回くらい会合していると聞き、自分も日比谷の陶々亭に行ったことがあるが、在京者と通勤者との

同窓の懇親を深めるため、あれを復活しようではないか」と話しかけたのがきっかけ。両氏は坂田圭司(中17)にその希望を述べたところ、さっそく賛成された。二人で銀座の交詢社ビルでピルゼンというビヤホールを経営している斉藤憲吉(中11)を訪ね、会場の提供を頼んだところ、もう手をあげて賛成し、その場で快諾を得た。そこで、さらに世話好きの高橋三四次(中23)にも同志集めを依頼した結果、一九五三(昭和二八)年三月十八日、矢部謙次郎(中1)、森田茂(中3)、喜多義之(中6)、岩崎賢太郎(中11)、小川茂(中12)、大野又四郎(中13)、田中次郎(中16)、内田静馬(中22)の各氏等総勢二二人がピルゼンに集合、ここに在京初雁会が発会した。毎月八日正午を期してピルゼンで例会

年に一回川越高同窓会との合同大会を各地で開き、会員相互の親睦をはかることとした。同年十一月に矢部謙次郎を初代会長に推挙した。

その後、本校の同窓会長、学校長はじめ関係者の往来も足しげく、相互に情報を交換し隆盛をきわめた。最近では世代の交替がうまくゆかず、会員は漸減傾向にある。現在では中学が23回Ⅱ一九二五(大正一四)年卒業からの三二名、高校が25回Ⅱ一九七三(昭和四八)

年卒業までの三四名の計六五名で、地域別にみると都内が二九名、埼玉、神奈川、千葉県で二六名となっている。創立二十五周年以降、五年ごとに神田の学士会館で記念式典を挙行しており、最近では一九九四年(平成六)年に一年遅れの四十周年を祝った。

一九七二(昭和四七)年に副会長、川越地区連絡員、各種委員を設けた。本来当会は出入り自由、会費はその都度払い、規約なしで運営していたが、やはりいろいろと支障があるので、一九八五(昭和六〇)年に規約を制定した。組織面では、副会長に総務、企画、財務、広報の担当を明示し、事務局長、監事をおき組織の強化をはかった。

歴代会長

- 初代 矢部謙次郎(中1) 一九五三年
 - 2代 喜多義之(中6) 一九六二年
 - 3代 児玉政介(中7) 一九六三年
 - 4代 坂田圭司(中17) 一九七四年
 - 5代 矢部義一(中23) 一九八四年
 - 6代 増島隆二(中35) 一九九一年
 - 7代 田中隆(中45) 一九九三年
- 現役員
- 会長 田中 隆(中45)
 - 副会長 矢部敬一郎(高2)

菅沼伸之(高2)

岡田良平(高2)
横溝高至(高21)

活動概要

夏の八月を除き、毎月次のいずれかを主催し、または本校同窓会行事に参画している。

①昼食会——銀座の交詢社ビル内「ピルゼン」において創立以来連綿として続いており現在は一、二、四、七、十二月の年五回原則として八日の正午～十四時。出席の申込みは不要で会費は二〇〇円。最近は出席者が少なくいろいろと検討中。(一九六四年にピルゼンの斉藤憲吉社長(中11)が急逝したが、後を継いだ長男のご好意で、そのまま現在まで会場として利用できたことが、本会の発展に大きな力となっている。)

②夕べの集い——昼食会への参加が難しい会員のために一九七九(昭和五四)年から、三、六、九、十一月の年四回、あらかじめ通知して神田一ツ橋の学士会館で十八～二十時半まで食事の後、同窓会員による講演会、懇談会、意見交換会、マジックショー等を催してきたが、平成九年から場所を変えたところ、出席者も増え、好評なので今後はその方向で進む予定である。

最近一年間のテーマは「日本版ビッグバ

ンについて」長島恒男(高3)、「モンゴルの旅」岡田良平、菅沼伸之(高2)、「香港の旅雑感」矢部敬一郎氏(高2)、母校百周年記念事業をめぐる話し合い等である。



1996年12月8日の月例会(銀座ビルゼンにて)

③本校の同窓会総会、秋の散策会には毎回十数名が参加している。平成八年の散策会は当会が主管して、芝増上寺―愛宕山―新橋を回り、西銀座のバルハラデンで懇親会を行ったが、同窓生とその家族、渋谷同窓会長、深谷校長など一〇三名の参加があり盛大だった。

会報「鐘つき堂」は一九七三(昭和四八)

年に創刊、会員の講演記録、論文、随筆、

和歌、俳句、川柳、大会報告、会員消息、

行事予告、慶弔等を取りあげ、会員相互の

親睦、啓発、報告、連絡等に役立っている。

現在年二回発行を原則として六三号まで出

ている。創刊号から一七号までは佐々木忠

一(中32)、一八号から二五号までは松本

博一(中37)、二六―五二号までは佐々木

忠一と田中崇(高3)、五三号以降は岡田

良平(高2)が編集と発行を担当している。

もともと本会は、母校を愛する気持と同窓

生相互の連帯意識の強い諸先輩の主導で都心

に生まれたもので、懇親的色彩のきわめて濃

い集まりである。時は移り、人は変われども

その精神は変わらないと思う。最近各地に初

雁会が相次いで誕生したが、それはそれとし

て、都内へ通う同窓生は年々増えていると思

うのでたまには当会にもお顔を見せていただ

きたいというのが私たち役員の願いである。

岡田良平(高2)

所沢初雁会

所沢初雁会(会長河内昭次・中44)は、一

七番目の地区初雁会として、本年五月二十九

日、市内晨麓苑において会員総数三八八人の

設立総会で、発足いたしました。母校の百周

年と所沢にも初雁会をとの思いで、発起人会

議、各卒業年次代表者による二回の設立準備

会、また度重なる事務局打合せ会議を持ち設

立となりました。当日は、渋谷同窓会長、橋

本校長他のご臨席をいただき、母校の古典ギ

ター部、応援団の諸君のアトラクションも行

なわれ、盛会裏に閉

会となりました。今

後は、先進初雁会の

ご指導もいただき、

会の充実を図ってま

いります。

斎藤 清(高19)



母校応援団によるエール

岡田恒輔(中)——初のOB校長にして「明治文庫」の創設者

岡田恒輔は川越中学校の第一回卒業生であり、母校の校長も務めた。その栄光に満ちた偉大な足跡は、川越高等学校百年の歴史の巻頭を飾るにふさわしい。

一九四六(昭和二一)年に埼玉師範学校(現埼玉大学)校長を最後としてすべての公職を辞した。明治の時代の日本の興隆と、世界への飛躍の時代を、トップリーダーの一人として歩んできたその心境を思えば、一九四五(昭和二〇)年八月十五日の終戦の詔勅は、全く耐え難いものであったに違いない。そしてこのいさぎよきこそ岡田恒輔の名声の今に称えられるゆえんではないかと思われる。

岡田家は、西武鉄道吾野駅の近くに「御武



第七高等学校長時代の岡田

腰」という地名があるが、その地名のままに御武腰と呼ばれて通る素封家である。恒輔は一八八三(明治一六)年、医師としては二代目になるこの岡田家に生まれた。しかし恒輔は学者を志し、川越中学から第一高等学校文科へ、そして東京帝国大学(現東京大学)文学部哲学科に籍を置き好きな学問の道に励んだ。

一九一〇(明治四三)年、帝大卒業後は、熊本県立の中学校を振り出しに、一九三七(昭和一二)年から六年間は第七高等学校(現鹿児島大学)長にもつき、最後は一九四三(昭和一八年)から一九四六(昭和二一)年まで埼玉師範学校校長を務めた。こうして三六年間教育者としての道を歩んだ。この間、一九一九(大正八)年から二年間、母校川越中学校長の任に就いている。翌一九二〇年、現川高図書館の前身である「明治文庫」を開設する際には、岡田も多くの私財を投じ、これを推進させたことを忘れてはならない。

第二次世界大戦という時代背景の中にあつ

て学徒の出陣出征に当たっては、その前途をつねに気づかっていたが、やがて大きな犠牲のもとに日本の敗戦である。彼の思想信条からしてその生涯における衝撃的な痛恨事であった。学徒を戦場に送った責任を感じたのであろう彼は、埼玉師範の戦後の体制を整えるや、埼玉師範学校長をはじめ一切の公職を辞し、趣味の絵筆をとることが多く、請われれば絵を教え、好きな溪流釣りや読書に日を送り、幾度も要職に誘われたが、再び職を求めようとはせず清貧に甘んじていた。

一九六〇(昭和三五)年に母校川越中学の教え子が、川越図書館で恩師の絵画展を開き、招かれた時は涙して喜んだという。その二年後八〇歳で永眠したが、まことに教育者としても人間としても偉大であった。そしてなお後継者一族からは教育者を輩出している。

一九三九(昭和一四)年、勲一等瑞宝章受章。一九四五年、従三位に叙せられる。

小山誠三(中47)

安部立郎(中)——「同志会」「図書館」を設立、はつかり文化の礎を築く

安部立郎は、一八八六(明治一九)年二月

六日、漢方医安部大蔵の一人息子として、川越町上松江町に生まれた。一九〇三(明治三六)年川中第一回生として卒業後、早稲田大学(政治経済科)に進み、卒業時の成績は、中野正剛に次いで次席だったという。

川中在学中に、その後の行動の基本となる二大事に取り組む。一つは図書館設立運動、他の一つは、「同志会」結社活動である。

一九〇二(明治三五)年五月、五年生の時、第一回生全級二九名を会員とした「青年文庫」なる図書閲覧所が、学校に程近い養寿院裏、川越慈善学校の一部を借りて生まれた。これは、運営面でつまずき失敗に終わる。だが、一九〇三年九月に発足した同志会により、一九〇六年一月、図書館開館が決まった。旧



青年文庫の所在地、慈善学校の一部を借り受け発足。その後、住所は転々とし

たが、一九一五(大正四)年五月、私立川越

図書館は独立の建物をもてるようになり、はじめに公共図書館らしい機能と広さをもつに至った。安部は、司書としてこの間さまざま活躍をする。すなわち『入間郡誌』(一九一一年一月)を謙受堂書店から出版、また自身の講話により、川越叢書として『三芳野砂子』(川越年代記)(一九一六年一〇月)『川越素麵』(一九一七年三月)、『三芳野名勝図絵』(同年二月)等を復刻出版した。

私立川越図書館は、一九一八(大正七)年五月の町会で、建物、蔵書等とともに町に移管され、町立(現市立)図書館となった。

一方、一九〇二年十月には、安部、広木を中心として遠足を目的とする健脚隊を組織し、翌年九月には、これを発展させ、同志会を結成する。

初代会長海老名義雄(中5)によれば、

「その中に吾々も段々級も進んで、幾分か学問的議論を試みるようになってくると、健脚隊従来の事業は、あまりに簡単であつて変化に乏しい。もう少し複雑した偉業をやつて見ようではないかと云う処から編集事業の拡張、

図書館の経営を企てた。」

安部は、一九〇五(明治三八)年九月、自ら会長となり、海老名を編集、及び図書部長とし、まず、図書館開館を決めた。編集に關しては、「健脚文壇」「同志会雑誌」「世界的日本」の一連の雑誌、単行本では、『五月雨記』、『大日本』、『暹羅事情』、『列強東方侵略史』、『朝鮮近世史』、『国民性研究』などが刊行されている。ほかにも集會、弁論、遠足、庭球、會計など種々のグループがあつたが、その一つに庭球部があつた。一九〇九(明治四二)年十二月に誕生、氷川神社の境内にコートが新設され、活動しはじめる。

一九二二(大正一一)年十二月一日、川越に市政が布かれ、翌年二月に第一回の市議会議員の選挙が行われた。安部は、同志会の政治団体として「公友会」を設立、安部立郎、染谷清四郎(中8)が出馬、見事当選した。

この年の四月、安部夫人が死亡。ところがそれから一年もたたない一九二四(大正一三年)、安部会長も病のため後を追うように亡くなった。行年三七歳。惜しみてもあまりある早逝であつた。小島良夫(中46)

佐藤隆房(中)——詩人宮沢賢治の主治医「S博士」

あなたは黒いフロックコートを召して
こんなに本気でみてくださった

それもあなたの病院の

花壇を二年いじっただけの関係で

これで死んでもどこに文句がありません

これは、病床の宮沢賢治が書いた詩「S博士に」(「目にて云ふ」先駆形)からの抜粋である。

一九三二(昭和七)年、童話『グスコープドリの伝記』を書き終えたばかりの賢治は歯痛に悩まされていた。ある日、歯茎からの出血が止まらないとの連絡を受けた医師は、宮沢家に急ぎ「烙白金」で止血に成功する。この黒いフロックコートを愛用していた医師は花巻共立病院の院長で賢治の主治医でもある佐藤隆房であった。賢治は翌年九月に他界するが、二人は親密な関係で、賢治が具合悪いときはいつも隆房が往診し、体調のいいときには病院の花壇の設計など頼んだりして、親交を深めていった。二人の間にはまた連句のやりとりもあった。

隆房はまた高村光太郎とも親しく、戦後光

太郎が戦争責任の自責から山籠もりしたとき、献身的に世話をした。光太郎記念館には隆房の略歴や資料が収められている。

佐藤隆房は一八九〇(明治二三)年十月十五日に栃木県那須温泉湯本の旅館の跡継ぎとして生まれた。地元大田原中学校三年終了後川越中学四年に転入する。当時、那須温泉には多くの湯治客がいた。その中の一人に川越市の老舗佐久間旅館の当主次郎氏がいた。隆房の父はこの次郎氏の人柄を見込んで、旅館の修業をさせるため隆房を次郎氏に預けたのであった。

川越にきた隆房はランプの手入れなど下働きをしながら中学校へ通うが、やがて旅館を



院長室で執務中の佐藤

経営するより「医への志」が強くなっていき、川越中学を卒業すると国立千葉医学専門学校(現千葉大学医学部)に入學する。

一九一三(大正二)年同校を卒業し、付属病院にて外科学を研究した後、宮城県の前倉病院外科医長として赴任、一年あまりしてから賢治の父宮沢政次郎に請われて、花巻に佐藤外科病院を開業する。

一九三二(大正二二)年には町議会議員であった政次郎など花巻町の有力者たちによって花巻共立病院が設立されると、その院長兼外科医長として迎え入れられた。やがて、町医、学校医などにつき、病院内に付属看護学校を設立、花巻にはなくてはならない人となった。その後、岩手県医師会会長、日本医師会議長、宮沢賢治の会会長などを務め、一九八一(昭和五六)年五月二十一日永眠、行年九二歳であった。

病院は現在総合花巻病院となり、令息進氏が院長を務めている。

隆房の著『宮沢賢治——素顔のわが友』は戦前に書かれた貴重な賢治研究の書である。

奥 雅臣(高10)

山崎嘉七(中)——「熱い郷土愛」が支えた「すべてに親切」の人生

山崎嘉七は埼玉県におけるのみならず、広く日本の社会においても私たちの誇ることのできる優れた人物であった。第七回といえは卒業は一九〇九(明治四二)年であり、彼が九五歳の天寿を全うして死去した一九八八(昭和六三)年までの八〇年は日本が興亡を経験した激動の時代だった。そのなかで、創業二百年の老舗「亀屋」を大きく発展させ、

銀行家として若くして昭和初期の大不況を切り抜け、太平洋戦争中の「一県一行主義」に基づく銀行合併を行い、戦後のインフレ期における埼玉銀行(現あさひ銀行)の経営基盤を確立し都市銀行として新発足させるなど、山崎の功績に帰すべきものが多い。

一九三二(昭和七)年、三五歳で第八十五銀行頭取に推され、戦後一九四七(昭和二二)年には埼玉銀行頭取に就任し、川越商工会議所副会頭、同顧問も務めた。また彼は一九四二(昭和一七)年より川越市議会議員、一九四六年には市議会議長の重責を担うなど地方自治にも功労があった。このような社会にたいする功績から、山崎は一九六八(昭和四三)年、勲四等瑞宝章を贈られ、さらに、

市への数々の貢献により一九八四(昭和五九)年には「川越市名誉市民」の称号を贈られた。逝去に際して従五位に叙せられた。その生涯を顧みて、深い感銘を受けるのは終生川越に注いだ熱い郷土愛であり、もう一つは官におもねることなく終始善良な市民の立場から発言し行動する、という事業家としての独自の人生哲学に発した深い信念を持っていたことである。

川越は江戸時代には「小江戸」として繁栄し、明治期においても、市民の経済活動は関東の諸都市の追隨をゆるさないほど積極、進取であった。ところが織物など地場産業が衰えるにつれて、大正から昭和にかけて次第に活気が乏しくなった。このことを憂えて、晩年の彼は新しい産業の開発、商店街の活性化、市の文化的遺産の活用による観光客の誘致など、川越市の発展策を機会あることに雑誌や新聞を通じて市当局や市民に訴えてきた。

川越の歴史にも造詣が深い山崎は、郷土に埋もれている文化財を掘り起こし、市制六十年の一九八二(昭和五七)年には「文化財都市川越」の宣言をするよう提唱している。



山崎の祝いの日の卒寿

三芳野神社に「とおりやんせ」のわらべ唄の碑を献納し、土蔵造りの亀屋本店に山崎美術館を創設したのも同じ趣旨によるものである。

山崎がモットーとしていた言葉に「すべてに親切」というのがある。すべてとは、人を含むすべての対象に親切であればという意味である。「心のない物体に親切にすれば末永く利用され、資財などに親切であれば有効に使われる……自己に親切を行なえば精神の修養、健康の保持となり、家庭に及ぼせば一家団欒、^{だんらん}各国間について考えれば紛争をなくし、世界の平和をもたらし(ロータリー・クラブの卓話記録より)人間にとって新しい世紀に何が必要かを見通したような、味わい深い言葉ではなからうか。 松本博一(中37)

国崎定洞(中10)——社会衛生学の研究から革命運動の道へ

国崎定洞は一八九四(明治二七)年十月五日熊本県で生まれた。父は医師。姉の嫁ぎ先が川越にあったために、一〇歳で单身寄宿、川越高等小学校から川越中学校に学ぶ。その後、第一高等学校を経て、東京帝国大学医学部を一九一九(大正八)年に卒業した。

当時、国内では普通選挙運動が最高潮に達し、デモクラシーの思想は学界までも席卷していた。卒業後、大学院に席を置いたまま、伝染病研究所ペスト部にはいる。

一九二四(大正一三)年帝大医学部助教授となった彼は、マルクスの「唯物史観」に強い影響を受け、レーニンに傾倒していく。

そうした中で、彼は医師は単に病気を治すだけでいいのかと自問し、新しい道を模索す



東京帝大医学部卒業時の国崎

る。そして「社会衛生学」という分野を目指すことになる。

『社会衛生学』の著者カーエスに会い、この学問体系を日本に定着させたいと思った彼は、一九二六年ドイツに留学。途中シベリア鉄道を使ってモスクワ経由でベルリンにはいる。出来たばかりのレーニン陵に詣るためであった。敬愛するレーニンの墓前に立つての印象を東大医学部の後輩で親友の小宮義彦に感動を持って書き送っている。

ベルリンでは日本人留学生の社会科学研究会に参加、千田是也と知り合い交流を深める。

一九二八(昭和三)年ドイツ共産党に入党し、同志フリーダと結婚する。本国に残してきた病身の妻斎藤ともを前年に亡くし、さらに一九二九年には、帝大医学部助教授も免官となった。そのころ、祖国では三・一五社会主義者大弾圧の風が吹き荒れていた。

一九三二(昭和七)年にはドイツからソ連に亡命し、コミンテルンの東洋部で活躍するが、スターリンの独裁体制下では思うに任せず、一九三六年スペインに内戦が起ると国際義勇軍に志願したが認められなかった。

その後の定洞について記したものに、後に

公開された旧ソ連公文書館秘蔵の「国崎定洞ファイル」がある。それによれば、彼は一九三七(昭和一二)年八月四日スパイ容疑でソ連秘密警察の手によって逮捕、同年十二月十日ソ連最高裁軍事部で有罪判決を言い渡され、即日射殺されたという。彼は法廷で「いかなる時も日本の諜報部員であったことはなく、スパイ活動をしたこともない」と証言している。四四歳の若さでスターリンの粛清にあつたのだ。彼を告発したと言われる山本懸蔵も、恋の越境の杉本良吉も後にこの粛清にあつている。フリーダ夫人とその娘タツ子は彼の死も告げられず、まもなくナチス・ドイツに強制送還された。

定洞の法的な「名誉回復」はスターリン没後六年目の一九五九年、フルシチョフ体制下のソ連最高裁判所においてなされた。

一九九四年には娘タツ子を日本に迎えて「国崎定洞生誕百周年の集い」が盛大に行われた。その集いに参加した九〇歳の千田是也は、会の二日後帰らぬ人となった。

伊藤泰吉(中)——市長在職一九年、大川越市実現のため献身

伊藤泰吉は、一八九九(明治三二)年十二月七日、川越城富士見櫓跡にある御嶽神社の神職の家に生まれた。

一九〇六(明治三九)年四月、川越尋常高等小学校へ入学、尋常科を経て高等科へ進んだが、この高等科在学中、父の死にあつた。泰吉は、父亡きあと、家計も大変だろうと思ひ、高等科卒業後は、実業につくつもりでいた。

だが、卒業直前になって、担任の大野勝蔵先生が訪問、泰吉の進路について兄の岩吉と語りあつた。大野先生は、

「泰吉君ほどの才能を、このまま野に埋もらせてしまふのはもつたない。是非、中学校へ進ませ、学問の道が続けさせたい。」

と、親代わりとなつていた長兄岩吉を熱心に説得した。

大野先生と岩吉の度重なる話し合い、兄も出来る限りの援助をおしまないという厚意に、泰吉も向学心を刺戟され、川越中学校受験を決意した。川越中学校へは、首席で入学、しかも、首席で卒業している。恩師のお見立通り、秀才の芽はスラスクと伸びて、まさに順風満帆。難関の一高、東京帝大も一度でパス、



川越市長時代の伊藤

帝大在学中に高等文官試験行政科にパスしている。一九二五(大正一四)年、大学卒業と同時に官吏の道を選び、朝鮮総督府司法勅任事務官となる。以来、斎藤、山梨、宇垣、小磯、南の五総督に仕えた。いずれの総督からも信任をえて、一九四一(昭和一六)年には、同総督府専売局長、翌年に逓信局長に就任。そして一九四四年には、勲三等瑞宝章を受けている。

しかし、終戦と同時に総督府での職を失い、一九四六(昭和二一)年四月に帰国、同年十一月、川越市議会の推薦により、川越市長候補となった。まだ、新しい地方自治法施行以前で市長は市議会の選任で決まった。一〇代

目市長となる。さらに、一九四八年四月、第一回の市長公選に当選。以来市長在任は、五期一九年に及んでいる。

その間、市政上、特筆すべき事として、大川越市への合併実現がある。当時、川越市周辺には、九つの村があつた。川越市民約五万人、周辺九か村(福原、高階、南古谷、古谷、芳野、山田、名細、霞ヶ関、大東)を合併すると、人口一〇万人に倍増、大川越市となることは疑いなかった。

このため、市も市議会も一体となり、周辺九か村に合併を働きかけた。その間、多少の紆余曲折があつたが、ともかく一〇万都市が実現、一九五五(昭和三〇)年四月、川越高校講堂で合併記念式典が挙行された。

一九六五(昭和四〇)年七月三十一日、持病の喘息のため倒れ、六六歳の生涯を閉じた。八月九日、市民会館にて市葬が行われた。

この間、一九六三(昭和三八)年には埼玉県市長会会長、全国市長会副会長、また、一九六五年八月には、川越市の名誉市民第一号となった。

小島良夫(中46)

藤野忠次郎(中17)——洗練された国際人にして三菱“中興の祖”

藤野忠次郎は一九〇一(明治三四)年、川越市久保町の不動尊近くで生まれた。七人兄弟の長男で小さいときから手に負えないガキ大将であったという。そんな忠次郎を母ふじはいつも黙ってみていた。婿養子であった父勢之助は学問には理解がなく、中学を出たら彼に家業を継がせるつもりであった。家業は砂糖や燃料雑貨を商う店であったが、今はない。川中での成績は優秀。特に英語が得意で、戦後GHQとの交渉にこの英語がものをいうことになる。彼はいつも辞書を携帯し、わからない単語があると必ず辞書にあたり、赤線を引いて日付けを書き入れた。これは社長になってからも続け、部下にもそれを励行させた。

一九一九(大正八)年仙台の第二高等学校に入学するが、受験料は母ふじがこっそり出してくれた。その母も本心は忠次郎に家についてほしかったようで、後年三菱商事に入ってから、会うといつも会社を辞めて家に帰ってこいといったという。

一九二五(大正一四)年東京帝国大学法学部を卒業し三菱商事に入社、穀肥部に配属される。以後、戦前はずっと肥料畑を歩み、一

九三〇(昭和五)年から四年間ニューヨーク勤務、帰国後日中戦争が始まると、外貨獲得のために肥料の重いサンプルを持って中南米二〇数か国を行商して歩かされた。一九四〇年には肥料課長となり「満州」にわたり、青島・天津・北京などの各支店長を歴任した。戦後は取締役渉外部長として、語学力を生かしGHQとの折衝役を務めたが、三菱商事は一九四七年解散を命じられる。その後は太平商工社長、東京貿易専務などについてが、一九五四(昭和二九)年には常務取締役となり三菱商事再統合に尽力した。六四年には取締役副社長、六六年に取締役社長、七四年取締役会長、八〇年には相談役となり、一九八五(昭和六〇)年七月二十三日に八四歳で没するまで三菱商事一筋に生きたのである。

洗練された経営センスと国際感覚を持つ忠次郎の真骨頂は社長時代に遺憾なく発揮された。彼は沈滞気味だった社内を活性化させるために「あやめ作戦」(社員から自由に会社経営計画を出させる)を展開し、「青田買いの廃止」「会長不要論」「社長を弾劾せよ」など、独特の所論を展開して総合商社トップ



三菱商事一筋に生きた藤野

の座を不動のものとし、三菱“中興の祖”といわれるまでになった。

三菱グループ首脳の集まりである「金曜会」の代表としてその結束に努め、国交正常化前の中国を訪ねて日中貿易拡大に先鞭をつけた。東京商工会議所副会頭も務めた藤野忠次郎は「三菱の風土が生み、商事の社風が育てた」勲一等瑞宝章に輝く、非凡なる才能であったと言えよう。

栗原 進(高10)

打木村治(中) — 郷土を舞台に描きあげた児童文学の傑作『天の園』

打木村治(本名・保)は、農民文学の作家として、また戦後は児童文学の作家としても、この地方の風土に根ざした数多くの小説を書き、芸術選奨文部大臣賞をはじめ、多くの賞を得たばかりか、埼玉ペンクラブの会長など、埼玉文壇の長老として後進に大きな影響を与えた文士である。

村治は、大阪に生まれたが、官吏であった父の病気のため、幼くして母の実家である唐子村(現東松山市)に移り、少年期を過ごしたので、自ら「埼玉出身」と称した。川越中学に入ったのは一九二七(大正六)年のことである。多くの書を読み、文学に目覚めたのもこの時期であった。早稲田大学政経学部在学中には小説を書き始めている。そして、大蔵省に入り、厩橋税務署に勤務した時、担当した区域に川端康成の住居があり、訪ううちに、才を認められて師事することになった。

やがて、小説『部落史』が氏に激賞され、芥川賞候補になったのを機に、退職し、文筆生活に入った。そして、雑誌「作家群」を創刊主宰し、『魔事』『喉仏』などを発表。これらの作品は、昭和初期の不況を背景として、

資本主義の下にあえぐ農村や都会の下層の人々の生き様を克明に描き出しており、『支流を集めて』では、山国からこの地方の製糸工場に集められる女工たちの姿を温かい筆致で描き、優れている。このため、官憲の圧迫も再三受けたが、農民文学作家としての名を確かなものにしていくことにもなった。そして昭和十年代、満州開拓が始まると、要請を受けて現地を視察、『光をつくる人々』『自然の祭』などを出版。厳しい条件の中での開拓民の生活をリアルに描写している。

戦後は、所沢に住んで、児童文学にも手を染めた村治は、「おとなも読める児童文学」を標榜し、自分の生い立った武蔵野の風土の中の人間像を追求した。また自ら『掌編小説』と命名した短編は、『花のトンネル』にまとめられているが、その文体は散文詩のよう美しい。

晩年は、飯能に移って二十数年住んだが、ここで、自身の小学校時代をモデルにしたといわれる長編小説『天の園』全六巻を書いた。困窮にまげず心豊かに成長する少年と、それを包む母親の像を描き上げており、芸術選奨



やサンケイ児童出版文化賞を受けた。続いて中学時代を書いた『大地の園』全四巻では、大正期の川越中学の生徒の生活を生き生きと描き、校史の資料としても貴重なものである。

このように、中央では文芸家協会などで活躍するとともに、地方文化への貢献も大きく、その結実として、所沢の山口観音境内に「孤寒を旅ゆく」の碑、また飯能の子の権現境内には「子どもの騒ぎは雪のさわぐのに似ている」との自筆を刻んだ文学碑が、それぞれ村治を慕う数百人の浄財によって建てられている。墓所は、飯能市下直竹の長光寺にある。

石川信夫(中) — 詩の深さ・歌柄の大ききで知られた鬼才歌人

石川信夫(本名・信雄)は、昭和初頭のアララギ派の写実短歌全盛期に、新短歌運動を起し、作品とともに評論活動をもって芸術短歌運動の旗手といわれた歌人である。前川佐美雄や斎藤史たちと、「エスプリ」「短歌作品」「日本歌人」などに拠ったその作風は、ずっと後の、戦後短歌にまで大きな影響を与えたと評価されている。

信夫は、豊岡町(現入間市)の石川製糸の一族として生まれた。川越中学在学中から同人誌「星座」に加わり、早稲田大学政経学部時代は「稲門歌人」で活躍。後井嘉一らの新



短歌運動にも加わっている。一族皆経済人の中で異端者のように中途退学すると、菊池寛の知遇を得て文芸春秋社に入り、

編集者の仕事のかたわら、短歌界での活躍を続け、一九三六(昭和一一)年に歌集『シネマ』を出版した。この西欧の新しい詩風をとり入れた大胆な語法が高い評価を受け、新しい歌人としての地位を確立した。そしてその後の活動が期待された一九三八年に召集令を受け、一九四四年までの六年余、中国大陸に従軍しなければならなかった。作家として一番大切な時期を奪われたのは惜しまれる。しかし信夫は戦争短歌は詠まず、もっぱら中国の風物に接し、東洋の詩精神の深さに触れていた。そして一九四四年、土屋文明、加藤楸邨とのゴビ砂漠行を執行。これが戦後への転機につながる事になったと思われる。復員すると、しばらく豊岡の自宅に隠棲し、やがて近くの米軍基地の図書館に勤めながら、米文学の翻訳を始めた。そしてスタインベックの『岳詰横町』など八冊を出版している。

また、所沢の小沢俊郎(中37)や肥田塾勝美(中39)の同人誌「雑木林」を、打木村治とともに指導したり、飯能で小川文雄(中19)らが発行した「飯能文化」に協力したり、埼玉歌人会の発足に参画するなど、戦後の地方文化の復興にも力を尽くしている。やがて「日本歌人」が復刊されると、信夫も歌壇に復帰。一九五〇年には、埼玉や東京にいる若い同人を糾合して、「短歌作品」を創刊し、一九五四年には、戦中・戦後の作品をまとめて歌集『太白光』を出版した。この歌集は、東洋風の詩の深さと、歌柄の大ききによってその鬼才ぶりは高い評価を受けた。国やぶれ山河ありけり背戸川のたぎちを染むる秋の日のいろ
天涯ゆきたり天涯へ去る鳥の白き群かとも桜の花を
一九六一(昭和三六)年には「宇宙風短歌会」を創立、新短歌運動の総括を志したが体調を崩し、四年目にして他界した。五六歳であった。信夫の晩年の生活のさまは、打木村治の小説『原罪歌の人』に克明に描かれている。墓所は、入間市の蓮華院にある。

鈴木聞多(中四)——白いスパイクで青春を駆けぬけた名スプリンター

鈴木聞多^{ぶんた}——人は「モンタ」「モンタ」とよんだ。

鈴木聞多は、六三年前のベルリンオリンピック大会(一九三六)などで大活躍した不出の短距離選手である。彼の生家(比企郡川島町)には、彼の愛用した白いスパイクが大切に保管されている。

スパイクは年月をへていくぶん色あせているが、今でも地元の小中学校を代表するような優秀な選手が誕生すると、生徒たちに鈴木聞多の業績を聞かせ、実際にこのスパイクを履かせることもあるという。

鈴木聞多が陸上競技に興味をもち専門的に練習を始めたのは、川越中学に入ってからであった。

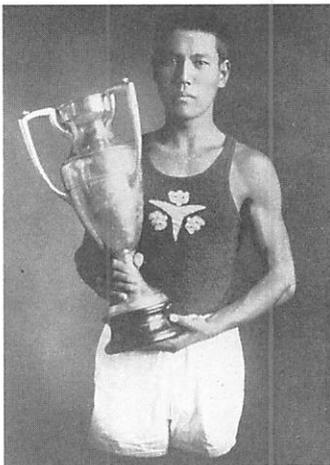
一九三〇(昭和五)年の全国中等学校選手権大会(甲子園競技場・現在のインターハイ)に初出場した鈴木聞多は、一〇〇ギと二〇〇ギに好記録で優勝する。独特のダイナミックな走法でゴールを駆けぬけると、スタンドの満員の観衆は期せずして総立ちとなり、新たなヒーローの誕生に大きな拍手を送った。翌日の報知新聞は、「彗星のごとく現れて、

一〇〇ギと二〇〇ギの選手権を獲得した川越中学の鈴木聞多君の奮闘はまったくものすごいもので、一躍名スプリンターの名を勝ち得た。やがて日本の短距離界を代表する選手になるだろう」と報じた。

慶應義塾大学進学後の一九三五(昭和一〇)年の国際学生陸上大会(ブタペスト)では、一〇〇ギで胸ひとつ、同タイムの二位。

五か国対抗陸上大会(ベルリン)では、世界の強豪を破って優勝した。さらに「世紀の祭典」といわれたベルリンオリンピックで活躍その功績は今も凜と輝いている。

鈴木聞多は、スポーツに対する理解がまだ乏しかった昭和のはじめに、陸上競技の華、男子一〇〇ギで10秒6という世界的記録を樹



鈴木聞多の優勝時のインターハイ

立、世界の舞台で活躍した。

歴史に残るといったビッグタイトルこそ少ないが、オリンピック大会への夢にこだわりの夢を見つづけて、激しく自分を燃焼させていったスプリンターである。

「暁の超特急」といわれた吉岡隆徳の後継者と目され、文字どおり「一〇〇ギを十秒台で走る男」であったが、日中戦争さ中の一九三九(昭和一四)年七月、二六歳という若さで河南省、黄河北岸の戦場に散っていった。

日本で最初のオリンピックとなるはずであった東京大会(昭和一五年。日中戦争で開催権が返上された「幻の東京五輪」)の日本期待のホープでもあったが、「護国に散る陸上競技の華、名譽の戦死」とその死が悼まれた。「ワンダフル・モンタ」の名によって世界にその名を馳せ、さらに将来の活躍が期待されていた鈴木聞多の死は、惜しみても余りあるものであった。

しかし、激動の昭和初期に、陸上競技を通して日本スポーツの普及に貴重な一石を投じた業績は尊い。

小原敏彦(県立大井高校長)

小林斗盦とあん（中）——篆刻界で初の日本芸術院会員、文化功労者

埼玉県川越市には、んこやのせがれとして生まれた。小学五年生のとき、工作の時間に初めて石に姓を彫り、先生にほめられ、面白くなり、父に習うようになった。

川越中学校に入り書も始めた。三年生のとき、書の芸術院会員第一号の比田井天来、篆刻の石井雙石に師事。川中在学中一六歳で、泰東書道院に書で、日本美術院に篆刻で初入選。

川越中学校卒業後も、一九四一（昭和一六）年には、篆刻界の第一人者河井荃廬に師事、その才能を認められる。戦後は、西川寧等、多くの権威につく。特に注目されるのは、文字学、漢籍を加藤常賢に師事、東大中国哲学



日本芸術院会員の小林

科加藤教室の甲骨学研究会に参加、篆刻の基礎研究にのり出したことである。

篆刻の三法というのがある。一つは、「字法」。書と文字学で、篆刻の基本となる。二つは、「章法」。いわばデッサン。三つは、「刀法」。筆で書くように彫るので、刀は一本、鉄筆という。どう表現するかが刀法の極意。作家の生命を燃焼させて、はじめて芸術作品となる。彫る時間は短く、恩賜賞、芸術院賞

受賞作は、二、三時間で彫り上げた。

一九八一（昭和五六）年、中国の著名な篆刻家、吳昌碩が初代社長をしていた篆刻の西泠印社の名譽社員となり、一九八三年、その創業八〇周年の記念に訪中。翌年四月には、昭和五八年度の恩賜賞、芸術院賞を受賞。受賞作は、同年第一五回日展に出品した作品「柔遠能邇（じゅうえんのうじ）」。中国の古典、書経舜典に出てくる言葉で、意味は、「遠きを和らげ、近きをよくする」こと。形は、秦の始皇帝のころに一番多い円形古印の作風で、字はそれよりもっと古い金文体。「金文体の装飾性を生かし、知性の高い新しい風格を開いた」というのが受賞理由。

「この文句は、かねてより一度彫ってみたいと思って、何度も試みたが、『遠』と『邇』とシンニユウが重なるので、なかなかうまくいかなかった。秦代の円形印は、大変面白いものなので、その形式の中に、この四文字を構成してみた。」と、斗盦は語る。篆刻での受賞は、一九六〇（昭和三五）年の中村蘭台（二世）以来、二十三年ぶりである。

一九八五（六〇）年には、日展理事、中国西泠印社名誉理事、一九九〇（平成二）年には、勲三等瑞宝章を受章、一九九四年、日展常務理事、全日本篆刻連盟会長、篆刻界では、初の日本芸術院会員となる。以上のほか謙慎書道会顧問、北斗文会会長など役職も多い。

都心のワンルームマンションに一人住む。「懐玉印室」の額が掲げられている。ぼろを着ながらも、玉印を抱くとの老子の言葉「聖人被褐懐玉」に由来する。「私にびったり」と笑う。一九九八（平成一〇）年、日中友好条約締結二十五周年と、斗盦就学七〇年を記念して、日中友好会館、上海博物館で個展が開催された。この年、篆刻界初の文化功労者として表彰される。

小島良夫（中46）

家村相太郎(中34)——名選手は名監督となり「甲子園への夢」を果たした

野球歴の多彩さ、内容の深さ、後輩への指導の実績といった点で、この人の右に出る者はいない。二年生からレギュラーに抜擢され、卒業までの四年間活躍。その間、一九三二(昭和七)年には一塁手。翌年、翌々年には投手兼中心打者として県大会三年連続優勝の金字塔を樹立。一九三五(昭和一〇)年にも準優勝をなした。北関東大会に連続四年出場の快挙。第一期黄金時代を築いた。

一九三六(昭和一一)年、日本でのプロ野球結成に参加、セネタースに所属し、プロ野球黎明期のパイオニアとして活躍。途中ノンプロのオール京城に所属、各種大会に一塁手で出場し、球界に家村ありといわれた。一九



セネタース時代の家村

四〇(昭和一五)年の第一四回社会人大会では全国制覇をなすとげ、黒獅子旗を手中に収めた。戦後、プロ野球の再結成にもいち早く参加し、数々の華々しい実績を残した。長い川中・川高の歴史の中で、プロ野球選手といえば、綿貫惣司(中31・セネタース)と最近の杉本友(高44・オリックス)を含め三人のみという貴重な存在の中の一人である。

プロ野球退団後、思うところあり、学生野球指導者の資格を獲得(プロ経験者は、人格的にも技術的にも指導者にふさわしいと学生野球協会から資格認定を受ける必要あり)して新天地を開拓し、まず、時間を割いて県下高校野球の審判やコーチをすることで、自らの経験を高校球児の育成に捧げようと努力し、高校野球の隆盛の基礎を作った。仕事の都合で奈良県に移り、天理高校の監督に就任、同校を何回となく甲子園に出場させるなど、名監督、名指導者としての評価を集めた。やや体調をくずし郷里川越に戻った一九五八(昭和三三)年、母校野球部からの強い要請で監督に就任。わずか一年にして夏の甲子園大会(選手権大会)に、待望久しい初出場

の快挙。その手腕、力量が非凡なところを立証した。とくに、心にしみとおるような温かみのある話し方。いつしか人の気持ちを魅了してしまうような説得力。真面目さ、明るさ、そして筋を通す根性。加えて卓越した野球技術がマッチし、練習の結果得られた個々のプレー一つ一つを褒め、自信を持たせる手腕、方法が選手たちを引き付け、彼らに驚くべき力を与え、その結果として当時強豪とは言われながらも絶対的地位にはなかつた川高野球部を、アツという間に甲子園へ……との印象が強い。

甲子園でも強敵、鎮西高校(熊本)を破り、高知商高と善戦をするなど、川高の名を天下に轟かせた。

その後も市立習志野高校などのコーチを頼まれ甲子園出場の出掛かりを作ったり、天理大学野球部の監督として大学野球にも足跡を残すなど、長期にわたって学生野球の発展に寄与してきた。第一線引退後も野球に対する情熱はいささかも衰えず、野球界の発展に、母校野球部の育成に……と想いを馳せている。

渋谷 健(中47)

浅見紳太(中40)——「アメリカ港湾鉄道の父」への『人生・夢航路』

小学校から同級生で無二の親友である浅見紳太について、略歴から紹介したい。

一九二五(大正一四)年、入間郡川角村西戸(現毛呂山町)に出生。

一九四二(昭和一七)年、県立川越中学校卒。

一九四五(昭和二〇)年、東京高等商船学校

航海科卒業。川崎汽船入社。海上勤務。

一九六〇(昭和三五)年、アラスカ航路開設に尽力、船長に昇格。翌年ニューヨーク駐在。

一九七二(昭和四七)年、INTERNATIONAL TRANSPORTATION SERVICE INC(以下I・T・Sと記す)社長になる。

一九九〇(平成二二)年、I・T・S会長。

一九九二(平成四四)年、日本国外務大臣表彰。

一九九五(平成七)年、勲五等双光旭日章受章。I・T・S相談役・名誉会長。

一九六四年米国から帰国した彼は、今後の海運はコンテナ輸送が中核であるべきだとの発想に立ち、その第一歩をふみだす。八年後川崎汽船はロングビーチ港にI・T・S(コンテナターミナル)をつくり、彼を社長にする。当時の海運界はこの新様式には極めて懐

疑的であったが、彼はそうした障害を払拭し、米国有数のターミナルに仕上げ、世界の有力船会社を自ら訪問して顧客を獲得する。

しかし、残念なことに日本の船会社は政府の規制により、親会社の川崎汽船でさえI・T・Sの利用が出来ない状況にあったが、これもみごとに乗り越えることに成功。

さらに、八〇年代には太平洋岸に港湾経営のネットを張り、北はタコマに、サンフランシスコ湾にはオークランドなどにコンテナターミナル社を設立。ロスアンゼルスでは、石炭積み出し施設のあるカイザーインターナショナル社まで買収し、名実ともに米国随一の会社経営にのりだし、多くの国際会議に米国代表として出席するに至る。

コンテナは、元来荷主の戸口から受取人の戸口へと一貫輸送が目的であることから、国内を網羅するシステムが必要になってくる。そこで、彼が長い間夢にえがいていた大陸横断の鉄道輸送にとりかかることになる。これがコンテナ二段積み専用列車である。七年間ロングビーチ港湾局や市会とのほげしい論争を経て、やっと走らせることになる。二〇〇



偉大なる国際人、浅見

〇に達する専用列車が堂々とロングビーチ港やタコマに発着する姿に接した両市の関係者はみな、「キャプテンアサミの意見に従ってよかった」と称賛しているとのこと。

日本人としてアメリカ社会で孤軍奮闘しながら、市政発展と多くのアメリカ市民にその利益を還元できたことは無上の喜びと述懐している。ロングビーチ市からは「港湾鉄道の父」の称号まで与えられる。また、タコマ市からも市発展に寄与した功を称え、「キャプテンアサミズ・デー」を設けられ感謝される。彼はまさに初雁から翔き、世界に大きな功績を残した偉大なる国際人である。

彼の半生は、その著『人生・夢航路』にくわしく書かれている。

勝俣福志(中41)

岡村了二（中43）——博識とさわやかな弁舌の人・元同窓会長

「(前略)母校の創立は明治三二年、二つの戦争の谷間、第二次山県内閣のもと、不況に加え労働問題も深刻に、又、旧憲法施行後九年、民法は誕生一年に満たず、現行刑法など未だ日の目を見ないという時期(後略)」

これは、創立九十年を記念して発刊した同窓会名簿の会長挨拶から一部引用したものであるが、岡村の法律家としての一端を示すものである。

川越に生を受け、弟、正也(中44・元東京電力火力部長)和夫(中45・元NHK解説主幹)を加えた三人兄弟の長兄として成長した。父君も文学に造詣が深く、岡村もこれを継承し、その道に秀で、天性の話術にも他を寄せ付けない卓越した才能を有していた。

川中在学中に入営し、軍隊経験もあるとのこと。戦争最中の川中時代、議会政治の父ともうたわれた尾崎行雄(豊堂翁)との親交も持ったとのこと。「梅壇は二葉より芳し」とか、早くから法曹界への夢、正義と秩序を守る確固たる意思等を固めていたのであろう。やがて念願叶って弁護士に。数々の難事件を引き受けて東奔西走の毎日だったと聞く。そ

の間、全国各地でその類い希なる博識、さわやかな弁舌、正邪を見分ける鋭い眼差しなどで人々を魅了し、信頼を集め、法曹界に確固たる地位を築いた。

敬虔なクリスチャンでもあり、謹厳さ、節度ある態度、礼儀正しさなどに、人々は敬愛の念を寄せる。多忙な中を、時には遠路恩師を訪ね、往時を偲び、報恩の誠を尽くすことも忘れない。また、後輩の面倒見も格別で、多くの人からの感謝を受けている。

法曹界や校友会の活躍実績により、明治大法学理事長に推され、現在二期目。村山総理誕生の際は、祝賀会での主催者としての堂々たる態度が人々の脳裏に残るなど、人気上昇中である。目下、明大全面改築の中心となり、構想作りから資金調達まで日夜奔走中でもある。広々とした理事長室に、「週に一、二回の勤務でもよろしいのでは……」との問いに、「理事長は常勤とするとの規定あり。それに従うのみ」と言い、連日出勤。法律家として規定遵守の几帳面さがうかがえる。

川高同窓会長には一九七五(昭和五〇)年就任。四九歳の若さ、囑望された結果でもあ



同窓会に功績のある岡村

った。それから一九八九(平成元)年まで七期一四年、その間、八十周年や九十周年の記念行事を精力的にこなし、諸改革にも着手し、旧同窓会室の放送設備を寄贈するなど、今日の発展の基礎を作った。振り返れば、山崎嘉七(中7)、伊藤長三郎(中21)や北村博学(中23)といった歴代会長の後を受け、しかも若い年齢であっただけに、苦勞も多かったと拝察。しかし、いつも温和な表情でゆったり構え、話題が往時に溯れば次々に思い出が溢れてくる記憶力には驚愕するのみであり、頭が下がる思いがする。

背筋を伸ばし悠揚迫らざる姿で、今後とも健勝で各方面での活躍をと期待しつつ。

渋谷 健(中47)

加藤 進(中4)——日本学士院賞に輝く国際的地球物理学者

加藤進は、旧制浦和高等学校を経て京都大学理学部に進み、主として地球物理学を学んだ。卒業後も大学で研究を続け、一九六七(昭和四二)年教授、一九八一年京都大学超高層電波研究センターの設置により、センター所長を兼任、一九九二(平成四)年京都大学を定年退官、名誉教授となった。主に地上付近から一〇〇〇*_{ポルトガル}に及ぶ中層大気及び超高層について研究した。

地球大気には高度九〇*_{ポルトガル}から五〇〇*_{ポルトガル}に電子やイオンの多く存在する領域があり、電離層ともよばれる。加藤は、まずこの電離層の理論研究を行っている。電離層は電波を反射したり吸収したりし、長距離無線電信は電離層によって可能になっている。したがって、電離層の観測、研究は地球物理学からも通信工学からも重要視されている。

電離層・中層(高度一〇〇~九〇*_{ポルトガル})の理論研究に加えて、実験研究のためいくつかの施設を設置している。なかでもMUレーダー建設は最も大きな仕事の一つであろう。これについては、川高同窓会報第四六号に加藤が記している。

これは中層・超高層用のレーダーで、地上から発信する電波は中層・超高層で反射して再び地上に戻る。これを観測するための直径一〇〇*_{ポルトガル}の巨大なアンテナを必要とする。そのため加藤は、設計や設置場所などに多大な労力と時間を費やしている。このレーダーは中層から超高層までの大気波動が伝搬する姿を見ることを可能とするもので、レーダー大気物理学の観測研究の基礎となり、電離層の研究とともに対流圏気象の研究のためにも貴重なもので、国内ばかりでなく、海外からの研究者も利用し、多くの貴重な研究成果が報告されている。

加藤の主な研究は、中層・超高層(六〇~五〇〇*_{ポルトガル})における電子密度のイレギュ



国際舞台で活躍の加藤

ラリティー、潮汐振動、大気重力波など地球大気に関するものである。

京都大学を停年退官後も、国際学術連合太陽系科学委員会副議長、日本インドネシア科学技術フォーラム日本委員会副会長をつとめるなど、国際的視野のもとに幅広い活動を続けている。

加藤の受けた主な賞を記す。田中館賞(昭和三四)。山路自然科学奨励賞(昭和四九)。アップルトン賞(昭和六二)。この賞は英国王立協会が、アップルトン卿のノーベル物理学賞受賞を記念して設けたもので、三年に一度授与される。「電離層ならびに中層大気力学の研究への卓抜な貢献と高性能な大気観測レーダーの開発」が受賞の理由である。加藤は一〇人目、日本人では最初である。藤原賞(平成元)。日本学士院賞(平成元)。授賞対象は「大気潮汐並びに大気重力波に関する研究」。一九九二(平成三)年には米国地球物理学会会員に、さらに一九九五(平成七)年に米国工学会アカデミー外国人会員に選ばれている。研究者にとっては大変な名誉である。

長沢英俊(高1)——世界へ飛躍した芸術活動を支える「東洋の心」

長沢英俊の芸術創造の源は二つの体験によると思われる。

五歳までの幼児期を満州で過ごした長沢は、敗戦に伴う過酷な逃避行で佐世保に帰還した。二〇〇人のグループで生きて帰国したのは長沢母子を含めて五人であった。幼い子どもにとって、飢えと死に直面する毎日の連続は強烈な体験であった。そのため、作品の中に死の思想が潜在していると自ら語っている。

父の地元である川島の三保谷小学校時代は祖父が絵が好きであったこともあって一人で絵を描くことが好きであった。三保谷中学校に入学してからは体力もつき、念願の川越高校に入学した。高校二年生から大澤寛先生の指導する美術部に入部し、仲間と先生の準備室を利用してもらい、夜遅くまで活動する毎日であった。先生の影響を大きく受け、多摩美術大学に進学し、インテリアデザインを専攻した。一方、大学の空手部に所属し、全国大会にも出場するほどになった。

大学卒業後、建築事務所に勤め、その後一九六七(昭和四二年)にできるだけ多くの国を見聞しようと自転車を持ち横浜から船便で

タイに旅立った。タイからマレーシア、シンガポール、セイロン、インド、アフガニスタン、イラン、イラク、ヨルダン、シリア、トルコと回り、イスタンブールから帰国する予定であった。ところが、愛用するソニーの携帯ラジオからヨーロッパ音楽が流れてきた。東西の文化が融合するイスタンブールは、旅心を刺激した。ギリシア、イタリアと旅を続けると、ミラノで自転車の盗難にあつてしまった。そこで、ついに旅の終わりがきたと判断し、現地に残ることにした。幸いなことにミラノの北方には芸術家の村があり、若い人との交流ができてすぐ仲間ができ、活動場所も見つかり、そこにとどまり新しい芸術をめざす活動を始めた。以来、ミラノを拠点として活動している。ただし、最初の三年間は特技の空手教室を開いていた。このような若いときのチャレンジ精神にあふれた体験が、世界で活躍する芸術家のなかで、彼を他と異なる東洋的精神の深さを持った芸術家として存在させていると思われる。長沢は世界で活躍すればするほど、日本の文化をベースにすることを自覚している。そのため、帰国のため



ミラノを拠点に活躍の長沢

に京都・奈良、さらに地方を訪れ、絵画や能も鑑賞している。

彼の作品は、イデアを具象化するため、さまざまな素材を生かしたものである。特にヨーロッパでは高く評価され、ドイツのカッスルドクメンタに一九九二(平成四)年、ヴェネツィア・ビエンナーレにはイタリア館に五回招待されている。日本では一九九三(平成五)年水戸芸術館での個展で、あらためて大きな反響を呼ぶこととなった。国内の作品としては、東京国際展示場のアートワーク広場にある世界各地の大理石を素材にした七つの泉が有名である。

菊池建太(高17)

関根伸夫（高13）——「モノ派」の旗手——環境美術のパイオニア

関根伸夫は、一九四二（昭和一七）年埼玉県大宮市生まれ、多摩美術大学大学院油絵研究科を修了した年、一九六七（昭和四二）年に「位相―大地」を発表し、若くして美術界の最前線に躍りてた。

須磨離宮公園での第一回日本現代野外彫刻展に発表されたこの作品は、戦後日本のアートシーンに「作るとは何か？」を突きつけた衝撃的な土の作品で、朝日新聞社賞を受賞している。大地に直径二・二尺、深さ二・七尺の円筒形の穴を掘り、掘り出した土を積んで同寸法の円筒形の土塊と対比させた。

この作品はその衝撃性故に様々な解説が試みられたが、後に関根は、「我々はモノを作ることではできない。しかしモノに付着したチリを払ってモノそのものを開示することはできない」と



いう名言を残している。ともあれ、関根はこの作品に

よって、戦後日本の美術史に欠くことのできない「モノ派」の旗手と目されるようになる。

同年「位相―スポンジ」を発表、第五回岡現代美術館展で大賞を受け、翌一九六九（昭和四四）年には、箱根彫刻の森美術館のコンクール賞を受けている。在学中にも二つの賞（第一一回シエル美術賞展佳作賞。第八回毎日現代美術展コンクール賞）を受けているから、このころの関根は賞金あらしの盗賊のようであった。

そして翌年、一九七〇年に、ベニス・ビエンナーレ展（イタリアで隔年に開かれる国際展）に、二名の日本代表作家の一人（もう一人はニューヨーク在住の荒川修作）として現地制作のためイタリアに向かっている。

この時の作品は「空相」。一本立ちの太い柱の上に巨石をのせたもの。柱はステンレス製で、鏡のように磨き上げられているから周辺の風景が写し込まれ、石が空中に浮いているような感覚を観る人に与えるというインパクトの強い作品である。この作品は、デンマークのルイジアーナ美術館のパーマネントコレクションになっている。国際展の会期が終

わっても関根は帰国しなかった。長沢英俊（高11）と旧交を温めたり、ヨーロッパ各地で個展を開きながら二年間の遊学をしている。ここで体験したヨーロッパ都市のありさま、

都市の中に彫刻や芸術が建築や街並みと一体となつて息づいている姿をみて、日本に帰ってこよう、こゝをやってみたいという新しい目標を持つようになる。美術を美術館の枠内にとどめることなく、開かれた環境の中に統合しようとしたのである。

帰国して一年後、一九七三（昭和四八）年（株）環境美術研究所を設立し、日本における環境美術家のパイオニアとして国際的に活躍するようになる。

川高時代、関根は二年間美術部に在籍している。当時の顧問、大澤寛先生自身が現役の作家でもあり、最新の美術情報が高校生にもたらされていた。そんな中で関根は、心に残る作家たち、フォートリエやフォンターナ、円空や斎藤義重を「発見」している。関根のウイワイしく先取的感性が、美術と出合った最初の良き時代であった。

岩田甲平（高14）

奥泉 光(高26)——「純文学」に揺さぶりをかける芥川賞作家

今回、「はつかり人物誌」で紹介するOBのなかで最も若い奥泉光(本名・康弘)は、一九五六(昭和三一)年生まれ。川高を卒業(一九七四年)後、国際基督教大学を経て、同大学院比較文化研究科博士前期課程を修了。大学院在学中に、学問と並行して小説を書きはじめ。八六年、二九歳の時、処女作「地の鳥 天の魚群」を「すばる」(集英社)に発表、それが同誌新人賞の最終選考までのこり、批評家の注目を集めた。

専門の聖書学・キリスト教・社会科学などから題材をとった多彩な作風は、彼の作品群の一番の魅力であり、その後も、研究畑出身らしく緻密に構成され計算しつくされた濃密な作品を、次々と意欲的に発表した。瞳目反^{アシテ}・文学賞、野間文芸新人賞(『ノヴァーリスの引用』九三年、新潮社)と受賞を続けた後、一九九四(平成六)年には、『石の来歴』で第一一〇回芥川賞を受賞、あらためてその存在を世にアピールした。

そんな奥泉も、高校時代は「プラスバンドに明け暮れた」(本人談)音楽三昧の日々。彼は、一〇〇名の部員を擁し、県コンクールで

金賞を続けた全盛期の吹奏学部OBである。当時の担当楽器はフルートだったが、現在ではキーボードもボーカルもこなし、川高時代の仲間と定期的にライブも開くミュージシャン作家である。音楽的展開の作品(『葦と百合』集英社)にも納得がいく。

その在学中の話だが、ある時、授業をサボタージュして楽器の練習をしていた彼がある先生が咎めたところ、彼は悪びれもせず「いま自分にとって一番大切なものは音楽である」旨を悠然と述べたという。その先生も、「そっか」と納得して引き下がってしまった。奥泉の為人と川高の校風がともに推し量られる愉快なエピソードである。

奥泉の作品は、一作ごとにテーマも文体もまったく異なる。それは明らかに意識的なのだが、それが「つくりごとで、いかがわしい」との批判も招いてきた。また、作品のその言葉の豊富さは、「ブルドーザーのごとくに言葉をまき散らす」とも評された。しかし、「私より年下の男性作家では、いまやナンバードワン」(高橋源一郎氏)などという評価はともかく、現在の若手作家のなかで、日本の



講演中の奥泉

現代文学、小説というジャンルの存続、言葉のリアリティーといった諸々に対して、この人ほどの問題意識をもった人をほかには知らない。「文学の社会的機能がなくなった」(奥泉)現在、それでもなお「書くこと」と「読まれること」にこだわる彼の横顔には、作家としてのすこみが漂う。

今後の作品に対する期待も、自ずと高まるというものだ。

なお、彼の初期の作品「その言葉を」(『滝』集英社刊に所収)には、楠のある高校が登場するが、この高校のモデルの半分は川越高校だという。「いずれは、川越や埼玉を舞台にした作品を書きたい」とも。

石川智也(高45)／写真・中村ハルコ

感動は甦る

「増野悦興論の試み」は初代校長の人と思想を論じた力作。

母校創立当時の一回生の想いは？

関東大震災の時、川中はどうであったか？

戦時中の動員とは？ 敗戦の日、川中生は何を考えたか？

新制高校になってどんな活躍があったか？

学友会報・記念誌から、心に残るエッセイを再録する。

第一回入学式における校長「告辞」と生徒総代「誓約ノ辞」

告 辞

規定ノ試験ニヨリ諸子百二十名ヲ撰抜シテ入学ヲ許可シ本月本日茲ニ入学ノ式ヲ挙行ス諸子今ヨリ以後我校規ニ服シ学ヲ勉メ業ヲ励ミ各自ノ分ヲ全フシテ克ク始アリ終アル事ヲ得バ豈独リ之ヲ本校長ニ承ケ諸子教育ノ任ニ当ル予ノ慶ノミナランヤ
右陳告ス

明治三十二年四月二十八日

埼玉県第二中学校長 増野悦興

誓約ノ辞

生等幸ニ試験ニ及第シ本校ニ入ル事ヲ得タル上ハ爾後校則及ヒ師命ヲ守リ品行ヲ謹ミ学業ヲ励ミ校長以下各教師ノ恩誼ニ報ユルヲ期スベシ若シ夫レ浮薄怠惰ニ陥リ他日ノ成立ヲ誤ル如キハ生等断ジテ為サザルヲ誓約ス
右謹ア校長閣下ノ告辞ニ答フ

明治三十二年四月二十八日

入学生総代 岡田恒輔

●創立八十周年記念誌より 増野悦興論の試み

明治三十五年三月十五日、川越中学校の職員と生徒は、川越鉄道（現西武新宿線）の川越停車場で悲嘆にくれながら、増野悦興（まきの よしお）前校長を見送った。その悲しみの思いは、クラーク先生を見送った札幌農学校の生徒の心に劣るものではなかった。

三年足らずの短い期間ではあったが、創設以来学校のためだけに考え、一身を捧げてその事業にあたり、川越中学校の校風を築き上げた初代校長増野悦興は、二月二十四日、突然休職の命を受け、惜

児島康夫（高16）

しまれつつ川越の地を去ったのである。否、「惜しまれつつ」というような平凡な形容では、当時の学生の惜別の情を正確に表すことはできない。当時の学友会「会報」から、その生の声を再録してみよう。

「吾等は増野前校長の本校を去らるるに当り、実に慈父に訣るの嘆ありき、暗夜燈を失ふの感ありき。」

「親に別るる子の悲しみ、夫に先だたるる妻の悲嘆、懐かしき袖わ

かつ親友の惜別はさるものながら、己れ年頃師と仰ぎ親と頼みし人に別れる、などか断腸の思なからむ。書くも涙の種、かかぬも愛惜の情はさらじ。」

今から思えばやや異常とも思えるほどの悲嘆ぶりである。しかし増野悦興が生徒から深く慕われていたことを示すエピソードはいくつもある。増野が去ってから約一年後、川越中学の第一回卒業式が行われたが、卒業生は初代校長を忘れることができず、記念写真を撮る際、小倉金之助二代校長を招かず、日頃好きな先生を一人呼び撮影したというのである。

二代校長就任の時、生徒の最大関心事は、初代校長の教育理念がそのまま引き継がれるか否かであった。「会報」の報告によれば「新校長は新任を序するの席上に於て、前校長の遺緒を継ぎ、同一方針を以て統帥の権を執らんことを誓はれき。是れ吾等学生の等しく満足を表する所」ということであるが、具体的には前校長が常に標榜した「礼、節、質」の三徳を継ぐことであった。小倉校長はこのことを再三生徒の前に表明してはいる。しかしそれが必ずしも前任者ほどには生徒に受け入れられなかったことは、一年経った卒業式に於ける生徒の無礼な行動を見れば、およそ見当がつく。

小倉校長は果して前任者の三徳を正しく理解して継承したのであるろうか。小倉校長は礼、節、質を遂行するのに、新しく「誠実、剛毅、寛宏」の三つを内面的に養おうとした。そしてその「鍛練ノ効ノ大分ヲ、体操科ニ期待スルモノ」としたのである。このことから明らかなように、確かに言葉は継いでいるが、増野の真意を理解して継いだとは言えない。だから増野の人格に接してきた生徒にとっては、それは似て非なるものとしか思えなかったのであろう。

増野の人格に接してきた生徒は、単に彼が忘れられない存在だと

いうだけではない。その教えが身内に泌み込んでしまっていたのである。若く純真な学生にとって増野は、生まれて初めて出会った偉大な驚異的な存在であり、生涯再び見ることができないほどの高貴な人格者だったのである。それに、理由の定かでない突然の休職命令は、生徒の心にも衝撃を与えたであろうし、悲劇的な殉教者にも似た印象を生徒の心に焼きつけたのではなからうか。

休職の理由は未だ明らかではなく、いくつかの見解がある。増野の嗣子増野肇氏は「知事と教育上の意見を異にし」たのが原因だといふ。第一回卒業生で、後に本校第七代校長となった岡田恒輔氏は「之れには色々な関係があつたらう。幼稚な吾々には其真相は解らなかつたが、先生の余りに清らかな性格が直接間接に累を為して茲に至つたに違ひないのである。」と述べている（「会報」第九号）。

また同じく第一回卒業生の矢部謙治郎氏は「今から考えると増野先生が川越へ来られたのは御不幸だと思ひます。それは、川越は非常に封建的でしたので、町の人と話が合いません。そこへ増野先生が来られてキリスト教の伝道に熱心であつたからです。そして先生は町の人に排斥されたのであります。」と語っている（創立五十年記念誌）。

いずれとも決し難いが、増野氏の説は、知事がはたして教育理念について直接校長と議論を交わし、その結果休職命令を出すものかどうか疑問の残るところである。矢部氏の説は、「先生が基督教を信ぜられた事は本校に在職中頑迷なる一部の人からは嫌はれたけれども、先生は学校を以て布教の点としやうといふ如き考へは持たれなかつた。一回も基督教に就て語らず又之に關する運動もされなかつた」という岡田恒輔氏の回想（「会報」第九号）と矛盾するところがあるので、にわかには受け入れ難い。恐らく曖昧模糊とはして

いるが、岡田説あたりに落ち着くのではあるまいか。このあたり、もう一つ資料的裏付けが欲しいところである。

しかし矢部氏の話も当時の川越の精神風土を伝えていて全面的に棄て去ることができないばかりか、重要なことを示唆しているように思える。たとえば次のような事実がある。明治三十二年十二月一日、埼玉県会は満場一致を以て公娼設置の建議案を可決した。その議案の提出者は川越から選出された綾部惣兵衛議員であり、川越町に遊廓を設置する準備も着々と進められていた。かねてから別所梅之助、宮城大太郎、山内庫之助等を中心として非公娼運動に熱心であった川越美以教会は、翌年二月十一日人間郡公会所を借り受け、「公娼反対学術大演説会」を開き、東京より島田三郎、木下尚江、安部磯雄、五来欣造、堀口貞利の五氏を弁士として呼んだところ、聴衆六百余名にも及ぶ大盛会となったという。

この記録の中には増野悦興のことは何も述べていないが、弁士は増野の知己であるし、特に安部磯雄は同志社以来の大親友であったことを考えると、この演説会に参加したか、何らかの賛意を示したと見るのが自然であろう。

ところがまた、非難の槍玉にあがった綾部惣兵衛は、川越に県立中学を設立するのに尽力した人物であるし、何といても当時川越の第一級の有力者である。その膝元の川越中学で増野のような人物が校長になっているのは、面白くはなかったであろう。

増野は平素から教壇に於て倫理の時間に「一夫一婦制」の厳粛なることを始め、ピューリタンの倫理を説いており、生徒も学芸大会等で校長の説いたことを口移しの如く演説していた。当時川越に於ける最高学府であった川越中学の学生の言動は町全体の注目を受けたであろうから、これも町の有力者たちにとっては面白くなかつ

たことであろう。

以上は推論の域を出ないが、増野校長のピューリタンの性格は、当時の川越の有力者たちに違和感を持たれたであろうことは想像に難くない。

それでは、教え子にかくの如き大きな感化を与え、川越の有力者たちに反感を抱かせた増野悦興とは、どんな思想を持った人物だったのであろう。

彼は慶応元年九月三十日、島根県津和野に生まれた。彼によればこの津和野は「水戸に劣らぬ敬神の気風の盛なる藩」であったといふ（増野著『高貴なる人格』）。彼は日本魂ということをよく言うのであるが、これはけっして偏狭なナショナリズムではなく、有史以来日本人の心の底に流れているという「敬神」の道を高く評価して言うことなのである。後に彼がキリスト教に接した時も、もともと「濃厚なる敬神の空気の中に成長したので」（同書）、さほど違和感を抱かず、自然にキリスト教信仰を持つことができたのだという。また同時に、彼は当時の知識人に共通してある儒教的素養も大いに具えていた。実際、晩年には孔子教会員になつてもいる。そして「武士道の教養を受けた日本人にして基督教を奉ずる者は自づから儒教的基督教徒とも云ふべき一種の特色を有する教徒と為る」と自ら言っている（同書）。彼は当時西洋かぶれの新しいがり屋の多かつたキリスト教徒の中にあつて、現在流行の言葉で言えば「日本人としてのアイデンティティ」を失わなかつたのである。彼はハイカラ人間を「忌やらしい」ものとして極度に嫌つた（増野著『献身犠牲』）。

しかし儒教を高く買っていたといっても、彼の場合には多少その評価の基準が独特である。儒教には「道德の絶対權威を信ずる」信



仰があり、その絶対的權威を天とみる。即ち儒教には「畏天」の思想が根本にあるから素晴らしいのだと言うのである。そしてこの畏天の念が欠けた儒教など形骸に等しいと見る。

このように彼には生涯一貫した態度があつた。それは常に神に目を向けていたということである。彼はキリスト教の神髄を「愛神」と見るのだが、この「畏天」「敬神」「愛神」という線は、多神思想から一神思想になつたという変化はあつたにしても、常に天に目を向け、神に深く心を寄せた彼の生涯を貫いた態度を如実に表わしている。また同時にこのことは彼がキリスト教徒であることと、日本人であることと、孔子教会員であることとの間に、わずかの矛盾も存しなかつたことをも証している。従つて御眞影奉戴式(明治三十二年十月二十八日)等の際、内村鑑三のようなためらいの起きる余地は最初から無かつたのである。

増野のキリスト教への入信の事情は審らかではないが、同志社に入る以前、十五、六歳の頃であつたらしい。前述の如く、ごく自然に入信したのであり、回心前の煩悶は特になかつたという。

明治十四年、彼は同志社に入り、新島襄の薫陶を受ける。彼の生涯の中で最も深い影響を受けたのはこの新島襄と、後で出会うユニ

ヴァーサリストの宣教師I・W・ケートであつたらうと思う。この二人は共に情熱家で、高い理想を抱き、高潔な人格を有し、己の信する所に忠実で節を曲げず、教えるために自己を犠牲にして献身的に働き、それがもとで若くして亡くなつた。瘦軀で目元涼しく、キリリとしまつた端

正な面影などもよく似ている。しかし考えてみれば、以上挙げた点はすべて増野悦興自身の姿でもあつた。それは増野が二人に深く傾倒し、感化を受けたということながら、本来資質的に似ており、無言のうち引かれるものがあつたのではなからうか。

増野は同志社卒業後、関西四国で伝道し、明治二十三年より二十六年まで米国に留学、神学や倫理学の研鑽を積み、帰朝してからは組合教会系の東京靈南坂教会、上州安中教会といひわば名門教会の牧会に従事した。この時期から彼は新神学(自由主義神学)を鼓吹するのだが、ユニヴァーサリズムの教会(同仁基督教会)に正式に属するようになるのは後年のことである。

ユニヴァーサリズムというのは、明治二十三年、アメリカ人宣教師G・L・ペリン等によつて日本に紹介されたキリスト教の一派(初期は中村敬宇の命名によつて「宇宙神教会」と称した)で、それより少し前に渡来したユニテリアン、普及福音教会と共に当時新神学と言われ、正統主義に疑問を感じていた合理主義者や知識人階級に広く受け入れられた。ユニヴァーサリズムは三位一体説、イエス・キリストの神性、十字架の贖罪、人間の原罪と神の永遠の刑罰、聖書の聖典性等、正統派にとつては教義の要である点をほとんど信じない。最初日本に伝えられた時には「人類はことごとく救われる(ユニヴァーサル・サルベーション)」という教義を特に強調したが、後に増野は「更に根本に溯りてユニヴァーサル・ファーザー・フード、即ち神は万人の父なりてう信仰」(増野悦興述「吾徒の信条」)を同仁基督教会の教義の中心にすえた。

このような教義は、正統的キリスト教からは到底受け入れられないであろうが、実践面、生活面に於ては正統的キリスト教にけつして劣らず、否むしろ遙かに厳格で高潔な人物が多かつたようである。

増野は明治二十九年を境として、一時キリスト教の直接伝道の働きからは退き、教育界に身を投じた。そしていくつかの学校を経て、三十二年四月一日、埼玉県第三中学校長として着任したのである。時に満三十三歳の若きであった。

この教育界に身を投じたということは、彼が変節したことを意味しない。明治の偉大なキリスト者は、単に信仰というものを個人の魂の救済というレベルに留まらせず、日本国家全体のことを考えるスケールの大きさをもっていた。増野もその例に漏れず、国家全体のことを考えており、真に自由な精神を持つ、社会に有為な自主独立の人間を育てることを目指していた。その最も効果的な方法は、若い人々の教育にあると考えたのである。

彼の教育の基本方針は「自修自治」ということであつた。これは生徒一人一人を人格ある存在として尊重する、否、それよりもっと深く、一人一人を神の子として敬愛し、万人を同胞としてみる（ユニヴァーサル・ブラザーフード）彼の信仰が根底にある。そこから出発する彼の教育は、それまでの「――するべからず」一辺倒の堅苦しい修身ではなく、生徒との信頼関係を基礎に置いている。だから前述したように、後任者が増野の教育理念をそのまま継いだと言つても、それは人格の根底や信仰から滲み出たものなので、どこに継承することは無理であつた。増野の生徒に対する根本精神は、校則を一切作らず、ただ一語「ピー・セントルマン」だけで十分だとしたクラーク先生と同じ類いのものであろう。

明治も三十年を過ぎれば、地方都市川越にも西洋文明は数多く入ってきていたであろうが、増野はそのような西洋文明の表層ではなく、根底に流れる精神や価値を教えた。教えただけでなく、身をもって範を示した。また当時の日本の第一級の人物、たとえば友人

の安部磯雄等呼んで、校内で講話会を催した。

当時、このようにユニークで進歩的な教育がなされていた公立の中学が、日本でどれほどあつたらうか。この点については、我々はもっと高く評価し、単なるお国自慢、母校自慢ではなく、川越の歴史、特に精神文化史の中に、キチツと位置付けなくてはいけないのではなからうか。

雄弁家ではあつたが、普段は寡黙の方で、特に他に対し攻撃的ではなかつた増野ではあつたが、彼の信念や生き方そのものが、封建的な気風の川越に受け入れられず、追われてしまったのは、川越にとつて大きな損失であつたと言えよう。この意味で「先生がもう少し川越にいらつしやつたら、此の地の思想はもっと変つていたのだらうと思ひます」という第一回卒業生矢部謙治郎氏の言葉（創立五十周年記念誌）は、けつして大袈裟ではなく、増野の著作等を調べれば調べるほど確かにその通りだと思われてくる。

しかし増野の教育思想は、あくまでも私学に相応しいそれであり、公立学校で実践されるにはやはり限界があり、休職命令が出されたのも客観的に見れば無理からぬことであつたかもしれない。増野自身、後に、「終生決して復び官途には就かない」と、弟子の岡田恒輔氏に屢々語つたという。

川越を去つた後、増野は川越中学の庭にあつた瑞葉園、豊栄丘からその名を取つた瑞豊塾を東京の富士見町に開き、十名前後の生徒と寝食を共にして教育に當つた。また時々訪れる卒業生に川越中学時代の教え子一人一人の消息を尋ねたともいう。かように増野は、川越中学をこよなく懐かしみ、愛していたのである。

教職を辞してから約十年間、彼は再びキリスト教界に戻り、飯田町同仁教会の牧師をするかたわら、成民会を起し、国民道德の向

母校創立当時の思い出

上をはかった。また著作活動や地方巡回伝道にもいそしんだが、志半ばにして病に倒れ、今一度人間、比企、秩父の山川を巡り、懐か

しい人々を訪ねて歩きたい、という病床における願いも果たせぬまま、不帰の人となった。行年四十六歳であった。

岩沢新平(中一)



上の感謝状は母校川越中学校がいよ／＼我が川越に設立せらるるに到って、父虎吉が頂いたものである。この度母校創立七十周年を迎える際に当って、私が第一回卒業生の生き残りとして、何か創立当時の記事をと望まれたので、図らずもこの感謝状を発見したものである。抑々私が高等小学校(今の第一小学校の処)を卒業した当時、埼玉県には県立中学校としては、浦和(第一中学校)と熊谷(第二中学校)と二校しかなかった、

だったので、母校の史料にもと思って、木原元三校長に進呈して置きました。

私の父虎吉は自分の子(私)を中学校に入れるのに、浦和まで遣りたくなかったと見えて、是非とも川越に中学校を設置して貰って、手許から子供を通学させたいという念願も手伝ってか、決然起って、中学校設立運動を開始したので。それには先ず以て川越の有志に呼びかけ、中学校設立期成運動の激奨文を草して、印刷に附し、有志諸氏に配布したものである。その印刷物の一枚が、曾て手許にあ

ったので、母校の史料にもと思って、木原元三校長に進呈して置きました。私はその為め中学校の設立を待つこと、なって、その間私は松江町の佐久間旅館に止宿されて、英語を教えて居られた古沢與総先生(早稲田専門学校出身、後川中の教諭)の許に岡田恒輔君と二人で英語を教わり又、江戸町の中島霞崖先生(後川中の教諭)の塾に通って、漢籍の素読を教わって居て、中学校の設立を待つて居りました。かくていよいよ川越に中学校が設立されること、なって、敷地問題が出ました。勿論当時川越では中学校といえ、最高の学校であるので、最も優勝地として、川越城の城跡と決まり、多賀町通りから真直東に新道が出来て、母校に突き当って、南の正門に向った。この新道は中学新道と呼ばれて、新しい市民会館の前通りである。正門を入ると、右手に門番小屋があつて、その前を通ると玄関で、玄関を入ると右が事務室、左が教頭室で和田亀之助先生(和田博雄氏の父君)がそこに居られた。この左右の室の上が二階の講堂で、校舎の中で一番広くて立派な室であつた。この講堂で初代校長増野悦興先生が厳肅裡に倫理の講義をされたのである。

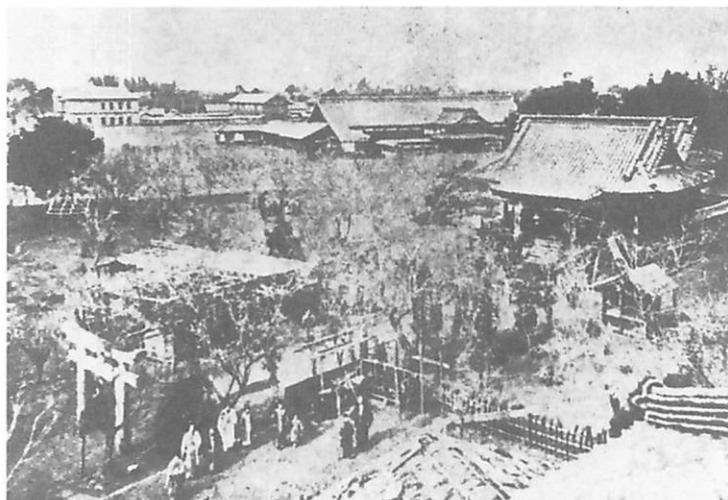
こ、で初代校長増野先生の偉容を偲んで見たい。先生は京都同志社の御出身で、浮田和民、安部磯雄先生等と同窓の秀才で、中々の

雄弁家であった。お体は小さくて瘦形で、いつも左肩を上げて、ピンとはね上った美髯の好紳士で、風格の高い威あって猛からずと云う方であった。我々第一回卒業生は、その風格と雄弁とに魅せられて、一に我々の尊敬の的であった。その先生の校長室は二階の一番西の室で、先生一人でそこに頑張つて居られて、倫理の時間には渡辺斧人といわれる陸軍少尉の先生が、毎も軍服姿で我々を講堂に入れて、「休め」の姿勢で校長の入室を待つて居ると、遠く校長室からカタッ、コトツと校長の足音が聞えて来ると我々は一斉にキチツと自ずと堅くなる。やがて校長が室に入るなり、渡辺少尉の「氣をつけ」の号令で校長が教壇に立つのを待つて、「礼、着席」で校長の講義が徐に始められるのです。その講義が実に立派で私は今もノートを保存して居りますが、いまだに懐かしいばかりか、その立派さに感激してしまいます。この校長の感化が余りにも強かつたので我々が卒業する一年前即ち明治三十五年二月に増野校長は休職となつて、二代校長小倉敏行先生と代つたのですが、どうしても我々一同は増野校長を忘れ去ることが出来ず、愈々三十六年三月卒業となる迄、小倉校長に嫌らず、卒業式にも可惜校長の式辞に心服せず、記念写真にも校長を招かず、我々が日頃好きな先生一人を呼んで、撮影した程です。そうであるから増野校長が母校を去つて東京都に移られても、先生を思慕する念止まず、我々は時折上京して先生を訪れるのを楽しみました。

又増野先生の雄弁は有名なもので、開校当時入学生徒の勧誘運動として、我々生徒を遠足がてら、近村の小学校に寄せられて、その他の有志に来て貰つて、中学に入学の勧誘演説をされたものであるが、来聴者は何れも傾聴感激したものです。従つて母校の校長をやめて川越を去られる時、我々生徒に別れの御挨拶があつた。「私は

これから、この学校を離れて東京の市民として暮らすことになるが、日頃諸君に講義した事を実践に移して見るつもりです」と仰せられ九段の富士見町に瑞豊塾を立てられて、学生を教養し、成民会を起して盛に宗教道德の講演に努められたりして、我々後進に範を示された事は、畏友岡田恒輔君の手紙「先生の近況報告」に委しく記されて居ります。

川越城址に校地を造成するに當つては、土塁を崩して壕を埋めて地均らし工事を進めて居る状況を眺めつゝ、早く校舎が出来、入学が出来る日を楽しみにして居りました。木造であるが二階建の洋式で、川越には初めての堂々たる建物で、近郷から態々見物に来る人もあつた。こんな立派な学校に入学出来ればと思つて胸ふくらませて待つたのでした。校舎が出来ても勿論庭に一木一石もありません。増野校長は父兄会を時々開いて、庭木の寄付を懇望しました。その寄付木の中でその特殊に目立つて校舎に偉彩を添えたものは、南大塚の山田平左エ門さん(第二回卒業生山田房吉君の父君)から寄せられた松樹でした。玄関の左側に植えられたが実に見事な赤松で、亭々として二階の屋根を凌ぐ巨木でした。その下に私の父が六米程の松を添えたのですが、実に小さく見えました。其他父兄から沢山の庭木の寄付があつて校舎を美化しました。それら創立当時の庭木が今は無い。卒業記念として鯨井から我々の手で掘り出して、植えた松もいつ枯れてしまつたのやら。又正門前に花園を設けて、瑞葉園と名づけその中央に我々の労力で小丘を築いて、豊栄丘と称した。何れも皇室の御慶事を祝い奉つて、記念としたものである。即ち前者は皇太子殿下(大正天皇、明治三十三年五月十日)の御成婚、後者は皇孫殿下(今上天皇、明治三十四年四月二十九日)の御誕生記念としたものである。この二ツの記念物も今はない。



こうした如上の記念の庭木も、親しんだ校舎も、皆なくなつて、昔懐かしの思い出となるものは、一つもないとなつては、我々初期の卒業生にとって、誠に心寂しい至りである。

私は静岡県立見付中学校を最後に教職を退いて、故郷川越に帰つて参りました。川越に帰ると間もなく、市立図書館長に任命されて、紀元二六〇〇年川越市の記念事業として、図書館の改築となり、今の建物が出来ました。そして母校では岩泉校長から大谷徳馬先生が校長となり、大正元年陸軍大演習の際大本営行在所となつた母校の名譽をのこす為、聖蹟記念碑を立てる議が起り、その題字を時の内

閣総理大臣兼文部大臣齋藤実氏に、撰文を早大教授牧野藻洲先生、書を神郡晚秋先生に頼むこととなり、その頼み役を私が引受けました。

こうした最中に図らずも母校に所謂「缶詰ストライキ」が勃発、校長排斥という不祥事件が起りました。その上級生数人が私宅に來られて、事件勃発を訴えられて善処方を頼まれました。そこで私は在市の同窓有志と謀つて、その無事解決策を講じ、数日間双方と折衝談合を試み、漸く無事おさまり安心しました。処が当の大谷校長はおさまらず、間もなく我々の引き止めもきかれず、教職を断然去つてしまいました。

その後任校長が木原元三先生で、教頭が岡田萬雄先生でした。この不祥事件の為、県下の名門母校の名譽と成績とを恢復する策に腐心、同窓有志の協議の結果時の文部省督学官岡田恒輔氏の意見を徵して、川中奨学会なるものを創立して、只管母校の成績向上に努力計画、同窓生有志協力、卒業生の上級学校入学率を高めるように努めました。又木原校長は昭和十六年に奉安殿を新築しました。これは卒業生室岡惣七氏の設計で、関根平造氏の建築で、県下一の立派なものであったが終戦後壊れてしまつた。其後川中父兄会を創立、私が会長に推されましたが、終戦後は亦解散しました。その年に上級学校進学生徒の為補習科を開設して先生方に特別御骨折り頂いて、生徒の学習を見て貰いました。

その後二十一年四月に新校長として福森治先生が赴任されましたが、大東亜戦争中青年教育官として、軍国主義、国家主義を鼓吹して、戦争遂行に積極的に協力したとの理由で、追放の厄に遭われたのです。そこで私は父兄会の代表として、私も再度上京、再審請求の為文部省の適格審査会に向いて、追放解除の運動を起したところ、幸に先生はめでたく解除となりましたが、先生はやがて母校を去つて、郷里三重県の中等教育に尽すこととなりました。私は去る四十二年二月市の文化財委員として、伊賀上野市並に松阪市の文化財視察の途二十年ぶりで福森先生に再会、御病床を押して、お嬢さんに連れられて、態々私の宿に來られて、母校在任中の懐旧談に耽り、大いに喜ばれました。

以上は私が戦前母校に度々往来して何かと地元卒業生の一人として母校に関係した一端を申し上げたのです。

一片の思い出

打木村治(本名・保)(中20)

なんといつても『母校』という概念にいちばんびつたりくるのは、むかしでいえば旧制の中学(今では高校)だと思ふ。小学校は、幼い頭には環境つまり自然のほうが領分が大きいし、大学は自己本位でこれはべつの意味が強すぎて母校というにはむしろ虚しい響きさえある。そこへいくと旧制高校だが、これは人間形成の血の製造をする場のようなもので、まあ魂の道場といった方に近くなる。私の場合は早稲田の第一高等学院でややこれに近かったが、要するに年頃からいつて求道的な眼の開ける以前のむかしの中学校、これが『母校』という名にふさわしいようだ。——酒もたばこもなく、取り立てて恋愛といえるようなものもなく、しかし何かに向かつてひたむきに精神と肉体が育っていく中学時代というものは有難いものだからである。

『埼玉県立川越中学校』は、ふるさとの山の如く私には有難くなつた。胸を張らせ限りなく誇りを持たせてくれ、内ではいつも貧相な自分の姿を鏡に映して見せてくれた。年を経てこれほど大きなふところを感じさせる場がほかにあるだろうか。——比企郡唐子村(今の東松山市下唐子)の父のないあくたれ小僧が、大正六年三月、川越中学校の入学発表をひとりで見に行った。当時川中は成績順に発表したものだった。それをあくたれ小僧は小学校時代の習慣に従つて——(こういう場合はいつも名前は筆頭に出るものときまっていたので)——はじめの方だけ見てしょんぼりして宿へ帰った。宿は親戚で、その新田町の米屋のにいさんに、おっこちました、と報

告した。そうだろう、とにいさんはいった。唐子の山ザルに、そうちよつくら川中に入れるものじゃない、むりもない、となぐさめてくれた。だがはじめからしまいまでよく見たのか、と暫くしてにいさんは念を押した。私は、はじめの方だけです、と答えた。このオッチョコチョイめ、ということになって、私はいさんの自転車のうしろに乗つけてもらつて再び川中へ見に行った。あるじゃあないか、とにいさんはいった。ほうらあそこに……しまいの方にちゃんとおる。私はめまいのするほどうれしかった。つまり川中は私に非常なる縁があつたということになる。山ザル仲間では神童(?)だった私も、川中へ来ては何ともお粗末な生徒だった。そのお粗末のまま、ともかくにも進級だけはしていった。だが私はこつそり友達にかくれて本だけは読んだ。これだけが救いだった。主に外国の小説だった。この方の師匠はおふくろで、勉強の方の師匠は二級上の鈴木佐平さんだった。鈴木さんは榊さんと並んで高名な秀才であつたが、いくら師匠が秀才でも弟子がほんくらだと効は奏さぬもののようにだ。必ずしも勇将のもとに弱卒がないとはいえぬ実例を、その後私は忠実に示しつづけた。外国の小説から日本の小説に暫く移つたそのきっかけは——これは初めて発表するのだが——伊藤泰吉さんであつたといえる。こんなわけだ——憧れ尊敬する伊藤さんが、一高に入ったはじめての夏、リボンのついた夏帽をかぶつてお隣りの森田実さんのお宅へひよっこり現われた。伊藤さんの手に持っておられた本に私はさっそく魅せられた。読んでしまつたらそれを貸

してください、といった。君はまだ三年生だろう、ちよいと早い。高等学校へいったら貸してやる、と伊藤さんはおっしゃった。しかし本の話のいろいろとしてくれた。私は待ちきれず、その夏のうちに同じ本を買った。——倉田百三の『出家とその弟子』である。トルストイ、チェーホフ、ストリンドベルヒ、デューマ、ユーゴー、イブセンなどに新しく倉田百三の名が加わった、というわけだ。

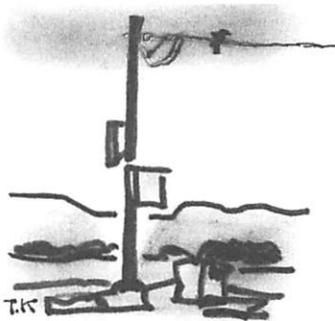
その翌年の秋、明治文庫が設立された。明治神宮ができたその記念事業ということで、初代の明治文庫世話役の先生は、英語の山田先生であった。先生は若く熱心で、毎朝朝礼のとき、文庫を活用せよと激励なされた——「明治文庫を借りたい！という人は……」という情熱的な表現は、当時私たちの間で人気を呼んだ。——私たちにも、その素朴なニュアンスから滴った真のユーモアというものが理解できたのだ。で、私の畏友武藤市郎君なんか、よし明治文庫をまるごと借り出してやる、などといって私たちを笑わせたものだ。爾來暫く先生の綽名は「健脳丸」から「明治文庫」にとって代った。明治文庫は二階の会議室めいた部屋がそれに当てられていた。狭いがしんとした部屋であった。こんにちはその面影の片鱗もあろう筈はないが、その頃はその部屋には、いま流行の言葉でいえば、「明治」がそっくりそこにあった、といえるような細長い部屋であった。山田先生は、職員室にいるよりよっぽどこの部屋にいたほうがいい、といったお顔で、いつもそこでカードなんかいじくりまわしておられた。私は柔道とマラソンの選手で放課後はだめだったが、気まぐれに昼休みに明治文庫を訪れることもあった。あるときひよいとドアをあけると、ほかに誰もいないその部屋に、時の校長岡田恒輔先生が本棚の前にぼつんと立っておられた。私は縮みあがった。しかし先生はおっしゃった——きみ、本を読むことはいいことだね。

さあ読み給え、わたしは外に出るから。——けっして、なーんだきみも本を読むのか、といったお顔はなさらなかった。わたしを腕白者の一人と印象されている筈であり、少し前に校長室で私ども幾人かの柔道選手に、『柔道助手を命ず』の辞令を下さったとき、あの温顔に微笑をたたえ、特に声を励まして「武道善用！ いいかね……」とだけ一言おっしゃった先生故に、私は縮みあがった上に更にきよとんとしてしまった——中学生のきよとんは感動の別表現なのである。

後年私が大学を出たばかりの頃、先生の本郷のお宅で、ぞろぞろ乗り込んで来た先生の教え児、すなわち一高生の一団に私は紹介される羽目になった。先生が私を何とって紹介なさったかというところ、「わたしの友人の打木さん」——（これには私は度胆を抜かれたが）——まったくこのとおりおっしゃったのであった。——数ある先生の教え児のなかの小さなこの一粒の私を。

私はこのような岡田先生の意識を超えた心の暖かさは、そのまま実は大先輩岡田先生あたりが伝統づけた川中（川高の）一つの文化のような気がして、いまもこれを『母校』の誇りに思っている。

（作家）



カット・鹿山 孝(高18)

大震災の日

岡田萬雄(中一)

大正十二年九月一日は、私の当宿直の日であった、第二学期の始業式が済んで、生徒の帰った後、職員の数はまだ職員室で長い休暇中の話など、交わしておられたが、昼近くになったので私は昼食に取りかかった。一膳終えて二膳目に移ろうとした其の瞬間、ゴーツと云うもの音と同時にグラグラガタガタツと揺れ出した。何時ものとは違って振動が恐しく猛烈である。其中に室外に飛び出した諸先生もある。私も続いて飛び出した。あの大動揺の中を、随分ゆりとしておられ、愈々書棚の本や壁が落ち出してから遁出した豪傑もあつた。外に出たものの、振幅六寸という揺れ方であるから、ジツトしておるわけに行かぬ。ヒョロヒョロする中、多数の人々は通門側の桜や電柱につかまって、漸く身の安定を計つた。其頃であつた。寄宿舎南寮の瓦が物凄い音を立て、落ちたのは、八分通りは落ちてしまった。幸いなことには、舎生は機敏に、それ以前に遁れ出ていたので一人の負傷者も出さないうで済んだ。間もなく余震の強烈なのが二度許り来た。其時分本校舎を始め門衛、物理化学教室、舎の食堂などの瓦が相当落ちてゐるのに気付いた。間もなく門外を火事だ火事だと叫んで行く者がある。尋常高等小学校の薬品中の燐から発火したとのことである。是を聞きつけた藤野先生は自宅からあわたゞしく駆けつけて西川先生など、一緒に物理化学室に飛び込まれたが、もう薬品の煙でむせかえるよう、止むを得ず窓だけ開け、煙の消えるのを待つて漸く薬品の整理をされた。然し未だ危険物を取出す必要があるので、勝田小使を中込先生方に走らせ総ての危険

物を教室の北側に運んで、一安心された。丁度その時金子、萩原の両先生は博物室の薬品の処置を取られ、是又安全ということであつた。大分余震も来て不安であつたが、野山校長と中間書記とはその揺れ間揺れ間を見計つては破損箇所を調査を進められる。寸時も早く奥に報告し直ぐにも修理して貰おうというその機敏さ熱心さ、所謂野山式に感服したことである。余震も大分緩かになり校舎も安全というので何かと奔走せられていた諸先生もだんだん御帰りになつた。尚椅子障子を中庭の桜の下に出して見舞の方に応接していたが、一旦自宅の安否を尋ねられた先生の中には再び学校に詰められる方もあつた。学校の事で夢中でいた私も是で先ず安心と思うと今度は家の方が心配になつて来たが当直ということで帰宅することが出来ぬ。其中私の当直に同情して下さつた三三の先生に御頼みして帰つて見たが幸い一家無事で唯壁と柱の一部分とを害ねた位で済んでいたので直に学校に引返した。

専売局の主任の方が見舞に見えた時であつた。野山校長などを運動場へ連れて行かれ、遙か南方二箇所を上昇している雲煙を指さされて、同氏が嘗て桜島の爆発を見た時のそれとよく似ていると話があつたので、私も金子、村本両先生と運動場へ行つて見た。成程正南方と稍東に偏して積雲の黒つやを含んだ塊が見える、そして下方は昨夏阿蘇登山の途中、宮地線の車中より望んだ一部の雲煙に似た処もある。そこで一瞬間に私の頭に火山の爆発……直に大島の爆発……そして正南方が大島の直上で稍東のものは南西風の為に吹き離

火山の爆裂に因る火山地震ではなく、昼の想像の如く断層より来る断層(地二)地震であったと断案がついた時、重苦しくなっていた頭が、何となくすがすがしくなつたようであつた。

御嶽山に出かける前から、正門前には、夜の地震を恐れて、夜具を芝生に敷いて、避難している人々があつたので、校長と御相談のうへ門柱に学校の高張堤灯をともし、扉を開けて、門内の砂利地を避難者の為に開放したが、遠慮してか内まで入つた人はなかつた。

夜の十時頃までは来校された方もあつて、気がまぎれていたが、其後は独り事務所ポツネンと時々来る余震に怯えながらも、余震は決して、初め程のものは来ぬという信念(舎生は舎生の多くに話しもした)があつたので、逃げ出す程のこともしなかつたが、舎生は時々ドヤドヤと走り出たようであり、又時には、なんでもないのに、地震だという声が聞えると、又ドヤドヤと走り出る、遂には恐怖の余り、中庭に出たまゝ、話し合つていようであつたので、私はそんな虚言のために怪我などあつてはならぬと考え、屋外に出ているものだけに、唯立ちすくんでいようより雨天体操場から柔道の畳を持つて来てこの桜の木の下に敷き休息するなり、眠いものは夜具を持つ

●創立七十周年記念誌より 講堂の思い出

三十七年前を思い出すことは極めてなつかしいが、明確さの点となるといささか困ることが多い。講堂建築について書くとなるとより一層むずかしいが記憶の一つ二つを記してみたい。

誰に写してもらつたのか忘れたが古いアルバムの中に一枚の講堂

て来て横臥したらよかろうと勧めた。皆その通りにしたので屋内におつたものも、此の安全地帯に出て来て同様横臥したので、暫くで舎の方は静まつた。暑い時であるから、此方が涼しかろうと、私も寝てみたが蚊軍の襲来のため、宿直室に引つ込んでしまった。然し度々の余震に浴衣に着替える勇氣はなく、服のまゝ、蚊帳の中に、つくねんと恐しい一夜を明したのである。

実は初め此大震災の日に当宿直に當つた事は何たる因果かと大に悲観したのであつたが、其の中考え直して、自分は今我が母校に奉職するのであるが性来の鈍物、平常何等という働きもない、そこで鈍重なる私にかゝる時こそ母校の為に何かせよと教えらるゝ、処があるであろうと、堅い決心をなし御真影奉安所入口の扉を開け放しておき夜もいざという場合を考えて、仮睡もしなかつたのである。以上後日の為に当日の学校の模様を記したわけである……。

(完)

〔原稿は歴史的かなづかいで掲載されていたものを現代かなづかに改めさせていただきました。——編集部注〕

山内 勤(中29)

入口の所に立っている私の写真がある。上衣のみじかさ(当時流行した)から言つて五年生の頃であろう、大学入試につかれた現在の生徒とちがつて至つてのんびりした中々の美少年ぶりである。

川越中学は当時生徒の集会する所と言へば雨天体操場と称する大

きな天井のない建物が、校庭に面してあった。半分を柔道場とし、半分を剣道場として授業や他校試合、寒稽古等に使ったり、弁論部の発表などに使ったり、又入学、卒業式も同様でうすぐらい板ばりのものであった。屋根は日本瓦で、又この瓦がいつも方々破損していたが、これは野球のフライが飛んで来ては破れたので、当時の野球部の練習ぶりや飯田先生の日に焼けためがねの顔がなつかしい。この建物の一ばん北側は、剣道の道具置場と教練の武器庫になっていたので、一年生の時は、早く上級生になってあの三八式歩兵銃をいじってみたいと思ったりしたものである。

現在の講堂のある場所は何か樹木の植えてあった所があり、又杉垣根をへだててクローバーが一ぱいに敷きつめたように生えていた庭と言うか広場があった。校門は木の柵が現在の土手のように半円形にならんでおり門柱にはガス灯のようなものがあつたように思う。校門を入ると右側に御嶽山の堀に向つて一直線に杉垣根が走つて作られていた。この杉垣根がクローバーの広場と玄関につらなる砂利道を境していたように思う。

当時は昼食後の休みには上級生ほど多くこの広場に出てくるのが常であつた。又南面した昔の川越城の土塁は篠やぶで冬は絶好のひなたぼつこの場所であつたので、上級生ほど篠やぶの中でよくねころんだものである。すると当時の生徒係と思われた村本先生が一段と背の高い姿で見回りに来て篠やぶの中から追い出されたりしたものである。

いつの日だったろうか、この杉垣根がとりはらわれてしまい、仕事職人を指揮して土台のなわ張りをしている事務長の間中先生の姿が思い出されるが、着工当時の頃であつたらう。

講堂がここに立つのだと言うニュースが友人たちから伝えられた

り、なわ張りを見て「案外せまいな」と言う友人の言葉に成程だと感じたり、いや実際完成して中に入った所、その壮麗さと広さに二度びつくりしたものである。

校舎の建物は当時は靴のまま土足で入っていたし、壁も内部も灰色や木地のままである兵舎の如き感じの木造であつたのに対して、講堂の外壁はコンクリートの洗い出し仕上げで、窓や其の他の裝飾がゴシックを模したような曲線が多く、極めて対照的なもので珍しく思つたり、又仲々立派なものだと感心したりしたものである。建築中に入口のドアを作つてはめ込んでいる職人が、偶然小学校時代の友人であつたりして話し込んだこともあつた。

完成した建物の内部はニスの塗装と言う、うす暗い校舎と比べられるものでなく詢(まよ)に超モダンな気分がしたし、其の後南側に花壇が作られたり、広場の中央にあつた小山(豊栄丘)の文字を刻んだ石が立っていた(のそばに心字の池が作られたように思う。一段と美化整備が進んで川越中学の偉観であつたが、現在訪れて見ると只只荒廃そのもので、当時北側に植えられた樹木だけが昔と異つて大きく生育しているばかりである。内部もみるかげもなく痛んで年月の変遷を示している。

現在校門から入ると屋根の三角形の所にある十文字の不思議な形の裝飾窓が案外三十七年前のままに西陽を受けて変らぬ姿で見下しているのがなつかしい。



1930年新築の講堂の外観

日本の軍国化と川中

佐々木 考輔(中37)

私たちは昭和九年に入学、同十四年に卒業したグループだ。仲間から六人が陸士へ、一人が海兵へそれぞれ進学、そして第二次大戦では二十数人が戦死している。当時は夢中だったが、こんなことからみても、私たちの川中時代には、すでに日本の軍国化の波が、ひしひしと身辺に押しよせていたのかもしれない。自分などは、陸士のシンボルだったえり章の金星に、スマートだった海兵生の短剣姿に、ただあこがれていたことを思い出さず。いま流にいえば、かっこいいものへのあこがれだったのだろう。

剣道の達人だった増島敬、馬力マンだった保泉馨、いつもにこにこしていた日出間房寛の三君は陸士組。勝呂宰治、栗原泰平、山田守二の三君は埼師組。いずれも仲の良かった友人だったが戦死してしまった。勝呂、栗原、山田の三君などは、生きていけばいまごろは、この地方の小、中学校の校長にそろそろ名前をつらねていた人たちだ。こうして筆を走らせていても、これら友人と楽しくすごした川中の餓鬼童時代のあれこれが、むしろようになつかしく思い出されてくる。

一年の三学期、学年末試験の最中、川中史上有名な五年生のストライキがあった。私たちの国防色と違う黒の小倉服を着たイキなラッパズボンの五年生が、特別な人間のように見えたものだ。中学生のストライキが許された時代、軍国化といってもまだまだのんびりしていたのだろう。もともと世界年表を見ると、昭和九年に大日本国防婦人会が生まれ、文部省に思想局が設置され、ドイツではこの

年にヒットラーが政権をとってナチが台頭し、十年には美濃部達吉氏の著書が発売禁止されるなど、そろそろ日本の軍国化もはじまりかけたようだ。そして、十一年にはロンドンの軍縮会議を脱退、二・二六事件が発生、日独防共協定が成立、十二年には日中戦争の発端となった蘆溝橋事件が起こり、愛国行進曲が生まれ、文部省から国体の本義が発表され、中学の国語副読本になったり、日一日と急ピッチで日本の軍国化は進んだ。

このころ、私たちの川中三、四年生時代、年々と軍事教練はきびしくなり、中国大陸にあこがれる風潮が出はじめ、中国語の課外授業が行なわれたりしたものだ。毎年一回行なわれた旧陸軍麻布連隊区司令部による軍事教練の査閲は見ものだった。この時期になると、学校あげて練習に励んだものだ。査閲官の講評結果に学校全体が一喜一憂、好結果に大喜びだった。『万年中尉』こと、故小松先生の嬉し気な笑みが思い出される。この当時、県下の中学四、五年生が東西に分かれて年に一回、寒い冬の日に実施した野外演習も、軍国調の中での楽しい思い出の一つだ。演習中、知らない土地での民俗が



教練風景 I

出陣から復校まで

楽しみだった。おたがいにごちそうを披露し合っては話の種にしていた。ちよつとした兵隊気取りだったのだろう。

こうして書くと、いかにも激しい軍国化の中にあつたようだが、学校自体はとくに軍国化していたということもなかった。とくに軍国調の先生がいて、生徒たちを軍国化にかり立てるようなことはなかった。職員室への出入りに「誰々、何々先生に用があつてきました」「誰々、帰ります」……大声を出したことを思い出す。軍国調だった一つだろう。しかし、個人々々はいたつてのんびりしたもの。五年生のころか、映画『愛染かつら』が流行し、教室内で主題歌を大声を張り上げてよく歌つたものだ。英霊の出迎えて、川越駅前に銃を持って整列させられたのもこのころだ。国防婦人会のタスキを

かけた、エプロン姿の川越芸者にそつと目を移し、英霊もそつちのけ、「あれはシャンダ」「これは美人だ」とささやきあい、ニキビはなやかなホホを紅潮させたことを思い出す。

中学生らしい、こうしたのんびりした面もあつたが、昭和十三年になり五月メーデーは禁止され、衣料キップ制が生まれ、興亜奉公日ができ、近衛首相による東亜新秩序の建設が発表され、軍部は北支、中支に戦力を延ばし、自分らが卒業した十四年の二月には、はじめて国民精神発揚週間が設けられるなど、国全体がはつきりとして一歩一歩軍国化に突き進んでいた。川中の軍国化は、むしろ私たちが卒業したあと、年々と強くなつたことを聞いている。まだまだよき時代の川中生だったようだ。

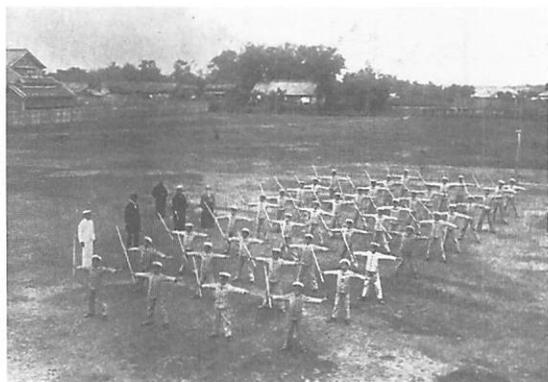
忘れもしない昭和十九年五月三十一日、私達のクラスは全員が甲種飛行予科練習生として土浦航空隊に入隊した。祖国の危急を救はんものと、日の丸の旗を十字にかけ十六歳の少年決死隊の勇躍の出陣だった。川中の校門から川越駅まで、全校職員生徒の歓呼の声に送られて、私達は興奮と感激とで無我夢中であつた。しかし電車がホームを遠ざかり、親しい友の顔が見えなくなると、やがて何とも癒しようのない寂寥感に襲われた。

思えば日本は疲弊のどん底に喘いでいた時だったのだ。航空兵であるのに訓練は主としてグライターで行われ、基礎学科と体力の養成に終始した毎日であつた。軍隊生活は何もかも厳しく、とりわけ

大久原 秀雄(中44)

毎日午後、一万メートルのマラソンを走るのが何としても辛い訓練だった。ハンモックを吊つて寝るのも競争で必死の思いであつた。自分が悪くなくとも班の誰かが間違えば、問答無用でなぐられた。楽しい事といえば、二週間に一度の外出で娯楽の空気を吸える事だった。

昭和二十年ともなればB29の空襲が東京を中心に土浦航空隊にも及んできた。やむなく隊の一部は青森に、秋田に、鈴鹿にと、私達もとうとう別れ別れになつてしまった。私は青森の三沢に移り、やっと空襲を免かれたか、と思つたのも束の間、今度はグラマンの機銃掃射のお見舞だった。飛行場の真中でグラマンに狙われた時はも



う生きた心地はしなかった。当たらないように、当たらないように、と祈るような気持だった。《命惜しまず予科練の》というのは歌の文句であって、命の惜しくない人はいなかったのだ。同じ三沢の基地から特攻隊に選ばれた人達の出陣前夜の号泣は、一体何を物語っていたのだろうか。

八月十五日の終戦放送も「恐山」の山中では聞くことも出来なかった。同月二十八日青森から復員列車で二十四時間もかかって、二度と帰る事はないと思つた川越駅に降りた時、ただあよかった、よかった、という気持で一杯だった。親兄弟ともまた会えた。

昔の友ともまた会えた。食べる物着る物は乏しくとも、戦争はなくなつたのだ。これ以上よいことはなかった。

やがて一緒に入隊した私達は、また集つて川中復校の話始めた。出陣の時は熱心だった人達が意外に冷淡なのには驚いた。敗戦という事実が、人の心まで変えてしまつたらしい。県に出かけてかけあつて、復員して五ヶ月もたった二十一年一月やっと復校の運びとなり、一ヶ月間の授業を受ける事になつたのだ。私達の外に陸幼・陸

士・海兵の人もいた。

このクラスを称して補習科といった。軍国主義一辺倒だった学校が、二年もたたぬ内に、最初の授業がアテネの民主政治だったのだ。みな戸惑つた。いくら柔軟な若い頭とはいへ、この戸惑いはしばらく続いた。何とも理解に苦しんだのだ。《君のため国のため》から《私とて君同様に》の民主主義の講義の連続だったからだ。しかし教える人は同じだったのだ。通用門からしか入れなかつた学校に、正門から出入りしても何の感激もなかつた。白線もつてたくなかつた。私達は、ただ無性に口惜しかった。青春に取り返しのできない空白ができてしまつたのだ。

馬場・金子の両君は、この百八十度の転換に、その繊細な感受性をもつては、心の矛盾に耐えられなかつたのだろう、相前後して「人生不可解」の文字を日記に残して、自らの命を絶つてしまつたのだ。

一ヶ月は短かつた。五十名足らずの卒業式も荒廃した講堂で行われた。希望を失い、挫折感に拉がれた私達も、どうやらこの一ヶ月を反省の手掛かりとして、職場に大学にと第二の人生のスタートをきる心の準備にとりかかつたのだ。

終りに入隊中不幸にして病に倒れ、若き一生を国に捧げた清水保夫君、さきの馬場敏君、金子忠君の御霊安かれと祈り筆を擱く。

●創立八十周年記念誌より 動員の思い出

私の川中在学六年間の真中にドカンと戦争が位置を占めている。

赤田 健一(高2)

通年動員の正味は、ちょうど半年なのだが、印象の強い毎日であつ

たためか、とても長い期間であったように思われる。

入学して、軍事教練などの厳しかった一年半が過ぎて、二年生になった昭和十九年。まず四、五年生が朝霞の被服廠に動員されて学校を去り、やがて三年生が福岡の火工廠に出勤する頃は、私たちも近隣の農村へ農作業の手伝いに出ることが多くなった。しかし、本業の授業も結構厳格に行われていたように思う。なにしろ、試験(考査といった)の用紙が欠乏して、一度先輩が使ったザラ紙の、名前の部分を切り取った裏面が使われたし、成績表も、白地図の裏面にガリ印刷されるといふ状態であった……。

秋中頃、名細村(現川越市)で芋掘作業中、B29一機飛来を目撃したのを皮切りに、いよいよ本土空襲が始まり、昭和二十年に入ると、一、二年生にも動員令が来た。一年生は全員火工廠へ、二年一組(市川先生)が南古谷の浅野カーリット工場へ、二、三組(長谷川、佐々木先生)は高秋の飛行場へ、われわれ四組は朝霞の被服廠へと分散出勤が決まった。

当時の日記が出てきたので、雰囲気伝えるために、そのまま抄出しよう。

二月十五日 時刻を心配しつつ池袋経由にて朝霞へ行きぬ。幸いにして遅れず。被服廠の神社前にて入所式あり。訓辞「特攻隊の精神をも入れて学徒たるの本分を全うすべし」と。宣誓をする。将校の授業あり。被服廠の一般知識及び規則なり。職場見学の後昼食、うどんを食した後警戒警報発令され、航跡雲(註・B29のもの)大いに現はる。帰路大泉学園まで歩いて帰宅八時半なり。

二月十六日 六時半発(註・西武飯能駅発)にて行く。田無にて空襲あり待避す。被服廠に十時半着す。敵艦爆群の来襲繁く数回に及ぶ。この間弾幕、震天制空隊の邀撃振ふ。終日警報なりしかば出席

者二十五名にして作業なし。

帰路大泉駅附近に降りし隼(註・撃墜された集戦機)を見たり。ただ乗員の安否を気づかふのみなり。帰宅十九時半。

二月十七日 昨日より警戒続行なりしかば、所沢にて下車、引返し豊岡にて石川(信男)と下車す。案の如く艦載機の来襲数度あり。

特に我が邀撃体当り、落下傘降下を初めて目撃す。勇士は顔部に傷を負ひ、機は

精明方面(註・飯能東部)に墜落しぬ。四時頃警戒解除あり世間明るくなりぬ。夕方撃墜一四七機の戦果を聞けり。

二月十九日 大泉より往く。東上線遅刻により十時作業開始。煉瓦運搬をす。十五時空襲ありB29の大編隊来る。帰路正門にて見習士官の説法を食ふ。

連日こんな調子で終戦まで続く。

動員先の被服廠の生活は、「学生班」と称する粗末なトタン葺のバラック建の平屋一棟がわれわれの食堂兼控室であった。コンクリートの床に長机長椅子、全員入るといっばいになる広さで、その建物の隅を区切って職員室兼事務室があり、松田、横田、佐々木(太郎)の先生方が、軍属の星のマークをつけておられた。作業は主に軍被服の梱包の運搬や木箱造りであったが、末期には校舎ほどもあ



勤労働員風景 I

という前置きをして「自由について」と一場の演説をされたこと等であつたろう。

終戦になつてから、動員の無理がたたつてか、休学する者多く、そのまま人生コースを変えた者もいたが、作業中重傷を負つた橋本君が見事に回復して、現在も人並以上に活躍しているのは嬉しいことである。

夏がくるとあの重苦しい日々を思い出す。徒勞に終り、再び繰りかえすべきでないことはいうまでもないが、若い全力を投入したこの時期に培つた友情が、三十余年たった今でも一番堅く厚いことを思えば、私たちの人生にとってやはりかけがえない時間だつたといえようか。

阿部新一(高3)

だが、城下町川越にはほんの少し余裕があつた。

入学当初、授業は普通に行なわれ、その中でとくに軍事教練では「氣をつけ」、「敬礼」、「分列行進」など炎天下で何時間もしほられるのは、新入生にとっては大きな負担であつた。この教官もうるさかつたが、それよりも上級生が何倍も強烈で、とくに三年生の中には血気さかんな人がいて、理由もないのによく「お説教」をもらつた。四、五年生の先輩とはあまり口をきく機会もなかつた。

戦局が一段と悪化するに及んで上級生はもちろん、一年生までが「学徒動員」で学校を離れた。我々は市内の工場(製粉・製糸)へ分

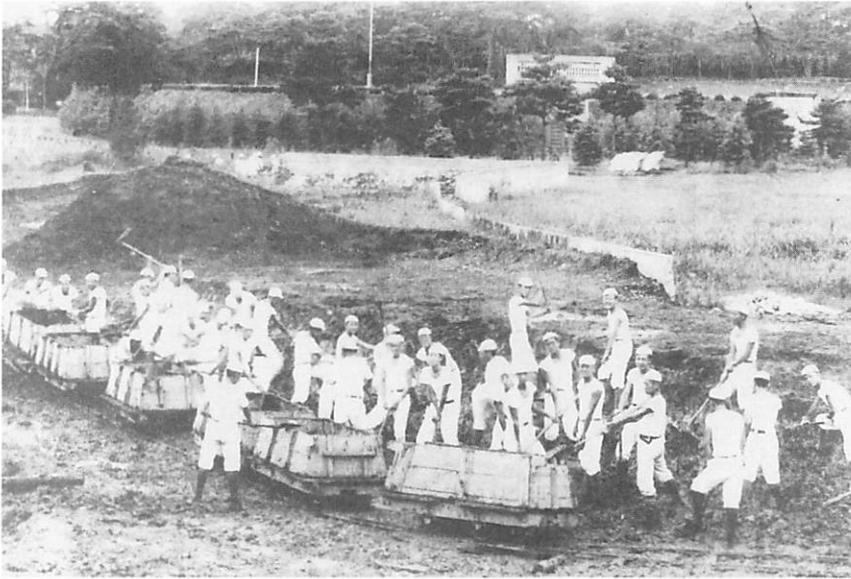
●創立八十周年記念誌より

中学一年の夏

あの日——昭和二十年八月十五日は格別に暑い日だつたと記憶している。

この年の四月、希望に胸ふくらませて県立川越中学校へ入学した。生徒はみな、校章と白線を一本つけた帽子をかぶりゲートルを巻いた服装で、特別の日でないかぎり正門からは入れず(そこには、上級生が銃を持って立っていた)少し離れた通用門から登下校するのが常であつた。

その頃、戦争はすでに末期的症状で、「本土決戦」とか「一億玉砕」がさげばれ、大都市への空襲は昼夜を問わず熾烈さを増してい



かれて勤勞奉仕にかり出された。

学校の校舎は連隊本部に変身し、校庭の半分が何も畑になり、立派な講堂の屋根には迷彩がほどこされ、みる影もなかった。また、御嶽山の下にはトンネルが掘られ、武器弾薬、非常食などが格納されていた。

暑さが増すにつれて、この城下町にも空襲による直接の被害が出はじめ、なかには、家族や家財を疎開させたりして最期に備える人もいた。学校では授業中でも、警報のサイレンが鳴ると全員を下校させる措置がとられていた。そんな事で、たまに学校へ行っても授業にはならなかった。

唯一の情報源のラジオからは、娯楽番組は消え、「大本営発表」や「東部軍管区情報——敵機B29の編隊は……」という放送しか流れず新聞も紙面が縮小され、日本軍の戦いぶりを誇大宣伝していた。

そうした八月のある日、「新型の爆弾」が落とされ、大きな被害がたつたことを知

らされた。

八月十四日は一日中警報が鳴り、地方の中小都市(熊谷、八王子)が爆撃をうけ、いよいよあすは川越の番だなど大人たちは言っていた。ラジオの臨時ニュースで、「あすの正午に重大な放送があるから全国民は必ず聞くように」との放送があった。その時は、まさか戦争に負けるとは思っていなかった。夜になると、サーチライトに照らし出されたB29の機影が次々と南から北へ重苦しい爆音を残して消えていった。その晩は、がらんとした家の中で万一に備えて寝ることができなかった。

八月十五日の朝、勤勞奉仕先へ自転車でかけた。夏休みに入って、川越の郊外の農家の開墾を手伝うのが一年生の役目であった。じっとしていても汗の出る炎天下での午前中の作業を早めに切り上げて、農家の庭先に集められた。みんなの前にラジオが一台ポツンと置かれていた。

正午を知らせる時報のあと、「玉音放送」が始まり、全員が頭をたれて聞いていた。中学一年生にはむずかしい言葉が多く、初めは何のことかわからなかったが、戦争に負けたのだとの感じは伝わってきた。放送が終わって先生が何か訓示されたのだろうが、よく憶えていない。しかし、昼の弁当のどをとらなかつたのと、何か大きな穴がポツカリあいたような虚脱感におそわれたことを、子供心にもはつきり記憶している。

入学してから終戦までの四か月半の経験は得がたい貴重なものがあり、その後のものの考え方や行動に少なからず影響のあったことは確かである。

この年の八月十五日は、中学一年生の私にとって忘れることのできない暑い一日であった。

巻頭言

学校長 日新義虎ひよし

開校五十年を記念する本誌の誕生を祝する。本校が正に五十年目に当って高等学校に昇格されたことは、偶然であるが、愛校者達の喜びを加える有力なる要素となったことは否定し得ない。

我が校に於ては半世紀に亙る先人の努力が効を奏してと考へざるを得ない。故に我々現在学校に籍をおくものは、単に新しき創業の喜びを感じるのみでなく、多年に亙って生成発展し来つた美風に謝意を捧げ之を継承しなければならぬ。

「民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献」すると云う理想を実現するには、若き学徒の力にまつ所が一番大きい。

「真理と正義を愛し」と云つても、他人の虚偽や不正を剔抉てつげつ批難することは易々たること、自己を真理の把握者とし、正義の実現者たらしめることが、急務である。

生徒諸君は、高校生となり平均年齢も二 year 高まり、旧制中学の四

年生が新一年生、高校の最低学年一年生となった。大いに自覚しなければならぬ。

我々教師の任務は更に重きを加えた。研究と修養ひんぎょうに只管精進ひんぎん生徒の信頼に答え、父兄の期待に背かないように。

大学で講義を聴くには、相当の知的教養を必要とする。此の準備は大学に直結する高校に於て与え、高校に於て受けなければならぬ。師資しし共に怠つて可ならんやである。

四千名の川中卒業生は母校として新たに川越高等学校を持つたのである。母校の熱愛と後輩の誘掖ゆうえきを願つて止まぬ。



「創立五十年記念誌」表紙

●創立五十年記念誌より

創立五十年を迎え高校生となつて

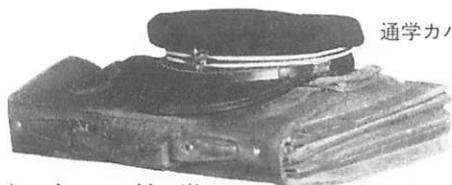
12 A 山崎榮作(高一)

新緑をそよがせて吹く風さえかおるさわやかな初夏の候とはなつ

た。「夏は来ぬ、夏は来ぬ。」と口ずさまずにはいられない。あらゆるものに若きがあふれている様な時だ。うの花がしずかな池のほ

とりに咲いている。

五月二十八日。この美しくも清らかな空気につつまれ、心字の池に睡蓮のうく瑞葉園を渡つて川越中学校の校歌は流れていた。この



学校が創設されて五十年の記念式典が行われたのである。長官閣下、文部大臣を始め来賓の方々の心からのお慶びの言葉をいたゞいて感激に胸をつまらせ、何とはなしに襟を正したくなる講堂の中で私達八百余名はあの校歌を歌ったのである。最後のピアノの音が消えて行った時、しんとした堂内を見おろして居られた代々校長先生の御写真の目まで、うるんで来た様だった。あ、この感激は、この感激こそ五十年の長い年月を経なければ得られない貴重なものなのだ。しずかに五十年と言う長さを数えてみる。人生わずか……と言つて人は五十年を軽んずる。しかし正門のわきに根を張つて厳と聳える楠の木の雄姿を眺めた時、あ、これが川中五十年の象徴なのだとも思われてはつとする。そして過去を思い、現在の自分を見出した時、五十年記念だ！ 創立記念だ！ と胸をはって、大手をふつて町中を、世界中をねって歩きたくなる。その角にも、あそここの駅にも、川中五十年のピラがはつてある。そしてそこを通る学生を見よ。初雁の姿もゆかしい徽章を輝かせて、白線二本帽の高校生ではないか。それこそ新しく生れた川越高等学校の生徒なのだ。日本はこゝ十年來、戦争と言う大浪にのり、渦にまき込まれて社会はめまぐるしく動揺した。学校もこの渦の中にはいつてきりくゝと変化をし、忙しい月日を送った。小学校は国民学校とかわり、中

学五年が四年間になった。そして生徒は出陣した。私達は動員で工場で働いた。学校も一時は形ばかりのものとなったが生徒は生徒の本分を忘れずに、将来何物かを期して汗とあぶらの中を勉学にはげんだのであった。

遂に太平洋戦争も果てた。私達はもとの学び舎に帰ることが出来力尽きた様な社会の一隅に、長年の圧力からのがれ得て自由な天地に飛び出した小鳥のように、燃え上る熱と意気を以て学園は活動を開始した。新しい議会によって学制は改革せられ、六三制実施となつてこゝに新制度の高等学校は生れて来たのである。私達は私達のはぐくまれた学校の長寿を祝うと同時に、新しい高校の誕生を祝福する事が出来るのだ。百年たつても来ないこの二重の喜び、私達はどうしたらよいだろう。高校の出発のものとをかためると同時に、新しい日本をそだて上げて行くべき義務と責任を感じる。万物皆若い。希望にみちて進んで行こう。秩父の嶺、人間の水と共に前途は悠遠なのである。

喜びを、たゞ嬉しさを書きつづつたが書き尽くせるものではない。アーチのその上に、楠の若芽が萌えていたが、私達の心はそれよりもっと自由に、もっともつとつとびくゝとはるか山の彼方めざして進んで行くのである。

●創立七十周年記念誌より 全日本高校庭球選手権大会優勝

芹沢良三(高二)

私が旧制川越中学に入学いたしました時代は、太平洋戦争華やかにし頃で、庭球などおよそ縁遠いものであり、そのため小学校よ

り剣道をしていた関係で剣道部に入り、最下級生として毎日上級生にしごかれておりました。間もなく我々も上福岡の火工廠に学徒動

優勝カップのレプリカ（芹沢家所蔵）



員され、そこで終戦を迎えたわけです。

学校に復帰し、間もなく上級生の有志の方々が集まり庭球部復活に努力され、その結果川越高校(当時はまだ中学)の庭球部が再建されました。当時テニス・コートはまだ畠であり、部員が協力し、ウネの跡を平らに直し、一応コートとして使えるように整備して、練習が開始されたわけですが、雨が降る度に畠のウネの溝にあたる部分がかたまり凸凹のコートになってしまい、それを直し、又ローラーをかけるという繰り返しで時期がしばらく続きましたが、今となってはこの苦しかった事も、良き思い出として残っております。又復活当初は運動靴が不足しており、練習時は素足で走りまわり、ボールも貴重品で、パンクしたものを直し、それを前衛練習に使うという現在では考えられないような時代でした。

然し、激しい毎日の練習が続けられ、それに先輩の方々も多くコートに見えられたこの時期に、今日、県下の最右翼にある、我校庭球部の基礎が固まったものと考えております。この練習の結果、昭和二十二年の戦後第一回の県下学校対抗戦(三組対抗)に上級生の方と出場し、優勝しました。これを機に爾後、川越高校庭球部は県下で常に上位を保つようになり、そして我々の高校時代の最後の年である昭和二十四年を迎えました。

当時我校の主力は柿田・加藤組、一色・津坂組と岡田君・私の組でした。此のメンバーで県下のほとんどの大会を制覇し、同年東京で開催された第四回国民体育大会の埼玉県代表も我校の二組で独占しました。七月二十四日に昭和二十

四年度全国高校庭球選手権大会が、新設の後楽園コートにて参加組数一八四組で開かれ、我々三組も県予選を経て、出場いたしました。私は前年の大阪大会は五回戦で敗れましたので、一応六回戦進出を目標に試合へ臨みました所、諸先輩関係者の皆様方の御声援に守られ、思わぬ優勝という大きな栄誉を獲得いたしましたわけでありませう。

当時の対戦相手、成績は、

第一回戦	4 対 1	福岡県中央高	秦・村田組
第二回戦	4 対 1	三重県津高	真砂・筒井組
第三回戦	4 対 0	千葉県成東高	細田・石田組
第四回戦	4 対 1	愛知県大洲高	木村・稲田組
第五回戦	4 対 3	愛媛県岡崎商	及川・守住組
第六回戦	4 対 0	奈良県奈良高	末広・飯田組
準決勝	4 対 0	岩手県盛岡高	工藤・石塚組
決勝	4 対 2	兵庫県神戸高	中塩・吉森組

以上の結果でしたが、思いつくまま試合内容をふり返ってみますと、まず私達の組はいつの大会においても出だしが悪く、三回戦程度に進みませんと安定したゲームにならず苦勞いたしますので、特に此の大会の一、二回戦は慎重な気持を持ってのぞみ、調子を整えるよう試合を進めました。スコア的には楽な勝ち方に見えますが、三回戦位まで苦勞したような記憶が残っております。五回戦は愛媛県の及川・守住組でしたが、此の試合に勝てば前年の実績を越え、今大会の目的は大体達せられるので必勝の気持でのぞんだわけですが、どの試合よりも苦戦し、又一番思い出に残る試合でした。前半及川選手は短い球、速い長い球を、実に良い配球で打ち込んで、苦心慘愴その球を返すと、長身の守住選手にスマッシュで決められるという相手のペースにはまり、勝負では完全に敗れていましたが、中

甲子園大会と私

盤頃より前衛の岡田君が非常に調子を上げ、及川選手の配球ペースを乱したため、後半は前衛アタック、前衛のサイド抜き、そして相手後衛に打ち勝つという私達のペースに持ち込み、ようやくの事で勝利を得たわけですが、この試合において岡田君の技術は如何に良い相手の後衛でも前衛の働き方により、それまでの自信をくずすことが出来ると言う良い例であったと思います。五回戦の苦戦を味わった事が六回戦以後の試合における私達に精神的な面で非常によい結果となったと考えております。

準決勝の盛岡高、工藤・石塚組は此の大会に出場した我校の柿田・加藤組と三回戦で対戦し、大接戦の末4-3で勝ち、その勢いにより、第一シードの三重県木の本高も4-1で破り準決勝に進出して来たものです。前後衛とも我々以上に色が黒く、その上大男で見ただけで戦いにくい相手でしたが、私の組のコンディションが最高になり、試合内容に幸運も伴い、楽な試合であったと記憶しております。決勝戦は夕暮れ間近な第一コートで開始されましたが、関東と関西の対戦となったため、先生、先輩の方々は勿論、大会関係者の大半が関東の方達であったため、声援のほとんどが我々の味方となり、その期待に沿うためにも必ず勝たねばの気持が強く湧き、そして岡

田君も私も学校のコートでやっているような調子が出、その上一ポイント取る度に起こる大きな拍手と歓声に守られ私達のペースで試合を進めることが出来4-2のスコアで勝ったわけです。この間先生、諸先輩方の気苦労はどんなに大変であったかと、その後思い出す度に感謝いたしておりました。

試合終了と同時に皆様の祝福の握手せめにあいましたが、その時は優勝というものが、あまりに大きなものであり、自分自身思いもよらなかつたため、何か実感が沸かず、ただようやく試合が終わったという気持ちの方が強かつたように覚えています。ほとんど日の暮れた所で表彰式があり優勝カップを受け、手にした時始めて勝ったのだ、今迄の猛練習の賜が、この様な大きな榮譽となつて報われたのだという喜びが湧いて参りました。

今、私の手元にあるのは優勝カップのレプリカと賞状だけです。私の高校時代の最も良き思い出として終生忘れ得ぬものです。この思い出を作っていたのは偏に先生、諸先輩の御指導と励まし、そして互に技術向上のため、良きライバルとして練習に勤しんだ庭球部の皆様の賜と心より感謝いたしております。

横田芳明(高12)

紫匂う武蔵野の……。校旗掲揚と同時にグラウンドに響きわたる校

歌が、ラジオ、テレビでも全国に放送されたとの事ですが、私はこの時ほど校歌の良さを身にしみて感じた事はありませんでした。恩

師諸氏、先輩諸兄、同輩、又川越を離れて遠くで働いている人たち、千差万別ではありますが、ともに感じた事であったと思います。

「一度でいいから甲子園へ」を合言葉に、私たちは練習につぐ練習



を重ねて、夢にまでみた全国大会の晴れの出場権を自分たちの掌中におさめました。そして、それまでの苦しかった練習が、一挙に自分の五体から吹きとんでしまった思い出が、今も私の脳裏に奥深く焼きついています。

西関東大会の甲府工との一戦が終わって、サイレンが大空に鳴り響き、テープがしきりに飛び、勝った喜びよりも、「ああ、これでやっと甲子園に行けるんだなあ」の感激で、ぼーっと前後の事等夢うつつ……、あつ、監督さんの胴上げをしなくてはと、皆に号令をかけて、

胴上げをしながら「よかった」「勝ったんだ」と自分に言いきかせ、チームメートと肩をたたきあいながら甲子園初出場の喜びをかみしめました。

ファンファールの高らかな響きが球場いっぱい広がって消えてゆくその中を、真夏の陽光に照らされて、晴れの出場に新調してくれたユニホームを着て入場行進をする私たちチーム。朝早くからアンプスタンドを白一色にした大観衆のどよめき。第四十一回甲子園大会入場式の様子は、大正五年に川高野球部が創設されてから四十二年ぶりにして、初めて踏んだ甲子園の土の感激を、全身に満ちあふれさせるのにたるものでありました。又、創立六十周年の記念の年に出場出来た二重の喜びが、私たちに「しっかりやれ」と激励してくれた事を思い出します。

試合は八月十一日に行われました。この日甲子園は久しぶりに朝

からからりとした夏空で、八時半の開始というのに早くも一万近くの観衆がスタンドをうめています。

私たちは朝七時に宿舎を出発。甲陽グラウンドで四十分間に亘って軽いトレーニングをした後、八時キツカリに故飯田先生の写真を持ち三塁側ダッグアウトに入りました。

そして故飯田先生に礼をした後試合に臨んだのです。九回、末次が僕の所にゴロをころがし飯島一塁手のミットにウイニングボールがおさまると試合終了となりました。

第二戦は十五日午後一時半から行われる予定でしたが、この日は朝から二つの延長戦が続いたために、第三試合の川越高対高知商の試合は二時二十分に開始されました。

中京商が敗れ優勝校の最右翼と見られる高知商に対し、押されながらも力一杯戦いました。

延長戦になれば僕たちのものと思っていた矢先、当然ダブルははずの二ゴロを高知商の巧みな走塁の前に屈し、一対〇で惜敗してしまつた。

しかし、僕たちは敗れたとはいえ、「やることだけはやった」の思い残す事はなかった。

当時川越には、本当に野球が三度の飯より好きな人たちが商売を放って、夕方になると、ネット裏や飯田先生の碑の所に現われて「しっかりやれ」「よく捕つた」等気合を入れてくれましたが、当時の人たちは現在も元気で野球を楽しんでいるだろうかと思うと胸がつまってきました。

寒風砂塵吹きさぶ荒川土手のトレーニング。霜柱の烟道を走りまわった伊佐沼でのマラソン。石灰でボールを白くして夜迄した準備練習。夜更け、グラウンドの両隅からチームが二つに分かれて、双

NHK全国学校音楽コンクール優勝

方で大声を出しあつて精神修養をしていた時、余りに騒々しいので当時の渡辺校長が驚いて出てきたが、逆に「おお、やってるな」と激励してくれた事。練習が終わつて全員でグラウンドを走っているとグラウンド近くの家から何とも言えぬ美味い匂いがして腹の底までしみてきた事。試合中の合宿で、夜二時三時迄はち巻をして猛勉強

四月に新入生部員四十余名を迎え、二年二九名、三年二二名と合わせて九〇余名の大所帯となり、部員全員が集まると椅子がたらず、広い視聴覚室も狭くなつてしまつた。又新任の小高先生を迎え、今年こそはと皆張りきつた。

一学期中に新入生歓迎演奏会、川越少年少女合唱団賛助出演、川越市民会館落成記念音楽会、熊高音楽部との交歓会、埼玉県合唱祭などがあり、行事も多かつたせいか一年生の伸びが例年になくみられた。

夏休みに入ったばかりの七月二十四日、オリンピックの關係で三ヶ月ばかり早くなつたNHK全国学校音楽コンクール県予選が大宮の商工会館で行われた。二、三年より三六名を選抜し、牧野統先生の指揮、小高秀一先生の伴奏で、課題曲「曲り角」随意曲「月の夜」を唱い、一五校中一位を獲得し、関東大会出場権を得た。これで七回目の出場である。同関東大会は八月二十三日にNHK第一放送を通じて行われた。関東六県と上信越三県のあわせて九校で全国大会出場権を争つた。

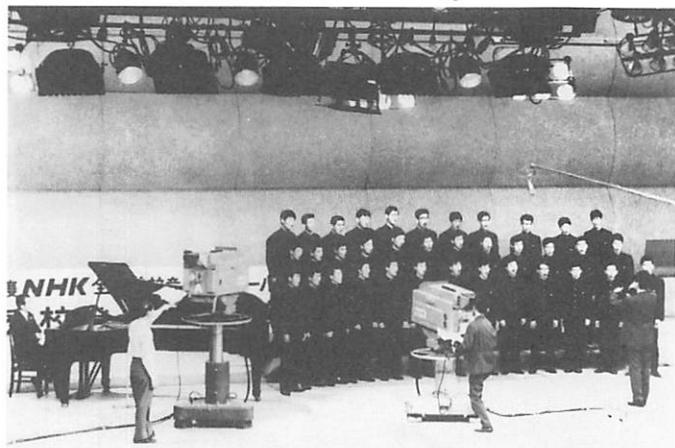
してきた事等、私の頭の中に浮かんできます。

昨年の暮、亡くなつた父が、母と甲子園にきて高知に敗れた時、「よくやつたぞ」と言う一言と、両親が私のバットケースを持って宿舎から出て行く後姿が、本当に昨日の事であつた様に思われます。

(一部、『創立八十周年記念誌』からの引用を含む——編集部注)

我々は昨年度全国優勝校横須賀高校を破り、埼玉県で初めて全国大会出場となつたのである。九月十三日もやはりラジオによる放送審査であつた。やはり全国大会だけあり、一〇地区より選ばれたすばらしい合唱を聞かせてくれた。

正午のニュースでその結果が発表され、「第一位は関……」とその頭文字を聞いただけで視聴覚室は歓声ではちきれそうであつた。このクラブが



全国大会演奏風景

音楽部

出来て一四年目、その間牧野先生、小高先生又先輩方の御努力が形になってやっと表われたのである。このすばらしい成績は現部員だけのものではなく、先生、先輩、学校全体が作り出したものである。その発表会の練習が二十五日に東京NHKホールで行われ、翌日入賞式発表会が行われ、その模様が二十七日テレビ、ラジオを通じて全国に放送された。

夏休みに長瀬「青年の家」で三回目の合宿が行われ、楽しいながらもきつい練習が続いた。

一学期に入り、県高校合同演奏会、又今年初参加の文化祭があった。発声、呼吸、ハーモニなどの研究発表を行い、初めとしては上出来であった。十月十一日に朝日県大会。NHKで全国優勝して

いるので勝たねばならなかったが、浦和一女に見事してやられたのである。十月十七日に川越市民会館で優勝記念を兼ねて第一四回定期演奏会を催す。開場時には行列が川高まで続く。千八百人ほど入場し、会館ホールはぎっしり、世界名曲集、コンクール曲集、日本民謡、合唱組曲「山に祈る」を演奏。また四重唱や埼玉大合唱団の賛助出演もあり大成のうちに終えることができた。

十月十五日青少年音楽祭に参加、川越市民大会で大学四団体、高校一団体の演奏であった。その模様が二十三日にテレビ、ラジオで全国放送。

今年をふり返って見て一番すばらしかったことは、チームワークの良さと一年の上達ぶりであった。

●創立八十周年記念誌より

川越高校の思い出

岩田文夫(高26)

川越高校創立八十周年おめでとうございます。このような長き歴史を誇るすばらしい学校に学べた事に限りなき喜びを感じます。

この輝かしい歴史の一ページを語るには、あまりにも役不足ではありませんが、そこは寛大な心にて御勘弁いただき、私達が入学した四十六年から四十八年にかけて少しお話ししたいと思います。

私達が入学した当時、新入生は生徒手帳がもらえませんでした。新入生だけでなく、実はこの時、誰も新しい生徒手帳を持てなかったのです。生徒手帳が私たちの手に渡ったのが二年の後半だったと思いますから、まる二年近くも川高生は生徒手帳を持っていなかったのです。原因はそれまでの生徒心得に変わり、新しく生徒憲章が

生まれたことでした。昭和四十五年二月二十六日とありますから、私達が中学二年の冬です。この時職員室前にすわりこみをした記事が新聞に載ったのをよく覚えております。この学園紛争の嵐の中で勝ち取ったのが、あらゆる表現の自由と政治的活動の自由を含む自主的民主的活動の自由を骨格とする生徒憲章だったので。私達が一年の頃は、まだ放課後アジ演説をする人達が盛んに新しき時代を強調しておりました。しかしそんな姿も半年、一年とたつうちにすっかり消えていきました。その頃に入學してきた私達は遅れてきた世代にも遅れた、もはや政治とは縁遠いのんきな世代でした。「遅れた」という焦りを感じることもなく、かといって勉強に熱心にな

るわけでもなく、三無主義、四無主義の真ただ中にありながら、皆の表情は非常に明るく屈託のないものでした。なにしろ七割浪人しても全然感じない世代でしたから、適当に遊ぶという感じでもないので勉強ができない、川女にいつも英語と数学で負けていた、何とも奇妙な世代と言えるかもしれません。

このような世代の生徒会を、私のような未熟者が預かることになったのが二年の秋からでした。よく人から川越高校をつぶさないでと言われたものでした。当時の生徒会活動は不人気で、何をやるにしても、一応実行委員を募るのですが、その実行委員が少しも集まらず、ほとんど本部役員で行うという、行事をこなすだけで大忙しの一年でした。生徒会本部の存在を一般の生徒たちにも知ってもらうため、私達ほとんどでもないことを一時期やったことがありました。週一時間、必修クラブの時間が私達の頃からありまして、六時限目にあつたものですから、エスケープして帰宅する生徒が多かつたのです。そこで私達本部役員があらゆる出入り口に立ち、エスケープしようとした生徒たちを封じ込めたのです。当時はやったロックアウトの反対のロックインをしたわけです。これにはいろいろと反対もありましたが、私達としては自分で決めたクラブぐらい出席してほしかつたのです。しかし必修クラブに対する一般生徒の受け取り方は多様で、把握できずに私達が息切れしたというのが実状でした。今思い返してみると、あまりにも強権的なことをしたなと思うのですが、当時の考えとして憎まれてもいいという思いがあつたのです。生徒会に対して反発することによって、生徒会って何だろうとみんなが考えるようになってほしいと考えていたのです。自主的民主的活動の自由を行使することなく帰宅することはあまりに非生産的に思えたのです。

しかし、私達の高校時代をふり返ってみて、まだまだ高校生らしさが残っていた時代だと思っています。私達の服装もまだ学生服が大半でしたし、遊びまわる者もいなかったように思います。生徒憲章の表現の自由は理解しているのだが、まだまだ勇氣と財政的余裕がなかったというところだろうか。川女との合同による新入生歓迎会も、私達の一年上の生徒会よりなくなり、クラスで行う川女との交歓会もほとんど行われず、そういう意味においても学園紛争の嵐のあとにやってきた何事においても平穩無事な年代ではなかつたかと思つていきます。それにしてもまじめな奴が多かつた割には大学へストレートで入るのが少なかつたのは、やはり理想だけは高いのんびり屋が多かつたせいだろうか。

花の四十九年組について少し紹介させていただいたのですが、私達の代は輝かしき川高の歴史においてはやはり汚点でしょうか。厳しき採点と御鞭撻を諸先輩方に賜ることをお願いいたしまして、川越高校八十周年のお祝いのことばとさせていただきます。



生徒憲章の入った最初の生徒手帳

「幻の花」を求めて

和田亀之助は、京都の仏具商の家に生まれ、東京神田の物理学校(現東京理科大学)を卒業後数学の教師となる。一八九九(明三十二年)、二七歳の時、新設された川越中学の教務主任として赴任し、一九〇三年の十二月まで教鞭を執った。亀之助はそのころ写真に凝っていて、川越中学開校当時の写真をかなり撮りためていたようだ。

亀之助アルバム発見のきっかけとなったのは『幻の花』という本である。亀之助の次男で、戦後第一次吉田内閣の農林大臣を務め、後に左派社会党で書記長となる和田博雄の伝記である。

小島良夫(中45)氏と木村定雄(中46)氏により、この本が編集部を持ち込まれたのは、編集委員会が活動を始めたころであった。この本の中で我々の目を引いたのは、博雄が父の二七回忌法要のために、兄武彦の家を訪れたときの記述である。

「父の法要の始まる前、書齋で兄と父のことを取り留めもなく話していたとき、兄が、ああ博雄、おまえに見せたいものがあるよ、といって書棚から父の遺した古いアルバムを数冊出して見せた。



……『父のアルバム』に貼られている写真は、先輩、同僚、親交のあったらしい同僚一家、川越中学校運動会、卒業生、寄宿舎生徒、軍事教練、川越郊外への自転車遠足、川越郊外の雪……。

その作品内容は多彩である。」

この『父のアルバム』が発見されれば、百周年記念誌の大きな目玉となる……。

記念誌の写真担当者は、まさに「幻の花」を追い求めることになった。手がかりは、本の奥付のみである。著者の大竹啓介氏とどうにか連絡を取り、わかったことは、『幻の花』を執筆するに当たり、大竹氏は一九八一年頃、亀之助の長男武彦(当時八四歳)氏を取材しており、その際アルバムを見せてもらったということであった。大竹氏は武彦氏の世田谷の住所と、和田博雄の書生であった寺門功氏の住所を教えてくださいました。

ところがその後、武彦氏とは全く連絡がつかず、もうひとつの手がかりである寺門氏に連絡を取ってみると、武彦氏はすでに亡くなり、一人娘の久子氏が小田原に住んでいるという。それから小田原への連絡を始めるのだが、いくら電話をしても連絡が取れない。なかばあきらめかけていた一九七七年三月、小田原への電話が通じたのである。

声の主は西尾吉一氏。久子氏の次女、佳子氏の夫に当たる。聞けば、世田谷の家にはだれもおらず、久子氏が時折風を通しに行っていたが、その久子氏も半年ほど前に他界したとのことであった。小田原の家も引き払うことになっており、この日たまたま電話をとることができたようだ。事情を話すと快く協力を約束してくださったが、吉一氏自身はアルバムの存在を全く知らないという。とありあえずこれから遺品整理を始めるので、それら

しいものがでてきたら川越高校に連絡を入れていただくといいことでは終わった。

その西尾吉一氏から、アルバムがあったという連絡をいただいたのが一九九七年九月八日。

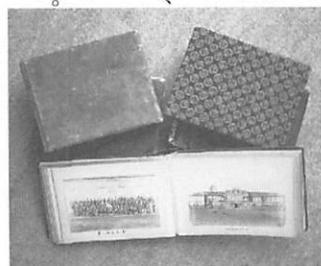
そして久子氏の長女、川越在住の和田美知子氏からアルバムを受け取ったのが十八日のことであった。

「父のアルバム」を手にしたときの我々の興奮と喜びをご理解いただけるであろうか。

まだ植木すら見あたらない完成直後の校舎全景をはじめ、まさしく『幻の花』に書かれていた写真が、五冊の古びたアルバムに詰まっていたのである。

それらの写真の中になった二葉、撮影したレンズ名を記録した写真がある。ゲルメヤー、クック五類という二本のレンズ名をもとに、今回航空写真を撮影してくれた宮崎一雄氏に調べてもらおうと、当時の価格は一本六〇〜七〇円、巡査の初任給が一〇円そこそこだったことを思えばとんでもない高級品であったわけだ。

ともかく、開校当初、和田亀之助がいてくれたおかげで、我々は大変貴重な資料を手に入れることができたのである。百年前の川越に思いを馳せて、じっくりご覧いただきたい。(丁・一)

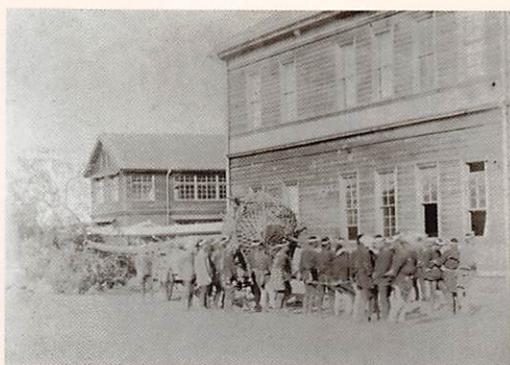


探し求めた「五冊のアルバム」

和田亀之助写真帳



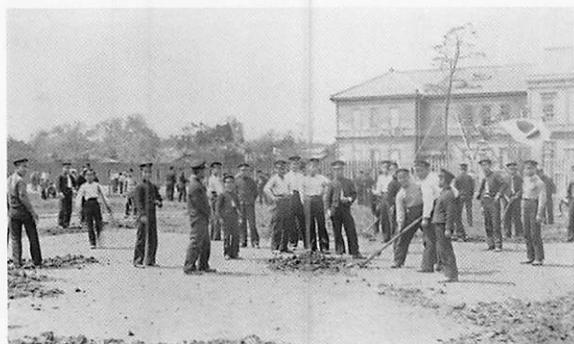
明治32年の7月の埼玉県第三中学校。まだ校舎の周辺に植樹もされていない



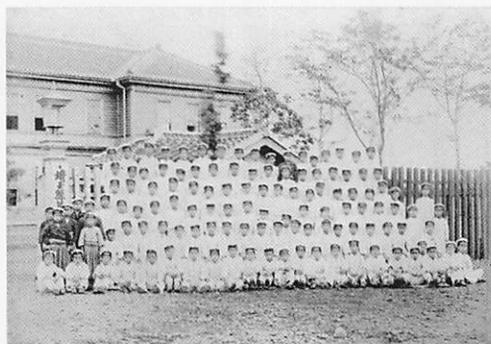
開校まもなく、増野校長が父兄に依頼して、松の木が植樹された。昭和10年代に枯れてしまったようである



松の木植樹後の校舎全景(明治32年)。そびえ立つ松の木は川越中学のシンボルとなった



瑞葉園。大正天皇の結婚を祝して校舎南側に開設された



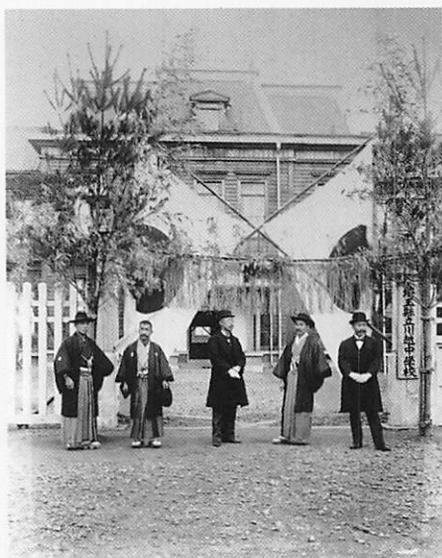
一年級。当時の学則によれば、羽織袴も許可された



川中の運動会は地域の一大行事であった。
見物客の服装などに当時の風俗が偲ばれる



“Bicycle Race Feb. 34” 珍しい自転車競技のスナップ



明治36年の正月、校門前で職員の写真撮影



校舎全景(グルメヤー広角レンズ使用)



学友会のマーク入り横断幕前での記念撮影(明治34年)



テニスは開校当初より、職員生徒間でさかんに行われていた



博雄を膝にした亀之助と家族。川越喜多院境内



川越中学職員一同。中央が増野校長、その右が亀之助



修学旅行、品川の乗り換え。当時の川中生にとって汽車に乗る修学旅行はどれほど胸弾むものであったろうか



「人車鉄道」で小田原へ(明治35年10月)



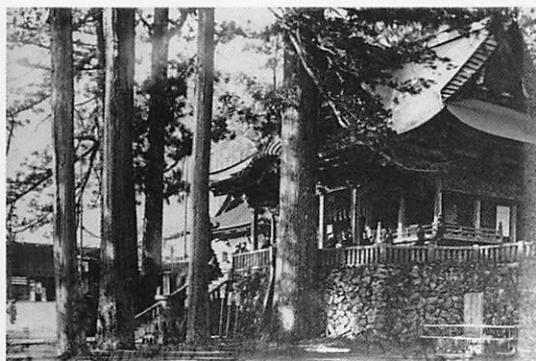
日比谷公園でひと休み。修学旅行の最後に立ち寄ったようだ(明治35年10月)



「足尾銅山。数町の坂を登れば遙かに禿たる足尾を見る。険道を降る事二里、毒煙朦々」



上野、不忍池。100年の時の流れを感じさせる



三峯神社。階段に生徒の姿が見える(明治34年4月)



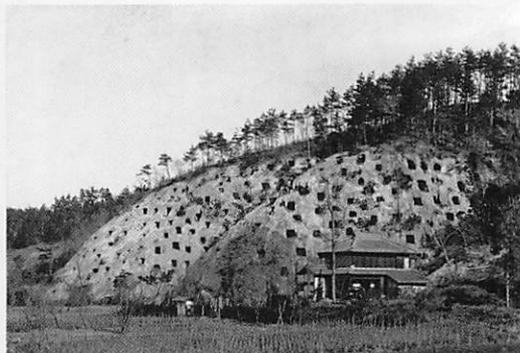
明治34年4月秩父旅行。右から六人目が亀之助



明治34年の松山遠足スナップ。川越と川島を結ぶ「井草の渡し」を行く川中生



梅園行。右から四人目が亀之助である



吉見の百穴全景。これも松山遠足のスナップ



船着き場。新河岸川の水路が川越仙波まで延びていた



今はすっかり整備された伊佐沼の100年前の情景である



小仙波の瀧(明治34年8月)。小仙波に水が湧いており、川越の観光名所のひとつになっていたようだ



明治20年に架けられた石組みの眼鏡橋(現在の高沢橋)



川越水川神社から東方を撮影。見渡す限り田園が広がる



中学校の屋根より川越町を見る。手前が川越高等小学校。右奥に時の鐘も見える



時の鐘より中学校方面を望む



川越南町。現在の本川越から市役所方面に向かうバス通りである。左手前の蔵づくりの建物は足立屋呉服店



明治34年、川越大火からの復興を祝って行われた、氷川神社の大祭



川越八幡の祭。旧士族による武者姿の仮装である

喜多院五百羅漢。
 亀之助のアルバム
 には北院と記
 されている。周
 囲の木々もまだ
 低く、空が抜けて
 みえる



川越城址、富士見櫓である。
 御嶽神社が見えている



喜多院境内の桜(明治34年4月)



開校の年、10月17日
 の第一回父兄会。前
 列左から4人目が増
 野校長、その右が亀
 之助である